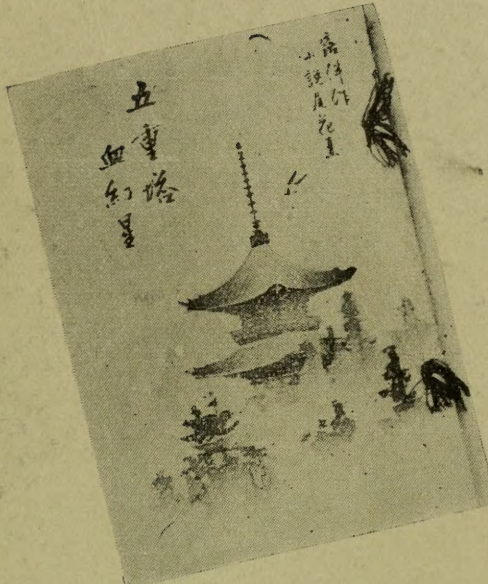





詩人腸は携る其物をは
雅彦の屋にて隠る古人も
説けり男ころ四十四にして
前篇稿を結ひ後篇稿
稿らす四隣これまた住
体よろしむくするに停して
哀哉空しく焉徒に去らせ給
ひぬとはまた人間事にあされ
はこれ作らむとて作得へしれ
あらすさてとも好く思ひ給ら
て用捨箱よりさそれてもい
春場に...

春日生

土井[illegible]学兄








神あれは助くる紙ありと私

は一笑す

著者

# 明治文學研究誌

岡野他家夫著




東京武藏野書院

# 明治文學研究誌　目次

卷末に

以上

# 明治文學研究の意義

## ――序に代へて――

我が國史上に於て、明治の聖代が如何に記念すべき時代で有つたかは今更に贅言を要すまいと想ふ。聖代四十五年間に、我が國威を中外に發揚するに至つた、諸々の原動力の中でも、最も重要な役割を果したのは正しく明治の文化であつた。而して其の明治文化を表象するものは即ち明治の文學であらう。

明治文學こそは、我が日本の國民精神文化の遺憾なき發露でもあつた。然も亦、外國文化の長を採り、以て獨自の日本文學を樹立展開したのも明治文學に外ならない。

半世紀の間に、最も異常にして急速な成長を遂げて、日本文學をして世界文化の水準にまで到達せしめた明治時代の文學は、日本の文化發達史上、將又日本文學史上に於て最も重視すべき一

時期を完全に占むるものであり、併も亦、現代の文運隆昌を齎らせる母胎でもある。明治時代文學の價値は、卽ち之を代表するものとも考へられる、逍遙、鷗外、漱石、紅葉、露伴等の文學が、我が國文學史上に於ける記紀、萬葉、源語、芭蕉、近松、西鶴の文學などと共に、其の同列に置いて考察せらるべきであるといふ學界の認識によつても大體は考へられると想ふ。

明治時代文學は最早や古典なりといふ言葉をもきく。されば之が研究は、今や本質的に而も永續して爲さるべき時期に際會してゐるわけである。宜なる哉、近年之が研究に精進せんとする學徒の漸く其の數を加ふる實情は寔に當然にして、吾人の久しく待望し期待せるところで、我が學界のため欣懷の念に堪えざる次第である。

併し翻つて、其の研究の態度又は方法等を考ふるに、之は未だ猶ほ吾々と吾々の後進學徒に課された重要問題とも謂へやう。

明治時代文學を史的に考察せる、文學史と銘打つた著書の數種も既に公にされてをる。併し、完全に近くゝ理された資料を基礎として、明治時代文學の全面を鳥瞰し、其の史的展開の趨勢を

洞察し、各種の樣相を分析檢討し、以て其の全貌主潮を考究して遺憾ない著述は猶今後に俟たなければならない。

明治の文學は勿論、西歐文學の感化影響の著しい文學である。特に其の表現法なり觀察法なりに於て然りであるが、それとても、從來の明治文學研究家の多くが、何よりも強く主張論評するが如き、單なる西歐文學の模倣或は亞流にすぎぬであらうか。其れは斷じて然らずと吾々は信ずるのである。皮相な觀察を捨てゝ其の眞髓を見究めるならば、其の本質に於てより日本的な精神に觸れることもできやうと想ふ。例へば明治文學に於て、一の新しい文學精神を樹立した新詩に就て考ふるならば、所謂之を新體詩と稱した時期に在つては其れは未だ西歐文學の形態を上に衣た模倣文學であつたともいへやう。然しながら、軈て藤村、有明、泣菫等の詩と呼ばれる文學作品に至つては、正に其れは純粹なる日本的な創作であるとも謂ひ得るのである。

吾々は、新時代の改造的精神を以て、舊來の實用又は德教の命下に一種の方便、手段として扱はれてきた文學、所謂勸懲教訓主義の文學を、純文學としての獨立の地位に置いた、明治の寫實主義文學の中にも、猶且つ古來からの我が文學理念の精髓である「ものゝあはれ」や「幽玄」或は「わび」や「さびしをり」といふ詞を以て呼ばれてゐる傳統の文學精神の流れ即ち內面的情緒

の潜んでゐることをも、もつと深く考察すべきであらうと想ふのである。

かの明治新文學理論の曉鐘といはれる坪内逍遙の『小説神髓』であるが、これは一般には西歐の文學理論の祖述で有るかの如くに考へられてゐるのである。それはそうで有らうが、其れにしてからが猶よく内面に潜む文學精神を探求するならば、そこには本居宣長の『玉の小櫛』中に説かれてゐる物語論から暗示を得てゐる事實が明らかに看取し得るのである。

つまり吾々は、明治時代文學に於ける日本精神といふやうな方面の研究にも尠なからざる意義を認めるものである。

又明治時代文學は、僅々四十五年間に、外國文學の啓蒙主義――浪漫主義――自然主義に至る凡そ二世紀間の變遷を經過せるものであるから、其の現象は實に多岐に亙り、その樣相は寔に錯雜してゐるのである。其の本質内容に於ても、之は封建時代の類型的文學とは甚だその特色を異にする、個人意識の成長――自我自覺の深化發展の上に樹つ個人主義の文學である事の、より進んだ本質究明的の考察も爲さるべきであらうとおもふ。

明治時代の文學界に興起し發展せる、新詩の本質究明、評論文學の特質研究、或は文章變遷の研究、新聞雜誌文學の考察、明治社會小説の研究、明治家庭小説の考察、明治に於ける少年文學

の考察、明治の美文、明治時代文學に及ぼせる外國文學の影響、明治演劇の特質等も意義ある研究題目であらうと考へられる。

或は之を主義主張から觀察するならば、浪漫主義の文藝、寫實主義――自然主義の文藝といふ大きな文藝思潮的題目の下に、其の作品と理論のもつと精細なる檢討吟味も行はるべき意義が有るであらう。

之を要するに、明治時代文學の本格的研究は、現在のところまだ〳〵爲さるべくして爲されてゐないと考へられるのである。資料の蒐集整理等、研究の出發に於ての困難は勿論念頭においてかゝらなければならないが、これは如何なる時代の文學研究にも必然的に件ふ條件であるから、更めて陳ぶべきではないであらう。

本書は專ら初學者を目標とせるもので、著者が年來看手中の、明治時代文學の基礎學的研究の備忘錄とも謂ふべきものである。輓近國文學研究の興隆は實に眼覺しきものあり、將に我が學界の一大風潮たらんとしつゝあるのである。斯かる時、此のさゝやかなる著述が、大成せらるべくして未だ其の出發途上にある明治文學研究の成就に多少とも寄與しうるならば、而して我が近代

文學に於ける國民精神文化の研究に何等かの示唆を與へうるならば著者の本懐これにすぐるものはないのである。

# 明治文學研究の方法

明治年代は、時間的に考へるならば僅か五十年にも滿たない期間ではあるが、其間に興隆起伏せる文學の種類樣相に至つては、實に複雜多岐に亙つてゐるのである。それ故に之を研究すると謂ふも實際は容易ならぬ難事業であることを豫期せねばならない。併し如何なる國の如何なる時代の文學を研究するにも、最初には相當の困難が伴ふのである。爰に明治時代文學の研究に就て考ふるに、未だ基礎學的研究の大部分を占むる、研究資料の整理――研究對象とすべき主要作品の選定等の事すらが未だ充分に成されてはゐない實狀である　明治文學研究の聲を聞くこと頻りであるが、其の成果の寥々たるは此の間の原因によるとも考へられるのである。

それならば、明治時代文學の研究は如何なる方法により爲さるべきであらうか。年來斯の研究

に携はりつゝあるものゝ、淺學不敏なる著者には一言にして盡す方法は考へ得ないのである。それで卑見にもとづき以下少しく述べてみたい。

一、明治文學の主要作品を選擇し之を熟讀すること。

二、現在公にされてゐる、明治文學史と文學評論に關する著書中の定評あるものを熟讀すること。

三、各作品の創作された當時の社會思潮と、作家の傳記を考察すること。

勿論これは明治時代文學一般の研究に就てのことである。明治文學中の特殊な研究に關しては、其れに適應せる方法が執らるべきであらう。然しながら、特殊の研究とても、一般の研究の基礎なくしては到底よき成果を齎すことは期待し得られないであらう。右の三項は初學者に必須不可缺の條件と考へてよろしからう。卽ち明治時代の文學も亦、其の內面本質に於て一筋の精神的聯繫を有つものであるから、一般の史的概念なくしては、一の文藝思潮の研究も或は一作家の研究も、甚だ不完全なるものに終らざるを得ないとおもふ。

斯くの如き見解から、明治時代文學の研究家は既に上代から江戶時代に至る日本文學史一般の知識素養有ることは勿論、猶同時に近世以降の西歐文學の概略にさへ通曉して居らねばなるまいと

おもふ。而して愈々研究に取掛るに際しては、次の論説などを讀んでおくことをすゝめる。

藤村　作博士　日本文學研究法（『日本文學原論』所收）

武田祐吉博士『日本文學研究法』（河出書房版「日本文學大系」第一卷）

鹽田良平學士　明治時代文學の研究法（雜誌「古典研究」第三卷第六號所載）

此の鹽田學士の一文のみに據るも、明治文學研究の手引は得らるゝであらうが、爰には猶少しく具體的な說明を試みることゝする。

明治時代文學の研究に入る第一步として、其の主要作品の選擇と熟讀を必須條件とすることを前述した。之に關して注意すべきは、能ふ限り原資料に就くべきことである。作品にせよ、評論にせよ最初に發表された時のものに依るべきことである。つまり雜誌に載つたものは其の雜誌を見ること、それが不可能の場合は最初に再錄された單行書冊を見ることである。これも亦不可能の場合には後に出版された全集本、叢書本等を見ることである。

明治時代に於ける文學作品の多くは最初雜誌又は新聞等の逐次刊行物に掲載發表せられたのである。併し此の雜誌に掲載のものは今日一般には容易に入手し難いであらう。

それらの雜誌類――「我樂多文庫」「國民之友」「都の花」「しがらみ草紙」「なにはがた」「文學界」「早稻田文學」「帝國文學」「文庫」「新聲」「新潮」「新小說」「文藝倶樂部」「太陽」「明星」「文章世界」「白樺」「青鞜」等の完本は、恐らく國立の帝國圖書館や帝國大學圖書館、早稻田・慶應義塾兩大學圖書館等の所藏中にも見る事が出來ない狀態である。所詮、特殊の學者、藏書家、蒐集家等の架藏を探り、或は古書肆の助力を乞はねば、之を求め之を閱讀する事が出來ないのである。

そこで最初の總括的研究に際しては、不本意ながら後版の書冊に據るも止むを得まいとおもふ。明治時代の文學作品の多くは、現在では全集本、叢書本等の形で大概複刻せられてゐるから、之等に就くのはそれ程困難な事では有るまいとおもふ。又、いま少しく煩勞を厭はぬならば、單行本に據り各作家の作品に親しむ事も出來やうとおもふ。これらの單行本或は全集本等は、謂はば古文學に於ける通行本に相當するものと考へられるのである。

何時、誰の、何といふ著書が出版發行せられてゐるかを知らうとするには、本書に收載の「明治文學書年表」を參照されたい。斯の種の記事はこれ迄に出てゐる文學年表の一部分として既に有るには有るが、嚴密正確を缺くものの少くないことを遺憾におもふのである。勿論、それら先

輩の勞作に對しては敬意と感謝の念を抱き、且つ自ら其事に當つての體驗から並々ならぬ編纂上の苦心は察知し得るのである。著者は此の不備不完全なる年表の作制に生なかの論文執筆にまさる數等の時日と勞力とを費したのである。數冊の本を調査するために數日を要するといふことは、一應は徒爾にも等しい瑣事と自らも想ふた程である。然も猶幾多の不滿はまぬがれないのであるが、此の年表は新聞等（之等モ現物ヲ所藏スル帝國大學明治新聞雜誌文庫等ノ目錄ニ據ル）數十種を除き殆ど全く現本實物に就ての調査に成るものであるから、利用者は大體之を信據せられてい丶と考へるのである。

次に、明治文學史と文學評論に關する著述であるが、其の主要なるものは本書收載の「明治文學研究書誌」に就て知り得るとおもふ。

研究者は先づ、其の研究對象とする題目に關する原作を讀み、而して其れが先輩學者により如何樣に考察せられ論評せられてゐるかを吟味檢討し、然る後に自己の見解論斷を下すべきが最も妥當適切なる研究の態度で有らうと考へられるのである。

それ〳〵の作品の創作せられた當時の社會情勢、社會思潮を理解する事と、各作家の人及び文學者としての傳記を知悉する事とは、文學作品を正解するに必要な鍵であるから、これを忘却し

てはならない。之に關する文献資料も亦「明治文學書年表」を參考とし、特に傳記資料に就ては本書の「明治文學者研究參考文献」を利用されんことをすゝめる。

苟も明治時代文學の研究に志す程の人は、以上の略述に多少の暗示を得て、又研究略史や年表、傳記資料等を手引とし、各自の研究方針を定め其の成果を擧げられることゝ想ふが、全くの初學者や、文檢受驗者等の參考までに、更に簡潔な説明を添へておくことゝする。

先づ明治時代文學史——明治時代文學の史的概觀をなすには如何なる著書に據るべきか。

一、岩城準太郎著　明治文學史　昭和二年發行

著者奈良女子高等師範學校の教授、帝國大學國文學科出身の國文學者、明治文學專攻ではないが、明治大正文學には特に造詣が深く、其の鑑賞批判には獨特のものがうかゞはれる。本書は最初明治三十九年に公にせられ、四十二年に增補版を出したものゝ增補改訂版である。所論は穩健中正、敍述は平明、研究資料の取捨選擇も概ね妥當である。

一、藤村作・久松潛一共著　明治文學序説　昭和七年發行

著者は東京帝國大學教授、本書の論説は久松博士の執筆に成るものであるが、内容は文學作品を中心として

時代との交渉を考へ、民族精神の理解に易からしめた特色の有る著書で、序說と題するが、明治文學概說とも謂ふべき好個の參考書である。

一、高須芳次郎著　明治文學史論　昭和九年發行

著者は梅溪の筆名にて明治文壇に活躍せる人、本書は著者の前著『近代文藝史論』『現代文學十二講』等の內容を修正增補せるもので、文壇人に多くの知己を有し、且つ明治文壇の種々なる情勢を親しく目擊せる著者が、其等の豐富な文壇的知識に基づいて詳論せるところに本書の特色と價値がある。

一、本間久雄著　明治文學史　上・下二卷　昭和十及十二年發行

著者は早稻田大學教授、英文學專攻であるが、明治時代文學に深き關心を有つ人、本書は東京堂版「日本文學全史」全十二卷中の二冊である。本書は明治文學史としての史的敍述の體制に聊か缺くるところ有りと評せらるゝが、又鑑賞批判に多少の偏重も認めらるゝが、豐富な資料、特に新資料による詳論精說は遽に他の企及し難き特色と云ひ得やう。

一、正宗白鳥著　文壇人物評論　昭和七年發行

卷頭の一文「明治文壇總評」は簡潔に要約された明治文壇史である。

夏目漱石以下永井荷風に至る明治時代文學史上に確乎たる地位と不朽の名聲を有する代表的文學者十八人

と、菊池寛、佐藤春夫、葛西善藏、芥川龍之介、この四人の大正時代作家に關する人と藝術に就ての、透徹した理解ある名評論である。明治文學研究者には必讀の著書である。

これらの著書により概觀的知識を得たならば、次に作家作品の考察に移つてよいであらう。明治時代の主なる作家は凡そ三十人位は數へられるのであるが、まづどの作家から始めるべきであるか、其れに就て少しく述べてみやう。

左に擧げる作家は、たゞに明治文學史上に主要な役割を演じたといふ意義からばかりではなく、又其れは現代文學の母胎としても研究されなければならない作家である。

## 一、坪内逍遙

本名雄藏、文學博士、別號春のや朧・小羊。安正六年五月生、昭和十年二月歿。

逍遙は明治時代文學界切つての先覺者であり、總ゆる文學的ジヤンルに先驅者としての功績を遺した、當代の第一人者であつた。彼の學者としての、シエークスピア翻譯の如きは周知の大業であるが、猶代表作として次のものがある。

『小說神髓』　明治十八年に發表された明治最初の組織的な文學論であり、明治文學史上特記せらるべき名著の一である。（岩波文庫本アリ）

『當世書生氣質』 明治十八年作。『小說神髓』の主張である寫實主義を表現せる作である。（岩波文庫本有リ）

『桐一葉』 明治二十七・八年作。演劇論の主張を生かせる名作史劇である。（逍遙選集第一卷所收）

『文學その折々』 明治二十九年單行。本書には、鷗外と論爭せし、啓蒙的文學評論「沒理想論」等が收められてゐる。

『新曲浦島』 明治三十七年發表の舞踊劇脚本で、新樂劇論の主張を表現せるものである。

**參　考**　其の著作を集成せる『逍遙選集』十二卷・別卷三冊全十五冊がある。傳記としては千葉龜雄の『坪內逍遙傳』がある。

瀧田貞治編『逍遙書誌』昭和十二年二月發行

木村毅『坪內逍遙論』改造社版『日本文學講座』「明治大正文學篇」ノ內

本間久雄『坪內逍遙』岩波講座『日本文學』「作家・作品明治時代」ノ內

小島德彌『坪內逍遙研究』木星社版『明治文學講座』第五卷ノ內

高須芳次郎『坪內逍遙研究』新潮社版『日本文學講座』「明治時代」ノ內

正宗白鳥「坪內逍遙論」單行『文壇人物評論』所收

『坪內博士追悼號』「早稻田文學」第二卷第四號　昭和十年四月

『坪內博士追悼特輯』「東京堂月報」第廿二卷第三號

## 一、二葉亭四迷

本名長谷川辰之助、別號冷々亭杏雨、元治元年二月生、明治四十二年五月歿。

明治時代文學界に於ける最も大なる影響と功績を殘せる自然主義文學の先驅をなせる寫實主義的の主張と實踐を爲せる第一人者は正しく二葉亭である。

『新編浮雲』第一、第二編二冊、明治二十、二十一年單行、第三編明治二十二年十月ヨリ雜誌「都の花」ニ連載これは二葉亭の處女作であり、而も『小說神髓』により逍遙の主張せる寫實主義を表現せる最初の作品である。之は又、言文一致體小說の先驅でもあり、當時としては類のない新鮮な感覺と思想的深みを有てる作である。

明治文學史上劃期的の記念すべき作品である。

『片戀』明治二十九年十一月單行。本書には、ツルゲーネフ作の名譯にして藤村、花袋等に大なる刺戟と影響を與へた、片戀、奇遇、あひゞき、三篇の譯文を收む。

『其面影』明治三十九年十一月より朝日新聞に連載せる長篇小說、四十年八月單行本發行。

『平凡』明治四十年十一月より朝日新聞に連載せる長篇小說、四十三年三月單行本發行。

**參考**　『二葉亭全集』全四卷、明治四十三年至大正二年東京朝日新聞社發行。

『二葉亭四迷全集』全八卷昭和十二至十三年岩波書店發行。

『二葉亭四迷』坪内逍遙、内田魯庵の共編、各方面より觀たる長谷川二葉亭の追懷記事。

雜誌「文學、二葉亭研究」第五卷第九號。

## 一、尾崎紅葉

本名德太郎。別號十千萬堂その他。慶應三年十二月生。明治三十六年十月歿。

紅葉は三十代で病歿し、其の作家的生涯も二十年に滿たないが、彼はやはり當時の過渡時代に於ける堂々たる大作家といへやう。山田美妙齋等と硯友社を創立し、明治文學界に於ける最初の文學雜誌「我樂多文庫」を發行、或は「國民之友」「讀賣新聞」等により華々しき文學的活動を爲した。又其の門下よりは泉鏡花、德田秋聲、小栗風葉等の逸材を出せるなど明治文壇に少なからざる功績を遺したのである。

『二人比丘尼色懺悔』明治二十二年四月「新著百種」第一號として單行の小說。

この作は紅葉の出世作で、雅俗折衷の凝つた新文體で書かれたものである。

『多情多恨』明治二十九年二月二十六日以降、「讀賣新聞」に連載の長篇小說。三十年七月單行本發行。これは言文一致體で書いた寫實小說で、紅葉の最大傑作と稱してよきものである。

『金色夜叉』明治三十年一月以降、斷續六年に亘り「讀賣新聞」に連載せられ遂に完結を見ずに終つた長篇小說で、紅葉の派手な方面を代表せる傑作である。三十一年以降全五冊本として春陽堂より刊行せられた。

**參考**　『紅葉全集』全六卷、博文館發行。

松原至文編『尾崎紅葉』（文祿堂版明治文豪傳ノ内。）

本間久雄著『人及び藝術家としての尾崎紅葉』
江見水蔭著『硯友社と紅葉』
福田清人著『硯友社の文學運動』

## 一、山田美妙

本名武太郎。美妙齋、樵耕蛙船と號す。慶應四年七月生。明治四十三年十月歿。
小說家、詩人、評論家として初期の明治文學界に啓蒙的功績を立てた。言文一致の主張と實行、新體詩の評論と創作に見るべきものが尠くない。
『武藏野』明治二十年十一月「讀賣新聞」附錄に發表せる歷史小說で美妙の出世作である。小說であるが散文詩に近いもので、新味ある言文一致の文體で書かれ、世評高く又文壇的影響も大であつた名作である。二十一年八月發行の短篇集『夏木立』に收錄。
『胡蝶』明治二十二年一月「國民之友」新年附錄に發表せる歷史小說で『武藏野』と共に著者の代表作である二十二年三月發行の短篇合集「花籠」等に再錄。
『日本韻文論』明治二十三年十月發行「國民之友」第九十六號以降八回に亙り連載せられし長篇論文である。日本韻文の將來は西洋の詩律に則り新式の韻格を制定すべきなりといふ趣旨の卓論である。
『新調韻文青年唱歌集』全二卷、明治二十四年八月發行。美妙自作の詩數十篇に、雜誌「以良都女」投書家の

詩を添へた詩集である。

『魔界天女』詩歌雜誌「やまと琴」第六調より第八調に亙り連載せる長篇叙事詩で、美妙の韻文中佳作と稱すべきものである。

**參考**　『美妙選集』全二卷。昭和十年發行。

鹽田良平著『山田美妙研究』昭和十三年發行。

## 一、幸田露伴

名は成行、別號蝸牛庵。文學博士、帝國藝術院會員。帝國學士院會員。慶應三年七月生。

露伴は紅葉と併稱せらるゝ明治文壇の巨匠である。作家としても一流であるが、又隨筆家としても現今無比である。其の小說は理想主義的或は瞑想的特色の濃いものである。未完の長篇『天うつ浪』以來小說に筆を斷ち時に史傳、隨筆をものし、悠々自適今日に至る。

『風流佛』「新著百種」第五號、明治二十二年九月單行。

『露團々』明治二十二年二月「都の花」第九號以降第二十號まで連載。二十三年十二月單行。

『五重塔』明治二十四年十一月以降「國會新聞」に連載、後二十五年十月「血紅星」と合綴『尾花集』として刊行せられたる露伴の代表的傑作である。其の小說一篇を熟讀すれば、作者の理想主義、藝術觀が十分にうかゞはるゝ作品である。

『天うつ浪』 明治三十六年九月以降「讀賣新聞」に連載せる未完の長篇小說、これは寫實主義的作風になる傑作であり、一般から期待せられた作品であるが未完に終つたのは惜しい。三十九年一月以降、第一、二、三の三冊本として刊行せられた。

**參考** 『露伴全集』 全十二卷、昭和四、五年發行。
雜誌「文學 特輯（露伴研究）」同十三年六月。

## 一、樋口一葉

夏子、明治五年三月生。同二十九年十一月歿。

一葉の存在は明治文學史上の一異彩である。僅々四年間の作家生涯で二十數篇の短篇小說が主要作品である。作風は內面的人生的ではあるが、女性としては稀にみる精確な描寫と透徹せる寫實性を有し、其の雅俗折衷の文體には驚異的な老練さがうかゞはれる。傾向としては後の自然主義的文學に近いものである。

『にごりえ』 明治二十八年九月「文藝俱樂部」に發表の短篇。女史の作中最も現實味に富むもので平明な文章中に獨特の纖細な味が出てゐる代表作の一篇である。

『たけくらべ』 明治二十八年一月以降「文學界」に連載せる中篇小說で、作者の文學的聲價を永久に保持するであらう傑作である。美化された詩情の中に實人生の現實相を客觀せるもので、作者の藝術精神の最高潮を

示すものである」其の雅俗折衷の自由な文章は明治時代文章の代表的見本として後代に傳ふ價値を有つものとおもふ。(馬場孤蝶編『眞筆版たけくらべ』大正七年刊。

**參考** 『一葉全集』全二卷、馬場孤蝶編並校訂、明治四十五年發行。

『一葉歌集』一卷、佐々木信綱編、大正元年發行。

湯地孝著『樋口一葉論』大正十五年發行。

久保田万太郎著『樋口一葉研究』(新潮社版『日本文學講座』ノ内)

## 一、北村透谷　(詩人・評論家)

名は門太郎、明治元年十一月生、同二十七年五月自殺。透谷は明治中期の浪漫的思想の先驅者である。彼は浪漫主義精神と世紀末の運命を一人で擔ひ遂に短い二十七年の悲劇的生涯を終つた文學者であるが、「文學界」を創刊し、評論に新詩に二十年代の明治文學史に一種清新の浪漫的精神革新の叫びを擧げたことは注意さるべきであらう。

「富嶽の詩神を想ふ」「山庵雜記」等や、長詩「楚囚の詩」(明治二十二年四月單行)「蓬萊曲」(明治二十四年五月單行)等が其の代表作といへやう。

**參考** 『透谷集』星野天知編、明治二十七年發行

『透谷全集』星野天知・島崎藤村等編　同三十五年十月發行

『北村透谷集』島崎藤村編「岩波文庫」本　昭和二年七月發行

鹽田良平著『北村透谷』（岩波講坐 日本文學ノ内）

## 一、高山樗牛（評論家）

名は林次郎、文學博士、明治四年一月生、同三十五年十二月歿。

樗牛は、美學者、文學評論家、文明批評家思想家、文章家等の多角面を有する文學者であつた。彼の明治文學界への功績としては、「太陽」「帝國文學」等に掲げた諸論と、ロマンチシズム思潮の勃興を促がした事どもであらう。

『瀧口入道』　明治二十七年二月「讀賣新聞」に發表の懸賞入選歴史小說で樗牛二十三歳の作である。無論これは彼の出世作である。大體の結構は平家物語により、平語の文章に馬琴調を加味した流麗韻文調の作品である。併し此の作以後彼は再び小說に手を染めなかつた。

『わが袖の記』　明治三十年六月「中央公論」に發表の感想文である。「平家雜感」や「月夜の美觀」と共に共の幽婉な詞藻と美くしい感傷性が當時の青年を魅了した散文詩ともいふべき名文である。

**參考**　『改訂註釋 樗牛全集』全七卷、大正十四年以降續刊。
赤木桁平著『人及び藝術家としての 高山樗牛』大正七年一月刊。

高須芳次郎著「高山樗牛研究」（新潮社版『日本文學講座』ノ内）

## 一、正岡子規（俳人・歌人）

名は常規、竹の里人、獺祭書屋主人とも號す。慶應三年九月生、明治三十五年九月歿。

明治新俳壇の始祖であり、明治和歌の革新者として明治の文學界に偉大な業績を遺した文學者こそ子規であつた。新聞「日本」に俳句の革新を唱へ雜誌「ホトトギス」を發刊して天下を風靡し、更に「歌よみに與ふる書」を發表し根岸短歌會を創立して明治和歌の主流となした。又寫生文の一體をも創始した。

『歌よみに與ふる書』明治三十一年二月三月「日本新聞」に連載の歌論で、子規の和歌革新の第一聲として意義深いものである。（『子規隨筆續編』ニ再錄）。

『獺祭書屋俳話』明治二十六年五月刊。本書は子規初期の俳話三十餘篇から成り、子規の俳諧に關する史的研究、俳句に對する見方、子規の新俳句の立場や其の文學觀等の窺はれるもので、『俳諧大要』（明治三十二年一月刊）と共に代表的俳話俳論集である。

參考　『子規遺稿』全六冊、明治三十七至四十二年發行。
『子規全集』（アルス版）全十五卷、大正十三年以降續刊。
『子規全集』（改造社版）全廿二卷、昭和四年以降續刊。
西宮藤朝著『人及び藝術としての正岡子規』大正七年發行。

橋田東聲著『正岡子規全傳』昭和二年發行。

藤川忠治著『正岡子規』昭和八年發行。

## 一、川上眉山

名は亮、硯友社同人、煙波山人とも號す。明治二年三月生、同四十一年六月自殺。

『魂膽祕事枕』明治二十一年二月「我樂多文庫」ニ發表。

『墨染櫻』明治二十三年六月「新著百種」第九號

『大盃』明治二十八年一月「文藝俱樂部」所載。

『書記官』明治二十八年二月「太陽」所載。

『ふところ日記』明治三十年一月「讀賣新聞」に掲載の紀行文。

『觀音岩』明治三十八年、前編を「國民新聞」に連載、後全二册單行本として刊行の長篇小說。(「岩波文庫」所收)これらの代表作により明治文學史上に短篇小說家としての位置を占める作家である。

**參考**　『眉山全集』全三卷、春陽堂版、明治四十二年發行。

『眉山全集』全四卷、博文館版、右同。

大野光次『川上眉山・人、作品』「立命館文學」第四卷、第九十號。

## 一、廣津柳浪

本名直人、別號蒼々園。文久元年六月生、昭和三年十月歿。硯友社同人。

所謂、深刻小說―悲慘小說の稱を有つた獨特の作風を以て明治文壇に重きをなした。彼は紅葉の寫實主義や露伴の浪漫主義等とは全く異なる、確然たる自己の藝術的境地を開拓したものである。

『殘菊』明治二十二年十月發行「新著百種」第六號。柳浪の文名を藉甚ならしめた初期の作である。

『いとのみだれ』明治二十四年八月發行「聚芳十種」第六卷。

『いとし子』明治二十七年六月發行「文學世界」第十二。

『女馬士』明治三十一年三月發行「春陽文庫」第九編。右の三篇は深刻小說以前に屬する作品中の佳作であらう。

『黑蜴蜓』明治二十八年五月「文藝俱樂部」に發表せる作で、深刻小說と呼ばれるものゝ最初の代表作である

『河內屋』明治二十九年三月「新小說」に發表、三十九年六月單行の小說。これは寫實的な心理小說の逸品で柳浪の全作品中の傑作の一である。

『今戶心中』明治二十九年七月「文藝俱樂部」に發表の小說で、柳浪全作中第一の傑作と稱せらるゝものである。

**參　考**　『柳浪叢書』全二卷、明治四十二、三年發行。（博文館ノ「名家小說文庫」第四及第五編デアル）
藤村顯三『廣津柳浪研究』木星社版『明治文學講座』本作家研究の內。

土井重義「廣津柳浪」改造社版『日本文學講座』本、明治文學篇の內。

## 一、德富蘆花

本名健次郎、明治元年十月生、昭和二年九月歿。

明治文學界に於ける最もユニイクな作家である。而して作家としての彼の本質は自傳作家であるといひ得るであらう。「不如歸」「黑潮」「寄生木」の三長篇小說を除けば、他の彼の創作は殆どみなヒューマン・ドキューメントである。

『不如歸』は明治三十一年十一月二十九日より三十二年五月二十四日まで「國民新聞」に連載の長篇小說である。これは著者最初の長篇であり、全作中の傑作とはいひ難いが代表作の一である。明治以降現代までに此の作ほど廣く且つ永く讀まれた著作は他にその比を見ない。明治三十三年一月に初版を民友社から出版した單行本は昭和二年九月には第百九十版を重ねて猶行はれてゐるのである。

『自然と人生』短篇小說二篇、評傳一篇、自然描寫、感想文八十六篇を集めた文集である 明治三十三年八月初版發行、昭和三年五月には第三百七十三版が刊行され、後「岩波文庫」にも收められて今猶愛讀されてゐる名著である。本書の內容は多く中等教科書に採用せられてゐるが、又一般讀者にも廣く愛讀されてゐるものである。自然詩人としての著者の全貌を髣髴せしむるに足る、この散文詩風の一卷は、明治時代の文章にも尠なからぬ影響を與へたものである。

『思出の記』 明治三十三年九月より三十四年三月まで「國民新聞」に連載され、三十四年五月民友社から單行の長篇小說である。これは著者の感想錄といつた自傳風の小說で、發表當時非常な好評を以て迎へられた著者自ら代表作の一に選ぶものである。

『黑潮』 明治三十四年十月より翌年六月まで「國民新聞」に連載し、三十六年二月、第一卷として自費刊行せる長篇小說である。此の作は、明治十年代後半期鹿鳴館時代の歐化主義思潮の絕頂當時に筆を起し、三十四年社會民主黨成立までの、日本の政界、思想界の現實を全六卷の一大長篇とすべく起稿せるもの、第一卷である。これは著者の作品中最も小說らしい形態を備へたもので、他の自傳的小說と異り、客觀的立場から事件と人物の性格を如實に描寫せんとつとめたもので、即ち文學的構想に成る新政治小說の一種とも考へられるものである。第一卷のみで終つたのは惜しい。

**參考** 『蘆花全集』 全二十卷、昭和三至五年發行。

前田河廣一郎『蘆花傳』 昭和十三年四月發行。

### 一、岩野泡鳴 （詩人・小說家・評論家）

名は美衞。明治六年一月生、大正九年五月歿。

作家としての泡鳴は、花袋、藤村等と共に自然主義文學の花形であり、詩人としては先驅的役割を果した一人といふべく、又評論家としては、その天才的閃きと相當深い學識に加へて深刻豐富な思想からくる獨自の文

藝觀、人世觀に立脚する自然主義の第一人者であつたといへやう。

『神祕的半獸主義』　明治三十九年六月發行の評論集である。之は泡鳴の出世論文である。內容は全二十二章、メーテルリンクの神祕說、エマーソンの自然論から說き起し、自然卽心靈說、善惡否定の論、悲痛の肉靈說、戀愛論から刹那的文藝觀を樹立し新悲劇論を說述せる長篇である。

『新自然主義』　明治四十一年十月發行の評論集で「神祕的半獸主義」の續篇とみるべきものである。

『耽溺』　は明治四十三年二月「新小說」に發表の作者の出世作であり、「破戒」や「蒲團」等と共に自然主義文學史上屈指の名作である。

『放浪』　及び『斷橋』は泡鳴の自傳體小說の中核を占むべき作品で、又自然主義的作品としても優れたものである。

**參　考**　『泡鳴全集』　全十八卷、大正十至十一年發行。

正宗白鳥「岩野泡鳴論」（『文壇人物評論』所收）

宇野浩二「岩野泡鳴　改造社版『日本文學講座』本「明治文學篇」ノ內。

舟橋聖一著『岩野泡鳴傳』　上卷、昭和十三年七月發行。

**一、國木田獨步**（別號、獨步吟客）

名は哲夫。明治四年七月生、同四十一年六月歿。

獨歩の明治文學史上に占むる地位は、矢張り自然主義の代表的作家としてゞあらう。然し彼の本質は徹頭徹尾詩人であつたといへやう。もつとも彼の詩そのものは詩史上にさほど重要な存在ではなかつたが、詩人らしい彼の精神と風格はむしろ散文の形式をとつた短篇小説、隨筆、紀行文等のいづれにも表現せられてゐるのである。而して自然主義的とはいふもの丶彼の作は客觀的或は科學的態度のさほどはつきりしたものではなく、理智的浪漫文學とも謂ふべきものである。自然美の熱愛、純眞戀愛の渇仰、理想と現實、個人と社會、運命對個性といふやうな問題をとらへ、默想し反省し熟慮せる獨特の文學觀、人生觀、社會觀の所産であつた。

『忘れ得ぬ人々』　初期の作で、明治三十年二月「國民之友」に發表のものである。

『源をぢ』　明治三十年五月「文藝倶樂部」に發表の小説處女作である。これは一篇の叙事詩ともいふべき物語風な一脈の哀調をおびた浪漫的作品である。

『武藏野』　明治三十四年三月單行の散文集である。本書には、三十一年一月「國民之友」に發表の「今の武藏野」と題する感想日記文を「武藏野」と改めたものと、それ以外に初期の短篇「置土産」(三十三年九月　太陽」所載)「源をぢ」「たき火」(三十年十一月作)「詩想」(三十一年四月作)「忘れ得ぬ人々」「鹿狩」(三十一年八月作)等が收錄されてゐる。特に「武藏野」の一篇は德富蘆花の『自然と人生』と共に明治文藝の双璧であるが、實に「武藏野」は彼のワアヅワアスとツルゲーネフの呼吸を身近かに感ずるやうな散文詩風の作品である。

『牛肉と馬鈴薯』　明治三十四年十一月、文藝雜誌「小天地」に發表の短篇小說である。これは獨步の浪漫的思想が遺憾なく表現されてゐる作であり、彼の代表作の一である。

「少年の悲哀」　明治三十五年八月「小天地」所載。

「酒中日記」　同三十五年十一月「文藝界」所載。

「運命論者」　同三十五年十二月「山比古」所載、

「女難」　同三十六年十二月「文藝界」所載。

「號外」　同三十九年八月「新古文林」所載。

「窮死」　同四十年七月「文藝倶樂部」所載。

「竹の木戸」　同四十一年一月「中央公論」所載。

これら諸篇が獨步の代表的作品とみていゝものであらう。

**參考**　『國木田獨步全集』全八卷、昭和五年發行。

『新聲・獨步號』第十九卷、第一號、明治四十一年七月發行。

『國木田獨步』「新潮」明治四十一年七月發行。

『文豪國木田獨步』「趣味」明治四十一年八月發行。

吉江喬松「獨步研究」新潮社版『日本文學講座』本「明治時代」ノ內。

鹽田良平「國木田獨歩」岩波講座『日本文學』本「作家、作品明治時代」ノ内。
中村星湖「國木田獨歩」改造社版『日本文學講座』本「明治文學篇」ノ内。

## 一、田山花袋

本名錄彌。明治四年十二月生、昭和五年五月歿。

花袋は逍遙、二葉亭以後の明治文學に、西歐の科學的自然主義に近い實驗と觀察を基礎とした新文學を導いた先驅者であり功勞者であつた。前時代の硯友社風の不徹底な寫實主義を壓倒して、明治後期の文學界を支配するに至つた自然主義文學を樹立したことは明治文學史上の一大革新であつた。花袋は西歐の近代文學殊に佛蘭西自然派からの影響も著しいが、又獨逸や露西亞の自然派からも深い影響をうけた作家であつた。彼は現實に直面して悶え苦しむ人間の姿を容赦なく描破したので、暗鬱な空氣が作品に漂ふてゐる。人間本能の苦悶、個性の悲劇を描く大膽執拗な一面は花袋の本領であらう。然も亦、情熱の詩人としての一面をも持つ作家で初期には『抒情詩』(明治三十年四月發行、宮崎湖處子編ノ詩集)以外にも『ふるさと』(明治三十二年九月發行ノ長篇小說)や『野の花』(明治三十四年六月發行ノ長篇小說)等の感情的、浪漫作品がある。

『重右衛門の最後』明治三十五年五月新聲社の「アカツキ」第五編として發行された中篇小說である。これは作者が公にした最初の自然主義風の寫實に成る小說で、明治文學史上記念すべき作品といへやう。

『蒲團』明治四十年九月「新小說」に發表された作者の代表作品であり、明治文壇にとつても、亦作者自身に

とつても明かに劃時代的のものであつた。此の一篇こそ明治文學史上に於ける自然主義運動が擧げた第一の烽火であつた。(「岩波文庫」收錄)

『生』明治四十一年四月「讀賣新聞」に發表の長篇小說で、これは『妻』(明治四十年一月「日本新聞」に發表)及び『緣』(明治四十三年三月「毎日電報新聞」に發表)と連續する三部作とみられるものである。『蒲團』により一躍自然主義文學運動の先驅者となつた作者が、その老母を中心として兄弟夫婦等の關係を材料として描き出した人生の縮圖で、全篇を貫く誠實さと技巧の淸新さとは、正に花袋の代表的傑作と認めらるべきものであらう。(「岩波文庫」所收)

『田舍教師』明治四十二年十月單行の長篇小說である。これは作者の主張した平面描寫を最もよく生かした作で、渾然たる藝術品の感じを與へる花袋の代表傑作である。(「岩波文庫」所收)

參考　『花袋全集』全十二卷、大正十二至十三年刊行。
『花袋全集』全十八卷、昭和十一年至十三年刊。
正宗白鳥「田山花袋論」單行『文壇人物評論』所收。
前田晁「田山花袋」改造社版『日本文學講座』「明治文學篇」ノ內。

## 一、島崎藤村

名は春樹。明治五年二月生。

藤村は明治時代に興つた新體詩を、最初に日本民族的の藝術にまで生育せしめた、明治三十年代前半期の代表詩人である。

小說家としては、明治末葉の自然主義に先驅して以來、現實主義の完成に至るまで不斷に力作を發表して明治文學史上に高い地位を占めてゐるのである。

『藤村詩集』　明治三十七年九月發行。前に單行本として出した四卷の詩集及び詩文集『若菜集』（明治三十年八月發行）『一葉舟』（明治三十一年六月發行）『夏草』（明治三十一年十二月發行）『落梅集』（明治三十四年八月發行）の內容をまとめた詩集で、本書一卷はよく詩人としての藤村の全貌をうかゞふに足るものである。（「岩波文庫」本ニ「藤村詩抄」有リ）

『破戒』　明治三十九年三月「綠蔭叢書」第一編として自費發行の長篇小說である。此の作は作者の所謂一寫實家として進んで行くべき、散文作家としての第一步を踏出したもので、其れまでの浪漫的から現實主義への過渡時代の所產である。發表當時各方面に甚大のセンセーションを捲起し、新興日本文藝の黎明と文藝史家から評されたのである。明治文學史上記念すべき作品である。

『春』　明治四十一年一月より「東京朝日新聞」に連載、同年十月「綠蔭叢書」第二編として單行の長篇小說である。これは北村透谷等「文學界」一派の青年文人がモデルとなつてゐることは有名なもので、時代も若く思想も若い其の頃の青年達の、浪漫的な惱みと憧憬とを客觀的に描寫した名作である。

『家』上卷は明治四十二年一月より「讀賣新聞」に連載、下卷は同四十三年四月、十月の「中央公論」に發表し、同四十四年十一月「緑蔭叢書」第三編として、上下卷二冊に刊行の長篇小說である。二つの大きな家族の二十年餘に亙る生活記錄である此の作は、又明治後半期の、日本の社會生活のある斷面を如實に示したものともいふべき大作である。

猶、前記『春』の前篇とも見ろべき長篇小說『櫻の實の熟する時』（「岩波文庫」本アリ）と『新生』は右の三篇と共に藤村の五大長篇小說であり、いづれも傑作と稱せられるものである。

**參考**

『藤村全集』全十二卷、大正十一至十二年續刊中。

『藤村文庫』全九編、昭和七年至同十二年刊行。

山崎斌著『藤村の歩める道』大正十五年發行。

秋田雨雀編『島崎藤村研究』昭和九年發行。

武藤直治著『夜明け前の作者』同十一年發行。

伊藤信吉著『島崎藤村』同

木枝增一著「島崎藤村」岩波講座『日本文學』「作家作品明治時代」ノ內。

有島生馬著「島崎藤村」改造社版『日本文學講座』「明治文學篇」ノ內。

雜誌「文學・藤　研究」第四卷第八號　昭和十一年八月

## 一、徳田秋聲と正宗白鳥

この二作家は共に現存の老大家であるが、明治文壇に於ける自然主義の作家として、獨歩、花袋、藤村等と共に考ふべきであらう。

秋聲の『新世帶』（明治四十一年十月「國民新聞」ニ連載ノ中篇小說）『足跡』（明治四十三年七、八月「讀賣新聞」ニ連載）『黴』（明治四十四年八月「朝日新聞」ニ連載）『爛（たゞれ）』（大正二年三月「國民新聞」ニ連載）等の作品は、自然主義的人生派的の傾向の傑作で、我が明治文學史上で最も精確で搖ぎのない運動であつた自然主義文學の水準を示す傑作である。

白鳥の『塵埃』（明治四十年一月「趣味」ニ發表ノ短篇小說）『何處へ』（明治四十一年一月「早稻田文學」ニ發表）『二家族』（明治四十一年九月下降「早稻田文學」ニ連載ノ長篇小說）『微光』（明治四十三年九月「中央公論」ニ發表）『泥人形』（明治四十四年七月「早稻田文學」ニ發表）等の諸作は、作者の地位を確保した名篇であり、明治の自然主義的文學作品中の代表的なものである。

**參考** 『秋聲全集』全十六卷、昭和十一年至十二年刊。

正宗白鳥著「徳田秋聲論」單行『文壇人物評論』所收。

中村武羅夫「徳田秋聲」改造社版『日本文學講座』「明治文學篇」ノ内。

『白鳥傑作集』全四卷、大正十年刊。

谷川徹三著「自然主義の作家」岩波講座『日本文學』「作家作品・明治時代」ノ内。

## 一、泉　鏡　花

本名は鏡太郎、白水樓主人等の別號あり。尾崎紅葉門。明治六年十一月生。

鏡花の作は觀念小説とよばれてゐるが、其れは浪漫主義が一層象徴化して幽玄神祕な世界にまで到達した傾向といふべきであらう。其の小説に扱はれてゐる世界は實に種々樣々であるが、彼獨特の文體と獨自の藝術精神とは稀有にして無類のものである。初期の傑作『夜行巡査』（明治二十八年四月「文藝倶樂部」ニ發表）『外科室』（明治二十八年六月「文藝倶樂部」ニ發表）や『辰巳巷談』（明治三十一年「新小説」ニ發表）『通夜物語』（明治三十一年九月「大阪毎日新聞」ニ發表）『湯島詣』（明治三十二年十一月單行本刊行）『高野聖』（明治三十三年二月「新小説」ニ發表）等から、自然主義全盛時代に創作した『婦系圖』（明治四十年一月「やまと新聞」ニ發表）『白鷺』（明治四十二年十月「朝日新聞」ニ發表）『歌行燈』（明治四十三年一月「新小説」ニ發表）の諸作は鏡花の各傾向を代表する名作で有るばかりでなく、それは又明治文學史上の傑作といひ得るものであらう。彼の作は單行本にして六十餘卷にも及ぶが、大正末期頃までの全作は十五卷の全集に收錄されてゐる。

**參考**　『鏡花全集』全十五卷、大正十四年至昭和二年刊。

『天才泉鏡花』「新小説」第三十年、第五號。

中河與一「泉鏡花」改造社版『日本文學講座』「明治文學篇」ノ内。

## 一、夏目漱石

名は金之助。慶應三年一月生、大正五年十二月歿。

漱石と鷗外は、單に作家といふより、もつと高い文學的地位に置かるべき、我が近世文學史上きつての大文學者である。現在ではそれ〴〵專門に此の兩大家を研究する學徒も居て其の研究は愈々さかんになり、精細な研究業績も日を追つて發表されつゝある。而して、一言に漱石を評するならば「人情に溺れたり人情の暗面を探つたり、殊更深刻なものを抉つたりはせず、自ら非人情の世界といふ超自然たる別天地を拓いて傍觀的な立場を守り續けた。高い教養を持つて、知的な創作態度を終生持してゐた作家は漱石を措いて他に類を見ない」と言ふ菊池寛氏の言葉が最もよく當つてゐるとおもふ。

參考　『漱石全集』（決定版）全十九卷昭和十至十二年刊行。
『文豪夏目漱石』「新小說」第廿二年、第二號
赤木桁平著『夏目漱石』大正六年五月刊。
森田草平著『文章道と漱石先生』大正八年十一月刊。
島爲男著『夏目さんの人及思想』昭和二年十月刊。
夏目鏡子述『漱石の思ひ出』昭和四年十月刊。
松岡讓著『漱石先生』昭和九年六月刊。

小宮豐隆著『漱石襍記』昭和十年五月刊。
『漱石記念號』「思想」第百六十二號、昭和十年十一月發行。
小宮豐隆著『夏目漱石』昭和十三年七月刊。
森田草平著『夏目漱石研究』新潮社版『日本文學講座』「明治時代」ノ内。
長谷川如是閑著『夏目漱石論』改造社版『日本文學講座』「明治・大正文學篇」ノ内。
正宗白鳥『夏目漱石論』單行『文壇人物評論』所收
『特輯、漱石研究』「國文國史」第三卷、第一號、昭和十三年二月。

## 一、森　鷗外

名は林太郎。諱は源高湛。文學博士、醫學博士。文久二年一月生。大正十一年七月歿。

鷗外が明治文學史上の第一人者であることは既に確認されてゐるのである。其の翻譯が明治啓蒙時代に與へた影響は實に大きい。流麗典雅な譯調文辭を以て西歐大家の思想業績を、貧しい我が文壇に移入した功績は、他の一流作家の功績をもしのぐ程のものであらう。和漢洋の教養を有ち、鑑賞眼も高く確かで、其の創作も亦明治文壇第一流のものである。

**參考**　『鷗外全集・著作篇』全廿二卷、昭和十一年至十三年刊。
『同　翻譯篇』全十三卷、昭和十三年七月ヨリ續刊中。

『文豪鷗外森林太郎』「新小説」臨時増刊、大正十一年八月。

『鷗外先生追悼號』「三田文學」第十三卷、第八號、同

『鷗外追憶記事號』「心の花」第廿六卷、第八號、同

『鷗外先生記念號』第一、第二冊。「明星」第二卷、第三・四號、大正十一年八・九月。

瀧田貞治編『鷗外書誌』昭和八年十一月。

『鷗外研究特輯』「浪漫古典」第四輯、昭和九年七月。

森潤三郎著『鷗外森林太郎』昭和九年七月。

木下杢太郎『森鷗外』岩波講座『日本文學』「作家作品・明治時代」ノ内。

小島政二郎『森鷗外研究』新潮社版『日本文學講座』「明治時代」ノ内。

『特輯鷗外研究』「文學」第四卷第六號 昭和十一年六月。

## 一、永井荷風と谷崎潤一郎

まづ、永井荷風などは前述の各作家と同列において研究さるべきであらう。和漢の素養に加へて外國の文化文學を咀嚼し、主觀的享樂主義的の優れた作品を、漸く無味單調に墮しかけてゐた明治末葉の自然主義文學時代に創作し、異色ある清新雅醇の詩境を開拓したのが荷風である。ゾラの寫實主義の影響になる初期の作『野心』（明治三十五年四月刊、美育社發行「新青年小説叢書」第一冊トシテ發表）『地獄の花』（明治三十五年九

月刊金港堂版〕や『夢の女』（明治三十六年五月刊新聲社版）等の長篇小說で早くも作家としての地位を得たのである。外遊中の記念業績『あめりか物語』『ふらんす物語』は單なる海外紀行文でなく優れた文學作品である。更に歸朝後の『歡樂』（明治四十二年七月「新小說」ニ發表）『すみだ川』（明治四十二年十二月「新小說」ニ發表）『冷笑』（明治四十二年十二月至四十三年二月 東京朝日新聞」ニ連載）等は荷風の代表作と謂はれるものである，『荷風全集』全六卷が有り、其の藝術を論じたものに日夏耿之介「永井荷風の藝術」（「中央公論」第五十二年第九號）がある。

谷崎潤一郎も亦、自然主義の衰退期に、所謂耽美主義、惡魔主義などと呼ばれる芳烈妖異なる文學を展開して明治末期の文學史上に特異の地位を占めた作家である。『刺靑』（明治四十二年一月「新思潮」ニ發表）『麒麟』（明治四十二年十二月「新思潮」ニ發表）『戲曲信西』（明治四十二年十二月「スバル」ニ發表）『少年』（明治四十四年六月「スバル」ニ發表）等は此期の作で、又彼の出世作であり傑作である。

『谷崎潤一郎全集』全十二卷、昭和五至六年刊行。

扨て明治文學史上に於ける、研究に値する第一義的の作家は大體以上であらうと考へられるのである。併し明治時代に名作或は傑作といはれる作品を遺してゐる作家は猶相當に多いのである。備忘のために其等の作家を擧げておくことゝする。

饗庭篁村（與三郎）

竹の屋主人と號す。「掘出し物」「當世商人氣質」「勝關」等以下數十篇の小說がある。小說集『むら竹』（全二十卷春陽堂發行）『竹の屋劇評集』（東京堂版）「明治文學名著全集」第十二卷）は彼の代表作である。

須藤南翠（光暉）

「新粧の佳人」「綠簑談」等の作がある。

河竹默阿彌（本名吉村新七）

『默阿彌全集』全廿八卷、春陽堂發行がある。

福地櫻痴（源一郎）

戯著「もしや草紙」「俠客春雨傘」等は有名な作である。『櫻痴全集』全三卷、博文館發行がある。

依田學海（百川）

「吉野拾遺名歌譽」「文覺上人勸進帳」「俠美人」「十津川」等が共の代表作である。

巖谷小波（季雄）江見水蔭（忠功）石橋思案（助三郎）

硯友社一派の文學、紅葉の研究に關聯して研究すべき作家である。

齋藤綠雨（正直正太夫）

短篇小說と隨筆に見るべきものがある。「かくれんぼ」は代表作であり、『あま蛙』『あられ酒』等の選集數卷及び、『綠雨全集』博文館發行がある。

**村上浪六**（名ハ信、ちぬの浦浪六）

「三日月」「奴の小萬」「たそや行燈」「當世五人男」等の代表作以下多數の小說、及び隨筆、雜著、史傳等數篇の作者である。其の小說は所謂「撥鬢小說」と呼ばれたものである。

**村井弦齋**（寬）

「小猫」「日の出島」等大衆的作品が多數ある。

**黑岩淚香**（周六）

明治二十一年にエミイル・ガポリオーの「ルルージュ事件」を譯した「裁判小說人耶鬼耶」以下百篇に近い探偵物の翻譯がある。明治文壇に於ける探偵、冒險小說の第一人者である。

『黑岩淚香』淚香會編、大正十一年十月扶桑社發行がある。

**森田思軒**（文藏）

明治文壇の翻譯家として逸することのできぬ人である。代表作は「瞽使者」「探偵ユーベル」「十五少年」等である。

## 矢崎嵯峨の屋 （嵯峨の屋おむろ、名ハ鎭四郎）

處女作「守錢奴の肚」以下「ひとよ切」「無味氣」「初戀」「くされたまご」「野末の菊」「流轉」等の諸作は明治新興文學初期に一つの位地を占むるものである。「初戀」は、ツルゲーネフの影響に成る物語詩風の佳作である。

## 小杉天外 （爲藏）

明治文壇に於ける位置は、やはり自然主義一派に數へるべきであらう。紅葉以來の行詰つた寫實主義にゾラ風の眞なるものを探求しやうとする新潮流を注入しやうと努力した功績は認められてよいであらう。明治二十八年四月より「讀賣新聞」に連載した「改良若殿」以來新境地を開拓して、「蛇いちご」（明治三十二年四月單行）「初姿」（明治三十三年八月單行）「はやり唄」（明治三十五年一月單行）等の諸作を發表して文壇に於ける名聲に一段と重きを加へた。更に、明治三十六年二月より九月へかけて「讀賣新聞」に連載した長篇小說「魔風戀風」を書き「コブシ」（明治三十七年三月至十一月「讀賣新聞」所載）に次いで、明治四十一年九月より同四十二年八月に亙つて「讀賣新聞」に連載の「長者星」等の長篇佳作を發表するに及んで、明治文學史上の地位を確定したといへやう。

## 小栗風葉 （加藤磯夫）

風葉は、鏡花、春葉、秋聲と共に紅葉門下の四天王と稱された作家である。其の作風は紅葉と同じ藝術至上

主義と呼ばるべきものである。

「寢白粉」（明治二十九年九月「文藝倶樂部」ニ發表）「龜甲鶴」（明治二十九年十二月「新小說」ニ發表）「戀慕流し」（明治三十一年九月ヨリ「讀賣新聞」ニ連載）「青春」（明治三十八年三月ヨリ「讀賣新聞」ニ連載）等は數多い風葉の作品中の傑作であらう。

『風葉集』全二卷、明治四十四年、春陽堂發行。

中村武羅夫『小栗風葉』改造社版『日本文學講座』「明治文學篇」ノ内。

## 眞山青果（彬）

鄉土色豐かな佳作「南小泉村」を代表作として自然主義文學時代に短篇小說作家として足跡を印した人。短篇集『青果集』（明治四十年十二月單行）がある。

『眞山青果』（鈴木氏亨）改造社『日本文學講座』「明治文學篇」ノ内。

## 小山內薰（撫子ト號ス）

共の業績から考ふれば劇文學に本領を認められるが、明治文學史上から見るならば、むしろ詩人及び短篇小說作家としての地位を有つのである。『小野のわかれ』（詩集、明治三十八年九月、同人雜誌「七人」ノ第九冊トシテ發行）『夢見草』（明治三十九年十一月、本鄉書院發行ノ散文詩集）と短篇小說集三卷――『窓』明治四十一年八月單行）『蝶』（明治四十二年四月單行）『笛』（明治四十三年十一月單行）及び演劇論集『演劇新潮』（明

治四十一年十二月單行）『演劇新聲』（明治四十五年一月單行）等が明治期に於ける文學的業績である。

以上十五六人の作家を擧げたが、これら以外にも猶研究さるべき明治時代の文學者は尠くないのである。遡つて、外山ゝ山、物集高見、落合萩の家等の新體詩史上に於ける業績も闡明さるべきであらう。又磯貝雲峰や戸川殘花や宮崎湖處子等の詩壇への寄與も考へるべきであらう。高橋五郎の飜譯文學に於ける業績も指摘されなければならない。

內田遠湖、石橋忍月、內田不知庵（魯庵）大西操山、金子筑水、島村抱月、後藤宙外、長谷川天溪、生田長江等の評論壇への貢獻も看過できぬであらう。

又　朝比奈知泉、陸羯南、志賀矧川、三宅雪嶺、德富蘇峰等の新聞に於ける評論活動も、明治文學史上の輝かしい業績であつたのである。

更に、上田敏　柳村）土井晩翠、蒲原有明、薄田泣菫等の詩文學に於ける貢獻や、與謝野鐵幹同晶子、伊藤左千夫、長塚節、佐々木信綱、窪田空穗、尾上柴舟、金子薰園、島木赤彥、太田水穗、石川啄木等の短歌文學に於ける功績や、又更に內藤鳴雪、高濱虛子、河東碧梧桐、村上鬼城等の俳諧文學に於ける業績に就ても猶研究の餘地があるであらう。

木下尙江、長谷川如是閑、堺利彥（枯川）等の社會文藝といふものも、猶よく考察されていゝと想ふ。柳川春葉、佐藤紅綠は自然主義時代の前後に相當の作品を書いてゐるのであり、渡邊霞亭、菊地幽芳等は家庭小說、新聞小說、歷史小說家として活躍したのである。

又赤門派の文人で、韻文散文に或は評論等の方面に名聲を博した人々、卽ち大和田建樹、大町桂月、武島羽衣、鹽井雨江、久保天隨、田岡嶺雲、內海月杖、樋口龍峽、小山鼎浦、齋藤野の人・沼波瓊音等に就ても、もう少し注意が拂はれていゝと想ふのである。又、高安月郊、岡本綺堂、伊原靑々園、松居松葉等の劇壇に關する功勞には特筆すべきものがある。

又更に、三宅花圃、田澤稻舟、梶田薄氷、大塚楠緒子、森しげ女等の女流作家の考究もなされていゝとおもふ。

鈴木三重吉、森田草平等明治末期の文學界に相當價値を認められていゝ作品を遺してゐる作家や、武者小路實篤、有島武郞、志賀直哉等「白樺派」の作家達、或は「靑鞜」一派の女流作家に至る研究考察にまですゝむことを期待するものである。

研究すべき作家はこれで盡してゐるとは言ひ難いであらうが、初學者は先づ以上の作家中の一人から始めて、其れに關聯する他の作家に及び、更にまた特殊の深い研究等にまで精進せねばな

るまいとおもふ。斯くて、爰にはじめて明治時代文學の研究はほゞ完全に果されるであらうと信ずるのである。

# 明治文學研究書誌

明治時代文學史の本格的研究は、岩城準太郎著『明治文學史』（明治三十九年十二月初版發行）に始まると考へ得られるであらう。それ以降にあつては、大正年間に入つて漸く斯の學業に携る者の多きを加ふる傾向となつた。この事は、時代文學史の研究として當然であるといへやう。大正時代に始められ、昭和時代となつて愈隆盛を見つゝある事實も亦必然の趨勢であらうが併し其れは又、輓近の文藝復興的な學界の機運と、明治時代文化考察の熱意とに由因するものとも考へられるのである。

今や、明治文學史の名を負ふて公にされた著述も數種をかぞへるのである。又明治文學の全史ではないが、其の一面を或は一作品一作家を中心としての研究に至つては夥しい數にのぼるので

ある。併しながら、明治時代文學の本格的研究・即ち我が國文學史上に於ける明治文學の意義を闡明し、或は民族精神文化の表現としての明治文學の本質を究明するなどは、猶今後に期待すべきであらうし、明治文學全史の著述も、現在吾々の前に示されてゐるもの丶みで滿足すべきではなからうと考へるのである。筆者が茲に此の初學者向きの書誌を記述しやうとするのも、より完全な明治文學研究の業績を新進有爲の學徒に待望するからに外ならない。

此の書誌の記述は專ら明治期以降現今に至る間に公にされた、明治文學史研究に關する主要な參考文獻の解說を本として、其れが展開の跡をたどり、以て明治文學研究の略史に代へやうと想ふのである。

## 明　治　期

明治十五年八月に、外山丶山、矢田部尙今、井上巽軒三氏同撰の『新體詩抄』[1]の誕生によつて明治新文學としての新體詩發生の端緒は旣に開かれたのであるが、少し降つて明治十八年こそは我が文學界の一大劃期(エポック)であつた。卽ち明治新文學の曉鐘ともいはれる坪內逍遙の『小說神髓』が

發表されたのである。この著は明治十七年に起稿されて、十八年から翌十九年へかけて半紙判雜誌型九冊といふ出版樣式によつたもので發行所は松月堂であつた。其の內容は、小說の本質一般と各法則の細論とから成立つてゐる。主として英國の文學評論や英文學史を其の土臺としてゐるので、又美學の本質等の觀點からは猶不徹底さもまぬがれないのであるが、小說の本道が寫實にあるべきだといふ理論を闡明し、一の文藝概論としての體系をまとめたことは、未だ明治十七八年といふ時勢に在つては、正に先覺者の偉業といはねばなるまい。本書の著者は、此の文學新論の著述と前後して、小說[3]『一讀三嘆當世書生氣質』をも創作發表したのであるが、これは過渡期の作として興味もあるが、併し『小說神髓』の理論を具體化した作品としては其の代表的價値あるものとは言ひ難い。むしろ明治二十年に出た、二葉亭四迷の創作[4]『浮雲』こそは、『小說神髓』が與へた小說作法の指導精神と竝稱せらるべき價値を有つものであることは、今日では明治文學史家の定說となつてをる。

明治十九年に出た、[5]末松謙澄の『日本文章論』や物集高見の[6]『言文一致』など或は廿二年に出た朝戸善友著[7]『改良小說著作法』等も文學史研究上一顧の要は有るものとおもふ。

明治廿四年に刊行の吉田香雨著[8]『當世作者評判記』は小冊子ながら、而も亦著者自ら戲著と稱

するものではあるが、之は當時の文壇人物評論として注目すべきものであらう。著者香雨（伊太郎）に就いては其の傳を詳にしないが『小說文範』等の著もあり國文學に通じてゐたことは推考できるのである。此の評判記は、美妙齋を筆頭に紅葉、漣、篁村、天囚、春の屋、仰天子、文海、湖處子、忍月、香雪、三昧、南翠、新二、露伴、思案、鷗外、眉山、綠雨、半牧、愛溪、學海、鯉出、蘭溪、嵯峨の屋、二葉亭、鐵腸、採菊、櫻痴、得知、思軒、梅花、涙香、龍溪、柳浪、霞亭、青萍、漁山に至る當時文壇の一流人物は殆ど其の月旦にのぼせてゐる。簡潔ではあるが各人物のアウトラインを畫き、猶その近作代表作の批評にまで及んでゐて、その所論は穩健中正であるので明治新文壇初期の作家を知るには恰好の參考資料である。

同じ廿四年九月に出版の坪內逍遙著『春廼家漫筆』(9)中に「梓神子（あづさみこ）」の一篇がある。これは同年五月十五日から六月十七日に亘つて「讀賣新聞」に連載せられたもので、小說風の隨筆ともいふべき作品である。この作の中に明治初年頃からの當時の我が文學界の狀態が諷刺諧謔的に敍述せられてをるが、これなども史的觀察の一助ともなるものであらうか。

廿六年六月出版の坪內逍遙著『小羊漫言』(10)一卷には三十年代初頭二三年間の我が文學界の進展過程を論述した章節が多く、この期に於ける文學の評論乃至解說の役目を果してゐる。

「廿二年文學上の出來事月表」――「廿二年文學界 重に小說界 の風潮」では、當時の文學作品發表の代表機關である[11]「國民の友」[12]「新小說」[13]「都の花」[14]「文庫」[15]「女學雜誌」等で公にされた文學論や作品に就ての評論・感想を書いてゐる。「廿二年の著作家」の章では、當年活躍した美妙齋、思軒、竹の屋、南翠等「都の花」や「新小說」を舞臺とした諸作家を、或は又紅葉を筆頭とする硯友社派の諸家、[16]「新著百種」に據つた諸家、批評家としての忍月『風流佛』の作者露伴、關西を席捲した三昧、脚本壇の雄學海、飜譯と文學評論の第一人者鷗外等を論じてゐる。「新聞紙の小說」「廿三年文學界の風潮」「小說三派」等は文藝時評であり、又『此ぬし』と『致師三昧』其他では美妙、紅葉等の作品批評を爲してゐるのである。

德富蘇峰の[17]『文學斷片』は廿七年の三月に發行された。本書の內容は、「近來流行の政治小說を評す」「新日本の詩人」「歸省を讀む」「梅花詩集に題す」其他文學界に關する論說が主である。然しこれらの諸論文は既に二十年頃から廿六年頃までに「國民新聞」や「國民の友」に揭載したものである。

同年の四月[18]『文學者となる法（卷頭ニハ爲文學者經トアリ）』三文字屋金平述といふ一書が發行された。これは勿論一種の戲著といふべきものであるが、著者は當時の文學通であり又文藝批評にも

一見識を有つてゐた内田魯庵（不知庵）である。
内容は、文學界の動静を知る法——文學者となり得る資格——文學者として學ぶべき一般の見識及び嗜好並に習癖——交遊に於ける文學者の心得——著述に於ける心得並に出版者待遇法、この五章に分ち各細節に亘つて詳論したもので、いはゞ文學志望者への文學案内の役割を目標に書かれたものであらうが、達者で巧な筆法で當時の我が文學界、文壇の裏面事情等を微細に記述してゐるので、之は明治文壇側面史の一部として見るべきものであり、その意味で多少の價値を認めていゝ著作と考へられる。

當時の文學界の實状は如何かといへば、先づ明治二十年代の初頭から四五年間は殆ど硯友社派の文壇といつた觀があつた。やがて併し、矢野龍溪の「浮城物語」とか末廣鐵腸の「南洋の大波瀾」などが出て大いにもてはやされた。又そこへ村上浪六の[19]「三日月」が突如として現はれ、所謂撥鬢小說の名で呼ばれる一聯の作品が一時の人氣を湊つたが、これも程なく沒落して了つた。二十五年に紅葉は長篇「三人妻」（讀賣新聞）を、又露伴は「二日物語」（國會新聞）の力作を各發表してゐるが、概して既成作家は稍疲勞の傾向を示しはじめ、讀者の方でも他の新らしい作品（例へば歷史小說を）待望する聲が高まつて來た。そこへ現はれたのが、まづ高山樗牛の[20]「瀧口入

道」明治廿七年五月、讀賣新聞懸賞入選作」であつた。そして間もなく日清戰爭が始まつたのであつた。

さて此の年の秋、こゝに最初の『明治文學史』(21)が公刊されたのである。本書は、明治文學史上に唱歌並に和歌、新體詩美文韻文の作者として名を殘した國文學者大和田建樹の著述にかゝるものである。四六判二百十餘頁の小著であるが、其の內容は、總論。第一期謂はゆる輸入時代。第二期謂はゆる反動時代。第三期謂はゆる新聞紙時代。といふ章別の下に、明治初年の福澤學風、中村敬宇の業績、飜譯書の流行、英語學、新聞の創業、雜誌の刊行、守舊學派といふ項目の細說から始めて、やがて小說界の繁昌に及び戯曲脚本、新體詩唱歌、雜誌及著書の解說をして、諸新聞雜誌の主義主張やそれを主宰する人物の紹介等で結んでゐる。これら本書の內容は必ずしも明治時代文學の充分なる研究から成る論說とも言へないであらうし、又精鋭な文學評論とも言ひ難いと考へられるのであるが、それにもかゝはらず、ともかく之は明治初期から二十年代半頃迄の我が文學界の現狀と推移とを穩健中正な筆致で敍述したもので、後學の明治文學史家の一應は見なければなるまい參考文献の一であると想ふ。

明治廿九年の秋と暮に明治文學書史上逸することのできない二書が出版された。其の一は坪内逍遙の『文學その折々』[二二]である。堂々菊判九五二頁の大冊、而も内容は廿三四年頃から數年に亘る著述を集めたもので、各種の論説批評、文學上の時事評論、海外文豪の評傳等から更に明治作家の月旦に及んでゐる。博引傍證、所論周密、實に明治廿年代の我が文學思潮の深淺干滿の度を測る唯一の資料ともいふべきものである。殊に本書の重要すべき理由の一は、書中所載の「烏有先生に謝す」以下凡そ一五〇頁にも亘る數項目一聯の論文は、かの明治文學史上特記に値する、逍遙對鷗外のわが文壇の兩大家の間に反復應酬された所謂「沒理想」に關する所論である。之に就いては後述の『月くさ』一卷をも參照として其の經緯を知るべきである。この沒理想論は逍遙の主宰する「早稻田文學」[二三]と鷗外が牙城とする「しがらみ草紙」[二四]との兩雜誌上に展開された論戰は明治論壇空前の大議論であつた。これによつて當時の明治文壇の諸家が啓發された事は恐らく想像以上であらうと考へられる。卽ち逍遙の沒理想主義と鷗外のハルトマン美學本位の藝術論とで、未だ幼稚薄識の文壇の人々に新知識を與へたことは實に多大であつて、其の爲に文壇は著しい進展をとげたのであつた。

森鷗外の『月くさ』[二五]は廿九年の十二月に出版された。『文學その折々』の分量にも優る千頁に垂

んとする大冊である。併し本書中の演劇に關する項は三木竹二の執筆であり、畫論の中には原田直二郎の執筆にかゝるものもある。それにしても本書は鷗外の最初の論集でもあり、その內容價値からも、明治文學書史上『文學その折々』と同列に置かるべき重要なものである。

本書一卷は明治新文學の興起した廿年代初頭から凡そ十年間に近い我が文學界の業績を嚴正に批判論評した好論文に滿ちてをる。其の卷首から始まる「柵草紙の山房論文」百頁は、まさに前述の對消遙の「沒理想」論である。この一篇がわが文壇にとつて如何に啓蒙的役割を果したかは既に觸れたことであるゝ。更に「美妙齋主人が韻文論」に於ては、美妙齋が「國民之友」誌上に掲げた韻文論に細評を下し、併せて內田不知庵、石橋忍月、正直正太夫(齋藤綠雨)等の論說の批判にも及んでゐるので、當時の我が詩壇の情勢や代表的な韻文論の概略をも知ることのできる好文献である。

又「今の諸家の小說論」とか「今の批評家の詩眼」その他の論文は當時の批評家の批判といつたふうなもので、これ亦好個の參考文献といふべきであらう。

明治三十年代の初め頃に於て發表された、時代文學の研究に資するやうな文献は何といつても雜誌「早稻田文學」であらう。二十九年の一月に第二期第一號を出した同誌は其の內容として、

脚本小說、彙報、新刊、論說、美文等を盛つたが、記實主義を標榜した彙報欄は當時同誌の呼物であつたが、之は今日猶明治文學研究資料としても他に得難い重寶な文献である。

三十年の六月に雜誌「太陽」[26]は博文館十周年記念として「臨時增刊」[27]を發行した。これには高山樗牛の「明治の小說」と題する三十頁に亘る論文が載つてゐる。これは初年からの三十年間に於ける我が明治文學史上の小說を論じた稍まとまつたものとしては唯一最初のものといへやう。——題して明治の小說と云ふと雖も、明治の小說歷史を述ぶるは吾等の志に非ず、そは今日尚ほ未だ其の時に達せざるを想へばなり。——と。筆者は冒頭で述べてゐるが、而も明治の小說が創作された背景である當時の社會情勢なり、思想界の變遷なりを織り交ぜて、ほゞ適切妥當の批判を下しつゝ簡潔に其の展開の樣相經過を論述してゐる。即ち第一期として明治初年から十八年までの、江戸文學の延長ともいふべき花笠文京、高畠藍泉等の戯作風讀物から、西洋小說の翻譯翻案風の自由民權政治小說等を論じて坪内逍遙の『小說神髓』出現に筆をすゝめてゐる。第二期としては二十年から二十八年に至る寫實小說全盛の時代を述べてゐる。二葉亭の「浮雲」[28]に筆を起して硯友社一派の小說を說明して美妙の言文一致作品に言及してゐる。筆者は又、紅葉一派の狹隘なる主觀を本とする寫實作家の衰退を必然の趨勢と論じて、浪六の撥鬢小說、涙香の探偵小說

の流行と文學界の墮落を嘆じて、やがて歷史小說の出現を待望する文壇の傾向を說いてゐる。そして渴望の聲の高かつた歷史小說が出現せずに、我が小說壇は遂に鏡花、柳浪等の觀念小說時代の將來とその衰徵を敍述して、一篇の稿を結んでゐる。

樗牛のこの論說は、多分にその强い主觀に本づく批判に終始してゐて、例へば天外や涙香の本質とか功績を實質以下に考へてゐたかのやうな所論などもあるが、概して要領を得た論說といふことができやう。

明治三十一年四月、博文館の發行した「太陽」の臨時增刊『奠都三十年』[29]の明治三十年史記事中に、柳井錄太郎執筆の第九編文學の部がある。これは研究の名に價するほどの論說ではないが、明治三十年間に發達した文學を總論、小說、脚本、新體詩の四章に分けて、簡單ながら概觀した一文が揭載されてをる。因に三十年史第一編の總論は高山樗牛が書いてゐる。

樗牛は明治中期の代表的文藝評論家であるが、その第一評論集『時代管見』[30]は卅二年一月に出てゐる。本書に載せたものは多く「帝國文學」「反省雜誌」「日本主義」「太陽」等の雜誌に數年來發表した論說である。其の內容は著者の國家主義思想の鼓吹時代の所產が多い。書中下篇文藝

の部は十餘篇の論文から成つてゐる。猶本書の卷末には有名な「わが袖の記」一篇が附錄として收められてゐる。

この頃出た（三）『文藝小品』一卷は、明治の文壇に批評家として活躍した內田不知庵の著書である。內容を成すものは明治廿三年頃から卅二年に至る凡そ十年間に雜誌「國民之友」「女學雜誌」等に寄稿した隨筆風の文が主であるが、又「落紅」一篇は當時の某文士を描いたと稱せられる小說めいたものである。

「綠蔭茗話」以下の十七篇、何れも當時の文壇文學界に刺戟と影響とを與へた啓蒙的の述作である。即ち其の題目の幾つかを擧げるならば、

詩文の感應力
詩文の紛飾
詩辨（美妙の韻文論を讀みて）
戰後の文學（國民をして機運に乘ぜしめよ）
政治小說を作るべき好時機
饗庭篁村氏

などであるが、これらは文壇の時事に關する意見であると共に又多分に我が明治文學の考察もかねた敍述であつて、今日から見ても猶文學史の參考資料たる意義を有つものである　卷末附錄の「嚼氷冷語」の一篇は著者自ら序文で言明してゐるとほり當時の文壇に對する忌憚のない所懷であつて、この一文亦明治文學の一面を語つた好文獻である。

井上哲次郎著(32)『巽軒論文初集』は哲學、宗教、文學に關する巽軒博士の論文集であるが、其の第五章「新體詩論」五〇頁は明治文學史上に新分野を開拓して成長をつゞけた新體詩に關する最もまとまつた評論の一として新體詩史上重視すべき著述であらう。

新體詩の來由
新體詩特有の性質
新體詩現今の傾向
新體詩將來の希望
新體詩と世の批評

斯うした形式(スタイル)で論じたものであるが、巽軒博士は『新體詩抄』の著者の一人でもあり、この論文は明治文學史上に於ける新體詩研究の一部を成すものと認めることもできやう。

茅村高松正道の著述にかゝる『(註)明治文學言文一致』は書名の示す如く明治文學に於ける言文一致に關する考察を内容とする著述である。著者は前に『明治文學美文自在』その他數種の美文韻文に關する編著の業績を示してゐる明治文藝に精通した人である。

本書一卷の主要部分を成すのは、言文一致緒論と言文一致變遷史であるが、これは即ち明治文學の變遷史であり又其の發達史の一面でもある。言文一致の主唱者山田美妙の諸作を引例しつゝ兒島獻吉郎や森鷗外の言文論を紹介することから稿を始めて二葉亭、嵯峨の屋に及び、忍月の諸作を考へ思案、漣、鷗外、綠雨の研究を第一期とし、更に若松しづ子、紅葉、眉山、水蔭、花袋、乙羽、風葉、鏡花、天外の作品を第二期として考察してゐる。鋭い批判評論はないが、本書はむしろ前述したやうに明治新文學の發展過程に於ける進歩的の樣相を記錄した一資料として相當の意義を認めていゝものであらう。

(註)『風雲集』一卷は島村抱月、後藤宙外、伊原青々園の早稻田文學系三氏の合著に成るもの。一卷を雪月花の三部として各人數篇づつの論文を載せてゐる。抱月の雪の卷中には、紅葉の『不言不語』逍遙の『新浦島』の批評や、新體詩の形や戰爭後の國文學に就ての所論がある。

宙外の月の卷では、美妙、紅葉、露伴三作家の長文の評論を第一として、露作、弦齋の新作評

や小説界の前途を論じた文章がある。

青々園の花の巻には、明治廿七年の梨園をはじめ劇談劇評といった稿者得意の文が収められてゐる。これらの諸論は明治廿年代末頃の文學界の狀態を知るよすがとして至極重寶なものである。

三十四年十月に新聲社から發行された『明治文學家評論』[35]は四六判二百頁餘のものであるが、これは當時としては出色の評傳書であり、一讀すべきものであらう。內容の殆どは、三十三・四年頃の雜誌「新聲」に所載の稿である。卽ち當時新進氣鋭の評論家が、文學界の老大家等を縱横無盡に月旦したものであるが、人物評と共の文藝評を兼ねたところにも特色がうかがはれる。內容は次に記す十三項目である。

福池櫻痴（正岡藝陽）
三宅雪嶺（高須梅溪）
島田沼南（奥村梅皐）
宗教界の文士（佐藤橘香）
田口鼎軒（正岡藝陽）

內村鑑三（高須梅溪）

露伴の理想（奥村梅皐）

竹越三叉（正岡藝陽）

桂月と嶺雲（高須梅溪）

高山樗牛（奥村梅皐）

松村介石（正岡藝陽）

少壯論客（高須梅溪）

江見水蔭（無名氏）

この年三月に新聲社から出た(36)『創作苦心談』一册は、當時の文壇に活躍した露伴、柳浪、水蔭、宙外、魯庵、鏡花、風葉、眉山、抱月、天隨、鳴雪、直文の十二名家に就いて親しく其の苦心談を聞いて本册にまとめたものである。各談の内容は、文章に就いての苦心談、材料の蒐集選擇についての苦心談、或は批評家に對する氣焰から文壇に對する抱負等に亙つてゐる。又各自の創作中に現はれる人物に關する談話や作者の經歷談等は最も興味深く讀まれるものである。創作に志す當時の青年には好指針で有つたのみでなく、當時の文壇を知るに足る一の有益な資料たるを失

はぬ著書であらう。

高山樗牛の『文藝評論』[37]一卷も亦同じ年に世に出た著書である。本書の內容をなすものは、三十二年頃から著者が隨時世に公にした文藝上の評論三十九篇を集めたものである。謂はゞ樗牛獨特の一家言ふうのものであるが、當時の文學界の變遷情勢を語つた代表的評論として見逃すことのできぬものであらう。就中「土井晚翠に與へて當今の文壇を論ずる書」や「文明批評家としての文學者」等は我が文壇の側面評として、當時の文壇に刺戟と影響を與へたものであり、又明治文學史家の一讀に値する好論文である。

久保天隨も亦明治中葉の我が文壇に評論を以て活躍した一人であつた。其著『塵中放言』[38]は後の『文壇獅子吼』と共に彼の文藝評論集である。三十四年八月版の『塵中放言』の內容は、かつて「帝國文學」「中學世界」「新文藝」等の誌上に載せた論說を集めたものであるが、深い漢文學の素養を根底として、更に精細な儒學精神を思想とした其の文藝批評は當時の文壇殊に年少の文士達に相當の精神的示唆を與へたもののやうである。明治文學評論史上一の意義を有つものと考へていゝとおもふ。

因襲的詩想の排斥

走馬燈的文壇
下賤なる小說家
文壇の生氣
花袋の「ふる鄕」
風葉と鏡花
少年文士を戒む
現時の文章
現代の和歌
狹隘なる寫實小說
文士品性問題
鐵幹對新聲社
蘆花の近業
赤門派文士を評す
その他十數篇の題目が其の內容を成す著書である。

三十五年には、明治文學史上に於ける俳諧の進歩を叙述した二著書が出版された。

一は「ほとゝぎす」同人の編著にかゝる[39]『俳諧叢書第十三編四年間』である。本書は正岡子規の稿で明治廿九年から卅二年まで、四年間の我が俳句界を評論した論集と、舊稿鳴雪外三俳人の評論とから成るものである。

明治二十九年の俳句界
同　三十年の俳句界
同　三十一年の俳句界
俳句新派の傾向
明治三十二年の俳句界
俳社一覽表抄
俳人一覽表抄
內藤　鳴雪
五百木飄亭
河東碧梧桐

高濱虚子

右の題目を見れば判るとほり、本書は我が明治新興俳句史の一部を成す内容を有つものである。

『俳諧風聞記』(40)一巻は岡野知十の著書である。即ち、

俳諧風聞記（明治新俳壇の觀察）

俳諧又聞記（明治舊俳壇の觀察）

俳諧露骨錄（日本派、新聲會派の時評）

この三部から成つてゐるが、これは明治文壇に新派俳句の興起してからの凡そ十年間に於ける俳句界の實狀をかなり詳細に述べたもので謂はゞ「明治新俳壇史」とも見ることのできる著述である。後年池田秋旻の『日本俳諧史』その他、明治の俳壇論を内容に有つ著書も數種出たのであるが、然も本書などはやはり明治俳句史研究の最も重要な文獻として擧げねばならぬものの一であらう。

こえて卅八年には長谷川天溪の(41)『文藝觀』が出てゐる。之は菊半截判三八〇頁余の小本であるが、當時の文藝評論書中重視すべきものゝ一であらう。天溪の評論中明治三十年代の後半期頃か

ら我が文壇の自然主義時代へかけてのものには、文壇に尠からざる影響を及ぼしたものが多い。この書に集めたのは、三十四五年から前後四五年間に雜誌「太陽」「太平洋」「早稻田學報」「新文藝」「明星」「新聲」や「讀賣新聞」等に發表したものである。

批評の本領
評壇の亂調子
表情なき面貌と藝術家
文學の試驗的方面
自然と不自然
文壇寂寥の一原因
文壇の個人主義
文明史上の日露戰爭
新思潮とは何ぞや
自然主義とは何ぞや
美的生活とは何ぞや

ニーチエ主義と美的生活
自然主義に就きて

其の他の論說を內容とするが、同著者の後年公にした『自然主義』と相俟つて、既に我が文藝界に於ける自然主義的思潮を價値づけ闡明した評論として明治文學評論史上に一の位置を保つものであらう。

後藤宙外と伊原青々園共編の『唾玉集』[41]一卷は、明治文藝界の側面史的意義を有つ文献として上乘なものである。內容目次の主なものを列記すれば、

自作の由來……………幸田露伴談
小說家の經驗…………尾崎紅葉談
作の材と其の運用……廣津柳浪談
今後小說の文體………同
編史と作劇……………福地櫻痴談
小說家の覺悟…………長谷川二葉亭談
かくれんぼ……………齋藤綠雨談

撥鬢小說の來歷……………村上浪六談
自作小說の材料……………森鷗外談
作家苦心談…………………坪內逍遙記
しりごみ……………………饗庭篁村記
翻譯の苦心…………………森田思軒談
芝居ばなし…………………高須高燕談
幕の內外……………………落合芳幾談
團十郎と左團次……………西田菫坡談
現時の劇壇…………………某氏談

文壇諸大家の談話は明治三十・三十一兩年に渉つて「新著月刊」に掲載されて好評を博したもの、又梨園の話等は青々園が「都新聞」に書いて非常な歡迎をうけたものである。これ等の記事は當時の文壇、劇壇を知る手引となるのみでなく、更に各作家の人と藝術を研究するにも好個の資料となるであらう。

この明治三十九年には二つの「明治文學史」が公にされた。其の一は高橋淡水著の[註]「時代文學

史」である。本書は完全な明治文學史と謂ふには猶未だしの感有るものであるが、四十年間に於ける我が最近世文學を、その作家の系統と時代思潮との關聯を目標として明治文學の一班を會得せしめやうと企てたもので、ほゞ所期の成果ををさめた著述といへやう。

章を分くること十、即ち總論・明治の新聞雜誌・明治の散文・明治の小説・明治の新體詩・明治の少年文學・明治の短歌・明治の俳句・明治の漢詩・明治文學年表としたものである。

敍述の方法、形式も先づ妥當であり又其の所論も概して穩健中正であるから初學者の參考とするに適した文學史といへやう。特に明治文學年表は著者の最も苦心を拂つた作とみられる、現在では諸種の明治時代の年表も出來てをり、其の資料とすべき文獻等も多少の時間と費用が有ればその蒐集整理の業績も稍々整ふであらうが、本書發行の當時にあつては相當の努力と研究によつてはじめて出來上つたものであらう。ともあれ本書は初學者向きの平易な明治文學史として成功した著書であるといへやう。

さていま一つは岩城準太郎著の(卌)『明治文學史』一卷である。本書は、後年大正・昭和時代となつて明治時代文學の研究が數多い新進氣鋭の學徒によつて、いろ／＼の角度から、いろ／＼の方法形式で稍々本格的に着手されるやうになるまでは、唯一の嚴密な純學的體系をとつて書かれた

明治文學史として學界に推重されてきた著書である。最近に刊行の本間博士著『明治文學史』二巻等と比較するならば、其の量に於て又參考資料の選擇等に於て一籌を輸すとも考へられるが、而も今日猶、吾々後進の明治文學研究者の最も信用する明治文學史といへば依然本書を第一に擧げねばなるまい。

本書の價値と特色は、かの錯綜極まりないかに考へられる明治四十年間の時代思潮の變遷と、目まぐろしい文藝諸流派の隆替推移の諸相をあくまで周密嚴正に評論叙述したこと、就中、可及的に各時期各流派の代表的作家と其の作品を論評してゐる點である。更に又本書は學的體系を整備した最初の著述として、明治文學研究史に永く其名を記憶されていゝものと信ずる。左に本書の内容の要目を揭げる。

第一期

第一章　前代繼承の文學

第二章　新文學の先驅

第二期

第三章　新文學思想

第四章　新文學の勃興其一

第五章　新文學の勃興其二

第三期

第六章　文學の轉進

第七章　最近文學の概觀

即ち混沌とした明治初期の暗黑文學界の狀態から叙述の筆をすゝめて、飜譯文學・政治小說の流行を說き、新文學の曙光時代から寫實小說の興起、傳奇小說の興廢に及び、新體詩・戯曲の論を試みてゐる。更に中期の、和歌・俳句の革新から觀念小說・心理小說を叙しやがて自然主義文學の擡頭期を前にした文學界の現狀を述べて結びとしてゐる。今日となつて、明治文學の諸相を通觀考察し、ひるがへつて本書を對照とするならば、論述批判共他について多少の不備不徹底さを認めざるを得ないが、それは本書の價値を低くめる理由とはなるまい。

さて明治四十年前後の文學界を一考するに、それは一言にして云へば自然主義的思潮の時代といへやう。三十七・八年は日露戰爭の期間で、凡そ二百篇もの戰爭に關聯した小說が作られたのであつたが、それらの中には特記すべき程のものは少なかつた。

明治文學史上に於ける自然主義的思潮は既に日露戰爭の前から動いてゐた。そうした傾向を有つ作品の前驅とも考へられる小杉天外作の「初姿」が發表されたのは三十三年である。又永井荷風作の「地獄の花」や田山花袋作「重右衞門の最後」島崎藤村作「舊主人」等が公にされたのは三十五年であつた。しかし、自然主義が我が文壇に於て其の主潮となり目ざましい流行を來たしやがて澎湃として全文壇を席捲したのは、三十九年、島村抱月によつて再興された「早稲田文學」と田山花袋によつて主宰された「文章世界」二雜誌の發刊以後に屬すと言ふべきであらう。自然主義の勃興發展に伴ふて、一方に又非自然主義的思想の相當活潑な動向をも亦見逃すことはできない。明治文學の研究もこのところ、自然主義に關聯した文藝評論にゆづつたかの觀があつた。

赤門派の文藝評論家として或は社會思想家として聞えた樋口龍峽の評論集(42)『碧潮』の刊行は三十九年三月である。本書の著者は、後藤宙外、笹川臨風、登張竹風等と共に文藝革新會を組織して、自然主義派に對立した程だから、勿論本書に收められた文藝評論は非自然主義的思想に基づく論調を帶びたものが多い。其の內容の一班を擧げるならば、

思潮評論

新ロマンチシズム

本能至上主義
美か醜か
奴隷道徳の排斥
情の醇化と愛の哲學

文藝小觀

短歌の詩的價値
批評と經驗と
「紫」と「みだれ髪」
樂詩一體論
戰後の文壇

斯のやうなものである。これらの所論は當時發表された文藝作品や他の文學評論と併せ讀むとき、明治文藝思潮の闡明に一の使命を果してゐることがうかゞはれるものである。

明治四十年から四十一・二年にかけて發表された明治文學研究文獻の主要なものは、やはり何といつても自然主義文藝に關する評論である。

[46]「ホト丶ギス」第十一卷第四號の附錄に稻門派の新銳な評論家片上伸の三十頁の論文「文壇最近の趨勢」が載つた。これは當年新たに勃興しつゝあつた俳諧派或は寫生派とも呼ぶべき文學と自然派文學を論じたものとして注目すべき評論である。

明治四十一年頃はわが文壇に於て、自然主義論の最も華やかに展開された時であつた。月刊雜誌などに現はれたもの丶中で最も重視すべきもの、例へば其年一月の「早稻田文學」所載島村抱月の「文藝上の自然主義」や「太陽」所載長谷川天溪の「現實暴露の悲哀」或は「早稻田文學」五月號の島村抱月「自然主義の價値」とか「明星」八月號の田中王堂「我國に於ける自然主義を論ず」などはその代表的な論說であらう。

この年七月に發行された、長谷川天溪の[47]『自然主義』は著者の代表的評論集である。其の上編に收めた左に列記する諸論文はいづれも自然主義文藝理論の範疇に屬するものであらう。

幻滅時代の藝術
反基督敎的精神
文藝と道德
敎育家の文藝觀

論理的遊戯を排す
現實暴露の悲哀
近時小說壇の傾向
所謂餘裕派小說の價値
自然主義に對する誤解
無解決と解決
再び自然主義の立脚地に就て
無脚色小說
自然主義と本能滿足主義との別
自然と不自然

これ等は明治文學評論史上見逃すことのできぬ評論であらう。

次に[15]「非自然主義」一卷である。これは「新小說」の編輯主宰者である後藤宙外の著である。宙外は反自然主義派の代表的人物であるが、むしろ評論家といふより藝術派の作家ともいふべきであらう。本書に收めた諸論文は自己の主宰する「新小說」その他に發表して大いに自然主義派

に對抗論戰した記錄であつて、これ亦明治文學評論史上重要な文獻の一であるとおもふ。

以上が其の内容をなす論文の標題である。

次に岩野泡鳴の『新自然主義』[49]に就いてゞあるが、本書は同じ著者の前著『神秘的半獣主義』[50]に連續する評論集である。泡鳴の自然主義論は、抱月や天溪とも、又宙外等とも異つた一の立場に立脚した所論である。一言にして之をいへば、自然即心靈とでもいふものである。この『新自然主義』の内容は主として「早稻田文學」や「新小說」等に載つたものであるが、自然主義に關するものゝ題目を擧げれば次のやうなものが有る。

自然主義的表象詩論

自然主義雜言

諸家の自然主義論を評す

『自然主義の理論的根據』を評す

表象と暗示——新自然主義の結論

その他十數篇、自然主義關係の主要文献であるのみに止まらず、明治文學界に於ける評論としても閑却できぬものであらう。

前年へ遡るが、中村樂天の『明治の俳風』[51]が出たのは四十年の九月である。本書は左記紅葉以

下二十人の、明治俳壇諸家の俳風を述べたものである。

尾崎紅葉　　岡野知十
巖谷小波　　伊藤松宇
川村黄雨　　瀧川愚佛
内藤鳴雪　　川村烏黒と板倉醉月
戸川殘花　　森　無黄
角田竹冷　　宮島五丈原
高濱虚子　　河東碧梧桐
佐藤紅綠　　坂本四方太
松瀨青々　　夏目漱石
正岡子規

次に「太陽」第十五巻第三號臨時增刊、明治史第七編[53]『文藝史』は明治四十二年二月に發行された。これは明治初年から四十一年に至る我が明治の文藝界の推移變遷の跡を、混沌世界——思

想界――小説及評論壇――新體詩界――短詩界の大勢――演劇界――新聞雜誌の七編に區分して敍述したものである。文學史風に系統立つた著述ではないが、本書の特色は各編數名の專門家が分擔執筆にかゝるもので、其の所論が文壇に卽して詳述されてゐることであらう。岩城準太郎著の『明治文學史』等と對照精讀すれば、明治文藝の研究上尠なからず有益な資料ともならう。

明治四十年の九月、小山内薰の編輯主宰によつて創刊された、帝國大學系統の文藝誌[50]「新思潮」(第一期)の第三號(四十年十二月發行)から第六號に亙つ 附錄として連載された、岩野泡鳴稿の「新體詩史」は明治新詩のやゝまとまつた最初の詩史として重視すべき文献であらう。第三號には先づ、明治十五年から始まり同四十年に終る「新體詩年表」を掲げ、第四號から三回に、明治十五年から同卅七年までの詩壇の概觀を敍述してゐる。泡鳴一流の多少獨斷的論調も感ぜられるけれど、筆者自身が明治の詩壇に身をおいただけに、犀利な直感的の觀察に秀でた所論である。

[51]『時代と文藝』樋口龍峽のこの評論集一卷亦、明治三十年代の末頃から四十一年頃へかけての我が文藝評論壇の一收獲に値するものであらう。内容の半ばを占めるのは、自然主義に關する所論である。本書の著者は反自然主義派有數の評論家であり思想家である。こゝに收めた諸論文は、

かねて「帝國文學」「文章世界」「中央公論」「新小説」「明星」「日本及日本人」等の雜誌或は「二六新報」に發表したものである。自然主義論として左記の題目のものがある。

ツエンタウリスムス
自然の三面六相
寫實主義と自然主義
自然派作品の特色
直寫か模倣か
鏡裡の花、水中の月
技巧と自然主義
無理想か新理想か
主客兩體の融合
七擒七縱
自然主義の本領
自然主義の人生觀

現實卽眞と性生活
情生命と人生
人生と藝術
自然主義の社會的功過
醒めたる自然主義
自然主義の側面觀　以上

『近代文藝之研究』(55)は島村抱月の論集である。この書に收錄のものは、明治三十九年から同四十二年の初までに「早稻田文學」「新小說」「太陽」「新潮」「明星」「趣味」「中央公論」等に揭載したものであるが、——著者は此書に於いて、自然主義論を中心とし、最も複雜曲折を極めた自家の藝術論に一段落をつけて見やうと思ふ。——と言明してゐる程のものであるが、事實又これらの諸評論は當時の我が文壇に於ける代表的の文藝評論であつた。本書の序文「序に代へて人生觀上の自然主義を論ず」の一文をはじめとして、

文藝上の自然主義
自然主義の價値

囚はれたる文藝

等の研究論文から、時評としての、

今の文壇と新自然主義

梁川、樗牛、時勢、新自我

情を盡したる批評

情緒主觀の文學

『破戒』を評す

『蒲團』を評す

『青春』を評す

『其面影』を評す

其他、當時の文藝を研究批判した諸論說は、明治文學の回顧檢討には必讀の好文獻であらう。

この年に出た明治文學研究の單行文獻として擧げねばならぬものに吉野臥城著の[56]『新體詩研究』がある。本書は同著者の前著『明治詩集』（明治四十一年一月發行）の姉妹篇であつて、この二書によつて吾々は明治新詩の史的概觀をうかゞふことができやう。

本書は篇を五つに分けて、詩史の資料を網羅した「詩國小觀」、詩集を出版年月順に序列した「詩集解題」、詩を讀み又作る事に關聯した「讀作詩眼」、明治新體詩の代表的な作を示した「分類詩例」と著者の舊稿、明治三十七年の詩界その他や最近の詩論、寫生文を集めた「餘材」の部門から成立つてゐる。前に擧げた岩野泡鳴の『新體詩史』等も既に有るが、本書は『明治詩集』と合せて一つの明治新詩史と見ることができやう。本著者の評論批判は極めて穩健中正で、初學者の參考に最も適した好文献である。

さて明治四十三年には、明治文學研究參考文献中ユニイクなものゝ一つであらう『地方文藝史』[67]が發行されてをる。著者は小木曾旭晃、菊判凡そ二百頁。本書の內容は、わが明治文學界に於て、中央(東都)以外の地方の文藝界が最も隆盛だつた日清戰後からの約十五年間、卽ち明治四十三年までの狀態趨勢を各一年毎に略史風に述べたもので、今日吾々明治文學研究者の最も調査困難の一事にかぞへる、地方で經營發行された文藝雜誌と其の關係者等を一卷にまとめてあるのは實に便利な手引となるものである。卷末の附錄は、地方文壇作家一覽表で、これ亦一の參考資料として重寶なものである。

「新潮」の明治四十四年一月號の卷頭に載つた相馬御風の「最近文壇十年史」は三十頁餘の論文

で之を一言にして云へば自然主義文藝の勃興成長期から其の隆昌爛熟期までの概說である。同じ筆者の書いた、早稻田文學社編『文藝百科全書』[58]中の「明治時代文學」や、後年大正時代の初期に文章學院の『文章講義錄』の一卷として出た「明治文學講話」は初學向きの平易な明治文學史であるが、それらと共にこの論文は明治後期の我が文壇の趨勢を簡明適切に說述したもので、所說公平一讀に値するものとおもふ。

[59]「文章世界」第六卷第十四號（鴻雁號）は現代文章之研究と銘打つたものである。卽ち卷頭から百余頁に亘つて、大體左記章目による研究を載せてゐる。

文章より見たる現代の小說
政論家の新選手
新しき人物評論家
現代雜錄の研究
小品の研究
現代の紀行文
現代評論之文章

管者はおそらく、本誌の主筆田山花袋か或は前田木城であらう。これは勿論明治文學の文章上から考察した研究であるが、文章の研究卽ち文學の研究といへるもので、明治文學研究に多少の參考となるものであらう。

四十四年十二月に出た單行本『花袋文話』(60)は前記の「文章世界」所載「文章より見たる現代の小說」その他を收錄したものでこれ亦明治文學研究の一參考書といへやう。就中「明治の作品研究」の一章など一讀すべきものであらう。

明治末期のわが文壇は、さしもに全盛を極めた自然主義文藝も最早衰退しかけて、既に「ホトトギス」一派の餘裕派文學或は低徊趣味文藝が一部に行はれ、又新浪漫主義文藝が起り、やがて「スバル」(62)や「三田文學」(63)を溫床として培養された享樂主義、唯美主義派の文藝が擡頭し、「白樺」(61)を本城とする人道主義派の文學が進出しつゝあるといふ情勢であつた。そしてこれらは明治から大正年間へ亙つて展開されたのである。故に大正時代へ入つたものゝ、大正時代は卽ち明治の延長であつて文學界の潮流が直ちに變動したのではなかつた。

生田長江の『最近の小說家』(64)は四十五年の二月に出た。これは春陽堂の「現代文藝叢書」の第八編で、內容は、

夏目漱石氏と森鷗外氏と
田山花袋氏
島崎藤村氏
泉鏡花氏
德田秋聲氏
眞山青果氏
の評論である。吾々は此の一小冊子によつて、明治文學に大きな足跡を印した七作家の人と藝術の大凡を知ることができやう。

## 大正期

大正元年十月號の(65)「文章世界」は金風號と銘打つた明治文學の概觀記事を内容とするものである。これはわが文壇を中心として觀た明治文學略史ともいふべきものである。執筆者は田山花袋その他、直接に文壇に交渉を有つ人達だけに其の叙述は、純學的研究評論といふより、むしろ文

學的觀察記錄とでもいふべきものである。

先づ田山花袋の十頁に餘る「明治文學の概觀」があり、次に諸家執筆の「明治文壇に於ける幾多の光景」の一章がある。これは文壇の重要事項に就いての回顧或は感想の記錄であつて、本書の特色記事であらう。その內容各項は次のとほりである。

一、明治文壇の曉鐘
二、言文一致の小說
三、紅葉訪問記……………………………………田山花袋
四、露伴の諸作品
五、『しがらみ草紙』と『早稻田文學』
六、北村透谷の短き一生……………………………島崎藤村
七、日清戰役の文壇
八、綠雨の戀愛觀
九、民友社の才人
一〇、紫吟社と樂天居

第三章には研究評論として、

明治文章界の事業とその感化…………………秋　海　棠

猶、巻末の左記評論も共に參考とすべきものである。

大正第一秋の文壇……………………………相　馬　御　風

右の「文章世界」の發行に先んじて、大隈重信伯主宰の雜誌「新日本」(66)は其の第二巻第九號を特輯「明治聖代號」として江湖におくつた。

本號には、明治大業史として明治の政黨以下二十八の各部類各專門家執筆の回顧談風の記事が掲げられた。この中に、早稻田大學教授島村瀧太郎(抱月)執筆の『明治の文學』の一章がある。簡明に明治時代文學の變遷を概說したもので、これ亦一つの參考文献として記憶せられていゝものであらう。

同じ頃に新潮社から出版された相馬御風の『黎明期の文學』(67)一巻は、著者が明治四十一・二年頃から諸雜誌等に發表した文學評論をまとめたものである。これらの評論は明治末期頃の我が文學界に於いて相當に意義をみとめられたものである。

正宗白鳥論
小川未明論
樋口一葉論
北村透谷私觀
病床に於ける梁川氏と獨歩氏
藝術家としての永井荷風氏
自然主義論發展の徑路

卷中、これらの論說は明治文學研究家の參考とすべき好文献たるを疑はない。

佐野保太郞、玉井廣平編『明治文學選』一卷、菊判六七〇頁は、大正改元後に現はれた明治文學關係文献中で屈指のものであらう。

本書　研究評論といふではなく、明治年代に於ける文學の推移變遷を概觀せしめやうと企てた著書、謂はゞ具體的の明治文學史といふこともできやう。卽ち明治初年以降、四十五年間に現はれた文學的作品中、各年代の代表作で、且つ當時の文壇乃至社會に多少の影響を與へたものか

ら、作者一人につき二三頁又は四五頁のものを抄錄したのである。而して本書の特色は、各篇の冒頭に作者の略歴を掲げたこと、又欄外に各作品又は各作者に關する文壇の評論、或は當時の思潮或は社會に及ぼした影響を簡單に記載したことなどである。福澤諭吉の『世界國盡』以下凡そ百二十餘篇、いづれも明治文學史上の名篇佳作である。

およそ、個々の作品なり、作家なりの研究論評はもとより必要であるが、この書のやうな編著も亦一般讀書界には勿論、研究者にとつても至便なものである。

この頃（大正元年又ハ二年）日本文章學院から出てゐた「文章講義錄」中の一冊に生田長江の[69]『明治文章史』がある。これは初學向きのものであり、嚴密な研究といふ程のものではないが、簡要平易に、文章といふ觀點から明治の文學を考察したもので逸することのできない文献である。

總　論

前代踏襲の時代

明治文學の革新

雅俗折衷體文諸家（其一、其二）

言文一致原始諸家

歐文脈諸家
漢文脈諸家
和歌系統と俳諧系統
自然主義諸家　其一、其二)

結　論

右の十二章の叙述を一一六頁にまとめた、量に於いてはさほどのものではないが、明治文章史と銘うつた著述中では最初のまとまつたものとして參考とするに足るものである。

それから、やはり其の頃の雜誌「新潮」[70]に、「明治の文壇及び劇壇に於て最も偉大と認めたる人物、事業、作品」の題目の下に、島崎藤村、岩野泡鳴、正宗白鳥、伊藤左千夫、吉江孤雁等文學界の三十一氏の回答が載つてゐる。これなども何等かの參考ともならうか。

此の雜誌には猶、馬場孤蝶の「文壇三十年の回顧」といふ一文があるが、これは明治文壇史の一資料として上乘のものであらう。

早稻田文學社から逐次刊行の「文學普及會講話双書」第一編として[71]『明治小説文章變遷史（德

田秋聲述」並に『明治小說內容發達史（田山花袋述）』の二篇が合綴一冊本となつて出てゐる。
其の二篇は各篇左記の內容から成つてをる。

明治小說文章變遷史

第一章　渾沌時代（明治十二年まで）
第二章　飜譯文の勃興（明治二十年まで）
第三章　言文一致體の創始（明治三十二年まで）
第四章　新文章の完成（明治三十三年以後）

明治小說內容發達史

第一期（元年より十八年まで）
第二期（十八年より日清戰爭まで）
第三期（日清戰爭より三十八年まで）
第四期（三十九年より四十五年まで）

本書は、中村武羅夫及び加藤武雄の代筆に成るとも言はれるもので或はさうでもあらう。併し何れも德田・田山二著者に就いて其の談話を聽いて執筆したもので、原稿も著者の校閱補訂を經

たものであるといはれる。それで此の二篇は直接自ら明治の文壇に身を置いてゐる二氏が草したものだけに、文壇外の研究者の叙述とは聊か趣を異にした書きぶりもうかゞはれるものである。ともかく本書は通俗平易に書かれた一種の明治文學史の内容を有つものである。

又右叢書の第十四篇には島村抱月執筆の[72]『明治文學變遷史講話』一篇が收められてゐる。これは前に擧げた、雜誌「新日本」の明治聖代號に所載同著者の『明治の文學』と殆ど同じ内容のものであるから爰には書名を記すだけにとゞめておく。

さて明治の末期頃から評論壇に重きをなしてゐた、生田長江の文藝評論集[73]『最近の文藝及び思潮』一卷は、――一九一一年二月から一九一五年三月へかけての、比較的重要なる觀察と、評價と、要求と、並びに希望との大部分を一冊にまとめた――と著者自ら其の序文に誌してゐるが、事實本書内容の各評論は當時の文壇に尠なからざる刺戟と示唆とを寄與したもので、今日吾々が明治文學を研究する場合にも有益な參考となるものである。內容目次を左に抄記する。

人として藝術家としての森田草平氏
小説家としての島崎藤村氏
夏目漱石氏を論ず

正宗白鳥氏を論ず
堺利彦氏に答ふ
大杉榮君に與ふ
安倍能成君へ

次に内田魯庵の『きのふけふ』[三]一卷は、研究評論といふではないが、明治文化資料、より明治文藝資料として價値を認めていゝ著述であらう。著者は明治時代に於ける有力な文明批評家である。否、むしろ明治文壇通の第一人者ともいへやう。本書は、——きのふけふのやうに我が心に往來する亡友の遺事及び事件の追憶を後の文化史を編むものゝ資料として提供す——と其の序文に有るとほりの内容のものである。特に明治文學の前期時代に劃期的の業績を我が文壇に遺した、美妙齋や二葉亭に關する文章は、後年それらの研究が現今のやうに進展するまでは、實に重要な資料としての役割を果したものと考へられる。

山田美妙
硯友社のむかしの憶出
齋藤緑雨

二葉亭の一生
二葉亭餘談

等が主要な内容であるが、殊に二葉亭に關するものは、研究者必讀の文章であらう。

『東京の三十年』(75)　田山花袋著

これは花袋の等身に餘る著作中でも最もユニイクなものゝ一つであらう。佛蘭西の作家ドウデエの『巴里の三十年』に倣つて名づけたものと想はれる此の著書は、其れが佛蘭西の文壇に對して有つと殆ど同じ意義を我が明治の文壇に有つものといへやう。東京の三十年は語を代へるならば、明治文壇の三十年である。

吾々は本書一卷によつて、明治新文學の發生期頃からの三十年間に亘る我が文壇の動勢を目のあたり髣髴するのである。明治文學の研究は、たゞ各作家の創作の吟味検討のみでは全きを期し得ない。本書のやうな文壇側面史ふうの著述によつて、はじめて吾々は文壇の表裏事情に通じて研究上のヒントなり手がかりを得ることが尠くないのである。今其の目次の幾つかを左に記してみやう。

明治二十年頃

新しい文學の急先鋒
ゾラの小說
紅葉と露伴
私の最初の飜譯
『かくれんぼ』の作者
最初の原稿料
その時分の文壇
當時の大家連
私達のグルツプ
紅葉の病死
丸善の二階
陣中の鷗外漁史
作家短評
上田敏氏

龍土會
獨歩の死
眉山の死
『生』を書いた時分
『田舎教師』
二葉亭の死
文學者の交遊
白鳥氏と秋江氏

等々で、讀物としても、まことに上乘なものといへやう。

これと同じ頃に新潮社から「文章入門叢書」が出たが、其の第二編は[16]『明治大正の文學早わかり』で著者は小林愛川の筆名を用ひてゐるが實は加藤武雄である。本書は文學に志す初學者向きに或は一般好學者の趣味的教養的の讀物として書かれたものゝやうであるが、主として明治文學の概念を手際よく叙述したもので、謂はゞ極くくだけた明治文學史ともいへるものである。

第一　逍遙　二葉亭

第十六　最近の作家
第十七　論壇の人々
第十八　詩壇及び劇壇の一瞥

以上が其の內容目次であるが、主要作家を中心としての敍述が特色である。又卷中隨所に挿入の雜錄風の記事は何れも明治文壇史上の興味ある話柄で、一讀有益なものである。

以上に記述した著書が示すやうに、明治文學全史の體系に近い研究評論書も、明治末期から大正初期へかけて數種公にされたが、更に進んで大正の中期頃からは、明治文學中に就ても其の各部門の專門的硏究のまとまつたものが追々表はれはじめた。

演劇通として知られた關根默庵の著(二)『明治劇談五十年史』などは先づ其の一であらう。これは明治以降五十年間の演劇史としては最初の著作であつて、後年出た伊原青々園の『明治演劇史』と共に明治演劇の研究者には最も重要な參考書といふべきであらう。其の內容は、

第一　過渡の詩代
第二　芝居全盛時代
第三　劇壇の新機運

第四　新派劇の勃興
第五　舊劇不振の時代
第六　混沌時代

この六章を詳細の節、項に分けて説述したものであるが、其の價値特徴は單に文獻資料等を便りとしての研究とは聊か異つて、著者のやうな劇界表裏の事情に明るい人にしてはじめて書けるものである。明治文學史研究上必讀の文獻である。

大正八・九年の頃には、まとまつた明治文學研究書は出てゐない。たゞ雜誌「早稻田文學」とか「文章世界」「文章倶樂部」等の誌上には、作家を主とした評論や、回想風の記事などで參考になるものが多々掲載された。例へば岩野泡鳴とか中澤臨川といふやうな人々の追悼回想記事などがそれである。

十年の五月に高須梅溪の『近代文藝史論』が發行された。これは即ち明治文學史論である。著者は「新聲」以來我が明治文壇に身を置いてゐるので、本書はこれまでに公にされた何れの明治文學史に關する著述よりも優れた點が觀取されるのである。先づ其の内容と要目によつてみれば、

總說　現代文藝の大勢及び進歩

第十章　新體詩・戯曲及新國文
第十一章　文化思潮の特相と美術及演劇

第三期　ロマンチシズムの時代

第一章　思想界の大勢
第二章　文壇の新機運が生んだ觀念小說・深刻小說
第三章　群起した文壇の新人
第四章　社會小說・家庭小說の出現
第五章　新進作家に對峙した紅葉・露伴
第六章　後半期の小說と少壯作家
第七章　此の期に於ける戯曲・翻譯・雜筆
第八章　此の間に於ける新體詩
第九章　短歌及び俳句
第十章　文藝評論の勃興及び演劇美術

これによつて略推考できるとおもふが、本著書の特色又は本書以前に出た類書との比較を言へ

ば、明治時代の一般文化思潮との影響交渉を論じた點、小說のみならず評論・雜文・詩歌にも相當の注意を拂つた點、文體の變遷、文閥打破の徑路を考察した點等を擧げることができやう。著者が序文で斷つてゐるやうに、本書の續稿である「自然主義勃興前後」以降の詳論と併せたならば、これまでにない、まとまつた明治文藝史論が完成さされるであらう。

雜誌「解放」が特大號『明治文化の研究』を發行したのは十年の十月である。これは明治文化の各般各種の事項樣相に就て其の變遷推移を、各事攻家が叙述したものである。

明治文學はもとより明治時代のあらゆる文化を背景とし、それを反影したものであるから、本書の全內容を成す、明治の政治・外交・經濟・社會・思想・宗敎・哲學・敎育・科學・文藝・軍事等の記事は、其の時代文學の研究にも勿論密接な關聯を有つものである。就中、

明治小說界槪觀　馬場孤蝶
明治時代の文學思想　片上伸
明治劇壇の變遷　中村吉藏
明治思想槪論　藤井健治郎
明治文化史槪論　三浦周行

等の論說は、直接明治文學研究に資するところの有るものである。

次に、池田秋旻の『[22]增補日本俳諧史』であるが、之は前に（明治四十四年十一月發行）の『日本俳諧史』の內容に、「大正の俳壇」の一章を增補したものである。勿論、本書は連歌時代からの我が俳諧文學の史的觀察であるが、其の第五篇「明治の俳壇」は書中二百頁に垂んとするもので、謂はゞ明治俳句史の體裁を整へた著述である。

斯うした目次を内容とするが、本書の特徴は事實を叙するを主とし、代表的人物の評傳を中心として、その作句を多く引用して有る點などであらう。後年、明治俳句史ともいふべき著述も數種表はれてゐるが、本書は最初のまとまつた著書として參考とすべきものといへやう。

明治四十五年後、最早十年を經過したこの頃となつて、漸く本格的の明治文學研究が行はれて、其の業績も追々發表されはじめた。田山花袋の『近代の小説』[12]一卷、これは史的研究といふ程の體系を備へた著述とは言ひ難いが、其の記述は、まさに明治二十年代以前——新文學の曙光が見え初めかけた頃の我が文學界の回想から稿を起して、大正初期の人道主義あたりまでに及んでゐる。これは同じ著者の前著『東京の三十年』と共に、否其れよりも更に蘊蓄と體驗とを傾倒して

書いた明治小說史ともいへやう。其の內容を成す項目は凡そ百三十有餘、いづれも皆明治文學史の生々しい一斷面である。明治文學研究の初學者は、例へば、岩城準太郎の『明治文學史』とか、後記する高須芳次郎の『現代文學十二講』などを繙くと共に本書や『東京の三十年』を讀むならば、ほゞ明治文學史の表裏をうかゞひ知ることができやう。

さて右に一寸書名を擧げた高須芳次郎（梅溪の）[32]『日本現代文學十二講』は大正十三年の年頭に世に出た。之は明治文學研究史上の一收獲として特記していゝ著述であらう。著者には年來、質量共に空前の詳密な現代日本文學史著述の素志希望があつた。本書は正に其の計畫の概略を具現したものであらう「思想・文藝講話叢書」中の一卷として大體制限のある分量に主要目十二講をまとめたので、著者自身としても意に滿たぬところも有るといふが、それにしても明治文學研究の類書中最　詳細に說述した好著たるを失はぬものである。

第一講　新文化の世紀及び新文學の世紀
第二講　啓蒙運動と黎明前の文學
第三講　黎明期の思潮及び新文學の生誕
第四講　新文學展開の種々相

この十二要目を各章節に分けて詳論したものである。叙述の方法・特色は大體に於て、著者の前著『近代文藝史論』と大同小異と見てよろしい。どちらかといへば、實證的鑑賞より、むしろ印象批評的といふことができやう。然しそこに本書の特色が有るともいへやう。著者は明治の文壇に身をおいて、中期以降の作家の多くを直接知つて居り、又それ〴〵の作品が最初に發表されたゞ當時或は直後に其れらを讀んだであらうから、印象批評ふうの考察態度をとるのは極めて當を得たことで、そこに獨特の味はひも生れてゐるとおもふ。

文藝春秋社から出た「文藝講座」中に小島政二郎執筆の『明治小説史』(83)がある。これは文藝人門者を目標に書かれた程度のものであるが、平易な叙述でよく明治小説展開の様相を明かにしたもので一讀參考になるものである。著者は明治小説史を次の三期に大別してゐる。

第一期　德川時代の文學をその儘繼承した時代　明治元年から十年頃まで)

第二期　硯友社時代(明治廿八年頃から三十六年頃まで)

第三期　自然主義時代(明治三十七年頃から四十四年頃まで)

そして其の各期に於ける社會情勢と文學界の動向に注意しつゝ、其期に生れ出た代表的作者と作品の批評紹介につとめてゐる。全稿凡そ百頁に餘る分量のものでまづ明治小説略史の名に背かぬものといへやう。

この頃(84)『日本新詩史』が福井久藏によつて著はされた。著者は元來國文學の古い方面や歌學史などを專攻の學者であるか、明治に起つた新詩に就ての理解も淺くないといはれる。本書は年來書きとめておいた新詩に關する鑑賞・批評・感想の類を集めて、これを稍ゝ系統的に編んだものである。

明治の新體詩に關しては、岩野泡鳴の『新體詩史』や吉野臥城の『新體詩研究』其他數種の著

書も既に現はれてゐるが、本書も亦一の研究資料として參考するに足るものとおもふ。

本書は第一章序說から始まつて第六十五章未來派で終つてゐて其の本文四百五十頁、それに附錄として、新體詩年表百頁餘が添へてある。本書の內容所論に就いていふならば、特に犀利鋭敏な批判は少ないかに想はれるが、概して穩健中正で初學者に明治新詩の種々相を瞥見せしめるには、まことに手頃な好著である。

『明治文學史』の著者岩城準太郎の[85]『表現と鑑賞』は、其の對象を明治文學のみに限つたものではないが、永年に亘る國文學の研究と明治文學に對する深い造詣と愛情の結果書かれた好著である。この著書は、謂はゞ國文學の文章學的研究評論でもある。

卷中、第二、表現から鑑賞への第十五節「寫實小說と寫生文」第十六節「文學論と描寫法」等は明治文學を扱つたものであり、卷末附錄の「明治の文章」と共に示唆に富んだ、優れた文藝鑑賞論といへるであらう。殊に「明治の文章」の一文は四十頁餘のものであるが、著者の明治文藝に關する深く溫たかい理解を示すもので、明治文學の特質を、現實的精神と個性的精神であるといふ考察を基としてゐる所論で、其の展開の樣相を實證風に叙述したものである。これ亦吾々には益することの多い參考書の一として見逃すことのできないものであらう。

次いで十四年四月に出た「文章講習叢書」中の一卷『日本文章史』も亦、明治文章研究の一文獻として參考とすべきものである。講述者　德田秋聲である。本書は上古からの我が國文學作品の文章の特質、樣式等を史的に考察したものである。其の第六章は「明治以後の文章」である。講述者は明治文壇以來の作家、親しく明治以降の文章の業に携はつてゐるので、其の考察はすべて實地に卽してゐる。

渾沌詩代　明治十二年頃まで）

飜譯文の勃興

言文一致體の試練

新文章の完成

この四節を細かい項目に分けて述べたもので、紙數五十餘頁、先に擧げた生田長江の『明治文章史』や大町桂月の『日本文章史』（桂月全集別卷所收）中の「明治の文章」等と共に一讀に値するものであらう。

早稻田大學講師で、かねて明治の文藝思潮研究に志してゐた宮島新三郎が其の業績の一端を發表したものが『明治文學十二講』である。本書の初稿は旣に大正十一年三月から約一ケ年に亘つ

て、雜誌「文章俱樂部」に連載されたものであるが、それに多少の增訂を施して一卷にまとめたのが本書である。先づ其の內容を目次によつて示せば、

第四期の文學
第九講　自然主義運動の實際
第十講　自然主義の意義及分化
第十一講　ニオ・ロマンチシズムの文學
第十二講　漱石及鷗外の藝術
明治文學年表
明治文學研究書目
索　引

斯うした要目によつて詳述したものである。

さて本書の價値であるが、先づ其の叙述の形式から言へば、前に擧げた高須梅溪の『日本現代文學十二講』に近いものである。併し前者の印象批評風の論說に對して、これは著者の社會意識とも謂ふべき理想的觀念の上に立つ批判が相當濃厚に、行文にうかゞはれるのである。文學批評に於て斯うした傾向は一種の進歩には違ひないであらう。たゞ併し其の爲に多少實證的考究の程度が低められてゐはしないかと思はれぬでもない。つまり、明治文學のやうに複雜多樣な時代文

學を初學者に講述するには、先づそれ〳〵の作品なりを解說提示して、その上で之が鑑賞批判に移るべきであらう。とはいへ、本書は文化觀的の明治文學史として稍〻創見にも富んだ著述で、勿論類書中屈指のものである。

更に本書と前後して、明治大正文學研究に關する二著書が時を同じうして公にされたことは、まさに明治文學の研究が本格的に着手されつゝある事と、其れが成果の期待すべきものゝ有る事を語るものであつた。

その一は、小島德彌の『明治大正新文學史觀』(3)である。本書はこれまでに出た、どの明治文學史よりも詳細に書いたものである。四六判、六百七十餘頁はその事を示してゐるといへやう。叙述の方法形式或は觀察批判には別段の新味とか獨創とかは餘りうかゞはれないが、たゞ最も忠實公平に可及的多くの作家作品に就て語つてゐる點は特色ともいへやう。そして、自然主義文學の全盛時代に百七八十頁の記述を費してゐるのは、左も有るべき事で他に見られぬところである。其の本質的意義或は價値の批判は暫らく措き、わが明治文學史上に於て斷然一つの主流となつて廣く大きく展開したのは自然主義文藝に外ならない。斯う考へると、此著書を明治文學研究の一文献として世に問ふた意圖なり、意義なりも亦相當に認めていゝものと想はれるのである。

その一は、岩城準太郎著『明治大正の國文學』一卷である。本書の著者がどれ程に俊敏な感覺と犀利な鑑賞眼とを以て明治文學に對してゐるかは、既に同じ著者が公にした『明治文學史』や『表現と鑑賞』等によつても學界に知られてゐる。著者の評論は國文學一般に關する深い造詣の上に立つもので、その現代文學考察は純學的ではあるが、所謂學者に有勝ちの一種の固定觀念から來る通弊らしいものが殆ど見られない點でも先づ推奬するのに躊躇しなくていゝのである。いま此書の內容を紹介する前に、本書の成立に就いての著者の序言の一端を記さう。

――明治大正時代の國文學を研究する氣持は、自分みづからの經歷を回顧する氣持である。そこに明治以前の國文學を研究する時とちがつた特殊の感味がある。それは全く自分と連れ立つて生長して來たものを懷かしむ情意の問題である　此親しさの心から、此の時代の國文學に關する追憶錄を書いて見たのが、卽ち本書である。三十餘年間の思出を記錄して本書を編上げたのである。――

一、少年の日　序に代へる）

二、新文學建設の主張

三、西洋文學の影響

一八、人間味の文學
一九、開拓者の悲劇（跋に代へる）

内容は右の十九章の綱目を細説したものである。追憶錄と著者は斷つてゐるが、これはほゞ文學史風の系統と組織を有つた叙述から成つてゐるのである。そして、右の主要項目でも解るやうに、各々の項目の下に三十年に亘つての其れの推移變遷の跡をたどつたところにも特色が有るとおもふ。とまれ本書は、明治大正文學研究の優れた業績の一として、研究者必讀の文献であると信ずるものである。

大正も終りに近い十五年の四月、雜誌「新小說」は[90]『明治大正文藝運動大觀』號を出した。これには明治文學に關して次の評論が載つた。

戯作者の逼塞と活動　尾崎久彌
明治の飜譯文學　柳田泉
三遊亭圓朝の作に就いて　鈴木行三
逍遙・四迷・美妙　小島政二郎
青年抵抗派　神崎清

社會主義文學一瞥　木村毅
文學批評の轉機　片上伸
自然主義運動私見　中村星湖
風葉氏のおもひでから　相馬御風
思ひ出すまゝ　久保より江
兒童文學の變遷　水谷まさる
春浪漁史　小杉未醒
ニオ・ロマンチシズムの頃　高須芳次郎
基督教思想と日本の文學　沖野岩三郎
白樺の回想　木村荘太
生命派の文學　水野葉舟

これらの諸論文中には、純學的の研究といふよりも多少隨筆風の記述に成るものも有るが、やはり明治文學研究文献の一として一應參考とすべきであらう。

名古屋から出てゐた歌誌「青樹」が、この年二回に亘つて[11]『明治短歌研究號』を特輯した。こ

れは勿論明治の短歌に關する範圍の研究ではあるが、歌學史の參考資料として擧げておから。內容目次は次の通りである

第一明治短歌研究號

落合直文論　兒山信一
歌壇に誤られたる子規の寫生觀　日比修平
窪田空穗　板倉董一
石川啄木に就て　加藤將之
明治新派歌書解題抄　雜賀重良
一人一首評　兒山信一
長塚節とその歌　清水勤二

第二明治短歌研究號

片われ月その他　小島吉雄
與謝野晶子論　安倍忠志
明治和歌雜談　兒山信一

服部嘉治氏の『伽具土』に就て　棚橋諒
伊藤左千夫の歌境に就て　岩間武雄
大西操山歌集　加藤將之
明治短歌研究書目　雑賀重良

大正十五年十二月は昭和改元の時である。雑誌「改造」の第八巻第十二號には齋藤茂吉以下數人の「明治文學の思ひ出」に就いての記事が載つた。「改造」が斯うした記事を載せたには相當の理由があつたと想ふ。それは、我が國の出版界に於ける一大エポックメーキングである『現代日本文學全集』の刊行が改造社によつて計畫されて將に實現せんとしてゐた時である。卽ち「改造」の此の號の發行と同時に全集の第一回配本『尾崎紅葉集』が世におくられたのであつた。この全集卽ち所謂圓本の出現によつて、それまでは、一部の研究家、文人、好事家等に獨占されてゐたかの觀のあつた明治時代の文學が初めて一般讀書人大衆に開放されたのであつた。それはそれとして「改造」の「明治文學のおもひ出」號の記事は次の題目のものである。

明治和歌史斷片　齋藤茂吉
明治の基督教文學　正宗白鳥

我々の通つて來た時代　木下杢太郎

平民社時代の社會文藝　石川三四郎

明治初期の虛無黨文學　木村　毅

『藝苑』の出た前後　馬場孤蝶

明治文壇印象記　高須芳次郎

明治維新と國學問題　長谷川如是閑

明治文學の回顧　阿部次郎

今と昔　廣津柳浪

子規のこと　高濱虛子

これらの文章は研究論文といふ程のものではないが、斯うした回顧談、感想文めいた記述の中からも、明治文學研究者は何等かの暗示なり、手がかりを得ることも有らうと考へられるのである。

この大正十五年四月に出た木村毅の(93)『文藝東西南北』中には明治文學に關する雜考が少くない。明治・大正文學諸斷面の新研究と著者は言つてゐる。

文壇モデル考
明治の社會主義小説
飜譯文學雜考
明治大正文學と經濟意識
明治文壇雜事二三
成島柳北
泉鏡花
明治文學渾沌期補遺

大正十五年十一月から昭和三年までに全十九卷を刊行した新潮社の『日本文學講座』[94]中には、明治文學に關する題目も多いが、これの解説は後年發行の改訂新版にゆつることゝする。

## 昭和期

大正末年頃から昭和の初年へかけて、明治文學の研究熱は正に最高潮に達したかと想はれる。

學界に於けるこの現象は必然的のものとも考へられるのである。併し、さうした情勢を誘致した原因なり主動力といふやうなものゝ事も一應考へてみるべきであらう。即ち大正末年から刊行を始めた改造社の『現代日本文學全集』全六十三卷の出現や、吉野作造博士等の明治文化研究會の活動――昭和二年から着手された『明治文化全集』全廿四卷の刊行等――或は續いて春陽堂版の『明治大正文學全集』全六十卷の刊行等の事業も其の主要なものであるとおもふ。

又明治初年頃から、帝國大學をはじめ各大學專門學校で國文學を修めた新進の學徒の中からも明治時代文學を研究の對象とする者が多數に輩出するやうになつた。そして、其等の人達によつて明治文學の研究を目的とする會合團體も幾つか組織されて、或は研究討論の會を有ち或は機關雜誌を發行して調査研究の業績を發表するなど具體的の活動が開始されたのである。又雜誌「[六]愛書趣味」等が出て、從來閑却されてゐた、或は調査洩れの明治文學研究上の參考資料の書誌的研究も大いに進んだのである。さうして、昭和の十年間には、明治文學の研究業績である主要著述が凡そ三四十種も公にされてゐるのである。されば、吾等の待望する完全に近い明治文學全史の著述も、軈て近い將來に於て成就されるであらうと信ずるのである。

さて昭和初頭に現はれた研究文獻として先づ第一に雜誌「早稻田文學」の特輯『[九]明治文學號』

を擧げねばなるまい。これは、大正十四年三月に其の第一冊を發行して以降昭和二年六月までに全七冊を出したものである。これは、明治の文學界に多大の貢献をなしてきた此の雜誌として、實に有終の美を完うした功績ともいふべきよい計畫であつた。又本誌にして初めて爲し得た仕事でも有つたらう。全七冊の內容は、各事項共執筆者その人を得たもので、これまでの明治文學史書の補遺として充分なものである。明治文學研究者はこれによつて實に少なからざる知識を得ることであらう。本誌各冊の內容細目は改造社版『日本文學講座』本の「年表書誌篇」中の「明治文學書誌」に揭げてあるから茲にはたゞ各號の主題と發行年月とを記すにとゞめる。

「早稻田文學」明治文學號

| | | |
|---|---|---|
| 一、混沌期の研究 | 大正十四年三月 | 第二二九號 |
| 二、胎生期の研究 | 同　年六月 | 第二三二號 |
| 三、同　續 | 同　年七月 | 第二三三號 |
| 四、興隆期の研究 | 同　十五年一月 | 第二四〇號 |
| 五、混沌期・胎生期・興隆期（補遺） | 同　年四月 | 第二四三號 |
| 六、混沌開明期の研究 | 昭和　二年四月 | 第二五五號 |

七、自然主義前後研究　　同　　年六月　　第二五七號

この七冊は後合本二冊として東京堂から發行されてゐる。

若い學徒によつて明治文學の檢討批判が盛に行はれる一方には、又文壇の耆宿達によつて往時の回顧追想の文が發表されることも多くなつた。

江見水蔭の『硯友社と紅葉』(97)は、硯友社の一員で尾崎紅葉に親炙した著者の回想であるから、當時の文壇の事情、特に紅葉一派の動勢に就いては、他の談話や文獻でうかゞはれない事どもが多く語られてゐる。硯友社時代の研究者には必讀のものであらう。

其れに次で公にされたものに野崎左文著の『私の見た明治文壇』(98)の一書がある。本書の著者は假名垣魯文の門人で明治の初期、十年代から二十年代に亘つて假名讀新聞、明治日報、いろは新聞、繪入朝野新聞、東京繪入、自由燈等の新聞雜誌の記者の經歷を有ち、又狂歌に造詣のある人である。それで本書には、明治初期の新聞小説や其の作者等に關する事柄や狂歌に關する記事が多い。明治初期の文學界の一面を知るに便利な參考書といへやう。

目次

今日新聞と浪華新聞
明治初期に於ける戯作者
稗史年代記の一部
田島任天翁の遺著
假名垣魯文翁の自傳
柳亭種彦氏の逸事
柳塢亭寅彦氏の狂歌
成島柳北仙史の面影
石井南橋散史の一面
服部撫松居士の評判
山田風外翁と關槎盆居士
明治年間の狂詩と飲仙會
明治年間の狂歌と鶯蛙會
昔の銀座と新橋藝者

(99)『自己中心明治文壇史』は江見水蔭の著で博文館から發行されたもの。本書內容の最初の稿は、大正十五年二月號以降昭和二年九月號に亘つて、雜誌「太陽」に分載されたのである。

著者も序文で言つてゐるとほり、本書は著者自身を中心として書いたので、多少は一方に偏したと思はれる節も無いではないが、著者自身の日記や雜記類或は文友の書簡、當時の新聞雜誌や其の切拔等を基礎として、加ふるに生存する知友の談話を參酌して、更に著者自らの實見實聞ー體驗の記憶を愼重に喚起して、力の及ぶ限り再考又參考の上で執筆したものである。本書の特徵價値は、あくまで事實本位に終始した點であらう。章を十九に分て明治初年から末年までのわが文壇の事件や消息が讀物風の輕快さで書かれてゐる。此の種の著書は明治文學の學的研究書とはいへないが、其の研究に尠なからぬ寄與をなす資料的價値を有つものである。殊に本書は、硯友社時代の明治新文學の勃興初期から明治の末年に至るまで現役的存在を文壇につゞけて來た著者の見聞實記ともいふべきもので他の追隨をゆるさぬ著述といへやう。

江戸文藝通で又明治文藝愛好者である石川巖編纂の『明治初期戲作年表』(100)は、明治元年以降二十年前後までの戲作雜著を、

翻譯小說
合卷式草双紙
新舊小說
花街風俗
戲文雜著

の五種に類別して、明治初期文藝の鳥瞰圖たらしめやうと期した編著である。本年表に所收の書目は單行本として發表されたものゝみを採つて、新聞雜誌の所載に止まるものは擧げてない。併し明治初期の文藝研究には有益な參考書となるであらう。通例年表には挿畫の無いものであるが、本書には多數の書影(中には稀覯に屬するものも尠くない)を入れた事は研究參考書としての便益を增大するもので、著者の懇切がうかゞはれる。

四六判橫綴本。書影挿畫入。全一五六頁。定價一圓五拾錢。從吾所好社發行。

昭和二年から刊行されたものとして昭和五年完了ノ『明治文化全集』を擧げておきたい。これ

は全廿四卷、明治文化研究會同人の編纂に成るもので其の主幹は吉野作造博士である、此の全集は明治初期文化の研究に多大な寄與をなした事は既に周知であらう。明治文學の研究上にもこの全集全卷が參考となるのは勿論であるが、殊に其の、第十二卷文學藝術篇、第十三卷時事小說篇、第十四卷飜譯文藝篇等が、明治文學研究者に與ふる便益は實に尠くないとおもふ。以下此の三卷に所收の內容を記しておかう。

第十二卷「文學藝術篇」（昭和三年十月發行）

| | | |
|---|---|---|
| 修辭及華文 | 菊池大麓譯 | （明治十二年） |
| ベリンスキーの藝術論 | 長谷川二葉亭譯 | （同　十八年） |
| 假名の會の問答 | 大槻文彥 | （同　十五年） |
| 羅馬字早學び | 矢田部良吉 | （同　十八年） |
| 羅馬字意見 | 田中館愛橘 | （同　十八年） |
| 言文一致 | 物集高見 | （同　十九年） |
| 人像畫法 | 本多錦吉郎譯 | （同　十三年） |
| 美術眞說 | フェノロサ演述 大森惟中筆記 | （同　十五年） |

日本繪畫の未來　外山正一（明治廿三年）
演劇改良論私考　外山正一（同　十九年）
演劇改良意見　末松謙澄（同　十九年）
演劇改良論駁議　守川丑之助編（同　十九年）
劇場改良法　中村善平編（同　十九年）
演劇論　高田早苗（同　十九年）
谷間の姫百合繪番附　（同　廿一年）
新體詩抄初編　外山正一　矢田部良吉　井上哲次郎　同撰（同　十五年）
新體詞選　山田武太郎編（同　十九年）
十二の石塚　湯淺吉郎（同　十八年）
西國立志編卷の二　其粉色陶器交易　佐橋富三郎（同　六年）
西國立志編卷の十　鞋補童教學　同（同　六年）
日本美談　前田正名（同　十二年）
滿二十三年息子鑑　河竹默阿彌（同　十七年）

東京現在著作家案內　櫻井德太郎編　明治廿五年

文學藝術雜纂　明治文化全集編輯部編

附錄

明治初期文學年表　齋藤昌三編

第十三卷「時事小說篇」（昭和三年四月發行）

附「續飜譯文藝篇」

冠松眞土夜暴動　武田交來（明治十三年）

蓆旗群馬嘶　彩霞園柳香（同　十四年）

自由艷舌女文章　小室案外堂（同　十七年）

黑白染分韁　高畠藍泉（同　十八年）

保安條例後日之夢　岡本純（同　廿一年）

女子參政蜃中樓　廣津柳浪（同　廿二年）

張嬪朝鮮宮中物語　福地櫻痴（同　廿七年）

開卷驚奇暴夜物語　永峰秀樹譯（同　八年）

虚無黨實傳記鬼啾々　宮崎夢柳（明治十八年）

獨逸奇書狐の裁判　シエクスピヤ著 共上勤譯（同 十七年）

仇結奇の赤繩西洋娘節用　シエクスピヤ著 木下新三郎譯（同 十九年）

附錄

時事小說年表　石川巖

第十四卷「飜譯文藝篇」（昭和二年十月發行）

和蘭美政錄　原著者不明 神田樂山譯（文久 元年）

通俗伊蘇普物語　渡部温譯（明治 六年）

歐洲奇事花柳春話　ロード・リツトン著 丹羽純一郎譯（同 十一年）

哲烈禍福譚　フエヌロン著 宮島春松譯（同 十二年）

春風情話　ヲルタル・スコツト著 橋顯三譯（同 十三年）

歐洲情譜群芳綺話　ボツカス著 大久保勘三郎譯（同 十五年）

人肉質入裁判　シエクスピヤ著 井上勤譯（同 十五年）

該撒奇談自由太刀餘波鋭鋒　レエクスピヤ著 坪内雄藏譯（同 十六年）

泰西活劇 春窓綺話　スコット原著　服部誠一譯（同　十七年）

露妙樹利戯曲 春情浮世の夢　レエクスピヤ著　河島敬藏譯（同　十九年）

想夫戀　ボツカス著　佐野尚重譯（同　十九年）

一名 西洋歌舞伎種本 シエークスピヤ筋書　チヤーレス・ラム著　竹内餘所次郎譯（同　十九年）

## 附録

### 明治初期飜譯文藝年表　柳田泉

大正年間から漸く隆盛になつた明治文學研究は、昭和年代となつて愈本格的のものとなつてきた。國文學徒の中からも、これを專攻する人々の輩出を見るやうになつた。文壇の士の中にも意をこれに用ひて折にふれては筆にするのも見うけられるやうになつた。明治文學の研究を目的とする團體も幾つか組織されて、其の機關雑誌が幾種類か出るやうになつたのも此の頃に始まつた。

先づ岩城準太郎の「改訂増補明治文學史」が出版されたのは昭和二年十月である。本書に就いては明治三十九年十二月發行の初版本で前述したので茲には言及しない。

菊判洋裝五〇一頁、附録年表一六頁、修文館書店發行。

『明治文學展望』は、前に『文藝東西南北』を著はした、明治文藝通として知られる木村毅の著書である。本書の内容は研究論稿といふよりは、むしろ興味本位の考證といふやうなものが多いが、特殊の資料に據る發見報告的の記述は明治文學の諸相を知る爲の有益な文献となるであらう。主要目次は次のものなどである。

『明六雜誌』の文學記事
明治初期の虛無黨文學
『鬼啾々』解題
探偵小說としての『楊牙兒奇談』
明治飜譯文學の概觀
『小說神髓』小論
森田思軒とその飜譯
社會小說研究
明治文學に現はれたる自然美
『文學界』を中心としての斷想

德富蘆花

明治大正文學の社會的考察

昭和三年六月。改造社發行。四六判洋装三〇七頁。

新屋敷幸繁の著『現代文學の鑑賞』は、文檢受驗者を目標とした程度で、現代日本文學の鑑賞論と鑑賞法と鑑賞實例とによつて、現代文學の鑑賞態度を明かにしやうとのもくろみから書かれたものである。書中の内容には明治時代の文學を對象とした項目が少くない。殊に其の第十一章「現代文學の生活的流れ」以下、第十六章「北村透谷の作品鑑賞」第十七章「樋口一葉の作品鑑賞」第十八章「正岡子規の鑑賞」第十九章「藤村獨歩の作品鑑賞」第二十章「作者の世界と鑑賞」第二十一章「作品の世界と鑑賞」第二十四章「島崎藤村の鑑賞態度」等は明治文學の鑑賞に關しての一種の見解として參考とするに足るものと想ふ。

昭和三年十月。大同館書店發行。四六判洋装二八六頁。

又吉田九郎著の『文學中心明治大正文學史』一卷も、此頃出た參考書の一である。

昭和三年十一月。敎育研究會發行。菊判洋装三〇〇餘頁。

松本高等學校敎授金井嘉佐太郎講述の『明治大正文學史』一卷。此の書は長野縣下更級郡敎員

會主催の夏期講習會に於て、著者の口演した明治大正文學講義の筆記を補訂して一卷にまとめたものである。

本書の内容は、もと單行本にまとめる考へから書いた稿ではないので、各作品の引例や、論斷の根據に多少精粗不定の節もうかゞはれるが、大體に於て穩健中正な態度で觀察し評論したもので、其の章節・項目の選擇叙述にも獨自の新味も見えるのである。明治大正文學の大要が最も適切に批判説述されてゐるので初學の研究者にはよき參考書となるであらう。

昭和三年十一月。長野縣更級郡戌組職員會編並ニ發行。菊判紙裝二四九頁非賣品。

橘文七著『明治大正文學史』は文檢受驗者の參考書程度を目標としてまとめた著書といへやう。本書は從前公にされてゐる、明治大正文學史と比較して特に優れた獨自の長所といふやうな點も見うけられないが、先に出た各著者をそれ〴〵參考として平易簡素に説述したものである。

昭和三年十二月。啓文社書店發行。四六判洋裝三三六頁。

『日本近代詩の發達』湯地　孝著

本書は、明治時代に發生して明治詩代にほゞ成長をとげた新體詩に就いて、其の展開の概略を辿り、それによつて近代詩としての明治新詩の流れが大觀されるやうに記述されたものである。

本書の内容目次を示せば次のとほりである。

本書を明治詩史として今日から見れば、其の記述の精粗繁簡に多少の不統一が見られる點などもあるが、以前にまとまつた類書は殆どないので、明治新詩の發展變遷を知り、明治文學の一分

野としての新詩を知るは至便な著者である。特に初學者にすゝめたい。

昭和三年十二月。不老閣書房發行。四六判洋裝全四〇〇餘頁。

之に次いで昭和四年の劈頭に新潮社から日夏耿之介著『明治大正詩史』が出版された。本書は著者數年の勞作で、これまでに出た明治新史に關する史的研究書と比べて其の質と量に於て斷然優秀を誇つていゝものである。本書一度公にされて、明治十年代より大正十年頃に及ぶ日本近代詩の創生展開が史的に大觀できるやうになつた。本書の內容を成す最初の稿は、大正十一年から十四年間に雜誌「中央公論」誌上に次の題名で四回に掲載されたものである。

日本近代史の成立　（大正十一年十月號）

日本近代史の浪漫運動　（同　十三年一月號）

日本近代詩の象徴思潮　（同　十三年四月號）

日本挽近詩潮の鳥瞰景　同　十四年六月號）

これを基礎として、精訂正增補を加へて、明治大正詩史としての體系的叙述を試みたものである。

斯うした要目の下に節・項を設けて可成精倒緻密に批判叙述の筆がすゝめられてゐる。湯地著『日本近代詩の發達』等を一讀して、更に本書を精讀するならば明治大正の新詩を理解し、之を研究する上に尠なからぬ利便と稗益を得るであらう。

昭和四年一月(上卷)十一月(下卷、詩書概表)
上・下二卷及詩書概表、索引一册。菊判全約一二〇〇頁。三卷。

早稻田大學教授永井一孝著『明治文學史』は、もと早大出版部發行の「文學講義録」のために日本文學史の一部として書かれたものである。著者自らその序文で言ふとほり、本書は事實の正確といふ點に深甚の注意を拂つて明治文學の史的考察を試みたものである。內容は大體さうした意圖に添ふたものとはいへるが、主要作家の評傳、主要作品の解說等の不充分な點は著者の認むるとほり多少遺憾の感がある。敍述の方法・形式等は他の明治文學史家のそれと大同小異で特に新味とか獨創はないやうに思はれる。併し、單行本の明治文學史の一として參考とすべき價値の有ることは勿論である。

昭和四年三月、菊判二五三頁。文獻書院發行。

『明治文學襍考』一卷、日夏耿之介著は前述の『明治大正詩史』と共に、著者の近代日本文藝に

關する蘊蓄の程を示す好著であらう。著者はもと詩人、本書の内容も亦明治新詩に關するものと、猶小説、戯曲、評論の類に及び、それ〲に就いて獨自の見解が多く記述されてゐる。

上田敏の譯詩に就いて
ヴヰクトオリヤ文學輸入閑話
紀季文學輸入閑話
新詩史上森林太郎氏の立場
自然主義的なる詩歌の發生
日本詩歌の變遷
一葉の日誌文學
嗜讀傳發端

以上が本書の内容目次である。

昭和四年五月。四六判洋裝四九六頁。梓書房發行。

『明治歌壇概史』尾山篤二郎著

本書は全く概史として書かれたものである。故にその量も菊半截判百頁餘にすぎない。併し著者自身、明治末期以降歌壇に在つての體驗考察から叙述されてゐるので、明治短歌史の研究には一讀すべき書である。

目次

昭和四年八月。菊半截判一〇九頁。紅玉堂發行。

「明治大正短歌史概觀」

これは、改造社版『現代日本文學全集』第三十八篇の現代短歌集巻末附載、齋藤茂吉執筆にかゝるもので、恐らくこれまでに發表された明治大正の短歌を史的に概説した著述中で最もよくまとまつたものと考へられる。研究者必讀の參考書である。因に、やはり本篇附載の「現代歌壇諸家略年譜」亦多少の參考となるものである。

猶此の全集第三十八篇は現代俳句集を合綴したもので、巻末には高濱虚子執筆の「明治大正俳諧史概觀」と「現代俳壇諸家略年譜」は短歌同様に明治大正俳句の研究に卑近な手引となるのであらう。

昭和四年九月。改造社發行。

俳句といへば、此の年刊行された俳句講座刊行會發行の伊東月草編『俳句講座』本の第八至十一及び十一・十三巻には五回に亘つて龜田小蛄執筆の「明治俳諧史」が掲載された。これは前記改造社全集本の虚子執筆の明治大正俳諧史概觀より詳細に記述されてゐるから明治の俳諧研究者は參照すべきものであらう。

「明治大正詩史概觀」北原白秋執筆

前後するが此年四月に發行の改造社版『現代日本文學全集』第三十七篇現代日本詩集篇卷末附載の北原白秋の詩史概觀は、前記、日夏耿之介著の『明治大正詩史』程の精緻な研究論文とは言ひ難いが、初學の便には手頃な說述といへやう。

因に、之は後昭和八年十二月に『改造文庫』の第二部第二百三十九篇として單行本となつて發行された。（菊判裁判三一二頁。改造社發行　共れに據つて、目次を記しておく。

序　言

日本詩歌の特性

新體詩以前

新體詩生る

次いで來るもの

新抒情詩時代の四星

新抒情詩壇の星座圖

新進詩人の搖籃「文庫」

大正詩書及詩史略年表

卷末に（後序）

「明治文學史抄」（本文頭註）といふ本が出た。著者は二松學舍專門學校教授の鹽田良平である。本書は學校での明治文學史講義を基として書かれたものである。

内容は明治文學史上の重要作家の主要作品の評論を中心として、それを次の章の下に區分して叙述したものである。

第一篇　新文學の興起

第一章　戯作群

第二章　新文學理論

第三章　新作家の輩出雜誌主義

第四章　舊派小說及其他

第五章　觀念的文學論

第六章　過渡文學

第二篇　人生派文學（一）

第一章　浪漫主義運動（前期）
第二章　浪漫主義運動（中期）
第三章　浪漫主義運動（後期）
第四章　紅葉文學其他
第五章　人生派文學
第六章　近代文學の完成（一）
第七章　近代文學の完成（二）
第八章　新浪漫主義
附錄　人生派文學（二）

昭和五年九月。菊判四三三頁（索引共）。大鐙閣發行。

此書と同じ頃出たもので、其内容も稍類似のものに「國文學講座」全廿八冊中の二冊「現代文學散文評釋」と「明治文學詩歌評釋」とが有る。前者は大阪府立女專校教授の石山徹郎著で、後者は同校教授風卷景次郞と兒山信一共著である。本書は共に文檢等の受驗者の參考件侶を目標としたものであらうが、稍一般の現代文學研究者にも參考となるであらう。

昭和五年十月。菊判一〇六頁。受驗講座刊行會。

同　同　二〇九頁。同

『文壇三十年』は近松秋江の著である。

著者がまのあたり見てきた明治中期以降の文壇と作家に關する回顧錄である。

自分の見て來た明治三十年以後の文壇

明治文學黃金期の終る頃

評論壇の新氣運

島村抱月氏

末流文壇

帝大派の文士

早稻田文學の再刊

文士生活難

天外と柳浪の抗爭

後藤宙外

吾々の出處進退

一黨の暗鬪

長谷川二葉亭氏

高山樗牛氏を懷ふ

國木田獨歩氏

德富蘆花氏

田山花袋氏の追懷

島崎藤村氏

秋聲氏の個人問題

女流作家漫談

斯うした記事は明治文學研究者には有益なもので、必ずや歡迎されるであらう。

昭和六年一月。四六判二八八頁。千倉書房發行。

この頃朝日新聞社發行の「明治大正史」第五卷『藝術篇』土岐善麿執筆）が出た。これは純粹の明治文學史とはいへないが、種々參考となる内容を有つたものとして一讀すべきであらう。

昭和六年二月。菊判六〇〇頁。朝日新聞社發行。

「國語と國文學」第六十號は特別號として『現代文學考察』を發行した。これは、國文學者中で、現代文學に最も造詣の深い二新進の勞作である長篇論文を以て殆ど全誌面を埋めたものである。即ち、

現代文學序說　湯地孝　一七五頁

現代文學諸相の概觀　片岡良一　三九〇頁

この二論文である。この論文によつて讀者は現代文學の縱觀橫觀をなし得るであらう。前者は鑑賞、後者は批判の態度を以て明治以後の文學に就ての考察を試みたもので、近來にない眞摯な充實した研究論文として、明治文學研究者には必ず參考となるであらう。

昭和四年四月。至文堂發行。

啻に明治文學といはず、日本文學が全面的に再吟味され、或は新しい觀點角度から鑑賞批判される傾向が頓に盛んになつたのも此頃である。其の結果は幾多の日本文學講座本の出現ともなつた。

新潮社版の『日本文學講座』

これは既に大正十五年に第一版を刊行したものの改訂新版である。全十五巻中次の三巻が明治時代編である。

第十一巻　明治時代（上）　昭和六年五月　四二八頁

明治文學概説　生田長江
寫實主義以前の小説　石川巖
明治の小説　田山花袋
政治小説研究　齋藤昌三
社會小説研究　木村毅
明治の歴史小説研究　柳田泉
明治新詩の展開　日夏耿之介
明治の短歌　土岐善麿
明治の俳句　高濱虚子
寫生文研究　島田青峰

森鷗外研究　小島政二郎
尾崎紅葉研究　德田秋聲
幸田露伴研究　柳田泉
高山樗牛研究　高須芳次郎
樋口一葉研究　久保田万太郎
國木田獨歩研究　吉江喬松
夏目漱石研究　森田草平
正岡子規研究　河東碧梧桐

以上

岩波講座の『日本文學』も亦之と前後して續刊された。全二十回配本、一題目一冊の分冊式の形で出たが、明治文學關係は左記の項目である。

日本文學史概論

明治時代　片岡良一

北村透谷　鹽田良平
國木田獨歩　同
石川啄木　湯地孝
正岡子規　齋藤茂吉
夏目漱石　小宮豐隆
島崎藤村　木枝增一
「白樺」の運動　武者小路實篤
現代俳句　志田義秀
現代の短歌　土屋文明
現代詩　茅野蕭々

此の二講座本、内容を見るに、どちらかといへば、新潮社版はより通俗的であり、岩波版はより學究的であるといへやう。併し兩々相俟つて明治文學研究者を益する事は實に尠くないであらう。

改造社から出た『短歌講座』全十　卷中、

第一卷　歌史歌體篇　昭和六年十月

明治大正和歌史　齋藤茂吉

第十二卷　現代結社篇　昭和七年九月

現代結社概說(歌誌篇)　柳田新太郎

現代結社概說　歌人篇)　矢島歡一

淺香社の思ひ出　堀內新泉

明星を憶ひつゝ　茅野蕭々

根岸短歌會の思ひ出　香取秀眞

いかづち會を憶ふ　小島吉雄

第一期創作の回顧　前田夕暮

生活と藝術の思ひ出　土岐善麿

日光の思ひ出　北原白秋

落合直文先生を偲ぶ　金子薰園

子規の追憶　岡　麓
伊藤左千夫の追憶　齋藤茂吉
啄木の追懐　金田一京助
木下利玄の追憶　川田　順
島木赤彦の思ひ出　竹尾忠吉
若山牧水の追憶　神原克重
古泉千樫の追憶　大熊長次郎
橋田東聲の追憶　臼井大翼
短歌鑑賞論　北原白秋

が掲載された。之亦明治和歌の研究上見逃せない文獻であらう。

昭和六年十二月に發行の、改造社版『現代日本文學全集』の別巻「現代日本文學大年表」は明治大正文學の書誌通として知られる齋藤昌三の編纂にかゝるものである。菊判五百二十頁餘、明治元年以降、大正末期に亘る約六十年間の、文藝作品の殆んどを年代順に收錄したもので、其の數は凡そ三萬三千篇にのぼつてゐる。斯の種の編著には殊に完全無缺といふことは到底不可能で

ある。吾々は本書を以て當分は滿足せねばなるまいとおもふ。

『明治文學大觀號』（「月刊日本文學」第二卷第四號）

特輯は次の内容を有つもので、明治文學の各樣相の概觀は盡くされてゐるとおもふ。

明治文學思潮　宮島新三郎
明治前期の小說　福田清人
明治後期の小說　片岡良一
明治の和歌　藤川忠治
明治の俳諧　荻原蘿月
明治演劇史　番匠谷英一
近代詩の展開相　湯地孝
明治の飜譯文學　柳田泉
明治文章史論　神崎清
明治自然主義文學理論の展開　雅川滉
明治文學研究法　篠田太郎

明治文學研究史　　形田藤太

明治雜誌解題　　蛯原八郎

川上眉山論　　中谷博

夏目漱石論　　石山徹郎

明治文學反古帳　　鹽田良平

附錄

明治文壇人名錄

昭和七年三月。菊判三三〇頁。日本文學社發行。

「明治文豪論」（「國語と國文學」第九卷第四號）

本誌は、明治時代文學史上に最も大きな足跡を印した十九人の人と藝術を評論したものであるが、論者は何れも帝國大學國文學科系の少壯學者で敍述は堅實で批判は概して穩健である。初學者のよき參考となるであらう。

坪内逍遙の文學評論　　久松潛一

尾崎紅葉論　　福田清人

| | |
|---|---|
| 二葉亭四迷の文學觀 | 井上孝次郎 |
| 森　鷗外論 | 成瀬正勝 |
| 一葉の小說 | 近藤忠義 |
| 泉　鏡花 | 田原節夫 |
| 國木田獨歩 | 佐山濟 |
| 透谷と「春」 | 齋藤清衛 |
| 花袋・藤村 | 片岡良一 |
| 德田秋聲と正宗白鳥 | 舟橋聖一 |
| 高山樗牛 | 鹽田良平 |
| 蒲原有明論 | 形田藤太 |
| 與謝野晶子論覺書 | 藤川忠治 |
| 啄木の生涯と其の歌 | 森本治吉 |
| 文壇活躍前の正岡子規 | 藤川忠治 |
| 木下尚江 | 神崎清 |

徳富蘆花論　篠田太郎
柳浪覺書　土井重義
漱石戲作者論覺書　湯地孝

昭和七年四月。菊判八七七頁。至文堂發行。

『史的唯物論より觀たる近代日本文學史』　篠田太郎著

本書は唯物史觀明治文學史と謂へやうところの內容から成る著書である。著者が本書の序で述べてゐる、明治文學に對する心構へと論斷に就いては、明らかに筆者は異論と批判を留保するものである。明治文學はブルジョアジイの文學であるといふ唯物史觀的研究の必要は認める、そして本書は未だかつて現はれなかつた優秀な創見に富む研究で有ることも充分に認め得る。併し封建時代の文學にも亦明治の文學にも、記紀萬葉の文學以降悠久な流れを流れて來た日本民族の傳統的精神も有るであらう。つまり、ブルジョアとかブロレタリアとかそういふ觀念を超越した文學精神を其の內なる本質とした文學を想はざるを得ないのである。それ故に筆者は、本書のやうな最初から特定の觀點から評論した文學史は初學者にすゝめることには一應の躊躇をなす者である。併し斯らいふ見方も慥かに研究の參考とはなるであらう。

第一篇　ブルジョア革命期の文學
一、ブルジョア文化の建設
二、過渡文學
三、ブルジョア民主主義獲得の闘爭とその文學
四、ブルジョア文學革命
第二篇　ブルジョアジー發展期の文學
一、資本主義の發展
二、反動的狀勢と貴族的封建的文學の改良革新
三、浪漫的文學
四、自然主義小說
五、現實主義小說
六、近代的戲曲詩歌の成立
第三篇　ブルジョアジー支配期の文學
一、ブルジョアジー支配の完成

二、ブルジョア文學の完成
三、ブルジョア文學の爛熟頽廢
四、プロレタリア文學の發展

昭和七年四月。菊判五二五頁（索引共）。春陽堂發行。

『文壇人物評論』　正宗白鳥著

本書は謂はゞ、明治作家論である。もつとも菊池・芥川・葛西等大正文壇の作家といふべき數人も含まれてはゐるが。著者は自ら自然主義初期以來の明治文壇に身を置いてゐるのであり、又犀利な評論を以て知られてゐる。本書の所論叙述は矢張り何と言つても、單なる年若い研究家等には能く爲し得ないものであらう。內容は左記のとほり、明治の重要作家研究には必讀の書であらう。

明治文壇總評
夏目漱石論
蘇峰と蘆花
尾崎紅葉論

菊池　寛論
永井荷風論
昭和七年七月。四六判四七八頁。中央公論社發行。

『現代日本文學序說』　唐木順三著

本書は明治以降の文學に就いての史的考究の諸論を内容とする著述である。

一、現代日本文學に於ける自然と道德の問題についての史的考察
二、自然主義の發生と沒落
三、國木田獨步における自然について
四、島崎藤村小論
七、二葉亭・透谷・啄木
八、夏目漱石論

これらの諸論は、かなりユニイクな觀察に富んでゐる。

昭和七年十月。菊判四〇五頁。春陽堂發行。

『明治文學序說』　藤村作 久松潛一 共著

本書は、明治文學研究の初學者には卑近な手引の役を果すものとおもふ。論説も極めて穩健である。たゞ之は明治文學史或は明治文學概說といふやうな內容は有たぬのである。それは明治文學史上、どうしても見逃すことのできない大きな現象である自然主義文學を餘說として簡單に扱つてゐる等の點からである。又、かなり多く目に止まる誤植は遺憾である。著者が我が國文學者の權威であるから、初學者は一應再應本書を信據するで有らうかとも考へられる。それで本書の稿はもと、著者が某所での講義案から成つてゐる事を言つておきたい。嘗て本書出版の當時、某雜誌上に本書の紹介を試みた一文を見かけたが、評者が唯物史觀に立脚する故にか、それ等の人々の屢々用ひるエゲツない言葉を以て、本書の小さな誤りとか不充分な點を酷評してゐる事を思出すからである。左に內容目次をかゝげる。

三、浪漫主義者泉鏡花
四、抒情詩の成立と若菜集
五、抒情詩より象徴詩へ
六、浪漫的傾向の短歌
餘說　自然主義の文學
序　說
一、自然主義時代の小說
二、戲曲及詩歌に於ける自然主義の影響
明治文學史年表
昭和七年十月。菊判約三四〇頁。山海堂出版部發行。

『明治文學講座』　木星社書院發行
これは第四卷と第五卷の二册しか出なかつた。各卷の內容は次の目次どほりである。
第四卷　明治文學の特殊的研究（下）　昭和八年三月發行
明治文學に於ける自我の發展史　唐木順三

明治に於ける心理小說の發展　伊藤　整
明治小說に於ける技術の發達　福田清人
明治文學とキリスト敎思想　沖野岩三郞
明治の政治小說　柳田　泉
明治の社會小說　篠田太郞
明治の戰爭文學　黑島傳治
明治の寫生文學　小西　謙
明治の隨筆紀行文學　水守龜之助
明治の探偵小說　木蘇　穀
明治詩人研究　百田宗治
明治歌人研究　阪口　保
假名垣魯文研究補遺　藤田德太郞
明治大正俳諧概觀　石渡澁耳

第五卷　明治作家研究（上）　昭和七年十二月發行

| | |
|---|---|
| 假名垣魯文研究 | 藤田徳太郎 |
| 河竹默阿彌研究 | 大瀬健 |
| 坪内逍遙研究 | 小島徳彌 |
| 尾崎紅葉研究 | 福田清人 |
| 山田美妙研究 | 土井重義 |
| 幸田露伴研究 | 形田藤太 |
| 齋藤綠雨研究 | 湯地孝 |
| 廣津柳浪研究 | 藤森順三 |
| 川上眉山研究 | 佐山濟 |
| 小杉天外研究 | 神崎清 |
| 德冨蘆花研究 | 篠田太郎 |
| 樋口一葉研究 | 瀨沼茂樹 |
| 泉鏡花研究 | 藤原定 |
| 石川啄木研究 | 藤川忠治 |

薄田泣菫研究　　佐藤一英
蒲原有明研究　　福士幸次郎

以上

この講座の執筆者は概して年若い學徒である。故に其の研究批判に多少實證的態度が稀薄で、むしろ主觀的推論に傾いてゐる樣な點も感じられるが、何れも眞摯率直な評論として參考にしていゝものであらう。

「明治大正短歌研究號」（「水甕」第二百號）

これは明治大正時代の短歌研究文献として逸することのできぬものであらう。

明治短歌史私觀　　石井直三郎
淺香社に就て　　安田青風
根岸短歌會　　上田英夫
新詩社に就て　　馬場忠三
車前草社の人々　　金澤種美
白菊會　　山崎敏夫

石川啄木の生涯　上田英夫
若山牧水論　丹草二
前田夕暮　加藤增夫
歌人土岐哀果　馬場忠三
赤彦短歌の推移をみる　松田常憲
齋藤茂吉概論　加藤將之
古泉千樫　安田青風
中村憲吉　日比野友子
木下利吉　山村德太郎
川田順を語る　湯本喜作
明治大正歌書年表　山崎敏夫等
明治大正年間主要短歌雜誌小引　馬場忠三
現代歌壇系統圖（別刷附錄）

昭和五年一月。名古屋市水甕社發行。

『現代結社篇』（「俳句講座」第八卷）

現俳壇展望　志田義秀

現代結社序説　山口誓子

ホトヽギスの人々とその主張　名和三幹竹

懸葵の人々とその主張　青木月斗

同人の人々とその主張　中塚一碧樓

海紅の人々とその主張　風間直得

改題三昧紀元の人々とその主張　井手逸郎

層雲の人々とその主張　松根東洋城

澁柿の人々とその主張　渡邊水巴

曲水の人々とその主張　臼田亞浪

石楠の人々とその主張　星野麥人

木太刀の人々とその主張　本堂蟹歩

筑波の人々とその主張

大須賀乙字の追憶　三井甲之
角田竹冷翁の追憶　服部畊石
明治・大正 昭和時代に於ける主要俳句雜誌一覽　大場白水郎
昭和七年十二月。改造社發行。

これは明治大正の俳諧と其の變遷現狀を知る上に至便な手引きともなるものである。因に、本講座の後に刊行された「續俳句講座」中の左記なども矢張り一覽參考となるであらう。

『俳諧書誌篇』「續俳句講座」第四卷）昭和九年八月發行
明治俳書解說　勝峯晋風
『俳壇現勢篇』「續俳句講座」第八卷 昭和九年十月發行
俳誌年表

『クオタリー日本文學』山室靜編

これは、柳田泉・木村毅等をリーダー格として組織されてゐる、明治文學談話會系の人々の研究發表の機關誌のやうな季刊雜誌で、其の內容は多く明治以降の現代文學の討究に費されてゐる。執筆諸家の顏ぶれでは、唯物史觀を信奉する少壯國文學徒が中堅分子を構成してゐるやうで

ある。第一、第二輯の二册が發行された樣であるが、所載の諸論說は是亦明治文學研究の一所産として擧げていゝものとおもふ。

第一輯　昭和八年一月。耕進社發行。

自由黨と政治小說　柳田泉
明治に於ける政治小說の歷史的意味　唐木順三
日本文學に於ける自然主義の發展（一）　杉山達郎　二木壽夫
初期の柳北について　大野光次
北村透谷論　篠田太郎
天外君と僕とに就て　齋藤綠雨　補註　神崎清
唯物史觀明治文學ノート　木村毅
明治文學者忌辰年表　蛯原八郎

第二輯　昭和八年七月。耕進社發行。

「經國美談」とその政治理想　柳田泉
自然文學に現れたる浪漫精神　鹽田良平

新傾向俳句の發生と其の自由律への發展　神畑勇
國木田獨步小論　吉野裕
田山花袋論　篠田太郎
「文學界」「しがらみ草紙」文學評論年表　土方定一
美妙齋日記　山田美妙手記

右目次ハ第一、第二輯共主要ト覺シキモノノミヲ掲グ。

『硯友社の文學運動』　福田清人著

本書は藤村作博士編「明治文學研究」叢書の第一編である。著者は國文學專攻の新進作家である。

第五章　同　　　その三
第六章　同　　　その四
第七章　硯友社作家の態度
結　論
硯友社年譜

内容は右の各章の細説から成立つてゐるが、之は著者五ヶ年間研究の成果であると、あとがきに見えるが、まこと其の言にふさはしい精到な研究といへやう。硯友社一派の文學は今日から見れば、明治新文學中に占める位置は其の量の割には低いものとも考へられるのである。併し、明治文學史上で初期の一時期は殆ど之が中心であつた事は否めない事實であらう。そこに之が研究の意義も有るといへやう。著者は作家的の情熱を以て想ふがまゝに論述してゐるのである。前に擧げた、江見水蔭の著書などと併せ讀むならば、硯友社文學に就て大體の知識は得られることゝおもふ。

『明治大正文學の諸傾向』湯地　孝著

現代文學の研究家として、殊に其の鑑賞態度の穩健を以て國文學界に知られる著者の、こゝ數

年間に發表された論文を集めたものである。著者は、藝術の一分野としての文學は、その藝術としての形象に何よりも先づ重きをおかなければならない。といふ視點に立つて明治大正の文學を展望し、其處に示されてゐる樣々の現象の中から　いろ〳〵の意味で興味のある傾向を取上げてみた。と序言してゐる。

目　次

「父歸る」の構成
「嬰兒殺し」の構成
明治時代の文章相
近代の流行歌

昭和八年八月。菊判四七二頁。積文館發行。

『明治大正昭和文學講話』　高須芳次郎著

これは文學研究者のみならず、一般讀書子に明治以降の文學に就てのよき理解と知識とを與へる著述である。叙述は平明、而も豐富な資料を臨梅して、簡潔ながら實に要領を得たまとめ方をした著述に仕上げてゐる。本書の特長は、著者が明治以降の文壇の事情に精通してゐて、その間の消息を永年練達の筆を以て書いてゐることであらう。書名の示す通り、これは講話といふ程度に書かれてゐるが、後に出版の『明治文學史論』に至つて、著者の明治文學論は一先づ大成されたといつてもよろしからう。

『日本文學聯講　第五卷　明治篇』

本書は、日本文學聯講の一部として、上世・中世・近世に次いで公刊されたものである。本書

の内容は最初、ラヂオ放送の目的から叙述されたものであるから、一般の研究評論とは多少行き方を異にしてゐるとおもふ。併し明治文學研究の一方法を示す好著述として少なからず參考となるものである。

一、明治文學の概觀　齋藤清衛
二、明治和歌史序說　相原弘
三、新派勃興以後の明治の和歌　久松潛一
四、明治の俳句　松岡滿夫
五、新體詩變遷の展望　湯地孝
六、硯友社以前の小說　藤村作
七、硯友社派文學の展開　北澤喜代治
八、硯友社以後の小說　形田藤太
九、自然主義の小說　鹽田良平
一〇、明治歌舞伎　守隨憲治
一一、新劇の世界　舟橋聖一

一二、明治文學評論の展開　　久松潜一

昭和八年九月。中興館發行。菊判六八七頁。

『日本文體に及ぼしたる西洋文體の影響』　四〇頁

鹽田良平

『日本文學に及ぼしたる西洋文學の影響』　八六頁

正宗白鳥

宮島新三郎

柳田泉

『西洋文學飜譯年表』　一五六頁

木村毅

齋藤昌三

これらは、「岩波講座世界文學」中の分冊で　昭和七年十二月、同八年二月、同年七月に發行された。

『季刊明治文學』　全四冊　明治文學會編

明治文學の研究が著しくなつた國文學界の時潮に際して結成された、東大國文學科出身の若い學徒を中心とする明治文學會々員の研究業績發表機關といへやう。其等の中には未だ何か主觀に囚はれすぎたり或は資料の檢討不足を想はせるものも有るが、概して眞摯率直な態度から成る研究が多い。左に各册の要目を記す。

第一號（特輯・自然主義）昭和八年十月發行

藤村「破戒」の史的位置　鹽田良平
明治自然主義の比較研究　吉田精一
田山花袋論　坂本浩
自然主義と新劇　舟橋聖一
政治小說の先驅・櫻田百衞　柳田泉
「詩人」を中心として　河井醉茗
深刻小說の展望　形田藤太
明治文學雜誌年表　蛯原八郎

第二輯　昭和九年三月發行

第三輯　昭和九年六月發行

第四輯　昭和九年十一月發行



以上

『明治文學を語る』　木村毅著

明治の文化及び文藝に關して、從來暗示的・刺戟的な著述を發表してきた著者の、第三のまとまつた著書である。其の叙述には多分のジャーナリステックな味と臭ひの有るものであるが、又特異の題材を獨自の見解で扱ふ特長は見逃せまいとおもふ。

第一部

一、明治開化期の文學(新文學以前の諸相)
二　坪内逍遙と二葉亭四迷(固有明治文學の創成)

三、紅葉と露伴と鷗外　明治極盛期の文學）
四、明治文學の總決算（その全面的展望）
五、大正文學の概觀　明治文學の遺產）

第二部

唯物史觀明治文學ノート
日本雜誌興亡史
リットン卿を迎へて
シェークスピアと明治文學
ツルゲエネフの日本文學に及ぼしたる影響
『蕪村句集講義』に現はれた正岡子規
漱石の道義觀
蘆花氏に關する斷片
南蠻趣味の小說『長崎の星』
明治文學研究指針

昭和九年五月。樂浪書院發行。四六判二六五頁。

『明治文學概論』　宮島新三郎遺稿

本書は著者の歿後、柳田泉の編纂したものである。內容は次の四章から成る。

明治文學概論

日本文學に及ぼしたる西洋文學の影響

明治文學思潮

早稻田文學と早稻田派

昭和九年五月。東京出版和發行。菊判二〇二頁。

『明治大正文學を語る』　雜誌「國語と國文學」第百二十四號

明治文學を研究する若い國文學徒が、明治文學界に深い關係を有つ老學者、老作家等を歷訪して、其等の人々の語つたところを記述したものが大部分である。左に直接明治文學に就ての記事の題目と談話者を記す。

余と明治文學及文學者　井上哲次郎

——新體詩抄・鷗外・フロレンツ・樗牛其他——

徳田秋聲氏訪問

芹澤光治良

以上

昭和九年八月。至文堂發行。

『明治時代の文學』　千葉龜雄著

これは國史研究會編輯の「岩波講座・日本歷史」中の一冊として書かれたもので、豫め執筆分量に制限が有るので、明治文學が史的に詳細に論究されてゐるものではない。然し著者は、明治文學史上の諸家の作を、大概は其れが公にされた當時に讀んだ人であり、而も自身亦「文庫」以來明治文壇に因緣を有つ人である。

第一　小說

第一期　黎明期

第二期　混沌期

第三期　發程期

第四期　自覺期

第五期　轉回期

第二　詩歌

第三　戯曲

内容を簡潔に右の章節に分けて説述したものであるが、明治文學史上の重要作家とその作品に就ては殆ど洩れなく言及してゐる。參考して益の多い著述である。

昭和九年八月。岩波書店發行。菊判五五頁。

『近代日本文學研究』　篠田太郎著

先に唯物史觀に立つ、明治文學史の一書を公にして、ともかくも明治文學研究史に一新生面を開拓した著者の世に問ふ第二の著書である。本書の內容、研究對象の扱方に就ては矢張り唯物史觀によつたのである。著者の文學史考察の態度は、本書の卷頭所載の一文「文學史の研究について」に明らかにされてゐる。其れに就てはこゝに言及する要もなからう。吾々は例ひ著者と觀點を異にするとしても、本書のやうな研究も亦明治文學研究に寄與するところの少くない事を信ずる。

目次

文學史の研究について

明治文學研究の流行と其の意義
明治文學研究の方法
封建社會の文學
ブルジョア文學發達の概觀
尾崎行雄氏の『新日本』
須藤南翠の『唐松操』
幸田露伴の『天うつ浪』について
尾崎紅葉の作品
近代日本文學に於ける革新運動の批判
正岡子規の文學史上に於ける地位
坪内逍遙論
北村透谷論
明治の社會小說
木下尙江の作品

白柳秀湖の二作品
明治の社會主義小說
島崎藤村論
島崎藤村と自然主義
田山花袋論
德富蘆花研究
日本に於ける自然主義文學の社會的性質について
佐野天聲作『大農』について
石川啄木小論
ブルジョァ文學としての白樺派文學とその分化
芥川龍之介再批判

昭和九年十月。樂浪書院發行。菊判四三五頁。

『明治文學史論』　高須芳次郎著

幾冊か既に公にした、本書の著者の明治文藝に關する勞作も、結局は本書一卷完成の道程とも

考へられる。現在吾々の有つ明治文學史書の中から數點を採擇するとなれば、先づ岩城準太郎『増補明治文學史』に次いで本書を、それから本間久雄『明治文學史』二卷（後記）等はどうしても除外できない著述であらう。研究者必讀の參考書として薦むるに躊躇しない。目次によつて内容を示す煩を避けて、例言によつて本書の實質と特長とを紹介しておかう。其れによつても本書の價値は推察できると想ふ。

（一）政治小説を在來よりも少し高く評價した。

（二）文學と密接の關係ある演劇・美術の事を各時期に亘つて略述した。

（三）在來の明治文學史は創作本位に傾いてゐるが、本書では文藝評論について可なり注意を拂ひ、自然主義時代の如きは、ひとり自然主義派の評論のみに留らず、反自然主義の評論をも紹介した。

（四）日露戰後に出た戰爭文學の代表的なものについて論述、批評した。

（五）自然主義時代に於ける、筆禍作品の一端にふれ、その意味についてもふれた。

（六）故人となつた文學者の小傳を附した。

（七）著者は明治の文壇人に多くの知己を有し、日清戰爭頃からの文學運動の種々相をも親し

く見て來たので、左樣した時代の空氣を割合によく知つてゐる。從つて左樣した文壇的知識が、おのづから本書の一特色を爲してゐる。

昭和九年十月。日本評論社發行。菊判五五一頁。

『明治俳諧史話』　勝峯晋風著

本書は、明治俳諧史話と銘打つが、その內容は、明治二十二三年、卽ち正岡子規が雜誌「俳諧」を發刊する前後の新派俳句時代以前に於ける、所謂舊派の俳人と共の俳諧に就て叙述したものである。明治俳句史を研究するには一讀すべき書であらう。

昭和九年十二月。大成堂發行。四六判四五八頁。

『明治演劇史』　伊原敏郎（青々園）著

本書は最初の、まとまつた明治演劇史として明治演劇の研究上大いに參考となるものである。――既刊の「日本演劇史」と「近世日本演劇史」とにつゞいて、この「明治演劇史」で、わが歌舞伎劇の發生から明治時代まで、殆ど三百五十年間に於ける國劇の沿革を一通り叙べたつもりである。もつとも明治時代といつても、團十郎と菊五郎との一時に歿した三十六年で筆を絕つたのは、卷尾にも記したとほり、歌舞伎劇はこれで一段落を告げて、その以後は大正昭和と共に取

扱つた方が至當でもあり、かつ便利でもあるからである。この「明治演劇史」も既刊の二書と同じやうに、餘りに俳優を中心にした憾みがある。しかしそれには理窟が有るが茲には言はない。それのみならず、既刊の二書は舞台裝置や劇場音樂についても多少の記述を試みたが、本書には殆ど省略した。此等の項目はそれぞれ專門的に獨特の歴史が必要だと考へたからである、なほ既刊の二書とちがつて、京阪の記事が東京に比して簡略である理由は、第四編のはじめに辯解して置いた。——著者の序文によつて本書著述の方針なども凡そ判るとおもふ。内容は左記五章を細叙したものである。

序說　明治初年の瞥見
第一篇明治前期
第二篇明治中期
第三篇明治後期
第四篇京阪の劇壇

昭和八年十一月。早稻田大學出版部發行。菊判八四一頁。

昭和八・九年に全十七卷を刊行した、改造社版『日本文學講座』中には、明治時代文學を扱つ

た項目も相當に多い。左に主要なもの丶目次を掲げる。

赤門派と帝國文學　森田草平
ホトトギスと寫生文　石田幸太郎
寫實小說　神崎清
社會小說と社會主義小說　篠田太郎
自然主義研究　本間久雄
國木田獨歩　中村星湖
田山花袋　前田晁
島崎藤村　有島生馬
德田秋聲　中村武羅夫
岩野泡鳴　宇野浩二
正宗白鳥　青野季吉
眞山青果　鈴木氏亨
新浪曼派の人々　阿部知二
明治飜譯文學研究　柳田泉

言文一致の發達　本間久雄

第十四卷　大衆文學篇

明治の人情噺と世話講談　久保田万太郎

明治以降新聞小説解題　蛯原八郎

第十七卷　年表書誌篇

明治大正時代文學書誌　齋藤昌三

文學雜誌書目解題　蛯原八郎

以上

『近代日本詩の史的展望』　遠地輝武著

これは史的唯物論の立場で書いた、明治大正詩史ともいふべき著書である。

日本に於けるブルジョア詩發達の概觀

日本ブルジョア詩の胎生期

日本ブルジョア詩の勃興期

日本ブルジョア詩の發展期

日本ブルジョア詩の爛熟期
日本ブルジョア詩の頽廢期
現在詩壇の情勢と分布圖

このやうな章節の下に、透谷・藤村から泡鳴・花外を論じ、米次郎・光太郎から犀星・朔太郎等に及び更に大正昭和期のマルクス主義詩人、プロレタリア詩人の批評に亘つてゐる。明治時代の新體詩を一口に日本ブルジョア詩と片づけてゐる事など、聊か偏見に囚はれた批判も目に止まるが、斯かる見方も亦一應は參考として吟味すべきであらう。

昭和九年九月。耕進社發行。四六判三九〇頁。

『明治大正詩書綜覽』　山宮　允著

本書は、本文と圖錄の二冊から成る。本文篇の卷首には、「新詩の發生及び展開」の一文がある。詩書綜覽の本文としては、維新前から始まり、明治大正年間に出版された邦語の詩書（創作詩・譯詩・評論・註釋・作法・評傳・書簡・隨筆・感想等）約四千種餘が、其の出版の年代順に列擧してある。それに、詩に關係のある雜誌一覽と全集一覽とが附いてゐる。明治新詩の研究者は、本書によつて詩史の研究上益を得ることも尠くないとおもふ。又圖錄篇一冊は百十餘圖の寫

眞版から成るもので、詩書の書影を見るには便利なものである。

昭和九年十二月。啓成社發行。本文篇菊判桝型本約五〇〇頁。

『近代日本文學論』 鹽田良平著

本書の著者は、帝國大學國文學科出身の多士濟々たる近代文學研究家群中でも定評の有る人。此書の内容も、著者が學窓を出て、明治文學を專攻するやうになつてからの七八年間に書いた評論中の主要なもの丶集大成である。

第一章 近代文學概觀
第二章 明治の佛教文學
第三章 浪漫主義考
第四章 自然主義考
第五章 明治の自然文學
第六章 戯作者論
第七章 硯友社と紅葉・思案
第八章 文學雜誌と巖本善治

昭和十年五月。萬上閣發行。菊判四八六頁。

『明治初期の飜譯文學』　柳田　泉著

本書は、明治文學研究家として知られる著者が研鑽十年の成果を順次發表せんとする「明治文學叢刊」全八卷中の第一卷である。明治初期の飜譯文學は著者得意の好題目であつて、本書一卷は、著者の從前發表し來つた明治文學研究業績中最も精細で、價値の有るものとおもふ。

内容を、研究篇・傳記篇・沙翁文獻篇・明治初期飜譯文學年表の四部に分つて、各重要事項を網羅してゐる。ひとり飜譯文學の研究者のみでなく、一般明治文學――文化の研究家はぜひ一讀すべき著書である。

昭和十年二月。春秋社發行。菊判六一五頁。

『政治小說研究』上及中卷　柳田　泉著

本書二冊は前記「明治文學叢刊」の第二、第三卷を成すものである。第四卷として出づべき本書の下卷が未發行であるのは遺憾である。

明治の政治小說研究は著者にとつて、前記の飜譯文學研究と共に、最も力を入れてゐる仕事で

有らうと想像されるのである。政治小説は明治新文學の主流でもなく、又文學史上それほどの重要性を有つものとは考へられない。併し明治文學史を考へる時には、これを除外することは無論できないのである。故に政治小説の研究も亦明治文學研究の一部として相當の意義を有つのである。

本書上卷では、研究前記として、

政治小説研究の必要
政治小説發展の背景
政治小説發展の概觀
政治小説以前の政治的文學

を論じ、更に研究本記として、

『情海波瀾』と戸田欽堂
明治十四五年に於ける先驅的政治小説家の二三
百華園主人櫻田百衛
宮崎夢柳とその政治小説

佛蘭西革命・露國虛無黨
『經國美談』としての政治理想
政治と文學
坂崎紫瀾について
案外堂主人小室信介
『佳人之奇遇』と東海散士
に就て叙述してゐる。中卷では、
春の屋主人とその政治小說
政治小說と『小說神髓』
ヂスレーリの政治小說
政治小說家としての須藤南翠
末廣鐵腸硏究
と論述をすゝめてゐる。猶豫告によれば、下卷では、藤田鳴鶴、尾崎學堂、久松義典、矢野龍溪、服部誠一、福地櫻痴等の人と作の論述を試みることゝなつてゐる。吾々は丹念にして倦まざ

る著者に期待して、本書下卷、それに續いて叢刊全部の完成公刊の近からんことを望むものである。

昭和十年五月及十月。春秋社發行。菊判六〇二及六五〇頁。

『明治文學雜記』　蛯原八郎著

本書の價値は何よりも先づ主要內容をなす年表解題等が東京帝國大學の明治新聞雜誌文庫所藏の新聞雜誌原物に據つて記述作製されたもので有る、といふことであらう。

明治文學前史考
明治以降新聞小說略史
明治十年前に於ける櫻痴居士の文學論
明治初年の戲作者小說家と新聞雜誌
村井弦齋小論
明治時代文學雜誌解題
初期の探偵小說と探偵實話

これらの諸論も參考となるであらうが、猶それにも增して、

明治時代文學雜誌年表

明治時代文學者忌辰年表

明治大正新聞小說年表

「讀賣新聞」明治時代小說脚本年表

「國民新聞」明治時代小說脚本年表

「國會」新聞文藝年表

此の六つの年表の方が、どれ程か明治文學研究者に便益を與へることであらう。

昭和十年七月。學而書院發行。菊判三七三頁。

『明治大正傑作論』「國語と國文學」第百三十八號

此の特輯號には、

東海散士　佳人之奇遇　柳田泉

紅葉　三人妻　福田清人

一葉　たけくらべ　今井邦子

逍遙　牧の方　渥美清太郎

鏡花　高野聖　吉田精一
子規　墨汁一滴と病床六尺　河東碧梧桐
荷風　地獄の花　形田藤太
二葉亭　平凡　岩崎萬喜夫
白鳥　何處へ　田中保隆
花袋　生　坂本浩
漱石　それから　成瀬正勝
鷗外　雁　仲賢禮
泡鳴　毒藥を飲む女　舟橋聖一
秋聲　あらくれ　中村星湖

斯うした評論が載つてゐる。（大正時代に屬するものは省略。）

昭和十年十月。至文堂發行。

『明治文學管見』　成瀬正勝著

紅葉

露　伴
逍遙と鷗外
鷗外の傳統

此の四章の内容から成るものであるが、著者の序文に從へば、これら本書の内容をなす四篇は結局鷗外に關する統一的研究に向ふ途上に横はる四つの映像であるといふ。而して又これは從來の明治文學史家の多くが安易な常識に從つて行つた決定に對する不滿の表示であるともいふ。以て本書の意義も考へられるであらう。

昭和十一年二月。野田書房發行。四六判二〇四頁。

『明治文壇回顧錄』　後藤宙外著

明治文壇の回顧錄を書く程の文壇人も今や寥寥となつた。本書の著者などは正しく其の少ない中の一人といへやう。往年「新小説」の主筆として或は非自然主義派の闘將として明治後期の我が文壇に名を馳せた著者が、昭和八年二月號以降、雜誌「藝術殿」に連載した回顧錄に補訂を加へて一卷としたのが本書である。年若い明治文學研究者は、文學史書等から得られない、明治文藝界の側面、裏面の消息を本書によつてうかがひ知ることができやう　左に内容目次をかゝ

げる。

自然主義運動の頃と島村抱月

文藝革新會——雨聲會

昭和十一年五月。岡倉書房發行。四六判二七二頁。

『近代日本文學評論史』　土方定一著

本書は明治文學の評論史・美學史方面に就ての考察を以て主な内容とする。近頃發表される少壯學徒や新進研究家の明治文學に關する業績中でも、此著書などは特異のものといへよう。

明治文學評論史

白樺とその文化史的意義

明治美學史考

近代日本文學研究

『ローレンツォ・ゲーテ』明治時代の文學運動

年表

雜誌「文學界」「柵草紙」文學評論年表

明治大正文學評論年表（單行本）

右の内容中、明治文學評論史と明治美學史考などに此書の意義が見出せるとおもふ。

昭和十一年六月。西東書林發行。四六判四二〇頁。

『明治文壇回顧』　馬場孤蝶著

著者は「文學界」や「明星」頃からの明治文壇を見てきた、わが文學界の耆宿の一人である。本書は、前に擧げた後藤宙外の回顧錄などと共に、明治文壇の情勢を知るに足る好文獻である。

内容は左記の項目その他から成る。

自然主義を育くむ文界
明治時代の閨秀作家
北村透谷君
齋藤綠雨君
山田美妙氏を憶ふ
あの頃の川上眉山君
上田　敏君
鷗外大人の思ひ出

漱石氏に關する感想及印象
人としての泡鳴氏
逝ける嚴谷小波君
魯庵大人の一面
坪内逍遙大人を憶ふ
若かりし日の島崎藤村君

昭和十一年七月。協和書院發行。四六判洋裝三〇一頁。

「隨筆明治文學」　柳田泉著

本書は隨筆と銘打つた著述であるが、これは研究と研究餘錄ともいふべきものである。

政治篇

「副島種臣傳」外三篇

文學篇

政治小說の發達と文學改良運動　外十篇

人物篇

櫻痴居士すけつちんぐ　外十七篇

叢話篇

「明治文化」より

物故文人獨談議

明治文化――文藝に關する常識的知識を滿載した著述で、研究者に尠なからぬ寄與をなすものであらう。

昭和十一年八月。春秋社發行。四六判六六六頁。

『明治大正文豪研究』　中村武羅夫編

本書の内容は曾て雜誌「新潮」誌上に掲載して識者研究家の高評を博した、明治大正時代の文豪十二人に關する研究座談會の記事を一卷に收めたものである。明治大正期の作家と作品とを研究する上に、本書は必須の參考文献で有らうことをうたがはない。

樋口一葉研究　　三宅花圃その他

尾崎紅葉研究　　德田秋聲その他

國木田獨歩研究　　島崎藤村その他

二葉亭四迷研究　千葉龜雄その他
夏目漱石研究　野上豐一郎その他
岩野泡鳴研究　正宗白鳥その他
森　鷗外研究　森　於菟その他
有島武郎研究　秋田雨雀その他
芥川龍之介研究　久米正雄その他
德富蘆花研究　沖野岩三郎その他
小山内　薫研究　長田秀雄その他
田山花袋研究　中村星湖その他

昭和十年九月。新潮社發行。四六判三六四頁。

『觀劇五十年』　伊臣　眞著

本書は、明治十八年著者が觀劇を始めてからの五十年間の思ひ出を主として筆を起し、歌舞伎の本流及び新派劇・新劇の三大潮流が、どんな風に流れて今日に至つたかを記錄しやうと試みたものである。卷末に附けた「演劇年表」(自明治十八年一月至昭和十一年十月)のみでも百五十頁

に垂んとする精細なもので、明治演劇の研究には、青々園博士の『明治演劇史』と秋庭太郎の『東都明治演劇史』と共に必讀參考とすべき著述であらう。

『明治の演劇』　秋庭太郎著

昭和十一年十月。新陽社發行。菊判約六六〇頁。

明治二十年代に於ける戲曲論
國劇改革者としての依田學海
明治二十年前後の演劇改良運動
劇文學に於ける透谷と古白
鳥熊芝居資料
坪內逍遙の新樂劇に就て
明治脚本の展望
川上音二郎傳
明治時代に於ける劇場音樂の盛衰
岩野泡鳴の戯曲に就て

連鎖劇考
イブセンの我が劇作家に及ぼせる影響
明治年代に於ける新劇運動の概觀

斯うした内容を有つ本書は、明治演劇史研究の未だ數少ない類書中比較的まとまつたものとして參考するに足ると想ふ。

昭和十二年三月。中西書房發行。四六判一六〇頁。

『明治代表詩人』 河井醉茗著

島崎藤村　蒲原有明
薄田泣菫　山田美妙
宮崎湖處子　中西梅花
北村透谷　横瀨夜雨
伊良子清白　兒玉花外
前田林外　三木天遊

明治文學史上に新體詩人として業績を遺した、此の十二人の人と藝術を語つたもので、其の論

評は極めて穩健、明治の新詩の主流といふやうなものの概略は本書によつて判るとおもふ。

昭和十二年四月。第一書房發行。四六判三七二頁。

『明治大正歌書年表』　小泉苳三編

本書は昭和十年に出したものゝ增補再版である。內容は、明治元年から大正十五年までに出版された歌書　歌集・歌學歌論書・その他短歌に關係ある書〻三千二百十一種を年代順に收錄し、五十音順による書名索引を附けたものである。明治大正時代の和歌研究者には非常に便利な本である。

昭和十二年十月。立命館出版部發行。菊半截判二九〇頁。

『明治文學史』　上・下二卷　本間久雄著

本書は東京堂刊行の「日本文學全史」全十二卷中の第十・十一卷である。吾々は既に、岩城教授の『明治文學史』や高須梅溪の『明治文學史論』其の他の好著によつて、明治時代文學の概要は知ることができるのである。併し今こゝに本書二卷の完成をみて吾々は一層細密に明治文學の全貌を鳥瞰し得るやうになつた。

本書の特色は、資料や挿圖の極めて豐富なこと、批判考察は特に實證的に重きをおいたこと等

であらう。又硯友社——殊に山田美妙の功績を述べることに餘り多くの叙述を費したこと、自然主義時代文學の記述が簡單すぎる事等は稍意に滿たぬとも考へられるのである。本書の著者といはず、概して外國文學專攻者に多い觀察であるが、明治文學を徹頭徹尾外國文學の影響感化による文學であるやうな考へ方には、筆者は聊か異見を有つものである。明治文學の研究には、勿論外國文學の影響といふ事を念頭におかねばなるまい。併したゞそれのみでは、本質の究明は期しがたいであらう。明治文學も亦、我が國文學史の一部として、その史的傳統といふやうなことも考へてみるべきであらう。

とにかく本書は最近に出た著述だけに、類書中最も詳細に明治文學史上の人と作とに就て記述されてゐる　著者の創見といふ程の論説もないが、それだけに又獨斷的叙述も少ないとおもふ。

上卷　昭和十年七月發行。菊判洋裝四七一頁。
下卷　同十二年十月發行。菊判洋裝五六二頁。

明治文學の研究は最近表面的には聊か下火になつた感がないでもない。併し、多數ではなくとも、最も進步的な若い國文學徒によつて精到な本質的の研究が着々進められてゐる事實を知る筆者は、やがて優秀な業績の發表される日を期待するものである。

# 註

（1）初版、明治十五年八月、丸屋善七刊、半紙和裝、活版印刷。
再版、明治十七年十二月、丸屋善七刊、半紙和裝、木板印刷。
『明治文化全集』第十二卷、「文學藝術篇」所收。

（2）初版本、全九冊、明治十八年九月至十九年四月、松月堂發行。
半紙判假綴。
初版（別本）、上・下二冊、明治十九年五月、松月堂發行。
半紙判和裝
「太陽」第十三卷第九號、『明治名著集』中ニ收錄。
『明治文學名著全集』第三篇トシテ複刻、大正十五年、東京堂版。
『逍遙選集』別冊第三冊編入、後『岩波文庫』本トシテ複刻。

（3）初版、全十七冊、明治十八年六月至十九年一月、晩青堂發行。
半紙判假綴
初版（別本）、前・後編、和裝本二冊、明治十九年四月、晩青堂發行。
同　　、　　全一冊、四六判クロース裝洋綴、明治十九年八月、晩青堂發行。
其他異版多數發行サル。

『明治文學名著全集』第一篇、『逍遙選集』別冊第一、『岩波文庫』等ニ複刻又ハ編入。

(4) 第一篇、明治二十年七月、金港堂發行、四六判紙裝。
第二篇、同　二十一年二月、同　同
第三篇、同　二十二年十月、「都の花」第十八號以降四回ニ分載。
『二葉亭全集』(朝日新聞社版)第一卷ニ所收。
『二葉亭四迷全集』(岩波書店版)第一卷ニ所收。

(5) 明治十九年十一月、文學社發行、全一冊、四六判紙裝。

(6) 明治十九年三月、十一堂發行、全一冊、半紙判和裝本。

(7) 明治二十二年五月出版、春陽堂發行、全一冊、四六判紙裝一三一頁。

(8) 明治二十四年二月出版、大阪太華堂發行、四六判紙裝五〇頁。

(9) 明治二十四年九月、春陽堂發行、菊判紙裝一九五頁。

(10) 明治二十五年六月、有斐閣書房發行、菊判紙裝二〇三頁。

(11) 明治二十年二月創刊、三十一年八月、第三七二號限リ廢刊。
徳富蘇峰編輯、民友社發行。

(12) 第一期、明治二十二年一月創刊(南翠・思軒・篁村等執筆)。
第二期、同　二十九年七月再刊(幸田露伴編輯)、昭和二年三月、第三十二年第三號ニテ廢刊。

(13) 明治二十一年十月創刊(山田美妙編輯)、同二十六年六月、第百九號ニテ廢刊。

(14) 明治二十八年八月、「少年文庫」ヲ改題、山縣悌三郎主宰。

同　四十三年八月、第四十卷第十二號ヲ以テ廢刊。

(15) 明治十八年七月創刊（第三十號以降巖本善治編輯）、廢刊年月不詳（明治四十二三年頃マデ續刊）。

(16) 明治二十二年一月ヨリ逐次刊行ノ雜誌型小說叢書。四六判紙裝、吉岡書店發行。

同　二十四年八月、第十七號ニテ終刊。外ニ號外一册發行。

(17) 明治二十七年三月、民友社發行、「國民叢書」第五册、四六半截二八五頁。

(18) 三文舍金平著トシテ、明治二十七年四月、右文社發行、菊判紙裝一八六頁。

(19) 明治二十四年七月、春陽堂發行、菊判紙裝一二四頁。

(20) 明治二十八年九月、春陽堂發行、菊判紙裝二〇二頁。

(21) 「國民文庫」第十編

明治二十七年十月、博文館發行、四六判紙裝二一四頁。

(22) 明治二十九年九月、春陽堂發行、菊判洋裝九五二頁。

(23) 第一期、明治二十四年十月創刊（坪內逍遙編輯）。

第二期、明治三十九年一月再刊（島村抱月編輯）、昭和二年十二月、第二百六十三號ニテ休刊。

(24) 文學評論雜誌

明治二十二年十月創刊、森鷗外主宰、新聲社發行。

同　二十七年八月、第五十九號ヲ以テ廢刊。

(25) 明治二十九年十二月、春陽堂發行、菊判紙裝九九六頁。

(26) 明治二十八年一月創刊、博文館發行、昭和三年三月廢刊。

(27) 明治三十年六月發行、「太陽」第三卷第十二號、臨時增刊。

(28)

(29) 明治三十一年四月發行、「太陽」第四卷第九號、臨時增刊。

(30) 明治三十二年一月、博文館發行、菊半截判五〇二頁。

(31) 明治三十二年九月、博文館發行、菊半截判五七六頁。

(32) 明治三十二年十二月、富山房發行、菊判紙裝二五五頁。

(33) 明治三十三年七月、太平洋文學社發行、四六判紙裝二〇八頁。

(34) 同　三十三年四月、春陽堂發行、菊判洋裝三一六頁。

(35) 同　三十四年十月、新聲社發行、四六判紙裝二一三頁。

(36) 同　三十四年三月、新聲社發行、四六判紙裝一二七頁。

(37) 同　三十四年六月、博文館發行、菊半截判四四三頁。

(38) 同　三十四年十月、大阪・鍾美堂發行、四六判紙裝二七八頁。

(39) 同　三十五年四月、俳書堂發行、菊半截判二六九頁。

(40) 同　三十五年十一月、白鳩社發行、三五判一四六頁。

(41) 同　三十八年八月、文明堂發行、菊半截判三八八頁。

(42) 同　三十九年九月、春陽堂發行、菊判洋裝四三四頁。

(43) 同　三十九年八月、開發社發行、四六判紙裝二六四頁。

(44) 初版、同　三十九年十二月、育英舍發行、菊判洋裝三七七頁。

增補版、同　四十二年六月、育英舍發行、菊判洋裝、本文ノミ四四八頁。

增補改訂版、昭和二年十月修文館發行、菊判洋裝五〇一頁。

(45) 明治三十九年三月、嵩山房發行、四六判洋裝三三八頁。

(46) 同　四十一年一月發行、「ホト、ギス」第十一卷第四號、附錄欄所載。

(47) 同　四十一年七月、博文館發行、四六判紙裝四一六頁。

(48) 明治四十一年九月、春陽堂發行、四六判紙裝三四〇頁。

(49) 同　四十一年十月、有倫堂發行、四六判紙裝四〇五頁。

(50) 同　三十九年六月、佐久良書房發行、菊判洋裝二〇二頁。

(51) 同　四十年九月、俳書堂發行、菊判紙裝一八九頁。

(52) 同　四十年九月創刊（小山內薰編輯）、同四十一年三月第六號ヲ以テ終刊……所謂第一次ノ「新思潮」ナリ。

(53) 同　四十二年二月、博文館發行、「太陽」第十五卷第三號增刊。

明治史第七編、四六倍判紙裝二五四頁。

(54) 明治四十二年三月、博文館發行、四六判紙裝三五〇頁。

(55) 同　四十二年六月、早稻田大學出版部發行、菊判洋裝七二六頁。

(56) 同　四十二年九月、昭文堂發行、四六判紙裝三六四頁。

(57) 同　四十三年十一月、岐阜教育新聞發行所發行、菊判紙裝一九四頁。

(58) 同　四十二年十二月、隆文館發行、四六倍版洋裝。

(59) 同　四十四年十月、博文館發行。

(60) 同　四十四年十二月、博文館發行、四六判洋裝四三七頁。

(61) 同　四十五年二月、春陽堂發行、袖珍判二二二頁。

(62) 同　四十二年一月創刊（平野萬里編輯、文藝雜誌）、廢刊大正二年十二月。

(63) 同　四十三年五月創刊（永井荷風主幹、三田文學會發行）。

大正十四年三月終刊、通號百六十三號。

(64) 同　四十三年四月創刊（武者小路實篤主筆、洛陽堂發行）。

大正十二年九月終刊。

(65) 大正元年十月、博文館發行、「文章世界」第七卷第十四號。

(66) 同　元年九月、富山房發行、「新日本」第二卷第九號。

(67) 同　元年九月、新潮社發行、四六判紙裝四二六頁。

(68) 大正二年七月、春陽堂發行、菊判洋裝六七〇頁。

(69) 同　元年―二年頃發行、日本文章學院「文章講義錄」ノ内、菊判紙裝一一六頁。

(70) 同　元年十一月發行、「新潮」第十七卷第五號所載。

(71) 同　三年五月、早稻田文學社發行、四六判洋裝三一二頁。

(72) 同　四年八月、早稻田文學社發行、四六判洋裝二二二頁。

(73) 同　四年五月、日月社發行、四六判洋裝三九七頁。

(74) 同　五年三月、博文館發行、四六判洋裝五三六頁。

(75) 同　六年六月、博文館發行、四六判洋裝五一四頁。

(76) 同　六年六月、新潮社發行、四六判紙裝一三一頁。
(77) 同　七年六月、玄文社發行、四六判洋裝四九四頁。
(78) 同　十年五月、日本評論社發行、四六判洋裝五〇八頁。
(79) 同　十年十月、大鐙閣發行、「解放」特大號、菊判四六三頁。
(80) 同　十一年十一月、星文館書店發行、四六判洋裝六三四頁。
(81) 同　十二年二月、近代文明社發行、四六判洋裝三三一頁。
(82) 同　十三年一月、新潮社發行、四六判洋裝五一四頁。
(83) 同　十三年發行、『文藝講座』本「日本文學史講座」ノ一部トシテ六回ニ亘リ連載、通頁凡ソ一〇〇頁。
(84) 同　十三年七月、立川文明堂發行、四六判洋裝五四八頁。
(85) 同　十三年十二月、東洋圖書株式會社發行、四六判洋裝二八四頁。
(86) 同　十四年四月、松陽堂發行、四六判紙裝八六頁。
(87) 同　十四年五月、新詩壇社發行、四六判洋裝本文二八二頁。
(88) 大正十四年六月、教文社發行、四六判洋裝六七四頁。
(89) 同　十四年六月、成象堂發行、四六判洋裝二九五頁。
(90) 同　十五年四月、春陽堂發行、「新小説」第三十一年第四號。
(91) 同　十五年六月及十一月、短歌雜誌「青樹」第二卷第六及十一號。
(92) 同　十五年十二月、改造社發行、「改造」第八卷第十二號所載。
(93) 同　十五年四月、新潮社發行、新四六判洋裝三四八頁。

(94) 同　十五年十一月ヨリ續刊、全一九冊、新潮社發行。

(95) 同　十五年二月創刊、昭和五年三月、第四卷第六號ニテ終刊。

(96) 全七冊

大正十四年三月發行、第二二九號「混沌期の研究」。

同　十四年六月發行、第二三二號「胎生期の研究」。

同　十四年七月發行、第二三三號「胎生期の研究」續篇。

同　十五年一月發行、第二四〇號「興隆期の研究」。

同　十五年四月發行、第二四三號「混沌期・胎生期・興隆期」補遺。

昭和二年四月發行、第二五五號「混沌開明期の研究」。

同　二年六月發行、第二五七號「自然主義前後研究」。

(97) 昭和二年十月、改造社發行、四六判洋裝二一四頁。

(98) 同　二年五月、春陽堂發行、四六判洋裝四八一頁。

(99) 同　二年十月、種文館發行、四六判洋裝四八七頁。

(100) 同　二年十一月、從吾所好社發行、四六判横綴本一五六頁。

## 後　記

此の明治文學研究書誌は謂はゞ私個人の覺え書にすぎない。これは昨年以來、財團法人服部報公會の援助によつて着手中の『明治文學研究參考書内容總覽』編纂の業餘に成つたものである。

明治大正文學の研究上に參　とすべき文獻の紹介は時々見うけるが、最もよくとまつたものとしては、昭和十二年六月發行の日本大學國文學會の編輯にかゝる「國學」第六輯所載、湯地孝氏稿「明治大正文學研究書目類別」を擧げてよろしからうと想ふ。（一三・四・二〇稿）

昭和十三年七月編

# 明治文學書年表稿

——明治文學史の基本資料たるべき主要文獻——

## 汎例

一、單行本ハ總テ其ノ初版ニ據リ、新聞雜誌類ハ創刊第一號ニ據リ之ヲ記載セリ

一、全集、叢書等ニシテ續刊中ノモノハ其ノ第一回ノ配本ニ據ル

## 明治元年（戊辰）西暦一八六八年

| 發行月 | 著（編）者 | 分類 | 書名 | 形狀 | 發行者 |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 二 | 柳川春三 | 新聞 | 中外新聞 | | 開物社 |
| | （月約十回發行、六月四十五號終刊） | | | | |
| 四 | 福地源一郎 | 新聞 | 江湖新聞 | | 編者 |
| | （隨時發行、五月第二十二號ニテ禁止サル） | | | | |
| 四 | 岸田吟香 | 新聞 | 横濱新報もしほ草 | | 横濱ヴエンリート |
| | （三年三月、四十二篇ニテ終刊） | | | | |

## 明治二年（己巳）西暦一八六九年

| 發行月 | 著（編）者 | 分類 | 書名 | 形狀 | 發行者 |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 四 | 加藤弘藏（弘之） | 啓蒙雜著 | 交易問答 二冊 | 四六判和裝 | 谷山樓藏版 |
| 八 | 福澤諭吉 | 同 | 頭書大全世界國盡 六冊 | 半紙判和裝 | 慶應義塾 |

十　河津孫四郎譯　史書　西洋易知錄　八册　同　知新館

## 明治三年（庚午）西暦一八七〇年

九　假名垣魯文　戯著　萬國航海 西洋道中膝栗毛　四六判和裝　萬笈閣
（全十五編三十册、第十二編以下ハ總生寛ノ作、芳幾・曉齋畫）

## 明治四年（辛未）西暦一八七一年

四　假名垣魯文　戯著　牛店雜談 安愚樂鍋　三編五册　四六判和裝　誠之堂
六　（パーレー萬國史）學靜學人譯　史書　西洋夜話　五册
七　（スマイルス自助論）中村正直譯　飜譯雜著　西國立志編　十三編十一册　半紙判和裝　靜岡同人藏版
不詳　太田垣蓮月　歌文集　海人の苅藻　和裝　辻本仁兵衛

## 明治五年（壬申）西曆一八七二年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 二 | 條野傳平等 | 新聞 | 東京日々新聞 | | 日報社 |
| 六 | 小西義敬等 | 同 | 郵便報知新聞（現在ノ報知新聞） | | |
| 九 | 福澤諭吉 | 小說 | 寓言かたわ娘 | 和裝半紙判 | 慶應義塾 |
| 不詳 | 齋藤了庵 | 翻譯 | 魯敏孫全傳 二冊 | 和裝小本 | 香芸堂 |
| 同 | 假名垣魯文 | 戲著 | 倭國字西洋文庫 八冊 | | 紅木堂 |
| 同 | 同 | 同 | 胡瓜遣 二冊 | | 萬笈閣 |

## 明治六年（癸酉）西曆一八七三年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | | 新聞 | 東京假名書新聞 | | 東京假名書新聞社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 二 | 福澤諭吉 | 幼童啓蒙書 | 小學暗誦十詞 一册 | | 須原屋等 |
| 三 | 黒川眞賴 | 歌書 | 横文字百人一首 | 四六判和裝 | 文淵堂 |
| 五 | 渡邊温譯 | 飜譯 | 通俗伊蘇普物語 六卷 | 半紙判和裝 | 著者藏版 |
| 十一 | 福澤諭吉 | 啓蒙書 | 第一文字之教 | 同 | 福澤氏版 |
| 一 | 佐橋富三郎 | 飜案脚本 | 其紛色陶器交易 三卷 | 半紙判和裝 | 京都近藤發行 |
| 二 | 同 | 同 | 鞋補童教學 三卷 | 同 | 同 |

**明治七年**（甲戌）西暦一八七四年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 二 | 成島柳北 | 戯著 | 柳橋新誌 二篇 | 半紙判和裝 | 奎章閣 |
| 三 | 森有禮等 | 學術雜誌 | 明六雜誌 | 小型和製 | 明六社 |
| 四 | 服部撫松 | | 東京新繁昌記 六卷 | 半紙和裝 | 奎章閣 |

（本年四月初編發行、明治九年四月六編發行完結）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 九 | 成島柳北等 | 新聞 | 朝野新聞 | | | 公文社 |
| 十一 | 鈴木田正雄<br>本野盛亨 | 同 | 讀賣新聞 | | | 日就社 |

## 明治八年（乙亥）西暦一八七五年

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 四 | 柳谷藤吉 | 新聞 | 平假名繪入新聞 | | | 繪入新聞社 |
| | （明治九年三月第二百七號限「東京繪入新聞」ト改題） | | | | | |
| 四 | 飯島半十郎編 | 學術雜誌 | 洋々社談 | 全九十五號 | | 朝野新聞社 |
| 四 | 福澤諭吉 | 論說 | 文明論之概略 | 六卷 | 半紙和裝 | 著者藏版 |
| 四 | 松村春輔 | 小說 | 春雪奇談近世櫻田紀聞 | 七卷 | 同 | 武田文永堂 |
| 五 | 永峰秀樹譯 | 飜譯 | 開卷驚奇暴夜物語 | 二册 | 和裝小本 | 奎章閣 |
| 十一 | 假名垣魯文 | 新聞 | 假名讀新聞 | | | 横濱毎日新聞會社 |

**明治九年**（丙子）西暦一八七六年

一　橘東世子　歌集　明治歌集　七冊　半紙和裝　橘守道

四　村上俊吉譯　飜譯　天路歷程（神戸ニテ發行ノ「七一雜報」ニ掲載）

四　服部誠一　戲文雜誌　昇平餘聞東京新誌　九春社

七　中村敬宇　學術雜誌　同人社文學雜誌　第九十二號ニテ終刊　同人社

九　箕浦勝人　家庭教育雜誌　家庭叢談　第六十六號終刊　慶應義塾

**明治十年**（丁丑）西暦一八七七年

一　成島柳北　文藝雜誌　花月新誌　第一五五號ニテ終刊　花月社

三　陽箕二　作文雜誌　穎才新誌　製紙分社

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 三 | 野村文夫 | 滑稽記事 | 團々珍聞 | | 團々社 |
| 三 | 松村春輔 | 小説 | 開明小説 春雨文庫 初篇二篇四册 | 和装 | 文永堂 |
| 六 | 山田謙益 | 歌集 | 明治現存 三十六歌撰 | 半紙和装 | 金花堂 |
| 八 | 橘東世子編 | 歌集 | 明治歌集 第二編三册 | 半紙和本 | 金花堂 |
| 八 | 東京大學編 | 學術雜誌 | ・學藝志林（明治十七年二月第七十九册終刊） | | 東京大學 |
| 不詳 | 聖書翻譯委員譯 | | 詩篇（舊譯聖書ノ部分譯） | 菊判假綴 | 米國聖書會社 |

## 明治十一年（戊寅）西暦一八七八年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 久保田彦作 | 小説 | 鳥追阿松海上新話 九册 | 草紙本及 | 錦榮堂 |
| 一 | 福澤諭吉 | 文集 | 福澤文集 二册 | 和装小本 | 松口榮造藏版 |
| 二 | 西周譯 | 翻譯 | 奚般氏 心理學 上册 | 四六判洋装 | 文部省 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 六 | 岡本起泉 | 小説 | 夜嵐阿衣花の仇夢 | 十五册 | 草双紙本 | 金松堂 |
| 六 | ジュール・ヴェルヌ作 川島忠之助譯 | 翻譯小説 | 新説八十日間世界一週 | 前・後篇二册 | ボール表紙 | 譯者及慶應出版社 |
| 七 | 爲永春江等 | 小説雜誌 | 芳譚雜誌 | | | 愛善社 |
| 十 | リットン作 丹羽純一郎譯 | 翻譯小説 | 花柳春話 | 五册 | ボール表紙 | 坂上半七 |
| 十一 | 大久保忠保編 | 歌集 | 開化新題歌集 | 三册 | 和裝小本 | 編者出版 |

## 明治十二年（己卯）西暦一八七九年

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 津田貞主宰（後、村山龍平） | 新聞 | 朝日新聞（廿二年一月「大阪朝日新聞」ト改題） | | | |
| 二 | 久保田彥作 | 歌舞伎雜誌 | 歌舞伎新報 | | | 歌舞伎新報社 |
| 二 | 假名垣魯文 | 實傳小説 | 高橋阿傳夜叉譚 | 廿四册 | 草双紙本 | 金松堂 |
| 四 | 橘東世子編 | 歌集 | 明治歌集 | 第三輯三册 | 和裝小本 | 金花堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 五 | 菊地大麓譯 | 文學論 | 修辭及華文（チエンバー「百科全書」第二十冊） | 四六判紙裝本 | 文部省 |
| 五 | フエヌロン作 宮島春松譯 | 翻譯小說 | 歐洲小說 哲烈禍福譚 八冊 | ボール表紙 | 太盛堂 |
| 六 | リットン作 丹羽純一郎譯 | 同 | 歐洲奇話 寄想春史 三冊 | 同 | 山中市兵衛 |
| 十 | 岡本起泉 | 小說 | 島田一郎梅雨日記 十五冊 | 草双紙本 | 島鮮堂 |
| 十一 | 篠田仙果編 | 歌集 | 明治英名百詠撰 | 和裝小本 | 村上眞助 |

## 明治十三年（庚辰）西曆一八八〇年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 三 | 東京學士會院 | 學術雜誌 | 東京學士會院雜誌 | 四六判假綴 | 編者發行 |
| 四 | スコット原作 橘顯三（坪內雄藏）譯 | 翻譯小說 | 春風情話 | ボール表紙本 | 中島精一 |
| 五 | 朝日奈泰吉編 | 歌集 | 類題明治和歌集 二冊 | 和裝小本 | 萬笈閣 |
| 六 | 古河默阿彌 | 脚本 | 霜夜鐘十字辻筮 三冊 | 半紙假綴 | 歌舞伎新報社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 六 | 戸田欽堂 | 政治小説 | 民權演義 情海波瀾 一册 | | 聚星社 |
| 七 | 岡本起泉 | 小説 | 澤村田之助曙草紙 五編十五册 | 草双紙本 | 島鮮堂 |
| 七 | 依田學海 | 劇評 | 新評戯曲十種 二册 | 和裝中本 | 丸屋善七 |
| 七 | 佐々木弘綱編 | 歌集 | 明治開化和歌集 二册 | 同 | 山中市兵衛 |
| 九 | 酒井爲治編 | 小説雜誌 | 繪入人情雜誌 第一八二號マデ刊行 | | 東陽社 |
| 十 | 小崎弘道 横井時雄 等編 | 宗教雜誌 | 六合雜誌 | | 警醒社 |

## 明治十四年（辛巳）西暦一八八一年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 三 | 西園寺公望等 | 新聞 | 東洋自由新聞 第三十四號ニテ終刊 | | 東洋自由新聞社 |
| 六 | チューマ作 松岡龜雄譯 | 翻譯小説 | 佛國情話 五九節操史 三册 | 唐本型 | 山梨温故書屋 |
| 十 | 上田秀成等編 | 學術雜誌 | 東洋學藝雜誌 昭和五年六月、第五六四號終刊 | | 東洋學藝社 |

十一　文部省音樂取調掛編　小學唱歌集 初編 一冊　和装 横本　文部省

## 明治十五年（壬午）西暦一八八二年

一　泉澤政知編　文藝雜誌　群芳新誌 第二十七號限リ廢刊　榮久社

二　小出粲　歌集　あさきぬ　吉川半七

二　サー・トーマス・モール著 井上勤譯　翻譯　良政府談（「ユートピア」ノ譯）　屯屋思誠堂

三　福澤諭吉等　新聞　時事新報　慶應義塾出版社

四　外山正一、山譯　譯詩　キングスレー作悲歌 四月十日發行「東洋學藝雜誌」第七號所載、新詩形初メノモノ

五　外山、山　新體詩　拔刀隊「東洋學藝雜誌」第八號所載

六　矢田部尚今　同　鎌倉大佛に詣でゝ感あり「東洋學藝雜誌」第九號

六　原胤昭譯　譯歌　讃美歌　和装 横本　はら書屋

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 六 | ボッカス作 大久保勘三郎譯 | 翻譯小說 | 歐洲情譜 群芳綺話 初篇 | ボール表紙 | 博聞社 |
| 六 | 坪井正五郎譯 | 譯詩 | 西詩和譯（最モ初期ニ屬スル西詩ノ譯）「東洋學藝雜誌」第九號所載 | | |
| 八 | 外山正一（丶山） 矢田部良吉（尙今） 井上哲次郎（巽軒） 同撰 | 新體詩（詞華）集 | 新體詩抄 初篇 | 半紙和裝 | 丸屋善七 |
| 九 | ポール・ウエルニエ作 川島忠之助譯 | 翻譯小說 | 虛無黨退治奇談 | ボール表紙 | 自家版 |
| 十 | ヂューマ作 宮崎夢柳譯 | 同 | 自由之凱歌 | 同 | 繪入自由新聞社 |
| 十 | フェノロサ演 大森惟中筆記 | 藝術論 | 美學眞說 | 四六判假綴 | 龍池會 |
| 十・十二 | 竹內節編 | 詞華集 | 新體詩歌（第一・第二集） | 同 | 甲府徽古堂 |
| 十二 | ヂューマ作 櫻田百衞譯 | 翻譯小說 | 西洋血潮小暴風 | 四六判ボール表紙 | 繪入自由新聞社 |
| 十一 | 外山正一紹介 | 譯詩 | 勝海舟譯蘭詩和譯 長歌「思ひやつれし君」（「東洋學藝雜誌」第十四號所載） | | |
| 十一 | 井上哲次郎抄譯 大槻文彥校訂 | 翻譯學說 | 倍因氏 心理新說 四册 | 和裝中本 | 同盟社 |
| 九 | 久野初太郎編 | 新聞 | 繪入自由新聞 | | 繪入自由新聞社 |

## 明治十六年（癸未）西暦一八八三年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 三 | 矢野文雄（龍溪） | 飜案 | 齊武名士 經國美談 二册 | ボール表紙 | 報知新聞社 |
| | （後篇八十七年二月發行ナリ） | | | | |
| 三 | 文部省音樂取調掛編 | 唱・歌 | 小學唱歌集 第二編 | 和裝横本 | 文部省 |
| 四・六・九 | 竹內節編 | 詞華集 | 新體詩歌 第二・四・五集 三册 | 四六判和裝 | 甲府 徽古堂 |
| 六 | プーシキン作 高須治助譯 | 飜譯小說 | 露國奇聞 花心蝶思錄 | 四六判ボール表紙 | 書肆法木 |
| 十 | シェークスピヤ作 井上勤譯 | 飜譯脚本 | 西洋珍談 人肉質入裁判 | 同 | 今古堂 |
| 十 | ヅフォー作 井上勤譯 | 飜譯小說 | 絕世奇談 魯敏孫漂流記 | 洋裝中本 | 博聞社 |
| 十 | 平井元滿編 | 歌集 | 東京大家 十四家集 | 和裝小本 | 若菜園 |
| 一 | 中江篤介（兆民）譯 | 飜譯 | 維氏美學 上・下二册 | 洋裝小本 | 文部省編輯局 |

一　前島和橋主宰　新聞　繪入朝野新聞　繪入朝野新聞社

三　正木謙造編　同　開花新聞　三益社

四　秋山德三郎編　戲作文藝　吾妻新誌　二十年、第一四〇號終刊　九春社

## 明治十七年（甲申　西曆一八八四年）

一　スコット作　服部撫松編　飜譯物語　春窓綺話　二册　四六判ボール表紙　坂上半七

（本書ハ一名「春江奇緣」實ノ譯者ハ坪内雄藏・高田早苗・天野爲之ノ三人ナリ）

三　ビーコンスフイルド作　關直彦譯　飜譯小說　政黨餘談　春鶯囀　四册　四六判洋裝　坂上半七

五　シエークスピヤ作　坪内雄藏譯　飜譯史劇　該撒奇談　自由太刀餘波鋭鋒　同　東洋館

五至八　竹内節編　新體、詩詞華集　新體詩歌　第一集至第五集　五册　四六判和裝　甲府内藤傳右衛門

六　菊亭香水　家庭小說　慘風悲雨　世路日記　四六判ボール表紙　東京稗史出版社

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 七 | 三遊亭圓朝 | 講談 | 怪談牡丹燈籠 十三册 | 和紙假綴 | 同 |
| 七 | ゲーテ作 井上勤譯 | 飜譯物語 | 獨乙奇書狐の裁判 | 四六判洋裝 | 繪入自由出版社 |
| 九 | 藤田茂吉 | 文化史 | 文明東漸史 | 同 | 報知社 |
| 十一 | 海上胤平編 | 歌論 | 東京大家十四家集評論 二册 | 和本小裝 | 晩成堂 |
| 十二 | 外山正一等 | 詞華集 | 新體詩鈔 初篇 | 半紙判和裝 | 丸屋善七 |

## 明治十八年（乙酉）西暦一八八五年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 二 | リットン作 坪内逍遙譯 | 飜譯小說 | 慨世士傳 初篇 | 四六判洋裝 | 晩青堂 |
| 二 | 古河默阿彌 | 脚本 | 水天宮利生深川 二册 | 草双紙型 | 松榮堂 |
| 二 | 高田早苗等編 | 學術雜誌 | 中央學術雜誌 | | 團々社支店 |

（東京專門學校法理文三學科ヨリ成ル同攻會ノ機關誌デ權威アル文學評論等ガ揭載サレタ）

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 五 | 尾崎紅葉 山田美妙 編 | 文藝雜誌 | 我樂多文庫 | | 硯友社 |
| | | | （明治文學界ニ於ケル最初ノ新文藝雜誌。明治十九年十一月發行第九號ヨリ活版刷、廿一年五月改卷第一號發行、廿二年二月第十七號ヨリ「文庫」ト改題） | | |
| 六至十九年一月 | 坪内逍遙 | 小說 | 一讀三歎當世書生氣質 全十七册 | 半紙假綴 | 晩青堂 |
| 六 | 德富猪一郎 | 評論 | 十九世紀日本之青年及其敎育 | | 自家版 |
| 七 | 近藤賢三 後、巖本善治 | 婦人雜誌 | 女學雜誌（透谷・天知・不知庵等執筆 明治四十二・三年マデ續刊） | | 萬春堂 |
| 八 | 有賀長雄 | 文學論 | 「文學叢書」第一册 文學論 | 四六判紙裝 | 丸善商社 |
| 九 | 田口卯吉 | 文化史 | 日本開化の性質 | 同 | 經濟雜誌社 |
| 自九至十九年四月 | 坪内逍遙 | 小說論 | 小說神髓 全九册 | 半紙假綴 | 松月堂 |
| 十 | 湯淺半月 | 詩集 | 十二の石塚 | 四六判假綴 | 著者自版 |
| 自十至十九年四月 | 小川平吉 首藤文雄 編 | 新體詩雜誌 | 新體詩林 第一至第六號 全六册（新體詩專門雜誌中ノ初期ノモノ） | | 大阪新體詩林社 |
| 十 | 宮崎夢柳 纂譯 | 飜案小說 | 鬼啾々 | ボール表紙 | 旭活版所 |

| 月 | 著者 | 種別 | 書名 | 體裁 | 發行 |
|---|---|---|---|---|---|
| 十 | 柴東海散士 | 政治小説 | 佳人之奇遇 全十六冊 | 半紙和装 | 著者自版 |
| | （明治三十年十月第十六卷發行ニテ完結） | | | | |
| 十一 | 藤田茂吉 尾崎庸夫 同譯 | 飜譯小説 | 諷世嘲俗繋思談 上・中篇二冊 | 四六判洋装 | 報知社 |
| 十二 | 鈴木弘恭 | 歌論 | 東京大家十四家集評論辨 | 和装小本 | 吉川半七 |
| 自十二至十九年九月 | 坪内逍遙 | 小説 | 新磨妹と背かゞみ 全十三冊 | 半紙假綴 | 會心書屋 |

## 明治十九年（丙戌）西暦一八八六年

| 月 | 著者 | 種別 | 書名 | 體裁 | 發行 |
|---|---|---|---|---|---|
| 三 | 矢野龍溪 | 文章論 | 日本文體文字新論 | 四六判洋装 | 報知社 |
| 三 | 物集高見 | 同 | 言文一致 | 半紙判和装 | 平尾氏藏版 |
| 四 | 坪内逍遙 | 小説 | 一讀三歎當世書生氣質 合本二冊 | 和装 | 晩青堂 |
| 五 | 同 | 小説論 | 小説神髓 合本二冊 | 和装 | 松月堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 四至九 | 同 | 戲著 | 内地雜居 未來之夢 全十冊 | 半紙假綴 | 晩青堂 |
| 六 | 同 | 小説 | 諷誡 京わらんべ | 四六判洋装 | 大阪 日野書店 |
| 七 | 山田美妙 | 詩集 | 新體詞選 | 菊半截紙装 | 香雲書屋 |
| 七 | 大和田建樹著 國府寺新作譯 | 同 | 書生唱歌 | 四六判紙装 | (岸田吉之輔纂輯) |
| 八 | 坪内逍遥 | 小説 | 一讀三歎 當世書生氣質 一冊 | 四六判洋装 | 晩青堂 |
| 八至十一 | 末廣鐵腸 | 政治小説 | 雪中梅 上・下篇 二冊 | 同 | 博文堂 |
| 八 | 落花居士演 香湖散史纂述 | 新體詩作法及詩集 | 新體詩學必携 新體詩格 愛國美談 合本一冊 | 四六判假綴 | 新體詩學研究會藏版 春陽堂發賣 |
| 九 | 竹内隆信編 | 詞華集 | 纂評新體詩選 | 四六判ボール表紙 | 春陽堂 |
| 九 | 外山正一 | 演劇論 | 演劇改良論私考 | 四六判紙装 | 丸善書店 |
| 十 | 中村善平 | 同 | 劇場改良法 | 同 | 大阪出版會社 |
| 十 | 山田美妙 | 詩集 | 新體詞華 少年姿 | 四六判ボール表紙 | 香雲書屋 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十一 | 末松謙澄 | 演劇論 | 演劇改良意見 | 四六判紙装 | 文學社 |
| 十一 | 同 | 文章論 | 日本文章論 | 同 | 同 |
| 十一 | 守川丑之助 | 演劇論 | 演劇改良論駁議 | 四六判紙装 | 今古堂 |
| 十 | 須藤南翠 | 政治小説 | 雨窓漫筆 緑簑談 | 四六判ボール表紙 | 駸々堂 |
| 十 | ボッカス作 佐野尚譯 | 飜譯小説 | ボッカス翁十日物語 想夫戀 | 四六判和装 | 丸善書店 |
| 十二 | 徳富蘇峰 | 評論 | 將來之日本 | 四六判ボール表紙 | 經濟雜誌社 |
| 十二 | スコット作 牛山鶴堂譯 | 飜譯小説 | 梅蕾餘薫 二册 | 同 | 春陽堂 |
| 十二 | 神田孝平譯 | 同 | 和蘭政美録 楊牙兒奇談 | 四六判紙装 | 廣文堂 |
| 十二 | 魚住長胤等編 | 學術雜誌 | 東洋學會雜誌（廿一年十一月第四編第十號終刊） | | 東洋學會 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 矢崎嵯峨の屋 | 小説 | 浮世人情 守錢奴の肚 | 四六判ボール表紙 | 大倉孫兵衛 |
| 一 | 依田學海 | 脚本 | 吉野拾遺名歌譽 二册 | 半判和裝 | 鳳文館 |
| 一 | 高橋義雄譯 | 飜譯脚本 | 梨園の曙 | 四六判洋裝 | 金港堂 |
| 二 | 德富蘇峰主筆 | 評論雜誌 | 國民之友（廿一年八月發刊 第三七二號終刊） | | 民友社 |
| 三 | 德富蘇峰 | 評論集 | 新日本之青年 | 四六判紙裝 | 集成社 |
| 四 | 碌々庵居士編（佐藤雄治） | 新體詩詞華集 | 偶評 明治新體詩歌選 | 三五判ボール表紙 | 大阪津田一松 |
| 自四至廿一ノ三 | 末廣鐵膓 | 政治小説 | 花間鶯 上・中・下三册 | 同 | 金港堂 |
| 自五至廿一ノ五 | 西村天囚 | 小説 | 屑屋の籠 前・後篇二册 | 四六判ボール表紙 | 博文堂 |
| 五 | 須藤南翠 | 政治小説 | 一顰一笑 新粧之佳人 | 四六判ボール表紙 | 正文堂 |
| 五 | 小宮山天香譯 | 飜譯史談 | 慨世史談 斷蓬奇緣 全四册 | 和裝 | 鳳文館 |
| 六 | 二葉亭四迷 | 小説 | 新編 浮雲 第一篇 | 四六判紙裝 | 金港堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 七 | 小中村義象・萩野由之 | 歌論 | 國學和歌改良論 | 四六判紙裝 | 吉川半七 |
| 七 | 山田美妙編輯 | 女學雜誌 | 以良都女（第八十四號マデ刊） | | 成美社 |
| 八 | 反省會編 | 禁酒雜誌 | 反省會雜誌 | | 京都 反省會 |
| | （後「反省雜誌」ト改題、更ニ現在ノ「中央公論」ト改題） | | | | |
| 八 | 月評社編 | 書籍評論雜誌 | 出版月評（第四十號マデ刊） | | 月評社 |
| 十 | 植木枝盛 | 詩集 | 自由詞林 | 四六半截紙裝 | 高知 嵜 青白眼 |
| 十一 | 岩崎熊吉編 | 同 | 新撰新體詩集 上卷 | 小型紙本裝 | 大塚熊吉 |
| 十二 | 物集高世 | 歌論 | 歌學新論 | 半紙和裝 | 松成堂 |
| 十二 | 大和田建樹編 | 新體詞華集 | 新調唱歌 詩人の春 | 四六半截紙裝 | 文盛堂 |
| 十二 | 矢崎嵯峨の屋 | 小說 | ひとよぎり | 四六判紙裝 | 金港堂 |
| 十二 | 菊池元起編 | 飜譯文藝雜誌 | 歐米大家 文學之花（第四號ニテ終刊） | | 指園社 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 十二 | 同志社文學會編 | 同志社機關誌 | 文學會雜誌 | 京都同志社文學會 |

## 明治二十一年　戊子　西暦一八八八年

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 二 | 武津八千穂 | 歌論 | 國學和歌改良不可論 | 弘道會 |
| 三以降 | 井上巽軒原作（漢詩）落合直文譯 | 新體詩 | 孝女白菊の歌 「東洋學會雜誌」左記各號ニ分載、四回ニテ完 第二編第四號第九號、第三編第二號、第五號 | |
| 自二至廿三ノ九 | 末松謙澄 二宮熊次郎共著 | 飜譯小說 | 谷間の姫百合 全四冊 四六判紙裝 | 金港堂 |
| 三 | 沙翁原作 和田萬吉譯 | 飜譯脚本 | みなれざを 四六判紙裝 | 聽雨堂 |
| 三 | 石橋忍月 | 小說 | 一喜一憂捨小舟 同 | 大倉保五郎 |
| 四 | 矢崎嵯峨の屋 | 自傳小說 | 無味氣 同 | 大阪駸々堂 |
| 四 | 志賀重昂 三宅雄二郎等編 | 評論雜誌 | 日本人（後「日本及日本人」ト改題） | 政教社 |
| 五 | 硯友社編 | 文藝雜誌 | 改卷 我樂多文庫 第一號發行 | 硯友社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 五 | 沙翁原作 渡邊治譯 | 飜譯脚本 | 鏡花水月 | 四六判紙裝 | 集成社 |
| 五 | 森田思軒譯 | 飜譯小說 | 瞽使者 二册 | 同 | 報知社 |
| 自五至廿五ノ四 | 大和田建樹 奧好義 | 唱歌 | 明治唱歌 全六册 | 四六判紙裝 | 中央堂 |
| 六 | 田邊龍子（後ノ三宅花圃） | 小說 | 藪の鶯 | 同 | 金港堂 |
| 七 | 「めざまし新聞」改題 | 新聞 | 東京朝日新聞 | | 東京朝日新聞社 |
| 七 | ツルゲーネフ原作 二葉亭四迷譯 | 譯文 | あひゞき（「國民之友」第廿五號臨時附錄所載） | | |
| 八 | 山田美妙 | 短篇集 | 夏木立 第一編 | 四六判紙裝 | 金港堂 |
| 十 | 山田美妙等編 | 文藝雜誌 | 都の花 第一〇九號ニテ終刊 | | 同 |
| 十 | 角藤定憲 | 小說 | 剛膽の書生 | | 大華堂 |
| 十一ヨリ續刊 | 福地櫻痴 塚原澁柿 譯 | 飜譯小說 | 昆太利物語 全三册 | 四六判紙裝 | 藏王堂 |
| 十一 | 山縣悌三郎主宰 | 少年雜誌 | 少年園 | | 少年園 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十一 | 饗庭篁村主幹 | 小説雜誌 | 小説萃錦 | | 春陽堂 |
| 十一 | 福地櫻痴 | 戯著 | もしや草紙 | 四六判洋装 | 文海堂 |
| 十二 | | 評論文藝雜誌 | 明治文庫 | | 明治文庫 |
| 十二 | 廣津柳浪等編 | 小説詩歌作雜誌 | やまと錦（第十三マテ刊） | | 博文館 |
| 十二 | 大和田建樹 | 詩歌集 | いざり火 | 四六判紙装 | 中央堂 |
| 十二 | 山田美妙 | 小説 | ぬれごろも 初編 | 同 | 金港堂 |
| 十二 | 黒岩涙香譯 | 飜譯探偵小説 | 人耶鬼耶 | 四六判ボール表紙 | 大阪改進堂 |
| 十二 | 末兼八百吉 | 評論 | 「國民之友」及「日本人」評 | 四六判紙装 | 集成社 |
| 十 | ツルゲーネフ原作 二葉亭四迷譯 | 譯文 | めぐりあひ（「都の花」創刊號所載） | | |

## 明治二十二年（己丑）西暦一八八九年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 須藤南翠編 | 文藝雜誌 | 新小說（第一期） | | 春陽堂内 同好會 |
| 二 | 陸實編 | 新聞 | 日本 | | 日本（新聞）社 |
| 二 | 「我樂多文庫」改題 | 文藝雜誌 | 文庫（第十七號ヨリ第二十七號マデ） | | 硯友社 |
| 三 | 山田美妙等 | 小說合集 | 花籠 | 四六判紙裝 | 奈良嘉十郎 |
| 三 | 萩野由之編 | 文章雜誌 | 文章會 第一集 | 半紙和裝 | 吉川半七 |
| 自四至廿四ノ八 | 吉岡哲太郎編 | 小說叢書 | 新著百種 全十八册 | 四六判紙裝 | 吉岡書籍店 |
| 四 | 尾崎紅葉 | 小說 | 色懺悔「新著百種」本 | 四六判紙裝 | 吉岡書籍店 |
| 四 | 北村透谷 | 長詩 | 楚囚之詩 | 四六横綴本 | 春祥堂 |
| 五 | 高田早苗 | 修辭學 | 美辭學 二册 | 菊判紙裝 | 金港堂 |
| 五 | 海上胤平 | 歌論 | 長歌改良論辨駁 | 四六判紙裝 | 玄同社 |
| 五 | 饗庭篁村 | 小說 | 堀出し物「新著百種」本 | 四六紙裝 | 吉岡書店 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 五 | 朝戸善友 | 小說論 | 改良小說著作法 | 同 | 春陽堂 |
| 六 | ユーゴー原作 森田思軒譯 | 譯文 | 探偵ユーベル | 同 | 民友社 |
| 六 | 尾崎紅葉 | 小說 | 風雅娘「新著百種」本 石橋思案作 乙女心ト合綴一册 | | |
| 六 | 渡邊乙羽 | 政治小說 | 霹靂一聲 | | 國粹堂 |
| 七 | 石井研堂編 | 少年雜誌 | 小國民 | | 學齡館 |
| 自七至廿三ノ十二 | 饗庭篁村 | 小說集 | むら竹 全廿册 | 四六判紙裝 | 春陽堂 |
| 自七至廿三ノ八 | 須藤南翠 | 小說叢書 | こぼれ松葉 全十一册 | 同 | 同 |
| 八 | 新聲社同人譯 | 譯詩集 | 於母影「國民之友」第五十八號夏期附錄所載 | | |
| 九 | 民友社編 | 譯詩及文集 | 藻鹽草 | 菊判紙裝 | 民友社 |
| 九 | 幸田露伴 | 小說 | 風流佛「新著百種」本 | 四六紙裝 | 吉岡書店 |
| 九 | 饗庭篁村 | 同 | 當世商人氣質 | 同 | 金港堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 九 | 尾崎紅葉 | 同 | 風流京人形「新著叢詞」本 | 四六紙裝 | 大阪 赤松市太郎 |
| 十 | 森鷗外主宰 | 文學評論雜誌 | しがらみ草紙（第五十九號ニテ終刊） | | 新聲社 |
| 十 | 廣津柳浪 | 小說 | 殘菊「新著百種」本 | 四六判紙裝 | 吉岡書店 |
| 十 | 同 | 同 | 女子參政蜃中樓 | 四六判ボール表紙 | 金泉堂 |
| 十 | 石橋忍月 | 同 | 露子姬 | 四六判紙裝 | 春陽堂 |
| 十一 | 廣津柳浪主宰 | 文藝雜誌 | 小文學（第九號ニテ終刊） | | 小文學發行所 |
| 十一 | 尾崎紅葉 | 小說 | 紅子戲語「新著叢詞」第三號 水蔭作 花の枝ト合綴 | | |
| 十一 | 本吉欠伸 | 小說集 | むら雲 | 四六判紙裝 | 大阪 駸々堂 |
| 十二 | 尾崎紅葉 | 小說 | 初時雨「小說群芳」第一 | 四六判紙裝 | 昌成堂 |
| 十二 | 宮崎三昧 | 同 | 松花錄「新著百種」本 | 四六判紙裝 | 吉岡書店 |
| 不明 | 嵯峨のや主人 | 同 | 美人の面影 | 四六判紙裝 | 大阪 偉業館 |

## 明治二十三年（庚寅）西暦一八九〇年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 尾崎紅葉 | 小説 | 南無阿彌陀佛 | 四六判紙装 | 駸々堂 |
| 一 | 松井廣吉編 | 文藝雜誌 | 日本之文華 | | 博文館 |
| 二 | 德富蘇峰主筆 | 新聞 | 國民新聞 | | 民友社 |
| 三 | 植村正久編 | 評論雜誌 | 日本評論 | 四六倍判 | 日本評論社 |
| 自四至廿四ノ十二 | 尾崎紅葉選 春陽堂編 | 小説叢書 | 新作十二番 全八册 | 半紙和装 | 春陽堂 |
| 四 | 依田學海 | 短篇集 | 夏木立 第二編 | 四六判紙装 | 金港堂 |
| 四 | 饗庭篁村 | 小説 | 勝鬨 「新作十二番」本 | | |
| 六 | 幸田露伴 | 小説集 | 葉末集 | 四六判布装 | 春陽堂 |
| 六 | 宮崎湖處子 | 小説 | 歸省 | 四六判紙装 | 民友社 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 六 | 川上眉山 | 同 | 墨染櫻「新著百種」本　四六判紙装 | 吉岡書店 |
| 六 | 廣津柳浪編 | 文藝雑誌 | 江戸紫（第十二號終刊） | 硯友社 |
| 八 | 巖谷小波 | 小説 | 妹背貝「新著百種」本 | 吉岡書店 |
| 九 | 尾崎紅葉 | 同 | 此ぬし「新作十二番」本 | |
| 十 | 同 | 同集 | 紅鹿子　四六判横綴 | 春陽堂 |
| 十 | 山田美妙 | 小説 | 教師三昧「新作十二番本」 | |
| 自十至廿九ノ七 | 「國民之友」記者編 | 小説叢書 | 國民小説　全八冊四六判紙装 | 民友社 |
| 十一 | 宮崎三昧 | 小説 | かつら姫「新作十二番」本 | |
| 自十至廿四ノ十 | 中根淑編 | 小説叢書 | 金港堂小説叢書　全四冊　四六判紙装 | 金港堂 |
| 十 | 渡邊乙羽 | 小説 | 露小袖「新著百種」本 | |
| 十二 | 尾崎紅葉 | 同 | 新桃花扇・巴波川「新著百種」號外 | |

十二　南新二　同　鎌倉武士「新作十二番」本

十二　幸田露伴　同　露團々　半紙紐綴　金港堂

**明治二十四年**（辛卯）西暦一八九一年

一　森鷗外　小説　文つかひ「新著百種」ノ内

一　幸田露伴　同　聖天樣「新著百種」ノ内『文つかひ』ト合綴

一　春陽堂編　小説叢書　聚芳十種　全十册　四六判紙装　春陽堂

一　尾崎紅葉　小説　新色懺悔「聚芳十種」ノ内

自一至廿七ノ十一　博文館編　叢書　少年文學　全廿二册　四六判和装　博文館

（第一編漣山人作『こがね丸』以下第廿二編宇田川文海作『契冲阿闍梨』マデ刊）

一　逍遙・露伴・紅葉　合集　筆はじめ（「讀賣新聞」附錄　四六判紙裝本）

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 二 | 吉田香雨 | 評論 | 當世作者評判記 | 四六判紙裝 | 大阪 大華堂 |
| 三 | 中西梅花 | 詩集 | 新躰梅花詩集 | 同 | 博文館 |
| 自三至廿七ノ六 | 春陽堂編 | 小説叢書 | 文學世界 全十二册 | 半紙判和裝 | 春陽堂 |
| 三 | 尾崎紅葉 | 小説 | 七十二文命の安賣「文學世界」ノ内 | | |
| 三 | 山田美妙 | 同 | やたらじま「聚芳十種」ノ内 | | |
| 三 | 三宅雪嶺 | 評論 | 眞善美日本人 | 菊判紙裝 | 政教社 |
| 自四至廿六ノ一 | 浪花文學會編 | 小説叢書 | なにはがた 全二十册 | 四六判紙裝紙綴 | 大阪圖書出版會社 |
| 四 | 草野茂松 村上典吉 編 | 文集 | 近世名家文鈔 | 四六判紙裝 | 民友社 |
| 四 | 山田美妙 | 小説 | 猿面冠者「文學世界」ノ内 | | |
| 五 | 巖谷小波 | 同 | かた糸「文學世界」ノ内 | | |
| 五 | 北村透谷 | 劇詩 | 蓬萊曲 | 菊判紙裝 | 養心堂 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 五 | 三宅雪嶺 | 評論 | 僞惡醜日本人 | | 菊判紙裝 | 政敎社 |
| 六 | 原抱一庵 | 小說 | 闇中政治家 | 「聚芳十種」ノ内 | | |
| 自六至大正二ノ八 | 德富蘇峰 | 著作叢書 | 國民叢書 | 全廿六册 | 菊半截紙裝 | 民友社 |
| 六 | 山田芝廼園編 | 文藝雜誌 | 葦分船 | | | 大阪 薫心社 |
| 六 | 石橋忍月 | 小說 | 辻占賣 | 「文學世界」ノ内 | | |
| 七 | 石橋思案主筆 | 文藝雜誌 | 千紫萬紅 | (廿五年四月第九號終刊) | | 成春社 |
| 七 | 村上浪六 | 小說 | 再考 三日月 | | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 七 | 齋藤綠雨 | 同 | かくれんぼ | 「文學世界」本ノ内 | | |
| 八 | 江見水蔭 | 同 | 野試合 | 「文學世界」本ノ内 | | |
| 八 | 遲塚麗水 | 同 | 碧流 | 「新著百種」本ノ内 | | |
| 八 | 山田美妙 | 詩集 | 新調 韻文 青年唱歌集 | 二册 | 四六判横本 | 博文館 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 九 | 高安月郊 | 同 | 天無情 | 四六判紙裝 | 著者發行 |
| 九 | 坪内逍遙 | 隨筆集 | 春廼家漫筆 | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 九 | 二葉亭四迷 | 小說 | 浮雲（第一・二・三篇合本一冊） | 四六判紙裝 | 金港堂 |
| 十 | 矢崎嵯峨の屋 | 小說集 | 千草 | 菊判紙裝 | 金港堂 |
| 十 | 幸田露伴 | 同 | 新葉末集 | 四六判布裝 | 春陽堂 |
| 十 | 尾崎紅葉 | 小說 | 伽羅枕 | 菊判洋裝 | 同 |
| 十 | 宮崎三昧 | 同 | 戀の重荷「聚芳十種」本ノ内 | | |
| 十 | 坪内逍遙編 | 雜誌 | 早稻田文學（所謂第一期ノモノ） | | 東京專門學校 |
| 十一 | 齋藤綠雨 | 小說 | 油地獄 | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 十二 | 村上浪六 | 同 | 井筒女之助 | 同 | 同 |
| 十二 | 山田美妙 | 同 | 社會小說 葛の裏葉 | 四六判紙裝 | 嵩山堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十二 | 幸堂得知編 | 合集 | 後の月かげ | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 十一 | 遲塚麗水編 | 文藝雜誌 | 青年文學（美妙、獨歩等執筆 第十七號ニテ終刊） | 菊判紙裝 | 青年文學社 |

**明治二十五年**（壬辰）西暦一八九二年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 石橋忍月 | 小說 | 黃金村「聚芳十種」本ノ内 | | |
| 一 | 渡邊乙羽 | 同 | おもひ川「文學世界」本ノ内 | | |
| 二 | 尾崎紅葉 | 同 | 二人女 | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 二 | 西村天囚等 | 合集 | 桃谷小說 | 四六判紙裝 | 大阪圖書出版會社 |
| 二 | 山田美妙 | 小說 | いちご姫 | 菊判紙裝 | 金港堂 |
| 自二至廿六ノ一 | 宇田川文海 | 小說叢書 | 貝よせ 全十一册 | 四六判紙裝 | 大阪岡島寶文館 |
| 三 | 內田不知庵 | 文學論 | 文學一斑 | 四六判紙裝 | 博文館 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 三 | 櫻井德太郎編 | 文士錄 | 東京現住著作家案内 | 同 | 博文館 |
| 三 | バーネット著作 若松賤子譯 | 飜譯小說 | 小公子（前篇）一册 | 菊判折束裝 | 女學雜誌社 |
| 三 | 金子元臣編 | 和歌雜誌 | 歌學（第十四ニテ終刊） | | 東京堂 |
| 三 | 永守千代吉編 | 文藝評論雜誌 | 域南評論（第十一號マデ及ビ號外一號ニテ終刊） | | 域南評論社 |
| 三 | 筒井民次郎編 | 文藝雜誌 | 武藏野（第三號ニテ終刊） | | 今古堂 |
| 三 | 山岸荷葉等 | 文藝同人雜誌 | 詞海 | | 成珠會 |
| 四 | 饗庭篁村 | 小說 | 雪達摩 | 四六判紙裝 | 春陽堂 |
| 自四至廿六ノ二 | 古河默阿彌 | 脚本集 | 狂言百種 全八册 | 菊判紙裝 | 同 |
| 五 | 尾崎紅葉 | 小說集 | 紙きぬた | 菊半截紙裝 | 同 |
| 六 | 村上浪六 | 小說 | 奴の小萬 | 菊判紙裝 | 同 |
| 六 | 宮崎湖處子 | 同 | まぼろし | 同 | 同 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 七 | 森鷗外 | 飜譯創作詩文集 | 水沫集 | 菊判紙裝 | 同 |
| 八 | 尾崎紅葉 | 小説 | 夏小袖 | 同 | 同 |
| 九 | 中村修一編 | 論文集 | 文談集 | 四六判紙裝 | 青年文學社 |
| 九 | 木崎好尚 | 小説 | 友鏡 | 菊判紙裝 | 大阪明文館 |
| 十 | 三宅雪嶺 | 論集 | 我觀小景 | 四六倍判紙裝 | 政教社 |
| 十 | 幸田露伴 | 小説集 | 尾花集（「五重塔」外一篇） | 四六判紙裝 | 嵩山堂 |
| 十 | 尾崎紅葉 | 小説 | 裸美人「小品十種」本 | 四六判和裝 | 進化閣 |
| 十一 | ドストエフスキイ作 内田不知庵譯 | 飜譯小説 | 罪と罰 全二册 | 四六判紙裝 | 内田老鶴圃 |
| 十一 | 福地櫻痴 | 雜筆 | 櫻痴放言 | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 十一 | 秋渚・半牧等作 | 小説集 | むらすゞめ | 四六判紙裝 | 大阪圖書出版會社 |
| 十一 | 江見水蔭編 | 文藝雜誌 | 小櫻縅 全五號 | 同 | 江水社 |

十二　尾崎紅葉　小説　三人妻　菊判洋装　春陽堂

四　黒岩涙香　新聞　萬朝報　創刊　朝報社

## 明治二十六年（癸巳）西暦一八九三年

一　高瀬文淵　小説　詩儒若葉　菊判紙装　春陽堂

一　本吉欠伸等　小説集　雪つむ里　四六判紙装　大阪図書出版会社

一　南新二　同　文庫　菊判紙装　春陽堂

一　武田仰天子等　小説合集　深見艸　四六判紙装　大阪図書出版会社

一　星野天知編　文藝雜誌　文學界（卅一年一月發行第五十八號終刊）　女學雜誌社

二　佐藤寛編　雜集　文藝雜俎　四六判紙装　觀奕堂

自一至廿七ノ二　春陽堂版　小説叢書　探偵小説　全廿六册　菊判紙装　春陽堂

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 二 | 高安月郊 | 哀詩 | 犧牲 | 四六判紙装 | 著者自版 |
| 二 | 木崎好尚等 | 合集 | 花くもり | 同 | 大阪圖書出版會社 |
| 三 | 大和田建樹 | 詩學 | 新體詩學「通俗文學全書」第二編 | 菊判紙装 | 博文館 |
| 三 | 松村介石 戸川殘花等編 | 文學雜誌 | 三籟（第十號ニテ終刊） | | 三籟社 |
| 三 | 佐々木信綱編 | 唱歌集 | 繪入幼年唱歌集 | 菊半截和装 | 博文館 |
| 四 | 巖本善治編 | 社會評論雜誌 | 評論（廿七年十月發行第廿九號ニテ終刊） | | 女學雜誌社 |
| 四 | 海上胤平 | 歌論 | 歌學會歌範評論 | 半紙和装 | 一本社 |
| 四 | 春日敬之 | 同 | 大八洲學會詠歌正邪論 | 同 | 同 |
| 五 | 正岡子規 | 俳論俳話 | 獺祭書屋俳話 | 菊判紙装 | 日本新聞社 |
| 五 | 尾崎紅葉 | 小說 | 戀の病 | 同 | 春陽堂 |
| 六 | 坪內逍遙 | 隨筆集 | 小羊漫言 | 同 | 有斐閣 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 六 | 落合直文 | 長詩 | 騎馬旅行 | 四六半紙裝截 | 國語傳習所 |
| 自七至卅六ノ一 | 民友社編 | 評傳 | 十二文豪（號外共全十七册） | 四六判紙裝 | 民友社 |
| 九 | 幸田露伴 | 紀行文集 | 枕頭山水 | 四六判紙裝 | 博文館 |
| 九 | 磯野德三郎 | 戲著 | 依緑軒漫録 | 菊判紙裝 | 日本新聞社 |
| 十 | 尾崎紅葉 | 小說 | をとこ心 | 菊判洋裝 | 春陽堂 |
| 十一 | 宮崎湖處子 | 詩集 | 湖處子詩集「ニッケル文庫」 | 菊半截紙裝 | 右文館 |
| 十一 | 村上浪六 | 小說隨筆集 | 浪六漫筆 | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 自十一至廿七ノ十二 | 博文館編 | 小說叢書 | 短篇明治文庫 全十八册 | 菊判紙裝 | 博文館 |
| 十一 | 西村天囚等編 | 文藝雜誌 | 藻しほ草 | 同 | 大阪詞華社 |
| 自十二至廿八ノ一 | 博文館編 | 小說叢書 | 春夏秋冬 全四册 | 菊判紙裝 | 博文館 |

## 明治二十七年（甲午）西曆一八九四年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 春陽堂編 | 小說合集 | 學園花壇 | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 一至三 | 大和田建樹譯編 | 譯詩集 | 歐米名家詩集 全二册 | 四六判紙裝 | 博文館 |
| 一 | 落合直成編 | 歌集 | 夢の餘波 | 同 | 編者自版 |
| 二至七 | 佐々木信綱編 | 同 | 明治歌集 全三册 | 同 | 博文館 |
| 二 | 山岸藪鶯編 | 文藝雜誌 | 東京文學（第四號限り廢刊） | | 東京文學社 |
| 自三至廿八ノ六 | 春陽堂編 | 小說叢書 | 小說百家選 全十五册 | 四八判竪長紙裝 | 春陽堂 |
| 三 | スコット作 鹽井雨江譯 | 譯詩 | 今様長歌 湖上の美人 | 四六判ボール表紙 | 開進堂 |
| 三 | 德富蘇峰 | 評論 | 文學斷片「國民叢書」第五册 | | |
| 四 | 內田魯庵 | 戲著 | 文學者となる法 | 菊判紙裝 | 右文社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 四 | 村井弦齋 | 小說 | 關東武士 | 同 | 金櫻堂 |
| 五 | 尾崎紅葉 | 同 | 心の闇 | 同 | 春陽堂 |
| 五 | 松居松葉 | 同 | 當世女學者 | 同 | 右文社 |
| 六 | 尾崎紅葉 | 同 | 隣の女 | 同 | 春陽堂 |
| 八 | 同 | 同 | 紫 | 同 | 同 |
| 十 | 志賀重昂 | 紀行 | 日本風景論 | 同 | 政教社 |
| 十 | 大和田建樹 | 文學史 | 明治文學史 | 四六判紙裝 | 博文館 |
| 十 | 星野天知編 | 詩文集 | 透谷集 | 菊判紙裝 | 文學界雜誌社 |
| 十一及十二 | 大和田建樹 | 詩歌文集 | 新文林（二册） | 四六判紙裝 | 博文館 |
| 十一 | 國學院編 | 文學雜集 | 國學院雜誌（現存） | 菊判 | 國學院 |
| 十二 | 村井弦齋 | 小說 | 櫻の御所（二册） | 菊判紙裝 | 春陽堂 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 十二 | 尾崎紅葉 | 同 | 片曆 | 同　同 |
| 十二 | 村上浪六 | 同 | 浪六叢書 たそや行燈 | 同　同 |

**明治二十八年**（乙未）西曆一八九五年

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 一 | 物集高見 | 長詩 | 世繼の歌「國學院雜誌」第三號附錄 | 國學院 |
| 一 | 帝國文學會編 | 文學雜誌 | 帝國文學 | 大日本圖書株式會社 |
| 一 | 博文館編 | 評論雜誌 | 太陽 | 博文館 |
| 一 | 同 | 文藝雜誌 | 文藝倶樂部（昭和八年一月廢刊） | 同 |
| 二 | 少年園編 | 文藝投書雜誌 | 青年文 | 少年園 |
| 三 | 立教學校文學會編 | 文藝評論雜誌 | 八紘 | 編者發行 |
| 四 | 尾崎紅葉 | 小說 | なにがし　菊判紙裝 | 春陽堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 六 | 同 | 同 | 不言不語 | 同 | 同 |
| 七 | 同編 | 合集 | 四の緒 | 同 | 同 |
| 七 | 文學館編 | 文藝雜誌 | 新文壇 | | 文學館 |
| 八 | | 同 | 文庫（四十三年八月第四十巻第十二號マデ） | | 少年園 |
| 九 | 外山正一外三氏撰 | 詩歌集 | 新體詩歌集 | 半紙判和装 | 大日本圖書株式會社 |
| 九 | 高山樗牛 | 小説 | 瀧口入道 | 菊判紙装 | 春陽堂 |
| 十一 | 中野重太郎 | 歌文集 | 逍遙遺稿 | 菊判 | 同 |
| 十二 | 「文藝倶樂部」第十二號 | 小説集 | 閨秀小説號 | 菊判紙装 | 博文館 |
| 十二 | 尾崎紅葉編 | 合集 | 五調子 | 同 | 春陽堂 |
| 自十二至卅五ノ二 | 幸田露伴 | 小説叢書 | 風流微塵藏　全五冊 | 同 | 青木嵩山堂 |

## 明治二十九年（丙申）西暦一八九六年

一　博文館編　小說叢書　太陽小說 第一・第二編 二册　菊判紙裝　博文館

一　森鷗外主宰　文藝評論雜誌　めざまし草（卅五年二月發行第五十五號ニテ終刊）　盛春堂

一　坪內逍遙編　文學雜誌　早稻田文學（第二期）　菊判紙裝　早稻田文學社

一　村井弦齋　小說　血の涙　菊判紙裝　春陽堂

二　「文藝倶樂部」第二卷第二編　小說集　青年小說　菊判雜誌　博文館

三　河井醉茗編　詞華集　詞藻 第一册　菊判紙裝　少年園

五　星野天知編　詩歌文集　うらわか草 第一卷　同　文學界雜誌社
（雜誌「文學界」ノ增刊ニテ、藤村・花袋・一葉・花圃等ノ作品ヲ掲載）

三及四　外山正一　詩論　新體詩及朗讀法「帝國文學」第二卷第三・四號

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 五 | 三宅雪嶺 志賀矧川 | 文集 | 斷雲流水 | 四六判紙裝 | 政教社 |
| 五 | 村井弦齋 | 小説 | 小説家 | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 七 | 與謝野鐵幹 | 詩歌集 | 東西南北 | 四六半截紙裝 | 明治書院 |
| 七 | 幸田露伴編 | 文藝雜誌 | 新小説（第二期） | 菊判 | 春陽堂 |
| 七 | 佐藤橘香編 | 文藝評論雜誌 | 新聲（四十三年三月發行第廿一編第三號二十卷刊行） | | 新聲社 |
| 八 | 松嘯吟社編 | 詩歌雜誌 | やまと琴 | 四六判及菊判 | 松嘯吟社 |
| 九 | 坪内逍遙 | 文學評論 | 文學その折々 | 菊判革裝 | 春陽堂 |
| 九 | 尾崎紅葉編 | 小説集 | 籠まくら | 菊判紙裝 | 同 |
| 九 | 同著 | 同 | 浮木丸 | 菊判紐綴 | 同 |
| 九 | 泉鏡花 | 小説 | 冠彌左衞門 | 菊判紙裝 | 大賣田中宋榮堂 |
| 十 | 矢崎嵯峨の屋 | 小説韻文等 | 文の庫 | 同 | 春陽堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十 | 尾崎紅葉 | 小説 | 青葡萄 | 同 | 同 |
| 十 | 政教社同人共著 | 文集 | 小弦集 | 四六判紙裝 | 政教社 |
| 十一 | ツルゲーネフ作 二葉亭四迷譯 | 飜譯小説 | 片戀 | 菊判洋裝 | 春陽堂 |
| 十一 | 佐藤儀助（橘香）編 | 詩集 | 青年新體詩集 | 四六判紙裝 | 新聲社 |
| 十 | 竹柏社編 | 歌學雜誌 | いさゝ川（第七號ニテ終刊「心の花」ノ前身） | | 竹柏社 |
| 十一 | 嶺雲・臨風・鯉洋等執筆 | 文學雜誌 | 江湖文學（第七號ニテ終刊） | | 江湖文學社 |
| 十一 | 秋聲會編 | 俳諧雜誌 | 秋の聲（第十號限リ廢刊） | | 萬卷堂 |
| 十二 | 森鷗外 | 論集 | 月草 | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 十二 | 雨江・桂月・羽衣合著 | 美文韻文 | 花紅葉 | 菊半截袖珍型 | 博文館 |
| 十二 | 森田思軒譯 | 飜譯 | 十五少年 | 菊判紙裝 | 同 |
| 十二以降續刊 | 村上浪六 | 小説 | 當世五人男（全十八册） | 同 | 嵩山堂 |

## 明治三十年（丁酉）西暦一八九七年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 柳原極堂編 | 俳句雜誌 | ほとゝぎす（翌年十月、虚子編 東京ニテ發行） | | 松山・ほとゝぎす 發行所 |
| 一 | 與謝野鐵幹 | 詩歌集 | 天地玄黃 | 四六半截 紙裝 | 明治書院 |
| 一 | 若松賤子譯 | 飜譯小說 | 小公子 | 菊判 紙裝 | 博文館 |
| 一 | 大橋乙羽編 | 全集 | 校訂 一葉全集 一冊 | 同 | 同 |
| 一以降續刊 | 博文館編 | 小說叢書 | 袖珍小說 全十二冊 | 菊半截 紙裝 | 同 |
| 三 | 新詩會編 | 詞華集 | 詩集 この花 | 四六半截 洋裝 | 同文館 |
| 三 | 矢崎嵯峨の屋 | 文集 | 古反古 | 四六判 紙裝 | 民友社 |
| 三 | 丸善編 | 圖書雜誌 | 學の燈（現存「學燈」） | | 丸善 |
| 四 | 宮崎湖處子編 | 詞華集 | 抒情詩 | 菊半截 紙裝横本 | 民友社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 四以降續刊 | 丁酉文社編 | 文學雜誌 | 新著月刊 全十五冊 | 菊判雜誌型 | 東華堂 |
| 五 | 森鷗外 小金井君子 合著 | 飜譯及評論集 | かげ草 | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 五 | 藤野古白著 正岡子規編 | 詩句・戲曲等 | 古白遺稿 | 菊判紙裝紐綴 | 正岡子規發行 |
| 五 | 末松謙澄 | 歌論 | 國歌新論 | 四六判紙裝 | 哲學書院 |
| 五 | 齋藤綠雨 | 文集 | あま蛙 「袖珍小說」第九編 | | 博文館 |
| 五 | 三木天遊 繁野天來 共著 | 詩集 | 松むし・詩々虫 | 四六半裁紙裝 | 京都河合文港堂 |
| 五 | 嵩山堂編 | 演劇雜誌 | 新作文庫 第四號ニテ終刊 | 菊判 | 青木嵩山堂 |
| 五以降續刊 | 村井弦齋 | 小說 | 日の出島 全十三冊 | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 六以降續刊 | 春陽堂編 | 小說叢書 | 春陽文庫 全十冊 | 四六判及菊判 | 同 |
| 六 | 「太陽」第三卷第十二號 | 雜誌 | 博文館十週年記念增刊（樗牛「明治の小說」其他） | | |
| 七 | 尾崎紅葉 | 同 | 多情多恨 | 菊判紙裝 | 春陽堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 七 | 內村鑑三 | 譯詩集 | 愛吟 | 菊半截紙裝 | 警醒社 |
| 八 | 島崎藤村 | 詩集 | 若菜集 | 四六判紙裝 | 春陽堂 |
| 八 | 矢崎嵯峨の屋 | 長篇小說 | 通例人の一生 「新小說」第二年第八號所載 | | |
| 九 | 大和田建樹 | 詩歌文集 | 散文韻文 雪月花 | 菊半截洋裝 | 博文館 |
| 十 | 宮崎湖處子編 | 詩及句集 | 月刊新體詩集 心の緒琴 | 菊半截紙裝橫綴 | 文成堂 |
| 十 | 宮崎三昧 | 小說 | 花園寄五 「春陽文庫」ノ內 | | |
| 十一 | 近藤泥牛編 | 句集 | 新派俳句家集 | | |
| 十二以降續刊 | 博文館編 | 小說叢書 | 明治小說文庫 全十冊 | 雜誌型 | 博文館 |

**明治三十一年（戊戌）西暦一八九八年**

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 時事新報社編 | 全集 | 福澤全集 全五冊 | 菊判洋裝 | 時事新報社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 石橋愚仙編 | 詞華集 | 山高水長 | 四六半截紙裝 | 增子屋書店 |
| 一 | 尾崎紅葉 | 小說 | 黃櫨句 | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 二 | 佐々木信綱主宰 竹柏園編 | 短歌雜誌 | 心の華（現存） | 同 | 東華堂 |
| 三 | 鼓攻吟社編 | 歌學雜誌 | 韻文學 | 同 | 鼓攻吟社 |
| 三 | 德富蘆花 | 小品集 | 靑山白雲 | 四六判紙裝 | 民友社 |
| 四 | 大町桂月 | 評論 | 詩及散文 | 菊判紙裝 | 普及社 |
| 四 | 高濱虛子 | 俳書 | 俳句入門 | 四六半截紙裝 | 少年園 |
| 四 | 「太陽」第四卷第九號臨時增刊 | 雜誌 | 奠都三十年 | 菊判 | 博文館 |
| 六 | 島崎藤村 | 詩文集 | 一葉舟 | 四六判紙裝 | 春陽堂 |
| 六 | 與謝野寬等 | 詞華集 | 月の桂 | 四六半截紙裝 | 中等書院 |
| 六 | 內村鑑三編 | 評論雜誌 | 東京獨立雜誌（第七十二號ニテ終刊） | | 東京獨立雜誌社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 六 | 奥村信太郎 | 文學論 | 通俗文學汎論 | 菊判紙装 | 博文館 |
| 七 | 江見水蔭 | 小説 | 鐵道小説 汽車の友 | 菊半裁洋装 | 同 |
| 七以降續刊 | 尾崎紅葉 | 長篇小説 | 金色夜叉 全五冊 | 菊判洋装 | 春陽堂 |
| 九 | 大橋又四郎編 | 詞華集 | 青年文 第一集 | 菊判紙装 | 少年園 |
| 十 | 徳富蘇峰 | 評論集 | 文學漫筆 「國民叢書」第十三冊 | | |
| 十一 | 中村秋香 | 作法書 | 新體詩歌自在 | 四六判洋装 | 博文館 |
| 十一 | 鳥谷部春汀 | 評傳 | 明治人物評論 | 菊半裁洋装 | 同 |
| 十二 | 島崎藤村 | 詩集 | 夏草 | 四六判紙装 | 春陽堂 |
| 十二 | 大町桂月 | 詩文集 | 美文韻文 黄菊白菊 | 菊半裁紙装 | 博文館 |
| 十二 | 大橋乙羽 | 小説及詩文集 | 若菜籠 | 同 | 同 |
| 十二 | 齋藤緑雨 | 文集 | あられ酒 | 同 | 同 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十二 | 高山樗牛 | 評論集 | 時代管見 | 同 | 同 |

## 明治三十二年（乙亥）西暦一八九九年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 「反省雜誌」改題 | 綜合雜誌 | 中央公論 | 菊判 | 中央公論社 |
| 一 | 正岡子規 | 俳論 | 俳諧大要「俳諧叢書」ノ内 | 菊半截紙裝 | 俳書堂 |
| 一 | 川上眉山 泉鏡花 共著 | 短篇集 | ふところ子 | 菊半截紙裝 | 春陽堂 |
| 一 | 石摶千亦編 | 歌集 | やまとにしき | 四六判紙裝 | 心の華發行所 |
| 二 | 緒方流水 | 評論集 | 文學管見 | 同 | 民友社 |
| 二 | 泉鏡花 | 小說 | 錦帶記 | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 三及十一 | 田岡嶺雲 | 評論集 | 嶺雲搖曳 第一・二 | 四六判紙裝 | 新聲社 |
| 四 | 土井晩翠 | 詩集 | 天地有情 | 菊半截紙裝 | 博文館 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 四 | 小杉天外 | 小説 | 蛇いちご | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 四 | 近角常觀編 | 詩集 | 星月夜 | 四六判紙裝 | 大日本佛教青年會 |
| 四 | 佐藤橘香編 | 詞華集 | 春風秋聲 | 同 | 新聲社 |
| 五 | 大橋乙羽 | 小説及史傳等 | 花鳥集 | 四六判洋裝 | 博文館 |
| 五 | 小島烏水 | 紀行文集 | 扇頭小景 | 四六判紙裝 | 新聲社 |
| 五 | 青木嵩山堂編 | 小説集 | はるさめ | 菊判紙裝 | 嵩山堂 |
| 六 | 森鷗外 大村西厓 編 | 美學書 | 審美綱領 二冊 | 菊判和裝 | 春陽堂 |
| 六 | 風葉・花袋・鏡花合著 | 短篇集 | 花吹雪 | 四六判紙裝 | 新聲社 |
| 六 | 兒玉花外等 | 詞華集 | 風月萬象 | 同 | 文學同志會 |
| 六 | 「女子の友」記者編 | 詩歌文集 | 花かたみ | 菊判紙裝 | 東洋社 |
| 七 | 妖堂居士 | 風聞記 | 文壇風聞記 | 菊半截紙裝 | 新聲社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 七至卅三ノ五 | 大學館編 | 詩文集 | 名家文庫 十冊 | 四六判紙裝 | 大學館 |
| | （高松茅村編『白砂青松』以下、石橋玄湖編『春風秋水』） | | | | |
| 九 | 內田不知庵 | 評論及小品集 | 文藝小品 | 菊半截紙裝 | 博文館 |
| 九 | 久保天隨等 | 文集 | 白露集 | 四六判紙裝 | 新聲社 |
| 九 | 大橋乙羽 | 小說及詩文集 | 風月集 | 菊半截紙裝 | 博文館 |
| 九 | 小栗風葉 | 小說 | 鬘下地 | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 九 | 田山花袋 | 同 | ふるさと | 四六判紙裝 | 新聲社 |
| 九 | 同 | 紀行集 | 南船北馬 | 菊半截紙裝 | 博文館 |
| 十以降續刊 | 江藤桂華 | 文學入門書 | 青年文學叢書 全六冊 | 四六判紙裝 | 新聲社 |
| 十 | 中央文壇社編 | 文藝雜誌 | 伽羅文庫 二冊 | | 中央文壇社 |
| 十 | 青木月兎主宰 | 俳句雜誌 | 車百合 | | 大阪車百合發行所 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十一 | 薄田泣菫 | 詩集 | 暮笛集 | 四六横綴本 | 金尾文淵堂 |
| 十一 | 大和田建樹 | 文集 | 散文韻文 深山櫻 | 菊半截 洋クロース装 | 博文館 |
| 十一 | 泉鏡花 | 小説 | 湯島詣 | 菊判紙装 | 春陽堂 |
| 十一 | 浮浪花主人編 | 詩文集 | 花月集 一冊 | 菊半截 クロース装 | 魚住書店 |
| 十二 | 芳賀矢一 | 文學史 | 國文學史十講 | 菊判洋装 | 富山房 |
| 十二 | 井上哲次郎 | 評論集 | 巽軒論文初集 | 菊判紙装 | 同 |
| 十二 | 大橋乙羽 | 小説及歌句集 | 初子集 | 菊半截洋装 | 博文館 |
| 十三 | 横瀬夜雨 | 詩集 | 夕月 | 菊半截紙装 | 旭堂書店 |

## 明治三十三年（庚子）西暦一九〇〇年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 鈴木暢幸 | 評論 | 文學小論 | 菊判洋装 | 春陽堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 德富蘆花 | 小說 | 不如歸 | 四六判紙裝 | 民友社 |
| 一 | 三木竹二編 | 演劇雜誌 | 歌舞伎（大正四年一月發行第一七五册ニテ終刊） | | 歌舞伎發行所 |
| 一 | 江見水蔭編 | 週刊新聞 | 太平洋（毎號短篇小說等掲載） | | 博文館 |
| 一 | 「女子の友」第五十八號增刊 | 詩文集 | 才媛詞藻 | 菊判紙裝 | 東洋社 |
| 二 | 大町桂月 | 評論集 | 文學小觀 | 四六判紙裝 | 新聲社 |
| 二 | 森鷗外 | 美學 | 審美新說 | 菊判和裝 | 春陽堂 |
| 三 | 高松茅村 | 美文 | 明治文學美文自在 | 四六判紙裝 | 太平洋文學社 |
| 四 | 島村抱月外二氏 | 評論集 | 風雲集 | 菊判洋裝 | 春陽堂 |
| 四 | 田岡嶺雲 | 同 | 雲のちぎれ | 菊判紙裝 | 同 |
| 四 | 泉鏡花 | 小說 | 照葉狂言 | 同 | 同 |
| 四 | 與謝野鐵幹主宰 | 詩歌雜誌 | 明星（四十一年十一月發行第百號ニテ終刊） | | 東京新詩社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 五 | 新聲記者編 | 詞華集 | わか草 | 四六判紙裝 | 新聲社 |
| 五 | 小栗風葉 | 小說 | 戀慕ながし | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 五 | 江見水蔭 | 同 | 避暑の友 | 菊半截紙裝 | 博文館 |
| 六 | 角田浩々歌客 | 詩文集 | 詩國小觀 | 同 | 金尾文淵堂 |
| 六 | 高安月郊 | 小說 | 金字塔 | 菊判紙裝 | 著者自版 |
| 七 | 高松茅村 | 文學史書 | 明治文學言文一致 | 四六判紙裝 | 太平洋文學社 |
| 七 | 久保天隨 中内蝶二 共著 | 美文集 | 藻かり舟 | 同 | 鍾美堂 |
| 七 | 河井醉茗編 | 詞華集 | 詩美幽韻 | 菊半截紙裝 | 内外出版協會 |
| 七 | 小島烏水 | 文集 | 木蘭集 | 四六判紙裝 | 新聲社 |
| 七 | 田山花袋 | 紀行小說 | 日光 | 同 | 春陽堂 |
| 七 | 日本文學會編 | 詩文集 | 神來 | 菊半截紙裝 | 松榮堂書店 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 八 | 小島烏水 | 文集 | 銀河 | 四六判紙裝 | 内外出版協會 |
| 八 | 德富蘆花 | 同 | 自然と人生 | 菊半截紙裝 | 民友社 |
| 八 | 小杉天外 | 小説 | 初姿 | 菊判洋裝 | 春陽堂 |
| 八 | 齋藤綠雨 | 小説及隨筆集 | わすれ貝 | 菊半截洋裝 | 博文館 |
| 八至卅四ノ七 | 菊地幽芳 | 小説 | 己が罪 全三冊 | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 八 | 山縣悌三郎編 | 詩文集 | 少年園叢書 全三冊 | 菊判紙裝 | 内外出版協會 |
| 八 | 「よしあし草」改題 | 文藝雜誌 | 關西文學 | 同 | 大阪矢島誠進堂 |
| 九 | 笹川臨風 | 評論集 | 雨絲風片 | 菊半截洋裝 | 博文館 |
| 九 | 落合直文等 | 紀行文集 | 山色水聲（「國文學界」第十五號臨時增刊） | | 誠之堂書店 |
| 十 | 栗島狹衣編 | 詩歌集 | 紫紅集 | 菊半截紙裝横本 | 盛文堂等 |
| 十 | 星野天知 | 隨筆集 | 破蓮集 | 三五判紙裝 | 大阪矢島誠進堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十 | 小杉天外 | 小說 | 女夫星 | 菊判洋裝 | 春陽堂 |
| 十 | 「ふた葉」改題 薄田泣菫等編 | 文藝雜誌 | 小天地（卅六年十一月發行第三卷第三號ニテ終刊） | | 大阪金尾文淵堂 |
| 十一 | 國府犀東 | 歌文集 | 月蓮風蓮 | 四六判紙裝 | 新聲社 |
| 十一 | 新聲社編 | 合集 | 弦月 | 同 | 同 |
| 十二 | 高安月郊 | 詩集 | 夜濤集 | 菊判紙裝 | 金尾文淵堂 |
| 十二 | 新聲社同人 | 評論集 | 三十棒 | 四六判紙裝 | 新聲社 |
| 十二 | 石橋思案 | 文集 | 筆と紙 | 菊半截洋裝 | 博文館 |
| 十二及卅四ノ四 | 高濱虛子編 | 寫生文集 | 寒玉集 全二册 | 四六判紙裝 | 俳書堂 |
| 十二 | 同 | 短文集 | 寸紅集 | 同 | ホトヽギス發行所 |

## 明治三十四年　辛丑　西暦一九〇一年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 金子薫園 | 歌文集 | 片われ月 | 四六判紙装 | 新聲社 |
| 一 | 河井醉茗 | 詩集 | 無弦弓 | 三六判紙装 | 内外出版協會 |
| 一 | 春陽堂編 | 短篇集 | 青すだれ | 菊判紙装 | 春陽堂 |
| 一 | 後藤宙外 | 同 | 陽炎集 | 菊判洋装 | 同 |
| 一 | (帝國大學系文士ノ機關) | 文藝雜誌 | 新文藝(第九號マデ刊) | | 東京堂 |
| 一 | 博文館編 | 雜誌 | 女學世界 | 菊判 | 博文館 |
| 二及五 | 佐々木信綱編 | 詩歌文集 | 竹柏園集 第一・二編 | 菊半截紙装 | 同 |
| 二 | 竹村秋竹編 | 俳句集 | 明治俳句 | 同 | 同 |
| 二 | | 俳句雜誌 | 俳聲 | | 俳聲發行所 |
| 三 | 國木田獨歩 | 文集 | 武藏野 | 菊半截紙装 | 民友社 |
| 三 | 與謝野鐵幹 | 詩歌集 | 鐵幹子 | 四六判紙装 | 大阪矢島誠進堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 三 | 新聲社編 | 文話 | 創作苦心談 | 同 | 新聲社 |
| 四 | 與謝野鐵幹 | 詩歌集 | 紫 | 菊半截紙裝紐綴 | 東京新詩社 |
| 四 | 泉鏡花 | 小說 | 通夜物語 | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 四 | 金尾種次郎編 | 紀行談 | 川上音次郎貞奴漫遊記 | 菊判和裝 | 文淵堂 |
| 四 | 緒方流水 | 評論文集 | 塵影錄 | 四六判紙裝 | 新聲社 |
| 四 | 井上哲次郎 | 評論集 | 巽軒論文 二集 | 菊判紙裝 | 富山房 |
| 四 | 岡田正美編 | 詩歌文集 | 明治時代文範 | 同 | 大日本圖書株式會社 |
| 五 | 土井晚翠 | 詩集 | 曉鐘 | 同 | 仙臺有千閣 |
| 五 | 德富蘆花 | 長篇小說 | 思ひ出の記 | 同 | 民友社 |
| 五 | 正岡子規選 | 句集 | 春夏秋冬 全四册 | 菊半截紙裝 | 俳書堂 |
| 六 | 高山樗牛 | 評論集 | 文藝評論 | 菊半截洋裝 | 博文館 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 六 | 「女子の友」記者編 | 歌集 | 明治才媛歌集 | 四六判紙裝 | 東洋社 |
| 六 | 小栗風葉等 | 短篇集 | あだ浪 | 菊判紙裝 | 文祿堂 |
| 六 | 鹽井雨江 | 詩文集 | 美文韻文 暗香疎影 | 菊半截紙裝 | 博文館 |
| 六 | 田山花袋 | 小說 | 野の花 | 四六判紙裝 | 新聲社 |
| 六 | 角田浩々歌客 | 文集 | 出門一笑 | 同 | 文淵堂 |
| 六 | 寒川鼠骨 | 同 | 斷霞錄 | 同 | 新聲社 |
| 七 | 坪內逍遙 | 文學史 | 英文學史 | 菊判紙裝 | 東京專門學校出版部 |
| 七 | 岩野泡鳴 | 詩集 | 露じも | 菊半截紙裝 | 著者自版 |
| 七 | 吉野臥城 | 同 | 小百合集 | 同 | 警醒社 |
| 七 | 服部躬治 | 歌集 | 迦具土 | 三六判紙裝 | 白鳩社 |
| 七 | 佐藤橘香編 | 風聞記 | 文壇樂屋觀 | 菊半截紙裝 | 新聲社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 七 | 德田秋聲等 | 短篇合集 | 新婚旅行 | 四六判紙裝 | 同 |
| 七 | 中村春雨 | 小說 | 無花果 | 菊判紙裝 | 大阪金尾文淵堂 |
| 七 | 內田魯庵 | 短篇集 | 血ざくら | 同 | 春陽堂 |
| 七 | 石川正作編 | 同 | 家庭小說 | 三六判紙裝 | 東洋社 |
| 八 | 島崎藤村 | 詩文集 | 落梅集 | 四六判紙裝 | 春陽堂 |
| 八 | 大和田建樹 | 同 | 散文韻文藻鹽木 | 菊半截紙裝 | 博文館 |
| 八 | 鳳(與謝野)晶子 | 歌集 | みだれ髮 | 竪長本紙裝 | 東京新詩社 |
| 八 | 山路愛山 | 文學隨筆 | 青年立身錄 | 菊半截紙裝 | 民友社 |
| 九 | 幸田露伴 | 評論集 | 讕言 | 菊判洋裝 | 春陽堂 |
| 自九至卅五ノ三 | 與謝野鐵幹編 | 詩集 | 片袖 第一至三集 | 菊半截紙裝 | 新詩社 |
| 九及十 | 中江兆民 | 論集 | 一年有半 正・續二冊 | 菊判紙裝 | 博文館 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 九 | 藤波しま編 | 詩文集 | 高等才媛文集 | 菊判紙裝 | 文友館 |
| 九 | 川上眉山 | 日記及小說 | ふところ日記 | 三六判紙裝 | 新聲社 |
| 九 | 生田葵山 | 小說 | 自殺 | 四六判紙裝 | 新聲社 |
| 九 | 德田秋聲 | 同 | 雲のゆくへ | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 九 | 柳川春葉 | 長篇小說 | 夢の夢 | 同 | 同 |
| 九 | 佐藤竹藏編 | 短篇合集 | 眞菰集 | 四六判紙裝 | 南風館 |
| 十 | 薄田泣菫 | 詩集 | ゆく春 | 四六判布裝 | 金尾文淵堂 |
| 十 | 金尾文淵堂編 | 詩文集 | 春くさ 第一號 | 三六判紙裝 | 同 |
| 十 | 黑瞳子（平出修） | 歌論 | 新派和歌評論 | 四六判紙裝 | 鳴皐書院 |
| 十 | 久保天隨 | 評論集 | 塵中放言 | 同 | 鍾美堂 |
| 十 | 東京新詩社編 | 短篇集 | 小說青燈集 | 菊判紙裝 | 文友館 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十 | 新聲同人編 | 評傳 | 明治文學家評論 | 四六判紙裝 | 新聲社 |
| 十 | 國府犀東 | 詩文集 | 花柘榴 | 三六判紙裝 | 文武堂 |
| 十 | 高須梅溪 | 美文集 | 暮雲 | 四六判紙裝 | 新聲社 |
| 十 | 文藝投書雜誌 | | 秀才文壇 | | 文光堂 |
| 十一 | 清水橋村 | 詩集 | 野人 | | 仙臺東北圖書出版社 |
| 十一 | 尾上柴舟譯 | 譯詩 | ハイネの詩 | 三六判紙裝 | 新聲社 |
| 十一 | 伊藤銀月 | 文集 | 詩的東京 | 四六判紙裝 | 昭光社 |
| 十一 | 幸田露伴 | 評論集 | 長語 | 菊判洋裝 | 春陽堂 |
| 十一 | 新聲同人編 | 同 | 弱者の聲 | 菊判紙裝 | 新聲社 |
| 十二 | 上田敏 | 同 | 文藝論集 | 菊判洋裝 | 春陽堂 |
| 十二 | 同 | 譯詩及譯文集 | みをつくし | 四六判紙裝 | 文友館 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十二 | 梶田薄氷 | 全集 | 薄氷遺稿 | 半紙判和装 | 春陽堂 |
| 十二 | 中村春雨 | 美文小品 | 雛鳩 | 菊判紙装 | 大阪金尾文淵堂 |
| 十二及卅五ノ三 | 上田敏 | 紹介評論 | 最近海外文學 全二册 | 四六判紙装 | 文友館 |

## 明治三十五年（壬寅）西暦一九〇二年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 自一至七 | 新聲社編 | 小説叢書 | アカツキ 全七册 | 菊判紙装 | 新聲社 |
| 一 | 尾上柴舟 金子薫園 共選 | 歌集 | 叙景詩 | 四六判紙装 | 同 |
| 一 | 蒲原有明 | 詩集 | 草わかば | 同 | 同 |
| 一 | 新聲社同人 | 評論集 | 沙上放語 | 同 | 同 |
| 一 | 泉鏡花 | 小説 | 三枚續 | 菊判紙装 | 春陽堂 |
| 一 | 徳田秋聲 | 同 | 後の戀 | 同 | 同 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 小杉天外 | 同 | 寫實小說 はやり唄 | 同 | 同 |
| 一 | 國木田獨歩等執筆 | 文藝雜誌 | 小柴舟 | 菊判紙裝 | 大阪駸々堂 |
| 一 | 小栗風葉 | 小說 | 梢の花「アカツキ」第一編 | | |
| 二 | 森鷗外 | 美學書 | 審美極致論 | 半紙和裝 | 春陽堂 |
| 二 | 太田みづほのや | 詩歌集 | つゆ草 | 三六判紙裝 | 文友館 |
| 二 | 吉野臥城 | 詩集 | 野茨集 | 同 | 仙臺尙文館 |
| 二 | 中村春雨 | 小說 | 黑塗馬車（佐野天聲作「籠坂峠」ト合綴）「アカツキ」第二編 | | |
| 三 | 佐藤儀助編 | 詩文集 | 亡國の縮圖 | | 新聲社 |
| 三 | 德田秋聲 | 小說 | 驕慢兒（正宗白鳥譯「鞭の音」ヲ合綴）「アカツキ」第三編 | | |
| 三 | 奥村梅皐 | 評論集 | 一噴一醒 | 四六判紙裝 | 新聲社 |
| 三 | 佐々醒雪編 | 文藝雜誌 | 文藝界 | 菊判 | 金港堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 三 | 泉鏡花 | 小説 | 黒百合 | 菊判紙装 | 春陽堂 |
| 四 | 田口掬汀 | 同 | 別れ路「アカツキ」第四編 | | |
| 四 | 長谷川濤涯 | 詩歌集 | おぼろ舟 | 竪長本紙装 | 大阪駸々堂 |
| 四 | 新聲社編 | 美文集 | 花吹雪 | 四六判紙装 | 新聲社 |
| 四 | 永井荷風 | 小説 | 野心（新青年小説叢書第一冊） | 同 | 美育社 |
| 四 | 正岡子規 | 俳句集 | 獺祭書屋俳句帖抄 | 菊半截紙装 | 俳書堂 |
| 四 | 國府犀東 | 小品集 | 花籃集 | 四六判紙装 | 新聲社 |
| 四以降續刊 | 新聲社編 | 人物傳 | 現代百人豪 全四冊 | 菊判紙装 | 同 |
| 四至八 | 伊藤銀月 | 評論集 | 冷火熱火 全三冊 | 四六判紙装 | |
| 五 | 齋木仙醉 | 評論 | 詩星文星 | 同 | 新聲社 |
| 五 | 國學院大學松韻會編 | 詩歌論及詩歌集 | 滿津の響 第一輯 | 同 | 東洋社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 五 | 田山花袋 | 小説 | 重右衛門の最後「アカツキ」第五編 | | |
| 五 | 島村抱月 | 修辭學 | 新美辭學 | 菊判洋裝 | 早稻田大學出版部 |
| 六 | 坪內逍遙 | 英詩評釋 | 英詩文評釋 二册 | 菊判紙裝 | 同 |
| 六 | 正岡子規 | 俳論 | 四年間（俳諧叢書第十三編） | 菊半截紙裝 | 俳書堂 |
| 六 | 永井荷風 | 小説 | 地獄の花 | 四六判紙裝 | 金港堂 |
| 六 | 坪內逍遙 | 評論 | 文藝と教育 | 菊判洋裝 | 春陽堂 |
| 六 | 與謝野鐵幹 | 同 | 新派和歌大要 | 四六判紙裝 | 大學館 |
| 六 | 柳川春葉 | 小説 | 酒中花「アカツキ」第六編 | | |
| 六 | 內田魯庵 | 評論集 | 社會百面相 | 菊判紙裝 | 博文館 |
| 六 | 海賀變哲 | 小説文集 | 初つとめ | 四六判紙裝 | 內外出版協會 |
| 六 | 青木銀藏編 | 小説合集 | つり葱 | 三六判紙裝 | X倶樂部 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 六 | 幸田露伴 | 小說集 | 露伴叢書 | 菊判洋裝 | 博文館 |
| 六 | 緒方流水 | 評論集 | 靑眼白眼 | 四六判紙裝 | 星光社 |
| 七 | 矢野龍溪 | 小說 | 新社會 | 菊判紙裝 | 大日本圖書株式會社 |
| 七 | 日本新詩學會編 | 辭典 | 新派和歌辭典 | 菊半截紙裝 | 新聲社 |
| 七 | 登張竹風 | 評論集 | 氣焔錄 | 四六判紙裝 | 金港堂 |
| 七以降續刊 | 金港堂編 | 評論其他 | 文藝叢書 全五册 | 同 | 同 |
| 八 | 湯淺半月 | 詩集 | 半月集 | 三六判紙裝 | 大阪金尾文淵堂 |
| 八 | 德富蘆花 | 文集 | 靑蘆集 | 四六判紙裝 | 民友社 |
| 八 | 金港堂編 | 短篇集 | 教育小說 | 菊判紙裝 | 金港堂 |
| 八及九 | 同 | 小說叢書 | 金港堂小說叢書 全五册 | 菊判紙裝 | 同 |
| 九 | 森鷗外譯 | 譯文 | 卽興詩人 全册 | 菊判洋裝 | 春陽堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十及十二 | 正岡子規著 小谷保太郎編 | 隨筆 | 子規隨筆（正・續二册） | 同 | 吉川弘文館 |
| 十 | 山田美妙 | 作法書 | 新體詩作法 | 四六判紙装 | 嵩山堂 |
| 十 | 星野天知 島崎藤村 編 | 全集 | 透谷全集 | 四六判紙装 | 文武堂 |
| 十 | 山岸荷葉 | 小説 | 紺暖簾 | 菊判紙装 | 春陽堂 |
| 十一 | 岡野知十 | 俳論 | 俳諧風聞記 | 三六判紙装 | 白鳩社 |
| 十一 | 小谷保太郎編 | 評傳 | 子規言行錄 | 菊判紙装 | 吉川弘文館 |
| 十二 | 與謝野鐵幹 | 詩歌文集 | うもれ木 | 菊半截紙装 | 博文館 |
| 十二 | 森鷗外 | 劇詩 | 玉篋兩浦島 | 四六判紙装 | 歌舞伎發行所 |
| 五 | | 詩歌雜誌 | 山比古（第三號ニテ終刊） | | 白鳩社 |
| 六 | 與謝野鐵幹編 | 同 | 白百合（第一號ノミ刊） | | 明治書院 |
| 六 | 森鷗外等執筆 | 詩文雜誌 | 藝文（卷第二マデ刊） | | 文友館 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十 | 同 | 同 | 萬年草（通號十四册刊） | | 萬年草發行所 |

## 明治三十六年（癸卯）西暦一九〇三年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 下田歌子編 | 歌集 | 明治才媛歌集 | 半紙判和装 | 廣文堂書店 |
| 一 | 森田義郎 | 歌論 | 短歌小梯 | 四六判紙装 | 鳴皐書院 |
| 一 | 高安月郊 | 脚本 | 大鹽平八郎 | 菊判紙装 | 金港堂 |
| 一 | 山岸荷葉 | 小説 | 五人娘 | 同 | 文祿堂 |
| 一 | 泉鏡花 | 同 | 田毎かゞみ | 同 | 春陽堂 |
| 二 | 平木白星 | 詩集 | 日本國歌 | 四六判紙装 | 内外出版協會 |
| 二 | 佐々木信綱 印東昌綱 共著 | 歌文集 | 磯馴松 | 菊半截紙装 | 博文館 |
| 二 | 「婦人界」第一巻第八號 | 詩歌文集 | 閨秀文學號 | 菊判 | 金港堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 二以降續刊 | 大西祝 | 全集 | 大西博士全集 全七冊 | 菊判洋裝 | 警醒社 |
| 三 | 若松賤子遺稿 | 同 | 忘れ形見 | 四六判洋裝 | 文武堂 |
| 三 | 海上胤平 | 歌論 | 新自讃歌評論 | 半紙判和裝 | 文學々院 |
| 三 | 高安月郊 | 詩歌集 | 春雪集 | 菊判紙裝 | 著者自版 |
| 四 | 堺利彦 | 文集 | 枯川隨筆 | 四六判紙裝 | 内外出版協會 |
| 四 | 國府犀東 | 紀行文集 | 鷗影記 | 同 | 同 |
| 四 | 幸田露伴編 | 短篇集 | 新生田川 | 菊判紙裝 | 博文堂 |
| 五 | 蒲原有明 | 詩集 | 獨弦哀歌 | 四六判紙裝 | 白鳩社 |
| 五 | 黒岩涙香 | 評論 | 天人論 | 菊判紙裝 | 朝報社 |
| 五 | 寒川鼠骨 | 文集 | 寫生文 | 四六判紙裝 | 内外出版協會 |
| 自七至四一ノ九 | 大町桂月 | 評論集 | 筆のしづく 第一至三 | 菊判紙裝 | 文祿堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 五 | 齋藤綠雨 | 文集 | みだれ箱 | 菊半截紙装 | 博文館 |
| 五 | 高安月郊 | 脚本 | 江戸城明渡 | 菊判紙装 | 同 |
| 五 | 永井荷風 | 小説 | 夢の女 | 同 | 新聲社 |
| 自六至卅七ノ三 | 村井弦齋 | 雜著 | 食道樂　全四册 | 菊判和装 | 報知社 |
| 七 | 武島羽衣 | 詩歌文集 | 美文韻文霓裳微吟 | 菊半截紙装 | 博文館 |
| 七 | 幸德秋水 | 評論 | 社會主義神髓 | 菊判紙装 | 萬朝報社 |
| 八 | 兒玉花外 | 詩集 | 社會主義詩集 | 四六判紙装 | 社會主義圖書部 |

（本書ハ發行後直ニ發賣禁止トナリシモノ）

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 九 | 吉野臥城編 | 歌集 | 新韻集 | 四六半截紙装 | 仙臺新韻會出版部 |
| 九 | 森鷗外 | 敍事詩 | 長曾我部信親 | 菊半截紙装 | 國光社 |
| 九 | 「佛教文藝」第一卷第十號 | 詩文集 | 佛教文藝十二傑 | 雜誌型 | 佛教社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 九 | 登張竹風 | 評論 | 新教育論藝術篇 | 菊判紙装 | 有明館 |
| 九 | 坂本四方太 | 文集 | 寫生文集 | 四六判紙装 | 俳書堂 |
| 九 | 永井荷風 | 紹介評論 | 女優ナナ | 菊判紙装 | 新聲社 |
| 九 | 尾崎紅葉等 | 合集 | 詞海餘瀝 | 四六判紙装 | 芳文堂 |
| 九 | 草村北星 | 短篇集 | 七草集 | 菊判洋装 | 金港堂 |
| 十 | 尾崎紅葉編 | 同 | 換菓篇 | 五六判型紙装 | 博文館 |
| 十一 | 尾崎紅葉遺著 | 詩歌文集 | 草紅葉 | 五六型紙装 | 富山房 |
| 自十一至卅七ノ五 | 小杉天外 | 長篇小説 | 魔風戀風 全三冊 | 菊判洋装 | 春陽堂 |
| 十二 | 湯原元一 | 藝術論集 | 畫趣及詩趣 | 菊判洋装 | 金港堂 |
| 十二 | 尾崎紅葉譯 | 譯文 | 鐘樓守 全二冊 | 菊判紙装 | 早大出版部 |
| 十二 | 田山花袋 | 長篇小説 | 春潮 | 同 | 新聲社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十二 | 佐藤吉次編 | 詩歌文集 | 明治名文集 | 同 | 大日本圖書株式會社 |
| 一 | 「小國民」改題 | 文學雜誌 | 言文一致 | | 鳴皐書院 |
| 一 | 牧野望東主筆 | 俳句雜誌 | 卯杖（後「木太刀」ト改題） | | 秋聲會 |
| 一 | 野口寧齋主宰 | 漢詩雜誌 | 百花欄（第廿九號マテ刊） | | 鳴皐書院 |
| 六 | 根岸短歌會編 | 短歌雜誌 | 馬醉木 | | 根岸短歌會 |
| 十一 | 相馬御風等編 | 詩歌雜誌 | 白百合（四十年四月發行第四卷第六號マテ刊） | | 東京純文社 |

**明治三十七年**（甲辰）西暦一九〇四年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 姉崎嘲風（正治） | 文學及宗教評論集 | 復活の曙光 | 四六判洋裝 | 有明館 |
| 一 | 與謝野晶子 | 歌集 | 小扇 | 竪長型紙裝 | 大阪文淵堂 |
| 一至十二 | 巖谷小波・石橋思案共編 | 全集 | 紅葉全集　全六册 | 菊判洋裝 | 博文館 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一以降續刊 | 姉崎正治・齋藤信策共編 | 同 | 樗牛全集 全五冊 | 同 | 同 |
| 一及四 | 菊地幽芳 | 家庭小説 | 乳姉妹 二冊 | 同 | 春陽堂 |
| 二 | 兒玉花外 | 詩集 | 花外詩集 | 四六判紙装 | 大阪金尾文淵堂 |
| 二 | 横井時雄編 | 評論雑誌 | 時代思潮（第廿七號マデ刊） | | 時代思潮社 |
| 二 | 中川四明等編 | 俳句雑誌 | 懸葵（現存） | | 京都満月會 |
| 五 | 與謝野鐵幹・同晶子 | 詩歌文集 | 毒草 | 五六桝型洋装 | 本郷書院 |
| 五 | 落合直文 | 同 | 萩之家遺稿 | 四六判洋装 | 明治書院 |
| 五 | 巌眞一郎編 | 歌集 | 竹の里人選歌 | 菊半截紙装 | 根岸短歌會 |
| 五 | 木下尚江 | 小説 | 火の柱 | 四六判紙装 | 平民社 |
| 五 | 「新聲」改題 | 文學雑誌 | 新潮（現存） | | 新潮社 |
| 六 | 秋田雨雀 | 詩集 | 黎明 | 四六判紙装 | 中野書店 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 七及十 | 田口掬汀 | 小說 | 女夫波 全二冊 | 菊判洋裝 | 金色社 |
| 八 | 原口春鴻編 | 短篇集 | 三尺劍 | 菊判紙裝 | 國民書院 |
| 八 | 高橋五郎譯 | 飜譯 | ファウスト | 四六判紙裝 | 文榮閣 |
| 九 | 島崎藤村 | 詩集 | 藤村詩集 | 四六判洋裝 | 春陽堂 |
| 九 | 久保より江編 | 歌文集 | 瑠璃草 | 四六判紙裝 | 蘋社 |
| 十 | 小山内薫外六人編 | 文學雜誌 | 七人 | 菊判 | 七人發行所 |
| 十 | 日本葉書會編 | 文藝雜誌 | ハガキ文學 | 同 | 日本葉書會 |
| 十 | 松井柏軒 | 評論集 | 冷語熱語 | 四六判紙裝 | 松邑三松堂 |
| 十一 | 正岡子規遺著 | 詩歌集 | 竹の里歌 | 同 | 俳書堂 |
| 十一 | 尾上柴舟 | 詩歌集 | 銀鈴 | 三六判紙裝 | 新潮社 |
| 十一 | 小杉未醒 | 詩文集 | 陣中詩篇 | 同 | 嵩山房 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十一 | 坪内逍遥 | 評論 | 新樂劇論 | 四六判紙裝 | 早大出版部 |
| 十一 | 同 | 劇詩 | 新曲浦島 | 同 | 同 |
| 十二 | 岩野泡鳴 | 詩集 | 夕潮 | 同 | 有倫堂 |
| 十二 | 泉鏡花 | 小説 | 風流線 | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 自十二至卅九ノ七 | 木下尚江 | 同 | 良人の自白 全四册 | 四六判紙裝 | 梁江堂等 |
| 十二 | 野口米次郎 | 詩文集 | 歸朝の記 | 三六判洋裝 | 春陽堂 |
| 十二 | 田口掬汀 | 短篇集 | 幻影 | 四六判紙裝 | 新潮社 |

## 明治三十八年（乙巳）西暦一九〇五年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 幸田露伴作 | 長詩 | 心のあと出廬 | 四六判洋裝 | 春陽堂 |
| 一 | 神谷鶴伴作抄註 | 長詩評釋 | 出廬抄註 | 同 | 同 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 山川登美子外二人合著 | 詩歌集 | 戀衣 | 二七竪長紙装 | 本郷書院 |
| 一 | 田山花袋 | 從軍日記 | 第二軍從征日記 | 菊判紙装 | 博文館 |
| 一 | 河井醉茗編 | 文藝雜誌 | 女子文壇 | 同 | 女子文壇社 |
| 二 | 岩崎英重編 | 詩歌文集 | 山櫻集 | 四六判洋装 | 開發社 |
| 二 | 馬場孤蝶選 | 詞葉集 | 花がたみ | 桝型紙装 | 左久良書房 |
| 三 | 前田林外 | 詩集 | 夏花少女 | 四六判紙装 | 東京純文社 |
| 三 | みづほのや山百合合著 | 詩歌集 | 山上湖上 | 同 | 金色社 |
| 三 | 金子薫園 | 歌集 | 小詩國 | 三六判紙装 | 新潮社 |
| 四 | 成功雜誌社編 | 作文 | 現代名家作文秘訣 | 四六判紙装 | 成功雜誌社 |
| 四 | 柳川春葉 | 短篇集 | いさゝ川 | 菊判紙装 | 春陽堂 |
| 四 | 大倉桃郎 | 小説 | 琵琶歌 二册 | 菊判洋装 | 文淵堂外 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 五 | 國木田獨歩編 | 文藝雜誌 | 新古文林（第三卷第三號ニテ終刊） | | 近事畫報社 |
| 五 | 石川啄木 | 詩集 | あこがれ | 四六判紙裝 | 小田島書店 |
| 五 | 薄田泣菫 | 同 | 二十五弦 | 四六判洋裝 | 春陽堂 |
| 五 | 馬場孤蝶 | 文集 | 連翹 | 四六判紙裝 | 久友社 |
| 五 | 野口米次郎 | 英詩及文集 | 英米の十三年 | 菊判洋裝 | 春陽堂 |
| 五 | 中澤臨川 | 散文小品集 | 鬢華集 | 菊半截紙裝 | 七人發行所 |
| 六 | 岩野泡鳴 | 詩集 | 悲戀悲歌 | 四六判紙裝 | 有倫堂 |
| 六 | 薄田泣菫 | 詩歌文集 | 白玉姫 | 四六判洋裝 | 金尾文淵堂 |
| 六 | 河井醉茗 | 詩集 | 塔影 | 同 | 同 |
| 六 | 尾上柴舟 | 譯詩及創作詩 | 金帆 | 三六判紙裝 | 本郷書院 |
| 六 | 小島烏水 | 紀行集 | 不二山 | 四六判紙裝 | 如山堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 六 | 田口掬汀 | 短篇集 | 極樂村 | 菊判洋装 | 新潮社 |
| 七 | 三木露風 | 詩歌集 | 夏姫 | 三六判紙装 | 血汐會 |
| 七 | 蒲原有明 | 詩集 | 春鳥集 | 四六判洋装 | 本郷書院 |
| 七 | 山口孤劍等編 | 詩文集 | 荒村遺稿 | 同 | 白柳武司 |
| 七 | 綱島梁川 | 文集 | 梁川文集 | 菊判洋装 | 有倫堂 |
| 七 | 國木田獨歩 | 短篇集 | 獨歩集 | 四六判紙装 | 近事畫報社 |
| 七 | 平井晩村編 | 詞華集 | 明治才媛新體詩集 第一集 | 菊判紙装 | 文友社 |
| 七 | 小島烏水 | 文集 | 日本山水論 | 菊判洋装 | 隆文館 |
| 七 | 田山花袋 | 紀行文集 | 草枕 | 四六判洋装 | 同 |
| 八 | 清水橋村 正富汪洋 共著 | 詩歌集 | 夏ひさし | 細長型紙装 | 旭堂書店 |
| 八 | 長谷川天溪 | 評論 | 文藝觀 | 菊半截紙装 | 文明堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 八 | 泉鏡花 | 小説 | 續風流線 | 同 | 春陽堂 |
| 八 | 堺枯川 | 文集 | 半生の墓 | 菊半截紙装 | 平民書房 |
| 八 | 坪内銑雄 | 評論集 | 遺稿 宗教と文學 | 菊判紙装 | 文明堂 |
| 九 | 窪田空穗 | 詩歌集 | まひる野 | 四六判紙装 | 鹿鳴社 |
| 九 | 小山内薫 | 詩集 | 小野のわかれ（雜誌「七人」第九册） | 菊判紙装 | 七人發行所 |
| 九 | 石川啄木編 | 詩歌雜誌 | 小天地（第一號ノミ刊） | | 盛岡小天地發行所 |
| 九 | 雜誌「むさしの」第五卷第四號 | 詞華集 | むさしの | 四六判紙装 | 古今文學會 |
| 九 | 沼波瓊音 | 詩文集 | さへづり | 同 | 南江堂 |
| 九以降續刊 | 戸澤姑射 淺野馮虛 共譯 | 飜譯 | 沙翁全集 全十册 | 菊判洋装 | 大日本圖書株式會社 |
| 十 | 相馬御風 | 歌集 | 睡蓮 | 三六判紙装 | 東京純文社 |
| 十 | 泉鏡花 | 小説 | 伊勢の卷 | 菊半截紙装 | 春陽堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十 | 上田敏 | 譯詩集 | 海潮音 | 四六判洋裝 | 本郷書院 |
| 自十至四十ノ五 | 夏目漱石 | 小說 | 吾輩ハ猫デアル 全三册 | 菊判洋裝 | 大倉書店 |
| 十及卅九ノ一 | 田口掬汀 | 同 | 伯爵夫人 全二册 | 同 | 著者自版 |
| 自十至卅九ノ十一 | 小栗風葉 | 同 | 青春 全三册 | 四六判洋裝 | 春陽堂 |
| 十一 | 横瀬夜雨 | 詩集 | 花守 | 菊半截洋裝 | 隆文館 |
| 十一 | 中野逍遙 | 漢文及和歌集 | 逍遙遺稿 全二册 | 半紙判和裝 | 不破信一郎 |
| 十一 | 岩野泡鳴等執筆 | 詩歌雜誌 | 白鳩 | 四六倍判 | 韻文社 |
| 十一 | 坪內逍遙 | 劇詩 | 新曲赫映姫 | 半紙判和裝 | 早大出版部 |
| 十一 | 武田櫻桃 登張竹風 共著 | 詩文集 | こぼれ月 | 四六判紙裝 | 嵩山房 |
| 十二 | 當麻答郎編 | 俳文集 | 明治俳文集 | 同 | 梨華社 |
| 十二 | 德田秋聲 | 短篇集 | 花たば | 同 | 日高有倫堂 |

## 明治三十九年（丙午）西暦一九〇六年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 兒玉花外 | 詩集 | ゆく雲 | 四六判洋装 | 隆文館 |
| 一 | 高濱虛子 | 俳論俳話 | 俳諧馬の糞 | 菊判紙装 | 俳書堂 |
| 一 | 與謝野晶子 | 歌集 | 舞姫 | 三六判洋装 | 如山堂 |
| 一 | 泉鏡花 | 小說 | 誓の卷 | 菊判紙装 | 有倫堂 |
| 自一至四十ノ一 | 幸田露伴 | 同 | 天うつ浪 全三冊 | 菊判洋装 | 春陽堂 |
| 一 | 大塚楠緒子 | 短篇集 | 晴小袖 | 四六判紙装 | 隆文館 |
| 一 | 島村抱月編 | 文學雜誌 | 早稻田文學（第三期） | 菊判 | 金尾文淵堂 |
| 一 | 馬場孤蝶編 | 文藝雜誌 | 藝苑（第二期） | | 左久良書房 |
| 二 | 宮崎湖處子 | 文集 | 湖處子文集 | 四六判紙装 | 鹿鳴社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 二 | 中谷無涯 | 詩集 | すゐかつら | 同 | 春陽堂 |
| 二 | 細越夏村 | 同 | 靈笛 | 同 | 有倫堂 |
| 三 | 島崎藤村 | 小説 | 破戒「緑蔭叢書」本 | 同 | 著者自費出版 上田屋發賣 |
| 三 | 樋口龍峽 | 評論集 | 碧潮 | 同 | 嵩山房 |
| 三 | 國木田獨歩 | 短篇集 | 運命 | 四六判洋裝 | 左久良書房 |
| 三 | 田山花袋編 | 文藝雜誌 | 文章世界 | 菊判 | 博文館 |
| 三 | 虚子・四方太共著 | 寫生文集 | 帆立貝 | 菊判洋裝 | 俳書堂 |
| 三 | 幸田露伴 | 小品集 | 潮待ち草 | 同 | 東亞堂 |
| 四 | 金子薫園 | 歌集 | 伶人 | 三六判洋裝 | 短歌研究會 |
| 四及八 | 石川正作編 | 詩歌集 | 明治新體詩集 第一・二冊 | 四六判横綴紙裝 | 東洋社 |
| 四 | 櫻井忠温 | 戰記 | 肉彈 | 菊判紙裝 | 丁未出版社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 四 | 伊藤左千夫 | 小説 | 野菊の墓 | 四六判紙装 | 俳書堂 |
| 四 | 小島烏水 | 文集 | 烏水文集 | 四六判洋装 | 本郷書院 |
| 四 | 伊藤銀月 | 小説 | 美酒美女 | 菊判洋装 | 文祿堂 |
| 四 | 岡田八千代 | 小説 | 門の草 | 四六判紙装 | 如山堂 |
| 五 | 伊良子清白 | 詩集 | 孔雀船 | 四六判洋装 | 左久良書房 |
| 五 | 薄田泣菫 | 同 | 白羊宮 | 同 | 金尾文淵堂 |
| 五 | 河井醉茗 | 詩文集 | 玉蟲 | 同 | 女子文壇社 |
| 五 | 夏目漱石 | 短篇集 | 漾虚集 | 菊判布装 | 大倉書店 |
| 五 | 岡鬼太郎 | 小説 | 花柳巷談 二筋道 | 菊判紙装 | 隆文館 |
| 五 | 同 | 同 | 小説 晝夜帶 | 四六判紙装 | 左久良書房 |
| 六 | 落合直幸編 | 歌集 | 萩之家歌集 | 四六判洋装 | 明治書院 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 六 | 土井晩翠 | 詩集 | 東海遊子吟 | 同 | 大日本圖書株式會社 |
| 六 | 前田林外 | 同 | 花妻 | 同 | 如山堂 |
| 六 | 岩野泡鳴 | 評論集 | 神秘的半獸主義 | 菊判洋裝 | 左久良書房 |
| 六 | 佐藤湖月編 | 文集 | 明治大家文集 | 同 | 日高有倫堂 |
| 六 | 泉鏡花 | 小說 | 七本櫻 | 四六判紙裝 | 同 |
| 六 | あやめ會編 | 詩集 | あやめ草 | 菊判紙裝 | 如山堂 |
| 六 | 高安月郊 | 脚本・詩 | 寢覺草 | 同 | 金尾文淵堂 |
| 六 | 高須梅溪 | 文集 | 我が散文詩 | 三五判洋裝 | 岡村書店 |
| 六 | 遲塚麗水 | 紀行集 | ふところ硯 | 菊判洋裝 | 左久良書房 |
| 六 | 內海月杖 | 譯文集 | われから | 四六判洋裝 | 寶文館 |
| 六 | 水谷不倒編 | 文藝雜誌 | 趣味（四十三年七月發行第五卷第七號終刊） | | 彩雲閣 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 七 | 横瀬夜雨 | 詩文集 | 花守日記 | 四六判洋装 | 本郷書院 |
| 七 | 高須梅溪 | 評論集 | 青春雜筆 | 菊判洋装 | 美也古書房 |
| 七及九 | 寒川鼠骨編 | 句集 | 明治四大家俳句集（全二册） | 四六半截横綴紙装 | 大學館 |
| 七 | 水野葉舟 窪田空穂 | 歌集 | 明暗 | 四六判紙装 | 金曜社 |
| 七 | 小島烏水 | 紀行文集 | 山水無盡藏 | 四六判洋装 | 隆文館 |
| 七 | 水野葉舟 | 詩文集 | あらゝぎ | 四六判紙装 | 金曜社 |
| 八 | 登張竹風 | 評論集 | 筆舌錄 | 四六判洋装 | 春陽堂 |
| 八 | 高橋淡水 | 文學史 | 時代文學史 | 四六判紙装 | 開發社 |
| 八 | 益世堂書店編 | 短篇集 | 名家短篇傑作集 | 菊判洋装 | 益世堂 |
| 八 | 薄田斬雲 | 評論集 | 片雲集 | 四六判紙装 | 敬文館 |
| 九 | 藤代素人 | 同 | 草露集 | 菊判洋装 | 大倉書店 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 九 | 伊原青々園・後藤宙外共編 | 談話集 | 唾玉集 | 菊判洋裝 | 春陽堂 |
| 九 | 久保天隨編 | 文集 | 明治百家文選 | 同 | 隆文館 |
| 九 | 與謝野晶子 | 歌集 | 夢の華 | 三六判洋裝 | 金尾文淵堂 |
| 九以降續刊 | 博文館編 | 作文全書 | 通俗作文全書 全廿四冊 | 四六判紙裝 | 博文館 |
| 十 | 西本波太編 | 合集 | 小萩集 | 菊半截紙裝 | 帝國婦人協會 |
| 自十至四十一ノ七 | 小杉天外 | 小說 | コブシ 全三冊 | 菊判洋裝 | 章光閣 |
| 十一 | 早稻田文學社編 | 詩歌集 | 少年文庫 一之卷 | 四六判紙裝 | 金尾文淵堂 |
| 十一 | 小山內薰 | 散文詩 | 夢見草 | 同 | 本鄉書院 |
| 十一 | 一色醒川 | 宗教詩集 | 頌榮 | 同 | 京華堂書店 |
| 十一 | 「中學世界」第九卷第十五號 | 作文 | 作文叢話 | | 博文館 |
| 十一 | 生田葵山 | 小說 | 富美子姬（發禁） | 菊判洋裝 | 左久良書房 |

十一　島村抱月　短稿集　亂雲集　洋四六判　彩雲閣
十二　岩城準太郎　文學史　明治文學史　洋菊判　育英舍
十二　木下尚江　小說　懺悔　紙四六判　文淵堂
十二　青山霞村　口語歌集　池塘集　洋三六判　秋草山廬
十二　泉鏡花　脚本　愛火　洋菊判　春陽堂
十二　岡田八千代　小說　新緣　紙菊判　石割書店

明治四十年（丁未　西暦一九〇七年）

一　久保天隨　評論集　文壇獅子吼　紙四六判　日高有倫堂
一　夏目漱石　小說集　鶉籠　紙菊判　春陽堂
一　泉鏡花　小說　式部小路　同　隆文館

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 坂本四方太等 | 文集 | 新寫生文 | 四六判紙装 | 東亞堂 |
| 一 | 兒玉花外 | 詩集 | 天風魔帆 | 菊半截紙装 | 平民書房 |
| 一 | 「日本人」改題 | 評論雜誌 | 日本及日本人 | 四六倍判 | 政教社 |
| 一 | | 演劇雜誌 | 演藝畫報 | 同 | 演藝畫報社 |
| 二 | 横瀬夜雨 | 詩集 | 二十八宿 | 四六判洋装 | 金尾文淵堂 |
| 二 | 木村鷹太郎 | 評論集 | 眞善美・美之卷 | 菊判背革洋装 | 文祿堂 |
| 二 | 森鷗外 | 小說 | 舞姫（和英兩文） | 三五判洋装 | 彩雲閣 |
| 二 | 佐野天聲 | 脚本 | 不死の誓 | 四六判洋装 | 金尾文淵堂 |
| 三 | 前田林外選 | 民謠集 | 日本民謠全集　全二册 | 四六判紙装横綴 | 本郷書院 |
| 三 | 野口雨情 | 詩集 | 朝花夜花 | | 明文舍 |
| 三 | 平野萬里 | 歌集 | 若き日 | 四六判洋装 | 左久良書房 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 三 | 金子薫園 | 同 | わがおもひ | 三六判紙装 | 弘成館 |
| 四 | 沼波瓊音 | 俳論 | 俳論史 | 三六判紙装 | 文禄堂 |
| 四 | 坂本四方太 | 寫生文 | 續寫生文集 | 四六判洋装 | 俳書堂 |
| 四 | 「文章世界」第二巻第四號 | | 文と詩 | | 博文館 |
| 四 | 小林愛雄 | 詩集 | 管絃 | 四六判紙装 | 彩雲閣 |
| 四 | 鈴木三重吉 | 短篇集 | 千代紙 | 同 | 俳書堂 |
| 四 | 木下尚江 | 文集 | 飢渇 | 同 | 昭文堂 |
| 四及五 | 泉鏡花 | 小説 | 深川染 二册 | 菊判紙装 | 春陽堂 |
| 五 | 夏目漱石 | | 文學論 | 菊判洋装 | 大倉書店 |
| 五 | 木下尚江 | 小説 | 靈か肉か 二册 | 四六判紙装 | 文淵堂 |
| 五 | 坪内逍遙 | 評論集 | 文藝瑣談 | 菊判洋装 | 春陽堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 五 | 森田思軒 | 譯文集 | 思軒全集 第一卷 | 同 | 石割書店 |
| 五 | 河東碧梧桐編 | 俳句集 | 續春夏秋冬 全四冊 | 菊半截紙装 | 俳書堂 |
| 五 | 尾上柴舟 | 歌集 | 靜夜 | 四六判洋装 | 隆文館 |
| 五 | 國木田獨歩 | 短篇集 | 濤聲 | 菊判洋装 | 彩雲閣 |
| 五 | 田山花袋 | 同 | 草籠 | 四六判洋装 | 服部書店 |
| 五 | 戸川秋骨 | 譯文 | 譯文美文 西詩餘情 | 菊判紙装 | 左久良書房 |
| 五 | 「早稲田文學」增刊 中村星湖作 | 小說 | 少年行（佐野天聲作、脚本「意志」ヲ合綴ス） | | 早稲田文學社 |
| 六 | 齋藤信策 | 評論集 | 藝術と人生 | 菊判紙装 | 昭文堂 |
| 六 | 「太陽」第十三卷第九號 | | 明治名著集 | 四六倍紙装 | 博文館 |
| 六 | 中村秋香著 武藤元信編 | 歌集 | 秋香集 | 半紙判和装 | 五車樓 |
| 六 | 小川未明 | 短篇集 | 愁人 | 四六判洋装 | 隆文館 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 六 | 伊藤銀月 | 紀行文集 | 海草 | 四六判紙装 | 左久良書房 |
| 六 | 澁川玄耳 | 雜著 | 東京見物 | 同 | 文淵堂 |
| 六 | 伊藤銀月 | 評論 | 現代日本の思想界 | 菊判洋装 | 文祿堂 |
| 七 | 畔柳芥舟 | 同 | 文談花談 | 菊判洋装 | 春陽堂 |
| 七 | 角田浩々歌客 | 同 | 鷗心錄 | 四六判洋装 | 文淵堂 |
| 七 | 柳川春葉 | 短篇集 | 春葉集 | 四六判紙装 | 今古堂 |
| 七 | 小島烏水 | 紀行文集 | 雲表 | 四六半截洋装 | 左久良書房 |
| 七 | 桂木律水 持原皿山 編 | 詩文集 | 弱者 | 菊半截紙装 | 平民書房 |
| 七 | 佐野天聲 | 脚本 | 大農 | 菊判紙装 | 都新聞社 |
| 八 | 二葉亭四迷 | 小說 | 其面影 | 菊判洋装 | 春陽堂 |
| 九 | 森鷗外 | 詩歌俳句集 | うた日記 | 四六判布装 | 同 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 九 | 山本榮次郎編 | 美文韻文 | 白百合　一册 | 四六判紙装 | 大阪矢島誠進堂 |
| 九 | 松原至文 | 評傳 | 尾崎紅葉 | 菊判紙装 | 文祿堂 |
| 九 | 中村樂天 | 俳句集 | 明治の俳風 | 同 | 俳書堂 |
| 九 | 正宗白鳥 | 短篇集 | 紅塵 | 四六判紙装 | 彩雲閣 |
| 九 | 遲塚麗水等 | 紀行文集 | 金剛杖 | 同 | 春陽堂 |
| 十 | 小山內薫等 | 文學雜誌 | 新思潮（第一期） | （第六號マデ發行） | 潮文閣 |
| 十 | 「文章世界」第二卷第十一號 | | 文話詩話 | | 博文館 |
| 十 | 河東碧梧桐 | 俳話 | 新俳句研究法 | 四六判紙装 | 大學館 |
| 十 | 澁川玄耳 | 從軍記 | 從軍三年 | 菊判洋装 | 春陽堂 |
| 十 | 白柳秀湖 | 小品集 | 離愁 | 菊半截紙装 | 隆文館 |
| 十 | 齋藤綠雨 | 文集 | 綠雨遺稿 | 同 | 木下出版商社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十一 | 三井甲之 | 詩集 | 消なば消ぬかに | 同 | 彩雲閣 |
| 十一 | 生田長江 | 評論 | 文學入門 | 四六判紙裝 | 新潮社 |
| 十一 | 前田夕暮 | 歌集 | 哀樂 第一 | 同 | 白日社 |
| 十一 | 生田葵山 | 小說 | 虛榮 前・後二册 | 菊判紙裝 | 易風社 |
| 十一 | 幸田露伴 | 歌文集 | 蝸牛庵夜譚 | 菊判洋裝 | 春陽堂 |
| 十二 | 岩野泡鳴 | 作法 | 新體詩の作法 | 四六判紙裝 | 修文館 |
| 十二 | 生田星郊編 | 詩文集 | 明治時代文範 「通俗作文全書」ノ內 | | |
| 十二 | 二葉亭四迷譯 | 譯文 | カルコ集 | 四六判洋裝 | 春陽堂 |
| 十二 | 芳賀矢一 | 文學史 | 明治文學 (「開國五十年史」下卷所載) | | |
| 十二 | 小川未明 | 短篇集 | 綠髮 | 四六判紙裝 | 隆文館 |
| 十二 | 眞山青果 | 同 | 青果集 | 四六判洋裝 | 新潮社 |

## 明治四十一年（戊申）西暦一九〇八年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 杉村楚人冠 | 評論集 | 七花八裂 | 四六判紙装 | 丙午出版社 |
| 一 | 吉野臥城編 | 詞華集 | 明治詩集 | 同 | 昭文堂 |
| 一 | 蒲原有明 | 詩集 | 有明集 | 四六判洋装 | 易風社 |
| 一 | 高濱虛子 | 短篇集 | 鷄頭 | 菊判洋装 | 春陽堂 |
| 一 | 田山花袋 | 小說 | 生 | 菊判紙装 | 易風社 |
| 一 | 夏目漱石 | 小說 | 虞美人草 | 同 | 春陽堂 |
| 一 | 泉鏡花 | 同 | 草迷宮 | 四六判洋装 | 同 |
| 一 | 島崎藤村 | 短篇集 | 綠葉集 | 四六判紙装 | 同 |
| 二 | 長谷川濤涯編 | 評註現代傑作 | 華籠 | 菊判紙装 | 宮本武林堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 二 | 田山花袋 | 短篇集 | 村の人 | 菊判洋裝 | 如山堂 |
| 二 | 薄田泣菫 | 文集 | 落葉 | 四六判洋裝 | 獅々吼書房 |
| 二 | 泉鏡花 | 小說 | 高野聖 | 菊判洋裝 | 左久良書房 |
| 二及六 | 同 | 同 | 婦系圖 全二册 | 同 | 春陽堂 |
| 三 | 石川正作編 | 詩歌文集 | 明治才媛文集 第二集 | 菊判紙裝 | 東洋社 |
| 三 | 二葉亭四迷 | 小說 | 平凡 | 四六判洋裝 | 如山堂 |
| 自三至四 十二ノ三 | 田山花袋 | 短篇集 | 花袋集 全二册 | 菊判洋裝 | 易風社 |
| 三 | 小栗風葉 | 小說 | 天才 | 四六判洋裝 | 隆文館 |
| 三及六 | 菊地幽芳 | 同 | 月魄 全二册 | 同 | 文淵堂 |
| 三 | 兒玉花外 高濱長江 編 | 文藝雜誌 | 火柱（第十號限り廢刊） | | ほのほ會 |
| 四 | 岩野泡鳴 | 詩集 | 闇の盃盤 | 四六判紙裝 | 有倫堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 四 | 田山花袋編 | 小說集 | 二十八人集 | 菊判洋裝 | 新潮社 |
| 四 | 佐藤紅綠 | 短篇集 | 榾 | 四六判紙裝 | 服部書店 |
| 四 | 後藤宙外 | 同 | 名倉山 | 四六判洋裝 | 春陽堂 |
| 四 | 武者小路實篤 | 短篇及詩文集 | 荒野 | 四六判紙裝 | 警醒社 |
| 五 | 澁川玄耳 | 小品集 | 閑耳目 | 同 | 春陽堂 |
| 六 | 相馬御風 | 詩集 | 御風詩集 | 同 | 新潮社 |
| 六 | 河井醉茗 | 作法 | 新體詩作法 | 同 | 博文館 |
| 六 | 小栗風葉等 | 小說集 | 三人叢書 | 菊判洋裝 | 國民書院 |
| 六 | 小栗風葉 | 短篇集 | 風葉集 | 四六判洋裝 | 新潮社 |
| 六 | 田山花袋 | 紀行文集 | 函嶺紀行 | 四六判紙裝 | 日本葉書會 |
| 六 | 幸田露伴 | 小品集 | 小品十種 | 菊判洋裝 | 成功雜誌社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 六 | 遲塚麗水 | 紀行文集 | 露分衣 | 菊判紙裝 | 文祿堂 |
| 六 | 隆文館編 | 文藝思潮 | 最新思潮講話 | 菊判洋裝 | 隆文館 |
| 七 | 久保天隨 中内蝶二合著 | 美文集 | 美文韻文藻かり舟 | 四六判紙裝 | 昭文館 |
| 七 | 與謝野晶子 | 歌集 | 常夏 | 三六判洋裝 | 大倉書店 |
| 七 | 若山牧水 | 同 | 海の聲 | 四六判洋裝 | 生命社 |
| 七 | 長谷川天溪 | 評論集 | 自然主義 | 四六判紙裝 | 博文館 |
| 七 | 二葉亭四迷譯 | 譯文 | 血笑記 | 四六判洋裝 | 易風社 |
| 七 | 國木田獨歩 | 短篇集 | 獨歩集第二 | 同 | 彩雲閣 |
| 七 | 宮崎湖處子 | 自傳小說 | 自白 | 四六判紙裝 | 如山堂 |
| 七 | 木下尚江 | 小說 | 乞食 | 同 | 昭文堂 |
| 八 | 永井荷風 | 短篇集 | あめりか物語 | 同 | 博文館 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 八 | 小山内　薫 | 同 | 窓 | 四六判洋装 | 春陽堂 |
| 八 | 大塚楠緒子 | 小説 | 露 | 同 | 昭文堂 |
| 九 | 後藤宙外 | 評論集 | 非自然主義 | 四六判紙装 | 春陽堂 |
| 九 | 二葉亭四迷譯 | 飜譯 | 浮草 | 菊判紙装 | 金尾文淵堂 |
| 九 | 夏目漱石 | 小説集 | 草合 | 菊判紙装 | 春陽堂 |
| 九 | 山路愛山 | 文集 | 愛山文集 | 同 | 隆文館 |
| 九 | 小島烏水 | 紀行文集 | 山水美論 | 四六判紙装 | 如山堂 |
| 九 | 徳田秋聲 | 短篇集 | 秋聲集 | 菊判洋装 | 易風社 |
| 九以降續刊 | 隆文館編 | 文集叢刊 | 時文叢書　全五册 | 菊半截紙装 | 隆文館 |
| 十 | 伊藤左千夫編 | 短歌雜誌 | アララギ | 菊判 | 千葉アララギ社 |
| 十 | 岩野泡鳴 | 評論集 | 新自然主義 | 四六判紙装 | 有倫堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十 | 坪内逍遙 | 同 | 倫理と文學 | 菊判洋裝 | 富山房 |
| 十及四十二ノ一 | 國木田獨歩 | 感想錄 | 欺かざるの記 全二册 | 同 | 左久良書房 |
| 十及四十三ノ一 | 内田魯庵譯 | 飜譯 | 復活 全二册 | 菊判紙裝 | 丸善 |
| 十 | 石橋思案校 | 日記 | 十千萬堂日錄 | 四六判洋裝 | 左久良書房 |
| 十 | 白柳秀湖 | 評論集 | 鐵火石火 | 四六判紙裝 | 隆文館 |
| 十 | 正宗白鳥 | 短篇集 | 何處へ | 同 | 易風社 |
| 十一 | 國木田獨歩 | 從軍記 | 愛弟通信 | 四六判洋裝 | 左久良書房 |
| 十一 | 戸川秋骨 | 評論集 | 時代私觀 | 四六判紙裝 | 日高有倫堂 |
| 十一 | 眞山青果 | 短篇集 | 奔流 | 四六判洋裝 | 新潮社 |
| 十一 | 小杉天外 | 同 | 回想記 | 菊判洋裝 | 讀賣新聞社 |
| 十二 | 芳賀矢一編 | 詩歌文集 | 曉靄集 | 四六判紙裝 | 東亞協會 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十二 | 三宅雪嶺 | 評論集 | 宇宙 | 菊判洋裝 | 政教社 |
| 十二 | 小山内薫 | 演劇論 | 演劇新潮 | 四六判紙裝 | 博文館 |
| 十二 | 木下尚江 | 小說 | 墓場 | 同 | 昭文堂 |
| 十二 | 中村星湖 | 短篇集 | 半生 | 同 | 早稻田文學社 |
| 十二 | 岡田八千代 | 小說 | 黃橙 | 同 | 春陽堂 |

**明治四十二年**（己酉）西暦一九〇九年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 平野萬里等編 | 詩歌雜誌 | スバル | 菊判 | 昴發行所 |
| 一 | 高濱虛子 | 長篇小說 | 俳諧師 | 菊判洋裝 | 民友社 |
| 一 | 宮崎湖處子 | 小說 | 妻君の自白 | 四六判紙裝 | 今古堂 |
| 一 | 後藤宙外 | 短篇集 | 裾野　前・後編二册 | 菊判洋裝 | 春陽堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 小杉天外 | 小說 | 長者星 二冊 | 同 | 同 |
| 一 | 內藤鳴雪 | 句集 | 鳴雪句集 | 四六判紙裝 | 俳書堂 |
| 一以降續刊 | 隆文館編 | 叢書 | 小品叢書 全十册 | 菊半截洋裝 | 隆文館 |
| 一 | 田山花袋 | | 花袋小品「小品叢書」ノ內 | | |
| 二 | 「太陽」增刊『明治史』第七編 | 文學史 | 文藝史 | 四六倍紙裝 | 博文館 |
| 二 | 坪內逍遙 | 評論集 | 作と評論 | 菊判洋裝 | 富山房 |
| 二 | 小川未明 | 短篇集 | 惑星 | 四六判紙裝 | 春陽堂 |
| 三 | 大町桂月等編 | 合集 | むら雲 | 菊判洋裝 | 有倫堂 |
| 三 | 北原白秋 | 詩集 | 邪宗門 | 四六判洋裝 | 易風社 |
| 三 | 永井荷風 | 短篇集 | ふらんす物語 | 四六判紙裝 | 博文館 |
| 三 | 夏目漱石 | 評論 | 文學評論 | 菊判洋裝 | 春陽堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 三 | 樋口龍峽 | 評論集 | 時代と文藝 | 四六判紙裝 | 博文館 |
| 三 | 外山正一 | 評論及詩文集 | ゝ山存稿 全二冊 | 菊判洋裝 | 丸善 |
| 三 | 內藤鳴雪 | 作法 | 俳句作法 | 四六判紙裝 | 博文館 |
| 三 | 吉江孤雁 | 文集 | 綠雲 | 四六判洋裝 | 如山堂 |
| 四 | 大町桂月 | 詩文集 | 行雲流水 | 菊半截紙裝 | 博文館 |
| 四 | 大和田建樹 | 散文韻文 | 野菊 | 同 | 同 |
| 四 | 小山內薫 | 短篇集 | 蝶 | 四六判洋裝 | 水野書店 |
| 四 | 泉鏡花 | 同 | 柳筥 | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 四 | 德田秋聲 | 短篇集 | 出產 | 四六判洋裝 | 左久良書房 |
| 四 | 三宅花圃 | 歌文 | 花の趣味 | 菊判紙裝 | 服部書店 |
| 四 | 石榑千亦 | 歌集 | 利根川 | 同 | 竹柏會 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 五 | 河東碧梧桐編 | 句集 | 日本俳句鈔 第一輯 上・下二冊 | 四六判紙装 | 政教社 |
| 五 | 田山花袋 | 長篇小説 | 妻（三部作ノ内） | 菊判紙装 | 今古堂 |
| 五 | 夏目漱石 | 小説 | 三四郎 | 菊判布装 | 春陽堂 |
| 五 | 正宗白鳥 | 短篇集 | 白鳥集 | 四六判洋装 | 左久良書房 |
| 五 | 與謝野晶子 | 歌集 | 佐保姫 | 同 | 日吉丸書房 |
| 五 | 薄田泣菫 | | 泣菫小品「小品叢書」ノ内 | | |
| 五 | 泉鏡花 | 感想小品紀行集 | 春宵讀本 | 菊判紙装 | 文泉堂 |
| 五 | 海賀變哲 | | 新式小説辭典 | 三六判洋装 | 博文館 |
| 六 | 碧梧桐・虚子編 | 句集 | 子規句集 | 四六判紙装 | 俳書堂 |
| 六 | 島村抱月 | 評論集 | 近代文藝の研究 | 菊判洋装 | 早大出版部 |
| 六 | 大町桂月等編 | 小説文集 | 寄る波 | 同 | 有倫堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 六 | 田山花袋 | 作法 | 小說作法 | 紙四六判 | 博文館 |
| 六 | 內田魯庵 | 短篇及隨筆集 | イカモノ | 同 | 金尾文淵堂 |
| 六以降續刊 | 博文館編 | 小說叢書 | 名家小說文庫 全十二册 | 洋菊判 | 博文館 |
| 六 | 鳥谷部春汀 | 全集 | 春汀全集 全三册 | 同 | 同 |
| 六 | 森鷗外譯 | 飜譯 | 一幕物 | 同 | 易風社 |
| 六 | 木下尙江 | 小說 | 勞働 | 紙四六判 | 昭文堂 |
| 六 | 姉崎嘲風 | 隨筆 | 花つみ日記 | 洋四六判 | 博文館 |
| 六 | 奥山秀和編 | 合集 | 新小說集 | 紙菊判 | 一二三館 |
| 七 | 中村武羅夫 | 人物月旦 | 現代文士二十八人 | 紙菊半截 | 日高有倫堂 |
| 七 | 大町桂月 樋口龍峽 編 | 文集 | 千波萬波 | 洋菊判 | 同 |
| 七 | 博文館編 | 全集 | 眉山全集 全四册 | 同 | 博文館 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 七 | 春陽堂編 | 同 | 同（全三冊） | 同 | 春陽堂 |
| 七 | 篠山吟葉 星野麥人 編 | 小說集 | 小說十二人集 | 菊判洋裝 | 博文館 |
| 七 | 眞山青果 | 短篇集 | 壁上 | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 八 | 坪內逍遙 內田魯庵 共編 | 評傳 | 二葉亭四迷 | 同 | 易風社 |
| 八 | 尾上柴舟 | 歌集 | 永日 | 四六判洋裝 | 弘道館 |
| 八 | 長谷川如是閑 | 小說 | 額の男 | 同 | 政教社 |
| 九 | 吉野臥城 | 評論 | 新體詩研究 | 四六判紙裝 | 昭文堂 |
| 九 | 三木露風 | 詩集 | 廢園 | 四六判洋裝 | 光華書房 |
| 九 | 島崎藤村 | 感想文集 | 新片町より | 菊半截紙裝 | 左久良書房 |
| 九 | 大町桂月 | 文集 | 筆ぐさ | 四六判紙裝 | 金尾文淵堂 |
| 九 | 永井荷風 | 短篇集 | 歡樂 | 同 | 易風社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 九 | 泉鏡花 | 小說 | 神鑿 | 菊判紙裝 | 文泉堂 |
| 九 | 同 | | 鏡花小品 | 菊半截紙裝 | 隆文館 |
| 九 | 高濱虛子 | 小說 | 續俳諧師 | 菊判洋裝 | 民友社 |
| 九 | 芳賀矢一 | 歌文 | 月雪花 | 四六判洋裝 | 文會堂 |
| 九 | 岡田八千代 | 小說 | 恐怖 | 同 | 水野書店 |
| 十 | 田山花袋 | 同 | 田舍教師 | 菊判紙裝 | 左久良書房 |
| 十 | 中江兆民 | 文集 | 兆民文集 | 菊判洋裝 | 有倫堂 |
| 十 | 永井荷風 | 短篇集 | 荷風集 | 四六判紙裝 | 易風社 |
| 十 | 木下尙江 | 文集 | 荒野 | 同 | 昭文堂 |
| 十 | 眞山靑果 | 短篇集 | 四十二年 | 同 | 日高有倫堂 |
| 十 | 同 | 同 | 南小泉村 | 四六判紙裝 | 今古堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十 | 長田秀雄編 | 文藝雜誌 | 屋上庭園（第二號限リ禁止廢刊） | | 屋上庭園發行所 |
| 十一 | 田山花袋 | 文集 | インキ壺 | 菊半截紙裝 | 左久良書房 |
| 十一 | 大日本國民學會編 | 年史 | 明治四十年史 | 菊判洋裝 | 國民書院 |
| 十一 | 高濱虛子 | | 虛子小品 | 菊半截洋裝 | 隆文館 |
| 十一 | 吉江孤雁 | 紀行文集 | 高原 | 菊半截判 | 如山堂 |
| 十一 | 小杉天外 | 短篇集 | 草笛 | 菊判洋裝 | 章光閣 |
| 十一 | 水野葉舟 | 同 | 微溫 | 菊判紙裝 | 易風社 |
| 十二 | 德富蘆花 | 小說 | 寄生木 | 菊判洋裝 | 警醒社 |
| 十二 | 早稻田文學社編 | 事彙 | 文藝百科全書 | 四六倍判洋裝 | 隆文館 |
| 十二 | 坪內逍遙譯 | 飜譯 | 沙翁全集ハムレット | 四六判洋裝 | 早大出版部 |
| 十二 | 高濱虛子 | 短篇集 | 凡人 | 菊判洋裝 | 春陽堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十二 | 國木田獨歩<br>同　治子 合著 | 小說集 | 黃金の林 | 同 | 有倫堂 |
| 十二 | 島崎藤村 | 短篇集 | 藤村集 | 四六判紙装 | 博文館 |
| 十二 | 正宗白鳥 | 小說 | 落日 | 同 | 左久良書房 |

## 明治四十三年（庚戌）西暦一九一〇年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 若山牧水 | 歌集 | 獨り歌へる | 菊判紙装 | 名古屋 八少女會 |
| 一 | 夏目漱石 | 小說 | それから | 菊判洋装 | 春陽堂 |
| 一 | 長谷川天溪 | 文集 | 萬年筆 | 菊半截紙装 | 左久良書房 |
| 一 | 泉鏡花 | 小說集 | 鏡花集 全五册 | 同 | 春陽堂 |
| 一 | 森鷗外 | 飜譯戲曲 | 續一幕物 | 菊判洋装 | 易風社 |
| 一 | 青山霞村 | 詩歌集 | 草山の詩 | 四六判紙装 | 至誠堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 麥人・吟葉共編 | 文集 | 紅葉遺文 | 四六判洋裝 | 隆文館 |
| 二 | 齋藤緑雨 | 短篇集 | 緑雨集 | 四六判横綴 | 春陽堂 |
| 二 | 澁川玄耳 | 小品集 | 玄耳小品 | 菊半截洋裝 | 隆文館 |
| 二 | 泉鏡花 | 小說 | 白鷺 | 菊判洋裝 | 春陽堂 |
| 二以降續刊 | 森田草平 | 長篇小說 | 煤煙 全四册 | 菊判洋裝 | 著者自版 |
| 三 | 德田秋江 | 隨筆 | 文壇無駄話 | 菊半截紙裝 | 光華書房 |
| 三 | 金子薫園 | 歌集 | 覺めたる歌 | 三六判紙裝 | 春陽堂 |
| 三 | 與謝野寛 | 同 | 相聞 | 四六判洋裝 | 明治書院 |
| 三 | 若山牧水編 | 文藝雜誌 | 創作 | 菊判 | 東雲堂 |
| 四 | 土岐哀果 | ローマ字歌集 | Nakiwarai | 四六判洋裝 | ローマ字ひろめ會 |
| 四 | 中村星湖 | 短篇集 | 星湖集 | 四六判紙裝 | 東雲堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 四 | 若山牧水 | 歌集 | 別離 | 菊半截洋裝 | 同 |
| 四 | 武者小路實篤等編 | 文藝雜誌 | 白樺（大正十二年九月終刊） | | 洛陽堂 |
| 四 | 京都帝大文學部機關 | 學藝雜誌 | 藝文（昭和六年三月終刊） | | 開成館 |
| 五以降續刊 | 東京朝日新聞社編 | 全集 | 二葉亭全集　全四册 | 菊判洋裝 | 朝日新聞社 |
| 五 | 永井荷風編 | 文學雜誌 | 三田文學 | 菊判 | 三田文學會 |
| 五 | 夏目漱石 | 短篇集 | 漱石近什四篇 | 菊判洋裝 | 春陽堂 |
| 五 | 岩野泡鳴 | 同 | 耽溺 | 四六判洋裝 | 易風社 |
| 三 | 前田夕暮 | 歌集 | 收穫 | 四六判紙裝 | 同 |
| 五 | 田山花袋 | 短篇集 | 近作十五篇 | 四六判洋裝 | 博文房 |
| 五 | 永井荷風 | 長篇小說 | 冷笑 | 同 | 左久良書房 |
| 五 | 中村吉藏 | 社會劇 | 牧師の家 | 同 | 新橋堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 五 | 河井醉茗 | 散文詩集 | 霧 | 四六判紙裝 | 東雲堂 |
| 六 | 博文館版 | 全集 | 獨步全集 全二册 | 菊判洋裝 | 博文館 |
| 六 | 上田敏 | 長篇小說 | うづまき | 同 | 大倉書店 |
| 六 | 木下尚江 | 小說 | 火宅 | 四六判紙裝 | 弘學館 |
| 六 | 森しげ女 | 短篇集 | あだ花 | 菊判洋裝 | 同 |
| 七 | 與謝野寬 | 詩歌集 | 檞の葉 | 菊半截洋裝 | 博文館 |
| 七 | 大町桂月 | 評論集 | ちび筆 | 四六判紙裝 | 至誠堂 |
| 七 | 岩野泡鳴 | 小說 | 放浪 | 菊判洋裝 | 東雲堂 |
| 自七至大正四ノ七 | 小島烏水 | 文集 | 日本アルプス 全四册 | 同 | 前川文榮閣 |
| 七 | 小山內薰 | 短篇集 | 笛 | 四六判洋裝 | 春陽堂 |
| 七 | 遲塚麗水 | 紀行文集 | 山水往來 | 同 | 良明堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 七 | 福地櫻痴 | 時文大觀 | 櫻痴文集 | 菊半截紙裝 | 時文大觀刊行會 |
| 八 | 巖谷小波 | 少年文學 | 小波お伽百話 | 四六判洋裝 | 博文館 |
| 九 | 吉井勇 | 歌集 | 酒ほがひ | 四六判洋裝 | 昴發行所 |
| 九 | 日就社編 | 小品文集 | 近世名家小品文範 | 四六判紙裝 | 讀賣新聞社 |
| 九 | 小山內薰編 | 文學雜誌 | 新思潮（第二次） | 菊判 | 鳴皐書院 |
| 九 | 川路柳虹 | 口語詩集 | 路傍の花 | 四六判紙裝 | 東雲堂 |
| 十 | 佐々木信綱 | 歌學史 | 日本歌學史 | 菊判洋裝 | 博文館 |
| 十 | 內海泡沫 | 詩集 | 淡影 | 四六判紙裝 | 以文館 |
| 十 | 新潮社編 | 評傳 | 現代文藝百家小傳 | 菊半截紙裝 | 新潮社 |
| 十 | 小川未明 | 短篇集 | 闇 | 菊半截紙裝 | 新潮社 |
| 十一 | 三木露風 | 詩集 | 寂しき曙 | 四六判洋裝 | 博報堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十一 | 小木曾旭晃 | 文學史 | 地方文藝史 | 菊判紙装 | 岐阜教育新聞發行所 |
| 十一 | 福島四郎編 | 日記 | 大和田建樹遺稿 蘆船日記 | 半紙和装 | 大和田りよう |
| 十一 | 梶井盛編 | 文集 | 羯南（陸實）文集 | 菊判洋装 | 幡龍堂 |
| 十二 | 石川啄木 | 歌集 | 一握の砂 | 四六判紙装 | 東雲堂 |
| 十二 | 山田美妙 | 短篇集 | 美妙集 | 菊半截洋装 | 春陽堂 |
| 十二 | 河東碧梧桐 | 紀行俳書 | 三千里 | 菊判洋装 | 金尾文淵堂 |

## 明治四十四年（辛亥）西暦一九一一年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 中村春二編 | 歌文集 | 中村秋香遺著 不盡迺舍遺稿 | 菊判洋装 | 前川文榮閣 |
| 一 | 「新潮」第十四巻第一號 | 文壇史 | 最近文壇十年史（相馬御風） | | 新潮社 |
| 一 | 與謝野晶子 | 歌集 | 春泥集 | 四六判洋装 | 金尾文淵堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 夏目漱石 | 小説 | 門 | 菊判洋裝 | 春陽堂 |
| 一 | 泉鏡花 | 同 | 三味線堀 | 四六判紙裝 | 籾山書店 |
| 一以降續刊 | 幸田露伴 | 小説集 | 露伴集（全三冊） | 菊半截洋裝 | 春陽堂 |
| 二 | 竹久夢二 | 繪入詩集 | 野に山に | 菊判紙裝 | 洛陽堂 |
| 二 | 武者小路實篤 | 短篇集 | おめでたき人 | 四六判紙裝 | 同 |
| 三 | 阿部次郎外三氏著 | 評論集 | 影と聲 | 四六判洋裝 | 春陽堂 |
| 三 | 小栗風葉 | 短篇集 | 風葉集（全二冊） | 菊半截洋裝 | 同 |
| 三 | 永井荷風 | 小説集 | すみだ川 | 四六判洋裝 | 籾山書店 |
| 四 | 前田夕暮編 | 詩歌雜誌 | 詩歌（第九號ニテ終刊） | | 白日社 |
| 四 | 石橋思案編 | 文集 | 紅葉遺稿 | 菊判洋裝 | 博信堂 |
| 四 | 水野葉舟 | 短篇集 | 壁畫 | 四六判紙裝 | 春陽堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 五 | 田中王堂 | 評論集 | 書齋より街頭に | 菊判洋裝 | 廣文堂 |
| 五 | 荻原井泉水編 | 俳句雜誌 | 層雲（現存） | 菊判 | 層雲社 |
| 五 | 好文會編 | 文集 | 春光 | 四六判紙裝 | 明治書院 |
| 六 | 北原白秋 | 詩集 | 思ひ出 | 菊半截紙裝 | 東雲堂 |
| 六 | 人見東明 | 同 | 夜の舞踏 | 四六判洋裝 | 扶桑社書店 |
| 六 | 秋田雨雀 | 戯曲及小說集 | 幻影と夜曲 | 四六判紙裝 | 新陽堂 |
| 六 | 正宗白鳥 | 短篇集 | 微光 | 同 | 籾山書店 |
| 七 | 横山源之助 | 評論集 | 凡人非凡人 | 同 | 新潮社 |
| 七 | 吉井勇 | 戯曲集 | 午後三時 | 菊判紙裝 | 東雲堂 |
| 七及十一 | 福地櫻痴 | 戯曲及小說集 | 櫻痴集（全二册） | 菊半截洋裝 | 春陽堂 |
| 七 | 永井荷風 | 小說集 | 牡丹の客 | 四六判洋裝 | 籾山書店 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 七 | 吉江孤雁 | 文集 | 旅より旅へ | 三六判紙装 | 光風館 |
| 七 | 姉崎嘲風 | 随筆集 | 停雲集 | 四六判洋装 | 博文館 |
| 七 | 坪谷水哉 | 紀行文集 | 山水行脚 | 四六判紙装 | 同 |
| 七 | 田村俊子 | 長篇小説 | あきらめ | 菊判紙装 | 金尾文淵堂 |
| 八 | 夏目漱石 | 随筆集 | 切抜帖より | 四六半截洋装 | 春陽堂 |
| 八 | 正宗白鳥 | 小説集 | 泥人形 | 菊半截紙装 | 同 |
| 八 | 山田美妙 | 同 | 美妙叢書 | 菊判洋装 | 博文館 |
| 八以降續刊 | 春陽堂編 | | 現代文藝叢書 全四十五冊 | 菊半截紙装 | 春陽堂 |
| 九 | 平塚雷鳥等編 | 文藝雜誌 | 青鞜（第六巻第二號ニテ終刊） | | 青鞜社 |
| 九 | 若山牧水 | 歌集 | 路上 | 菊半截紙装 | 博信堂 |
| 十 | 國木田獨歩 | 詩文集 | 獨歩遺文 | 四六判紙装 | 日高有倫堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十 | 坪内逍遙 | 評論集 | 劇と文學 | 菊判洋裝 | 富山房 |
| 十 | 「文章世界」第六卷第十四號 | | 現代文章の研究 | | 博文館 |
| 十 | 泉鏡花 | 小說集 | 銀鈴集 | 菊判紙裝 | 隆文館 |
| 十 | 鈴木三重吉 | 同 | 女と赤い鳥 | 菊半截紙裝 | 春陽堂 |
| 十以降續刊 | 今古堂編 | 小說叢書 | 新作文庫 全五册 | 四六判洋裝 | 今古堂 |
| 十一 | 待宵會編 | 歌集 | 大和田建樹歌集 | 四六判洋裝 | 待宵會 |
| 十一 | 北原白秋主宰 | 詩歌雜誌 | 朱欒 | | 東雲堂 |
| 十二 | 田山花袋 | 文話 | 花袋文話 | 四六判洋裝 | 博文館 |
| 十二 | 福地櫻痴 | 全集 | 櫻痴全集 全三册 | 三六判洋裝 | 同 |
| 十二 | 金子薰園 | 歌集 | 山河 | 菊半截紙裝 | 新潮社 |
| 十二 | 谷崎潤一郎 | 短篇集 | 刺青 | 四六判洋裝 | 籾山書店 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 十二 | 森田草平 | 小説 | 自叙傳 | 菊判紙裝 | 春陽堂 |
| 十二 | 姉崎嘲風編 | 文集 | 樗牛文篇 文は人なり | 四六判洋裝 | 博文館 |

明治四十五年（壬子）西暦一九一二年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 兒玉花外 | 隨筆集 | 紅噴隨筆 | 菊半截紙裝 | 岡村盛花堂 |
| 一 | 横瀬夜雨 | 詩文集 | 夜雨集 | 四六判洋裝 | 女子文壇社 |
| 一 | 福永挽歌 | 散文詩集 | 習作 | 菊半截紙裝 | 岡村盛花堂 |
| 一 | 福田夕咲 | 詩集 | 春のゆめ | 四六判紙裝 | 文星堂 |
| 一 | 與謝野晶子 | 歌集 | 青海波 | 四六判洋裝 | 有明館 |
| 一 | 小山内薫 | 劇論集 | 演劇新聲 | 四六判紙裝 | 東雲堂 |
| 一 | 佐藤紅緑 | 脚本 | 俠艶錄 | 菊判紙裝 | 新潮社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 德田秋聲 | 長篇小說 | 黴 | 菊半裁洋装 | 同 |
| 一 | 田村俊子 | 短篇集 | 紅 | 四六判紙装 | 桑弓堂 |
| 一 | 泉鏡花 | 小說集 | 歌行燈 | 菊半裁紙装 | 春陽堂 |
| 二 | 生田長江 | 評論集 | 最近の小說家 | 四六半裁紙装 | 同 |
| 二 | 土岐哀果 | 歌集 | 黄昏に | 四六判洋装 | 東雲堂 |
| 二 | 木下尚江 | 文集 | 創造 | 四六判紙装 | 文淵堂 |
| 三 | 厨川白村 | 評論集 | 近代文學十講 | 菊判洋装 | 大日本圖書株式會社 |
| 三 | 若山牧水 | 歌話 | 牧水歌話 | 四六判洋装 | 東雲堂 |
| 三 | 岡田八千代編 | 短篇集 | 閨秀小說十二篇 | 同 | 博文館 |
| 三 | 鈴木三重吉 | 同 | 返らぬ日 | 四六判紙装 | 春陽堂 |
| 三 | 高濱虚子 | 長篇小說 | 朝鮮 | 四六判洋装 | 實業之日本社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 三 | 岡本綺堂 | 脚本集 | 綺堂脚本集 | 同 | 博文館 |
| 四 | 窪田空穗 | 歌集 | 空穗歌集 | 菊半截紙裝 | 中興館 |
| 四 | 五十嵐力 | 文學史 | 新國文學史 | 菊判洋裝 | 早大出版部 |
| 四 | 田中王堂 | 評論集 | 哲人主義 上・下二册 | 四六判洋裝 | 廣文堂書店 |
| 四 | 小川未明 | 短篇集 | 物言はぬ顔 | 菊半截紙裝 | 春陽堂 |
| 四 | 泉鏡花 | 同 | 國貞畫く | 四六判洋裝 | 同 |
| 四 | 德田秋聲 | 長篇小說 | 足迹 | 菊半截洋裝 | 新潮社 |
| 四 | 島崎藤村 | 短篇集 | 食後 | 四六判洋裝 | 博文館 |
| 四 | 尾山篤二郎編 | 短歌雜誌 | 自然（現存） | 菊判 | |
| 五 | 彌富破魔雄編 | 詩歌集 | 增訂大和ごころ | 竪長本紙裝 | 金港堂 |
| 五 | 田岡嶺雲 | 自傳 | 數奇傳 | 四六判洋裝 | 玄黃社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 五 | 馬場孤蝶編 | 全集 | 一葉全集 全二册 | 菊判洋装 | 博文館 |
| 五 | 堺枯川 | 文集 | 賣文集 | 四六判紙装 | 丙午出版社 |
| 五 | 小川未明 | 短篇集 | 少年の笛 | 同 | 新潮社 |
| 五 | 兒玉花外 | 詩文集 | 哀花熱花 | 菊半截紙装 | 春陽堂 |
| 五 | 長塚節 | 長篇小説 | 土 | 菊判洋装 | 同 |
| 五 | 國木田治子編 | 小品集 | 獨歩小品 | 菊半截洋装 | 新潮社 |
| 五 | 久津見蕨村 | 人物評論 | 眞人僞人 | 四六判紙装 | 丙午出版社 |
| 五 | 生田葵等編 | 文藝雜誌 | モザイク（第四號ニテ終刊） | | 鼎堂 |
| 六 | 石川啄木 | 歌及感想集 | 悲しき玩具 | 四六判紙装 | 東雲堂 |
| 六 | 小山内薫 | 文集 | 霧積 | 菊半截紙装 | 春陽堂 |
| 六 | 鈴木三重吉 | 短篇集 | お三津さん | 四六判洋装 | 同 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 七 | 三木露風 北原白秋 編 | 詩歌集 | 勿忘草（雜誌「朱欒」特別號） | | 東雲堂 |
| 七 | 田山花袋 | 短篇集 | 萠 | 四六判洋裝 | 春陽堂 |
| 七 | 岩野泡鳴 | 長篇小說 | 發展 | 菊判紙裝 | 實業之日本社 |
| 七 | 木下杢太郎 | 戲曲集 | 和泉屋染物店 | 四六判洋裝 | 東雲堂 |
| 七 | 森鷗外 | 譯文 | みれん | 同 | 籾山書店 |

**大正元年**（壬子）西曆一九一二年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 八 | 森鷗外 | 戲曲集 | 我一幕物 | 四六判洋裝 | 籾山書店 |
| 八 | 樋口龍峽 | 評論集 | 想の泉 | 菊半截紙裝 | 廣文堂 |
| 八 | 長田幹彥 | 短篇集 | 澪 | 四六判紙裝 | 籾山書店 |
| 九 | 前田夕暮 | 歌集 | 陰影 | 同 | 白日社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 九 | 相馬御風 | 評論集 | 黎明期の文學 | 同 | 新潮社 |
| 九 | 若山牧水 | 歌集 | 死か藝術か | 四六判洋装 | 東雲堂 |
| 九 | 夏目漱石 | 小説 | 彼岸過迄 | 菊判洋装 | 春陽堂 |
| 九 | 森田草平 | 同 | 初戀 | 菊半截紙装 | 同 |
| 九 | 富田砕花 | 歌集 | 悲しき愛 | 同 | 岡村盛花堂 |
| 九 | 「新日本」第二巻第九號 | | 明治聖代號 | 四六倍判 | 富山房 |
| 十 | 「文章世界」第七巻第十四號 | | 明治文學の概観 | 菊判 | 博文館 |
| 十 | 吉井勇 | 歌及紀行 | 水莊記 | 菊判洋装 | 東雲堂 |
| 十一 | 佐々木信綱編 | 歌集 | 一葉歌集 | 四六判洋装 | 博文館 |
| 十一 | 小山内薫 市川左團次 | 演劇史 | 自由劇場 | 四六判紙装 | 郁文堂 |
| 十一 | 伊藤銀月 | 思想史 | 明治青年思想變遷史 | 同 | 文榮閣 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十一 | 佐々木信綱 | 歌集 | 新月 | 四六判洋装 | 博文館 |
| 十一 | 永井荷風 | 短篇集 | 新橋夜話 | 同 | 籾山書店 |
| 十一 | 武者小路實篤 | 長篇小説 | 世間知らず | 同 | 洛陽堂 |
| 十一 | 鈴木三重吉 | 同 | 小鳥の巣 | 菊判洋装 | 春陽堂 |
| 十二 | 泉鏡花 | 小説 | 南地心中 | 四六判洋装 | 文藝書院 |
| 十二 | 森田草平 | 長篇小説 | 十字街 | 菊判洋装 | 春陽堂 |
| 十二 | 岡本かの子 | 歌集 | かろきねたみ | 四六型和装 | 青鞜社 |
| 十二 | 島崎藤村 | 感想及隨筆集 | 千曲川のスケッチ | 菊半截洋装 | 左久良書房 |
| 十 | 大杉榮等編 | 評論雜誌 | 近代思想 | 菊判 | 近代思想社 |

## 大正二年（癸丑）西暦一九一三年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一及三 | 森鷗外譯 | 翻譯 | ファウスト 第一・二部 全二冊 | 四六判洋裝 | 富山房 |
| 一 | 樋口龍峽 | 評論集 | 增訂 近代思想の解剖 | 菊判洋裝 | 廣文堂書店 |
| 二 | 相馬御風 | 評論集 | 新文學の初步 | 四六判洋裝 | 新潮社 |
| 二 | 本間久雄 | 評論集 | 高臺より | 小型紙本裝 | 春陽堂 |
| 二 | 巖谷小波 | 自傳 | 小波身上噺 | 四六判洋裝 | 志鷗堂 |
| 二 | 青鞜社編 | 短篇集 | 青鞜小說集 | 四六判洋裝 | 東雲堂 |
| 三 | 三宅雪嶺 | 思想史 | 明治思想小史 | 三六判洋裝 | 丙午出版社 |
| 四 | 永井荷風 | 譯詩及文 | 珊瑚集 | 四六判洋裝 | 籾山書店 |
| 四 | 島崎藤村 | 感想集 | 後の新片町より | 菊半截洋裝 | 春陽堂 |
| 五 | 土岐哀果編 | 詩歌及感想集 | 啄木遺稿 | 四六判洋裝 | 東雲堂 |
| 五 | 片上伸 | 評論集 | 生の要求と文學 | 同 | 南北社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 五 | 田岡嶺雲 | 文集 | 嶺雲文集 | 菊判洋装 | 玄黄社 |
| 五 | 平塚雷鳥 | 随筆集 | 圓窓より | 四六判洋装 | 東雲堂 |
| 六 | 日本文章學院編 | | 新文章問答 | 菊半截紙装 | 新潮社 |
| 七 | 玉井廣平 佐野保太郎 編 | 詩歌文集 | 明治文學選 | 菊判洋装 | 春陽堂 |
| 十 | 姉崎嘲風 小山鼎浦 編 | 同 | 哲人何處にありや | 同 | 博文館 |
| 十 | 安倍能成 | 評論集 | 予の世界 | 四六判洋装 | 東亞堂 |
| 十一 | 武島羽衣 大町桂月 編 | 詩歌文集 | 雨江全集 | 菊判洋装 | 博文館 |
| 十一 | 樋口龍峡 | 評論集 | 現代思潮論 | 同 | 中央書院 |
| 十一 | 三木露風編 | 詩集 | 獨歩詩集 | 菊半截洋装 | 東雲堂 |
| 十二 | 岩野泡鳴 | 評論集 | 近代思想と實生活 | | 東亞堂 |
| 十二 | 島中雄三編 | 人物論 | 人物研究 | 菊判洋装 | サンデー社 |

## 大正三年（甲寅）西暦一九一四年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 三宅花圃 | 隨筆集 | その日その日 | | 東京社 |
| 二 | 荒木郁 | 文集 | 火の娘 一册 | 菊半截洋装 | 尙文堂書店 |
| 四 | 藤代素人 | 評論集 | 文藝の人生 | 菊判洋装 | 不老閣 |
| 四 | 小川煙村編 | 年表 | 明治大年表 | 四六倍判洋装 | 吉川弘文館 |
| 四 | 生田長江等著 佐藤義亮編 | 百科全書 | 新文學百科精講 全二册 | 菊判洋装 | 新潮社 |
| 五 | 內田魯庵 | 隨筆集 | 沈默の饒舌 | 三五判洋装 | 丙午出版社 |
| 五 | 田山花袋 | | 明治小說內容發達史 | 四六判合綴洋装 | 早稻田文學社 |
| 五 | 德田秋聲 | | 明治小說文章變遷史 | | |
| 六 | 相馬御風 | 評論集 | 自我生活と文學 | | 新潮社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 六 | 島村抱月 | 同 | 懷疑と沈默の傍より | 四六判洋裝 | 同 |
| 六以降續刊 | 姉崎嘲風等編 | 全集 | 增補縮刷 樗牛全集 全六册 | 三五判洋裝 | 博文館 |
| 八 | 覆面冠者 | 評傳 | 德富蘆花と其哲學 | 四六判紙裝 | 嵩山房 |
| 十一 | 中澤臨川 | 評論集 | 破壞と建設 | 菊半截洋裝 | 新潮社 |
| 十一 | 尾上八郎 | 文學史 | 日本文學新史 | 菊判洋裝 | 東雲堂 |
| 自三年十一至十五年九月 | 新潮社編 | 選集 | 代表的名作選集 全四四册 | 菊半截布裝 | 新潮社 |
| 月不詳 | 「文章講義錄」本 生田長江 | 文章史 | 明治文章史 | 菊判紙裝 | 日本文章學院 |
| 同 | 「文章講義錄」本 小栗風葉 | 作法 | 小說作法 | 同 | 同 |
| 同 | 「文章講義錄」本 相馬御風 | 文學史 | 明治文學講話 | 同 | 同 |

## 大正四年（乙卯）西曆一九一五年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 吉江孤雁 | 評論 | 近代詩講話 | 四六判洋装 | 早稲田文學社 |
| 二 | 岩野泡鳴 | 同 | 惡魔主義の思想と文藝 | 菊半截洋装 | 天弦堂 |
| 二 | 森鷗外 | 評論隨筆 | 妄人妄語 | 四六判洋装 | 至誠堂 |
| 二 | 高濱虚子編 | 全集 | 子規遺稿 一册 | 四六判洋装 | 籾山書店 |
| 二 | 星野天知等編 | | 透谷全集 全二册 | 同 | 國文館書店 |
| 自二至五ノ七 | 鈴木三重吉 | 小説全集 | 三重吉全作集 全十三册 | 菊半截布洋装 | 著者自販 春陽堂發賣 |
| 四 | 新潮社編 | 詞華集 | 明治詩歌選「代表的名作選集」第十四 | | |
| 五 | 生田長江 | 評論集 | 最近の文藝及思潮 | 四六判洋装 | 日月社 |
| 五 | 片上伸 | 同 | 無限の道 | 同 | 同 |
| 六 | 太田資順編 | 評傳 | 樗牛兄弟 | 三五判洋装 | 有朋館 |
| 六 | 高濱虚子 | 同 | 子規居士と余 | 菊半截紙装 | 日月社 |

七 中村孤月 評論 現代作家論 四六判紙裝 磯甲部陽堂

八 島村抱月 文學史 明治文學變遷史講話 四六判洋裝 文學普及會

九 石坂養平 評論 藝術と哲學との間 同 高踏書店

十 野口米次郎 同 日本詩歌論 同 白月社

十一 松浦一 同 文學の本質 菊判洋裝 大日本圖書株式會社

大正五年（丙辰）西暦一九一六年

一 以降續刊 齋藤未鳴編 禁止作品集 明治文藝側面鈔 全五册 四六判洋裝 著者自版
（明治時代ノ文藝作品中禁止トナリシモノヲ收錄シテ同好ニ頒テルモノ）

三 以降續刊 春陽堂編 選集 名家傑作集 全十四册 菊半截洋裝 春陽堂

三 内田魯庵 回顧文話 きのふけふ 六判裝洋 博文館

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 三 | 大町桂月 | 人物評 | 十人十色 名物男 | 同 | 實業之日本社 |
| 九 | 水野葉舟 | 詞華集 | 心の響 | 菊半截洋装 | 春江堂 |
| 九 | 雜誌「藝文」第七年第九號 | 評傳 | 故上田(敏)博士追想錄 | | 鷄聲堂書店 |

## 大正六年（丁巳）西暦一九一七年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 平出修（露花） | 小説文集 | 平出修遺稿 | 四六判洋装 | 天弦堂 |
| 一 | 「新小説」第廿二年第二號 | 評傳 | 文豪夏目漱石 | | 春陽堂 |
| 三 | 西宮藤朝 | 同 | 人物哲 高山樗牛 | 四六判洋装 | 泰山房 |
| 五 | 赤木桁平 | 同 | 夏目漱石 | 同 | 新潮社 |
| 六 | 田山花袋 | 回顧文話 | 東京の三十年 | 同 | 博文館 |
| 六 | 小林愛川 | 文學略史 | 明治大正 文學早わかり | 四六判紙装 | 新潮社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 七 | 赤木桁平 | 評論集 | 近代心の諸象 | 四六判洋裝 | 阿蘭陀書房 |
| 七 | 柳下道政編 | | 漱石文學瑣談 | 三六判紙裝 | 高踏書房 |
| 九 | 坪内逍遙 | 劇論集 | 劇壇の最近十年 | 四六判洋裝 | 米山堂 |
| 十一 | 臼田亞浪 | 評傳 | 正岡子規 | 菊半截紙裝 | 俳句世界社 |
| 十二 | 江馬修 | 同 | 人及び藝術家としての國木田獨歩 | 菊半截布裝 | 新潮社 |
| 自十二至八ノ六 | 寺田寅彦等編 | 全集 | 漱石全集 全十三册 | 菊判洋裝 | 漱石全集刊行會 |

**大正七年**（戊午）西暦一九一八年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 赤木桁平 | 評傳 | 人及び藝術家としての高山樗牛 | 菊半截洋裝 | 新潮社 |
| 三 | 本間久雄 | 同 | 同　尾崎紅葉 | 同 | 同 |
| 五 | 池田林儀 | 同 | 德富健次郎 | 四六判洋裝 | 大日本雄辯會 |

六　西宮藤朝　同　人及び藝術家としての正岡子規　菊半截洋裝　新潮社
六　關根默庵・演劇史　明治劇壇五十年史　四六判洋裝　玄文社
十一　樋口邦子編　眞筆判たけくらべ　菊半截洋裝　博文館
十一以降續刊　坪内逍遙 内田魯庵共編　全集　縮刷二葉亭全集　全三册　三六判布裝　同
十二　「早稻田文學」第一五七號　追悼誌　島村抱月追悼號　東京堂

## 大正八年（己未）西曆一九一九年

三　生田春月編　詞華集　日本近代名詩集　菊半截洋裝　越山堂
四　森洽藏編　年表　日本文學者年表續篇　菊判紙裝　大日本圖書株式會社
自四至九ノ四　與謝野寛 土岐哀果共編　全集　啄木全集　全三册　菊半截洋裝　新潮社
自十至九ノ十　與謝野晶子　歌集　晶子短歌全集　全三册　四六判洋裝　同

十一　森田草平　評傳　文章道と漱石先生　同　春陽堂

自六至九ノ四　中村吉藏等編　全集　抱月全集（全八册）　菊判洋裝　天祐社

## 大正九年（庚申）西暦一九二〇年

五　巖谷小波　自傳　我が五十年　菊半截洋裝　東亞堂

十　上田敏（遺稿）　創作譯詩及　牧羊神　四六判洋裝　文淵堂

自十至十ノ四　古泉幾太郎等編　全集　左千夫（伊藤）全集（全四册）　同　春陽堂

十二　國木田獨歩　同　縮刷獨歩全集　三六判洋裝　博文館

## 大正十年（辛酉）西暦一九二一年

一以降續刊　谷崎潤一郎　選集　潤一郎傑作全集（全五册）　三六判洋裝　春陽堂

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 二 | 詩話會編 | 詞華集 | 現代詩人選集 | 菊判洋裝 | 新潮社 |
| 五 | 正富汪洋等編 | 同 | 現代婦人詩歌選集 | | 婦女界社 |
| 五 | 高須梅溪 | 文學史 | 近代文藝史論 | 四六判洋裝 | 日本評論社 |
| 自七至十一ノ七 | 岩野泡鳴 | 全集 | 泡鳴全集 全十八册 | 同 | 國民圖書株式會社 |
| 九以降續刊 | 正宗白鳥 | 選集 | 白鳥傑作集 全四册 | 三六判洋裝 | 新潮社 |
| 十 | 雜誌「解放」特大號 | 文化史 | 明治文化の研究 | 菊判紙裝 | 大鐙閣 |
| 不詳 | 德田秋聲 | 長篇選集 | 秋聲傑作集 二册 | 菊半截洋裝 | 新潮社 |

**大正十一年**（壬戌）西暦一九二二年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 藤岡東圃 | 文學史 | 國文學史講話 | 菊判洋裝 | 岩波書店 |
| 一至十二 | 島崎藤村 | 全集 | 藤村全集 全十二册 | 四六判洋裝 | 藤村全集刊行會 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 四 | 齋藤緑雨 | 選集 | 縮刷 緑雨全集 | 三六判洋装 | 博文館 |
| 六 | 樋口一葉 | 同 | 縮刷 一葉全集 | 同 | 同 |
| 八 | 小野秀雄 | 新聞史 | 日本新聞發達史 | 菊判洋装 | 大阪毎日新聞社 |
| 八 | 「三田文學」第十三巻第八號 | 評傳 | 鷗外先生追悼號 | 菊判 | 三田文學會 |
| 八 | 「心の花」第廿六巻第八號 | 同 | 鷗外追懐記事號 | 同 | 竹柏會 |
| 八 | 「明星」第二巻第三號 | 同 | 鷗外先生記念號 | 桝型大判 | 明星發行所 |
| 八 | 「新小説」第廿七年第九號 | 同 | 文豪鷗外森林太郎 | 菊判 | 春陽堂 |
| 十一 | 田村成義 | 演劇史 | 續々歌舞伎年代記 | 四六倍判洋装 | 市村座 |
| 十二 | 「心の花」第廿六巻第十二號 | 評傳 | 一葉女史記念號 | 菊判 | 竹柏會 |
| 十一 | 池田秋旻 | 俳史 | 日本俳諧史 | 四六判洋装 | 星文館 |

## 大正十二年（癸亥）西暦一九二三年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 二 | 田山花袋 | 評論 | 近代の小説 | 四六判洋装 | 近代文明社 |
| 自二至昭和二ノ十 | 森鷗外 | 全集 | 鷗外全集 全十八冊 | 菊判洋装 | 鷗外全集刊行會 |
| 三 | 水毛生伊作 | 評論 | 作家と中心とせる最近の日本文學 | 四六判洋装 | 弘道館 |
| 四 | 竹柏會編 | 雜誌 | 「心の花」第三百號 | 菊判 | 竹柏會 |
| 自十二年一至十三年三 | 田山花袋 | 選集 | 花袋全集 全十二冊 | 四六判洋装 | 花袋全集刊行會 |
| 自十二年六月至昭和三年三 | 武者小路實篤 | 同 | 武者小路實篤全集 全十二冊 | 同 | 藝術社 |

## 大正十三年（甲子）西暦一九二四年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 高須芳次郎 | 文學史 | 現代日本文學十二講 | 四六判洋装 | 新潮社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 齋藤昌三編 | 雜資料 | 近代文藝筆禍史 | 同 | 崇文堂 |
| 二 | 岩城準太郎 | 鑑賞 | 表現と鑑賞 | 同 | 東洋圖書株式會社 |
| 三 | 小島德彌 | 雜資料 | 文壇百話 | 四六判紙裝 | 二松堂 |
| 六 | 安倍能成 | 評論集 | 思想と文化 | 四六判洋裝 | 高陽社 |
| 七 | 福井久藏 | 詩史 | 日本新詩史 | 同 | 立川文明堂 |
| 七以降續刊 | 河竹默阿彌 | 戲曲集 | 默阿彌全集 全廿八冊 | 同 | 春陽堂 |
| 十二 | 尾崎紅葉 | 選集 | 尾崎紅葉全集 全四冊 | 三五判洋裝 | 同 |
| 自十三至昭和五年 | 岡本綺堂 | 戲曲集 | 綺堂戲曲集 全十四冊 | 四六判洋裝 | 同 |
| 十二 | 大日本文明協會編 | 文化史 | 明治文化發祥記念誌 | 菊判紙裝 | 大日本文明協會 |
| 自十三年至十四年 | 正岡子規 | 全集 | 子規全集 全十五冊 | 菊判洋裝 | アルス |
| 同 | 有島武郎 | 同 | 有島武郎全集 全十二冊 | 同 | 叢文閣 |

自十三年至十五年　仲木貞一等編　戲曲集　現代戲曲全集　全二十册　同　國民圖書株式會社

同　厨川白村　詩文集　厨川白村全集　全八册　同　改造社

月不詳　菊池幽芳　小說集　幽芳全集　全十五册　洋四六裝判　國民圖書株式會社

同　文藝春秋社編　講座　文藝講座　全十二册　紙菊裝判　文藝春秋社

## 大正十四年（乙丑）西曆一九二五年

二　詩話會編　詞華集　明治大正詩選　洋菊裝判　新潮社

三　大日本文明協會編　文化史　明治文化の記念と其批判　紙菊裝判　大日本文明協會

三　「早稻田文學」第二二九號　明治文學號（混沌期の研究）　東京堂

四　德田秋聲　文章史　日本文章史　洋四六裝判　松陽堂

四・五　小島政二郎　小說史　明治小說史「文藝講座」第十三及十四號所載　文藝春秋社

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 五 | 「新小說」第三十年第五號 | 評傳 | 天才泉鏡花 | | 春陽堂 |
| 五 | 宮島新三郎 | 文學史 | 明治文學十二講 | 四六判洋裝 | 新詩壇社 |
| 六 | 內田魯庵 | 評傳 | 思ひ出す人々（「きのふけふ」改題） | | 春秋社 |
| 六 | 岩城準太郎 | 文學史 | 明治大正の國文學 | 四六判洋裝 | 成象堂 |
| 六 | 小島德彌 | 同 | 明治大正新文學史觀 | 同 | 教文社 |
| 六至八 | 鼎浦會編 | 詩歌文集 | 小山鼎浦全集　全三册 | 同 | 鼎浦會 |
| 六 | 「早稻田文學」第二三二號 | | 明治文學號（胎生期の研究） | | 東京堂 |
| 七 | 同第二三三號 | | 同（同續） | | 同 |
| 七 | 寺田寅彥等編 | | 漱石全集別册 | 菊判洋裝 | 岩波書店 |
| 十一及十五ノ六 | 高木文編 | | 明治全小說戲曲大觀　正・續二册 | 菊判洋裝 | 聚芳閣 |
| 十二 | 兒山信一 | 詩歌論 | 日本詩歌の體系 | 四六判洋裝 | 至文堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 自十四年至十五年 | 小川未明 | 選集 | 未明選集 全六册 | 同 | 未明選集刊行會 |
| 自十四年至昭和二年 | 永井荷風 | 全集 | 重印荷風全集 全六册 | 三五判洋裝 | 春陽堂 |
| 同 | 泉鏡花 | 同 | 鏡花全集 全十五册 | 菊判洋裝 | 同 |
| 自十四年至十五年 | 時事新報社編 | 同 | 福澤全集 全十册 | 同 | 國民圖書株式會社 |
| 自十四年三至十五年八 | 新潮社編 | 同 | 現代小說全集 全十五册 | 同 | 新潮社 |
| 四至十 | 改造社編 | 短歌叢書 | 現代代表短歌叢書 全十二册 | 四六判洋裝 | 改造社 |

## 大正十五年（丙寅）西曆一九二六年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 二 | 田中貢太郎 | 評傳 | 文豪大町桂月 | 四六判洋裝 | 青山書院 |
| 自三至昭和二ノ十 | 山口剛等校 | 叢書 | 明治文學名著全集 全十二册 | 四六判洋裝 | 東京堂 |
| 四 | 木村毅 | 雜資料 | 文藝東西南北 | 同 | 新潮社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 四 | 松本龍之助編 | 辭書 | 明治大正文學美術人名辭書 | 同 | 立川文明堂 |
| 四 | 「文章往來」第一年第四號 | 評傳 | 藤村（島崎）號 | 菊判 | 春陽堂 |
| 四 | 「新小說」第卅一年第四號 | | 明治大正文藝運動大觀 | 同 | 春陽堂 |
| 七 | 山崎斌 | 同 | 藤村の歩める道 | 四六判紙裝 | 弘文社 |
| 自九至昭和二ノ十一 | 坪内逍遙 | 選集 | 逍遙選集 全十五冊 | 菊判洋裝 | 春陽堂 |
| 九 | 加藤武雄 | | 明治大正文學の輪廓 | 四六判紙裝 | 新潮社 |
| 十 | 石井研堂編 | 雜資料 | 明治事物起原 | 菊判洋裝 | 春陽堂 |
| 十 | 相馬健作 | | 文壇太平記 | 四六判紙裝 | 萬生閣 |
| 十 | 竹林古秋編 | 俳諧史 | 蛙流（佐々醒雪「明治以後の俳壇」） | 四六判紙裝 | 蛙流刊行會 |
| 十及昭和二ノ三 | 川尻淸潭 | 劇談 | 樂屋風呂 正・續二冊 | 四六判紙裝 | 中央美術社 |
| 十一 | 福井久藏 | 歌學史 | 大日本歌學史 | 四六判洋裝 | 不二書房 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十二 | 糸井武雄 | 雜資料 | 明治大正小說とそのモデル | 四六判紙裝 | 章華社 |
| 六及十一 | 雜誌「青樹」第二卷第六及十一號 | 歌史 | 明治短歌研究號 二册 | 菊判 | 青樹發行所 |
| 自十五ノ八至昭和三ノ二 | 小泉八雲 | 全集 | 小泉八雲全集 全十八册 | 菊判洋裝 | 第一書房 |
| 自十五年至昭和三年 | 新潮社編 | 文學講座 | 日本文學講座 全十五册 | 菊判紙裝 | 新潮社 |
| 十二 | 「改造」第八卷第十三號 | 諸家回想談 | 明治文學の思ひ出 | 同 | 改造社 |

## 昭和二年（丁卯）西暦一九二七年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 四 | 江見水蔭 | 文壇史 | 硯友社と紅葉 | 四六判洋裝 | 改造社 |
| 五 | 野崎左文 | 同 | 私の見た明治文壇 | 同 | 春陽堂 |
| 五 | 改造社編 | 目錄 | 明治文藝研究資料展覽會目錄 | 菊判紙裝 | 改造社 |
| 六 | 「太陽」第卅三卷第八號 | 文化史 | 明治大正の文化 | 同 | 博文館 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 七 | 島崎藤村編 | 選集 | 岩波文庫 北村透谷集 | 菊半截紙裝 | 岩波書店 |
| 十 | 島爲男 | 評傳 | 夏目さんの人及び思想 | 四六判洋裝 | 大同館 |
| 十 | 江見水蔭 | 文壇史 | 自己中心 明治文壇史 | 同 | 博文館 |
| 十 | 饗庭篁村 | 劇評 | 竹の屋劇評集「明治文學名著全集」本 | | 東京堂 |
| 自十至五ノ七 | 吉野作造等編 | 文化史資料 | 明治文化全集 全廿四冊 | 菊判洋裝 | 日本評論社 |
| 十 | 岩城準太郎 | 文學史 | 改訂增補 明治文學史 | 同 | 修文館 |
| 十 | 小山龍之輔 栗原元吉 編 | 選集 | 明治文學選 | 菊判洋裝 | 不老閣書房 |
| 十一 | 石川巖編 | 年表 | 明治初期 戯作年表 | 四六判橫綴 | 從吾所好社 |
| 十二 | 橋田東聲 | 評傳 | 正岡子規全傳 | 四六判洋裝 | 春陽堂 |
| 自二年六至七年六 | 春陽堂編 | 作品全集 | 明治大正文學全集 全六十冊 | 同 | 同 |
| 自二年一至六年十二 | 改造社編 | 同 | 現代日本文學全集 全六十三冊 | 菊判洋裝 | 改造社 |

## 昭和三年（戊辰）西暦一九二八年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 自三年二至四年九 | 德富蘇峰 | 著作集 | 蘇峰叢書 全十二册 | 四六判紙裝 | 民友社 |
| 二 | 河野桐谷 | 雜資料 | 江戸は過ぎる | 四六判洋裝 | 萬里閣 |
| 五 | 「文藝研究」第一卷第二號 | 評傳 | 上田敏號 | 菊判 | 文藝研究社 |
| 六 | 木村毅 | 研究雜纂 | 明治文學展望 | 四六判洋裝 | 改造社 |
| 八 | 市嶋春城 | 參考 | 春城筆語 | 同 | 早大出版部 |
| 八 | 三田村鳶魚編 | 選集 | 饗庭篁村集 | 同 | 春陽堂 |
| 九 | 「日本及日本人」第一六〇號 | 評傳 | 正岡子規號 | 四六倍判 | 政教社 |
| 十 | 新屋敷幸繁 | 鑑賞論 | 現代文學の鑑賞 | 四六判洋裝 | 大同館 |
| 十一 | 金井嘉佐太郎 | 文學史 | 明治大正文學史 | 菊判紙裝 | 長野縣更級部職員會 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十一 | 吉田九郎 | 同 | 文體中心 明治大正文學史 | 菊判洋裝 | 教育研究會 |
| 十一 | 夏目鏡子 | 傳記 | 漱石の思ひ出 | 四六判洋裝 | 改造社 |
| 十一 | 巖谷小波 | 同 | 私の今昔物語 | 同 | 早大出版部 |
| 十二 | 湯地孝 | 詩史 | 日本近代詩の發達 | 同 | 不老閣 |
| 十二 | 橘文七 | 文學史 | 明治大正文學史 | 同 | 啓文社 |
| 自十一至四ノ三 | 土岐善麿編 | 全集 | 石川啄木全集 全五冊 | 四六判洋裝 | 改造社 |
| 自十至五ノ五 | 徳富蘆花 | 同 | 蘆花全集 全二十冊 | 菊判洋裝 | 新潮社 |
| 同 | 同 | 同 | 同（普及版）全二十冊 | 四六判洋裝 | 同 |
| 自三年至六年 | 春陽堂編 | 戲曲集 | 日本戲曲全集（現代篇）全十八冊 | 同 | 春陽堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十一及十一 | 日夏耿之介 | 新詩史 | 明治大正詩史　全三冊 | 菊判洋裝 | 新潮社 |
| 一 | 藤澤衛彥 | 流行歌 | 明治流行歌史 | 四六判洋裝 | 春陽堂 |
| 三 | 橋田東聲 | 評傳 | 子規と節と左千夫 | 同 | 同 |
| 三 | 永井一孝 | 文學史 | 明治文學史 | 菊判洋裝 | 文獻書院 |
| 五 | 日夏耿之介 | 雜纂 | 明治文學襍考 | 四六判洋裝 | 梓書房 |
| 五 | 龜田小蛄 | 俳諧史 | 明治俳壇史（伊藤月草編「俳諧講座」第八・九・十・十一・十三卷ニ分載） | | |
| 六 | 高安月郊 | 比較文學論 | 東西文藝評論 | 四六判洋裝 | 春陽堂 |
| 八 | 尾山篤二郎 | 短歌史 | 明治歌壇概史 | 菊半截洋裝 | 紅玉堂 |
| 八 | 「古本屋」臨時號 | 評傳 | 內田魯庵氏追悼號 | 菊判 | 大阪荒木書店 |
| 自四年九至六年七 | 上田敏著　富田碎花等編 | 全集 | 上田敏全集　全九冊 | 菊判洋裝 | 改造社 |
| 九 | 鈴木敏也 | 文學史 | 概觀日本文學思潮 | 菊判洋裝 | 中文館 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十 | 百田宗治編 | 詩論 | 日本現代詩研究 | 四六判紙装 | 金星堂 |
| 自四年七 至七年九 | 小山內薰 | 選集 | 小山內薰全集 八册 | 四六判洋装 | 春陽堂 |
| 自四年十一 至五年十二 | 幸田露伴 | 全集 | 露伴全集 全十二册 | 菊判洋装 | 岩波書店 |
| 自四年十一 至五年十 | 島木赤彦 | 同 | 赤彦全集 全八册 | 同 | 同 |
| 自四ノ七 至五ノ七 | 新潮社編 | | 現代詩人全集 全十二册 | 四六判洋装 | 新潮社 |
| 自四ノ八 至六ノ十一 | 改造社編 | | 現代短歌全集 全廿二册 | 同 | 改造社 |
| 自四年六 至六年十一 | 森鷗外 | 全集（普及版） | 鷗外全集 全十七册 | 同 | 鷗外全集刊行會 |
| 自四ノ六 至六ノ十一 | 正岡子規著 河東碧梧桐等編 | 同 | 子規全集 全廿二册 | 同 | 改造社 |
| 十一 | 硯友社同人編 | 傳記資料 | 紅葉山人廿七年忌記念展覽會誌 | 菊判和装 | 本展覽會 |
| 十六至二 | 長塚節 | 全集（再版） | 長塚節全集 全六册 | 四六判洋装 | 春陽堂 |

## 昭和五年（庚午）西暦一九三〇年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 三至十二 | 國木田獨歩 | 全集 | 國木田獨歩全集 全八冊 | 四六判洋裝 | 改造社 |
| 四月至六年十 | 谷崎潤一郎 | 同 | 谷崎潤一郎全集 全十二冊 | 同 | 同 |
| 五 | 本美鐵三 | 解題 | 明治大正歌書解題 | 菊判洋裝 | 白帝書房 |
| 六 | 水谷幻花 | 劇話 | 演藝風聞錄 | 四六判洋裝 | 東京朝日新聞社 |
| 七 | 瀨木博尚編 | 目錄 | 明治新聞雜誌文庫所藏目錄（東天紅） | 四六倍判洋裝 | 編者版 |
| 七 | 同志社校友會編 | 雜資料 | 同志社五十年史 | 菊判洋裝 | 同志社 |
| 九 | 大阪毎日新聞社編 | 評傳 | 廿一大先覺記者傳 | 同 | 大阪毎日新聞社 |
| 九 | 鹽田良平 | 文學史 | 明治文學史抄散文篇 | 同 | 大鐙閣 |
| 十一 | 木村小舟編 | 傳記資料 | 小波先生 | 菊判和裝 | 編者自版 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十二 | 素人社編 | 人名辭書 | 現代俳家人名辭書 | 四六判洋裝 | 素人社 |

## 昭和六年（辛未）西暦一九三一年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 近松秋江 | 文壇雜話 | 文壇三十年 | 四六判洋裝 | 千倉書房 |
| 一 | 「水甕」第十八卷第一號 | 短歌史 | 明治大正短歌研究號 | 菊判紙裝 | 名古屋水甕社 |
| 二 | 土岐善麿 | 藝術史 | 明治大正史・藝術篇 | 菊判洋裝 | 朝日新聞社 |
| 二 | 改造社「日本文學大全集」ノ内 | | 石川啄木全集 | 四六倍判洋裝 | 改造社 |
| 三 | 兒山信一 | 和歌史 | 新講和歌史 | 菊判洋裝 | 大明堂書店 |
| 四 | 井上康文 | 詩史 | 新詩及詩人とその變遷 | 四六判洋裝 | 交蘭社 |
| 四 | 荒木伊兵衛 | 英語學史 | 日本英語學書志 | 菊判洋裝 | 創元社 |
| 四至九 | 改造社「日本文學大全集」ノ内 | | 有島武郎全集　全三冊 | 四六倍判洋裝 | 改造社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 五 | 西谷碧落居 | 評論 | 俳人漱石論 | 四六判洋裝 | 厚生閣 |
| 五 | 本間久雄 | 評論 | 文學論攷 | 菊判洋裝 | 東京堂 |
| 六 | 改造社「日本文學大全集」ノ内 | | 志賀直哉全集 | 四六倍判洋裝 | 改造社 |
| 九 | 岡本綺堂 | 演劇史 | 歌舞伎談義・附明治演劇年表 | 四六判紙裝 | 武藏野書院 |
| 十 | 篠田鑛造 | 雜資料 | 明治百話 | 四六判洋裝 | 四條書房 |
| 自六年六 至八年四 | 岩波講座 | 國文學一般 | 日本文學 全二十函 | 菊判假裝 | 岩波書店 |
| 自六ノ十 至七ノ九 | 改造社編 | 歌學一般 | 短歌講座 全十二冊 | 菊判洋裝 | 改造社 |
| 六ノ十一 至九ノ十二 | 改造社「日本文學大全集」ノ内 | 全集 | 正岡子規全集 全五冊 | 四六倍判洋裝 | 同 |
| 六ノ十一 至九ノ十一 | 植村正久 | 同 | 植村全集 全八冊 | 四六判洋裝 | 婦人之友社 |

## 昭和七年（壬申）西暦一九三二年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 三 | 高市慶雄編 | 目録 | 明治文献目録 | 菊判紙装 | 日本評論社 |
| 三 | 坪谷善四郎編 | 傳記 | 大橋佐平翁 | 菊判洋装 | 博文館 |
| 四 | 「國語と國文學」第九巻第四號 | 評傳 | 明治文豪論 | 菊判紙装 | 至文堂 |
| 四 | 篠田太郎 | 文學史 | 史的唯物論より見たる近代日本文學史 | 菊判洋装 | 春陽堂 |
| 五 | 井手逸郎 | 俳句史 | 明治大正俳句史 | 四六判洋装 | 立命館出版部 |
| 六 | 日本文學社編 | 文學史 | 明治文學史集説 | 菊判紙装 | 日本文學社 |
| 六 | 宮島新三郎 | 同 | 改訂明治文學十二講 | 四六判洋装 | 東京出版社 |
| 自七年六至十年四 | 藤村作編 | 辭書 | 日本文學大辭典（全四册） | 四六倍判洋装 | 新潮社 |
| 七 | 正宗白鳥 | 評傳 | 文壇人物評論 | 四六判洋装 | 中央公論社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 八 | 安倍忠三 | 歌壇史 | 歌壇史稿 | 同 | 立命館出版部 |
| 八及九 | 「愛書趣味」臨時號 | 傳記資料 | 追悼誌文獻 一冊 | 菊判紙裝 | 青山容三 |
| 十 | 藤村作 久松潜一 | 文學史 | 明治文學序說 | 紙判洋裝 | 山海堂 |
| 十 | 藤村作 | 同 | 日本文學史概說 | 同 | 中興館 |
| 十 | 唐木順三 | 評論 | 現代文學序說 | 同 | 春陽堂 |
| 十及十一 | 雜誌「藝術殿」 | 傳記資料 | 明代劇界功勞者號 二冊 | 菊判紙裝 | 梓書房 |
| 十一 | 齋藤昌三編 | 年表 | 現代筆禍文獻大年表 | 菊判洋裝 | 粹古堂書店 |
| 十一 | 新井聲風 | 傳記 | 明治以降物故新派俳人傳 | 四六判紙裝 | あかね社 |
| 十二 | 原田芳起 | 評論史 | 日本小說評論史序說 | 四六判洋裝 | 大同館書店 |
| 二至七 | 石河幹明編 | 傳記 | 福澤諭吉傳 全四冊 | 菊判洋裝 | 岩波書店 |
| 七ノ十二及八ノ三 | 木星社編 | 講座 | 明治文學講座 第四・五卷 二冊 | 菊判紙裝 | 木星社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 自七ノ五 至八ノ三 | 改造社編 | 同 | 俳句講座 全十冊 | 菊判洋裝 | 改造社 |
| 十一 | 東京帝國大學編 | 雜資料 | 東京帝國大學五十年史 二冊 | 菊判洋裝 | 東京帝國大學 |
| 自七ノ三 至八ノ十二 | 內村鑑三 | 全集 | 內村鑑三全集 全廿冊 | 四六判洋裝 | 岩波書店 |

## 昭和八年（癸酉）西曆一九三三年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | アララギ編輯部編 | 短歌史資料 | 「アララギ」二十五周年記念號 | 菊判紙裝 | アララギ發行所 |
| 一及七 | 耕進社編 | 評論集 | クオタリー日本文學 二冊 | 同 | 耕進社 |
| 一以降續刊 | 改造社「日本文學大全集」ノ內 | | 菊池幽芳全集 全四冊 | 四六倍判洋裝 | 改造社 |
| 二 | 福田清人 | 評論 | 硯友社の文學運動 | 菊判洋裝 | 山海堂 |
| 二 | 與謝野寬 | 歌集 | 與謝野寬短歌全集 | 同 | 明治書院 |
| 二 | 高嶋屋編 | 傳記資料 | 寬・晶子兩先生著作展目錄 | 菊大判假綴 | 高島屋 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 四及十二 | 川島徳太郎 | 評論 | 現代作家の人及作風（散文及詩歌篇）二册 | 四六判洋裝 | 大同館書店 |
| 四 | 太田水穗 | | 日本和歌讀本 | 同 | 立命館出版部 |
| 五 | 加田哲二 | 社會思想 | 明治初期社會思想の研究 | 菊判洋裝 | 春秋社 |
| 五以降續刊 | 長谷川如是閑 | 全集 | 如是閑文藝全集 全八册 | 四六判洋裝 | 學藝社 |
| 七 | 巽軒會編 | 詩歌文集 | 青桐集 | 同 | 大倉書店 |
| 七 | 坪内逍遙 | 隨筆集 | 柿の蔕 | 菊判洋裝 | 中央公論社 |
| 八 | 湯地孝 | 評論 | 明治大正文學の諸傾向 | 同 | 積文館 |
| 九 | 高須芳次郎 | 文學史 | 明治・大正・昭和文學講話 | 四六判洋裝 | 新潮社 |
| 九 | 藤村作編 | 評論 | 日本文學聯講（明治篇） | 菊判洋裝 | 中興館 |
| 自八年九至九年八 | 與謝野晶子 | 全集 | 與謝野晶子全集 全十三册 | 四六判洋裝 | 改造社 |
| 九 | 竹村覺 | 英學史 | 日本英學發達史 | 菊判洋裝 | 研究社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 九 | 藤川忠治 | 評傳 | 正岡子規 | 同 | 山海堂 |
| 十續刊以降 | 明治文學會編 | 季刊誌 | 明治文學 第一至四輯四冊 | 菊判紙裝 | 同 |
| 十一 | 「兒童百科大辭典」ノ內 | 文學史 | 日本文學史 | 四六倍判洋裝 | 玉川學院出版部 |
| 十一 | 伊原敏郎 | 演劇史 | 明治演劇史 | 菊判洋裝 | 早大出版部 |
| 十一 | 入澤達吉等編 | 雜纂 | 鷗外拾遺 | 同 | 克誠堂書店 |
| 六 | 舟橋聖一 | 評論 | 明治文學新講 | 四六判洋裝 | 三省堂 |
| 十一 | 添田啞蟬坊 | 流行歌 | 流行歌明治大正史 | 四六判洋裝 | 春秋社 |
| 十一 | 宮田戊子編 | 評傳 | 正岡子規研究 | 同 | 樂浪書院 |
| 十一 | 瀧田貞治編 | 傳記資料 | 鷗外書志 | 四六倍判洋裝 | 臺灣愛書會 |
| 十一 | 黑澤隆信 | 評傳 | 子規・節・左千夫の文學 | 四六判洋裝 | 金星堂 |
| 十一 | 金田一京助 土岐善麿 編 | 評傳 | 石川啄木研究 | 四六判紙裝 | 樂浪書院 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十二 | 北原白秋 | 詩史 | 改造文庫 明治大正詩史概説 | 菊半截布装 | 改造社 |
| 十二 | 齋藤昌三 | 書誌 | 閑板書國巡禮記 | 菊判洋装 | 書物展望社 |
| 十二 | 森潤三郎 同於菟 共編 | 雑纂 | 鷗外遺珠と思ひ出 | 四六判洋装 | 昭和書房 |
| 自八年五 至十年五 | 改造社編 | 講座 | 日本文學講座 全十七册 | 菊判洋装 | 改造社 |
| 自八年五 至九年七 | 慶應義塾編 | 全集 | 續福澤全集 全七册 | 同 | 岩波書店 |

## 昭和九年（甲戌）西暦一九三四年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一至十 | 明治文學談話會編 | 雑誌 | 明治文學研究 第一號至第十一號 | 菊判 | 排進社 |
| 二以降續刊 | 明治文化研究會編 | 文化研究 | 季刊 明治文化研究（第六輯迄既刊） | | 書物展望社等 |
| 三 | 小泉苳三編 | 年表 | 現代短歌大年表 | 菊判紙装 | ポトナム短歌會 |
| 三 | 山田弘倫 | 評傳 | 軍醫としての鷗外先生 | 菊判洋装 | 醫界時報社 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 三 | 片岡良一 | 評論 | 現代作家論叢 | 同 | 三笠書房 |
| 自九年四至十年三 | 高濱虛子 | 全集 | 高濱虛子全集 全十二册 | 四六判洋裝 | 改造社 |
| 四 | 內田魯庵 | 雜資料 | 續紙魚繁昌記 | 同 | 書物展望社 |
| 四 | 吉田孤羊編 | 傳記資料 | 啄木研究文献 | 四六判紙裝 | 明治文學談話會 |
| 五 | 齋藤昌三編 | 同 | 明治大正作者名索引 | 菊判紙裝 | 書物展望社 |
| 五 | 木村毅 | 雜纂 | 明治文學を語る | 四六判洋裝 | 樂浪書院 |
| 五 | 宮島新三郎 | 文學史 | 明治文學概論 | 菊判洋裝 | 東京出版社 |
| 五 | 江見水蔭 | 文壇史 | 明治文壇逸話 | 四六判紙裝 | 江水社 |
| 六 | 沼澤龍雄編 | 年表 | 日本文學史表覽 二册 | 菊判洋裝 | 明治書院 |
| 六 | 高安月郊 | 雜資料 | 高安の里 | 四六判洋裝 | 書物展望社 |
| 六 | 「立命館文學」第一卷第六號 | | 明治文學號 | 菊判 | 立命館出版部 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 七 | 横瀬夜雨 | 雑資料 | 雪あかり | 四六判洋装 | 書物展望社 |
| 七 | 「浪漫古典」第四輯 | 評論 | 森鷗外研究 | 菊判雑誌 | 昭和書房 |
| 七 | 森潤三郎 | 評傳 | 鷗外森林太郎 | 菊判洋装 | 同 |
| 七及十一 | 藤田徳太郎編 | 思想資料 | 日本精神文化大系第八及九巻明治時代（二冊） | 菊判洋装 | 金星堂 |
| 八 | 千葉龜雄 | 文學史 | 明治時代の文學（「岩波講座日本歴史」ノ内） | | |
| 八 | 「國語と國文學」第一二四號 | 同 | 明治大正文學を語る | 菊判 | 至文堂 |
| 九 | 遠地輝武 | 詩史 | 近代日本詩の史的展望 | 四六判洋装 | 耕進社 |
| 九 | 「浪漫古典」第六輯 | 評論 | 夏目漱石研究 | 菊判 | 昭和書房 |
| 十 | 篠田太郎 | 文學史 | 近代日本文學研究 | 菊判洋装 | 楽浪書院 |
| 十 | 高須芳次郎 | 同 | 明治文學史論 | 菊判紙装 | 日本評論社 |
| 十 | 小泉苳三 | 評論 | 正岡子規根岸短歌會の位相 | 四六判紙装 | 立命館出版部 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十 | 歌誌「水甕」第廿一卷第十號 | 短歌評釋 | 明治大正短歌評釋號 | 菊判 | 名古屋 水甕社 |
| 十 | 佐々木信綱編 | 書翰集 | 明治文學の片影 | 菊判洋装 | 中央公論社 |
| 十一 | 秋田雨雀編 | 評論 | 島崎藤村研究 | 四六判紙装 | 樂浪書院 |
| 十一 | 松岡讓 | 評傳 | 漱石先生 | 四六判洋装 | 岩波書店 |
| 十一 | 千葉龜雄 | 同 | 坪内逍遙傳 | 四六判紙装 | 改造社 |
| 十二 | 勝峰晋風 | 俳諧史 | 明治俳諧史話 | 四六判洋装 | 大誠堂 |
| 十二 | 山宮允 | 書目 | 明治大正詩書綜覽 二冊 | 桝型洋装 | 啓成社 |
| 自九年十二至十一年十二 | 明治編年史編纂會 | 新聞集成 | 明治編年史 全十五冊 | 四六倍判洋装 | 財政經濟學會 |
| 自九年至十年 | 明治文學會編 | 雜誌 | 評論（明治文學研究誌） | 菊判 | 山海堂 |

## 昭和十年（乙亥）西暦一九三五年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 齋藤昌三 | 書誌 | 書淫行狀記 | 新菊判洋裝 | 書物展望社 |
| 二 | 柳田泉 | 翻譯文學 | 明治初期の飜譯文學 | 菊判洋裝 | 松柏館 |
| 三 | 酒井衡平 | 文學史 | 現代國文學講話 | 四六判洋裝 | 文松堂 |
| 三 | 岡本綺堂 | 劇談 | 明治劇談 ランプの下にて | 同 | 岡倉書房 |
| 四 | 「早稻田文學」第二卷第四號 | 傳記資料 | 坪内博士追悼號 | 菊判 | 早稻田文學社 |
| 四 | 三島霜川 | 演劇資料 | 役者藝風記 | 四六判洋裝 | 中央公論社 |
| 五 | 清原貞雄 | 文化史 | 明治初期文化史 | 菊判洋裝 | 賢文館 |
| 五 | 瀬古確 | 文章史 | 近代日本文章史 | 四六判洋裝 | 育英書院 |
| 五 | 鹽田良平 | 評論 | 近代日本文學論 | 菊判洋裝 | 萬上閣 |
| 五 | 渕脇義雄 | 歌論 | 現代短歌の特質と鑑賞 | 四六判洋裝 | 厚生閣 |
| 五 | 與謝野寛 | 歌集 | 與謝野寛遺稿歌集 | 菊判洋裝 | 明治書院 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 五 | 小宮豊隆 | 評傳 | 漱石襍記 | 四六判洋装 | 小山書店 |
| 五及十 | 柳田泉 | 政治小説論 | 政治小説研究 上・中巻二冊 | 菊判洋装 | 松柏館 |
| 六 | 宮田戊子 | 評傳 | 正岡子規の新研究 | 四六判紙装 | 叢文閣 |
| 六 | 「立命館文學」第二巻第六號 | 歌壇史 | あさ香社及新詩社號 | 菊判 | 立命館出版部 |
| 七 | 本間久雄 | 文學史 | 明正文學史 上巻 | 菊判洋装 | 東京堂 |
| 七 | 蛯原八郎 | 書誌及年表等 | 明正文學雜記 | 同 | 學而書院 |
| 九 | 千葉龜雄 | 雜纂 | ペン縱横 | 四六判洋装 | 岡倉書房 |
| 九 | 島田青峰 | 評傳 | 子規・紅葉・緑雨 | 同 | 言海書房 |
| 十 | 山田美妙著 柳田泉等編 | 選集 | 美妙選集 全二冊 | 菊判紙装 | 立命館出版部 |
| 十 | 中央公論社編 | 誌史及總目録 | 回顧五十年 | 同 | 中央公論社 |
| 十 | 「國語と國文學」第一三八號 | 評論 | 明治大正傑作論 | 同 | 至文堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十 | 陸井清三編 | 傳記資料 | 小栗風葉資料集 | 半紙謄寫刷 | 編者發行 |
| 十一 | 「思想」第一六二號 | 評傳 | 漱石記念號 | 菊判紙裝 | 岩波書店 |
| 十一 | 杉谷惠美子編 | 詩文集 | 杉谷代水選集 | 四六判洋裝 | 富山房 |
| 十二 | 河井醉茗 | 文話 | 隨筆 南窓 | 同 | 人文書院 |
| 十二 | 小泉苳三編 | 年表 | 明治大正歌書年表 | 菊半截紙裝 | ポトナム短歌會 |
| 自十年十 自十二年十 | 夏目漱石著 小宮豐隆等編 | 全集 | 漱石全集 全十九册 | 四六判洋裝 | 岩波書店 |

## 昭和十一年（丙子）西暦一九三六年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 三越大阪支店編 | 傳記資料 | 逍遙（坪内博士を偲ぶ展覽會記念） | 四六判和裝 | 大阪・三越 |
| 二 | 小堀杏奴 | 同 | 晩年の父（鷗外のこと） | 四六判洋裝 | 岩波書店 |
| 二 | 伊藤信吉 | 評傳 | 島崎藤村の文學 | 同 | 第一書房 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 二 | 成瀬正勝 | 評論 | 明治文學管見 | 同 | 野田書房 |
| 二及四 | 高須芳次郎編 | 文集 | 日本名文鑑賞（明治篇二册） | 同 | 厚生閣 |
| 四 | 香取秀眞 | 評傳 | 正岡子規を中心に | 同 | 學藝書院 |
| 四 | 中江篤介著 嘉治隆一編校 | 文集 | 兆民選集（岩波文庫本） | | 岩波書店 |
| 四 | 德田秋聲 | 回顧 | 思ひ出るまゝ | 四六判洋裝 | 文學界社 |
| 四 | 石川正雄 | 評傳 | 父啄木を語る | 同 | 三笠書房 |
| 五 | 武藤直治 | 同 | 夜明け前の作者（島崎藤村） | 四六判紙裝 | 新陽社 |
| 五 | 後藤宙外 | 回顧文話 | 明治文壇回顧錄 | 四六判洋裝 | 岡倉書房 |
| 五 | 齋藤昌三 | 書誌 | 紙魚供養 | 菊判洋裝 | 書物展望社 |
| 五 | 佐藤春夫 | 傳記資料 | 漱石の讀書と鑑賞 | 四六判洋裝 | 小山書店 |
| 六 | 土方定一 | 評論 | 近代日本文學評論史 | 同 | 西東書林 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 六 | 柳田泉等編 | 雜資料 | 魯庵隨筆 氣紛れ日記 | 同 | 双雅房 |
| 六 | 相馬黑光 | 同 | 默移 | 同 | 女性時代社 |
| 六 | 木下杢太郎 | 同 | 藝林間歩 | 同 | 岩波書店 |
| 六 | 「文學」第四卷第六號 | 評傳 | 鷗外研究 | 菊判 | 同 |
| 自十一年六 至十三年七 | 森鷗外著 木下杢太郎等編 | 全集 | 新輯定版 鷗外全集著作篇 全廿二册 | 四六判洋裝 | 岩波書店 |
| 自十一年六 以降續刊 | 田山花袋著 島崎藤村等編 | 同 | 決定版 花袋全集 全十八册 | 同 | 花袋全集刊行會 |
| | （昭和十二年十一月マデニ第十六卷マデ發行） | | | | |
| 七 | 馬場孤蝶 | 回顧文談 | 明治文壇回顧 | 四六判洋裝 | 協和書院 |
| 八 | 柳田泉 | 雜資料 | 隨筆 明治文學 | 同 | 春秋社 |
| 八 | 柳田新太郎編 | 歌壇系圖 | 現代歌壇系統圖 | 系圖十葉 | 茜書房 |
| 八 | 「文學」第四卷第八號 | 評傳 | 特輯 藤村研究 | 菊判 | 岩波書店 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 九 | 「新潮」編輯部編 | 同 | 明治大正文豪研究 | 四六判洋裝 | 新潮社 |
| 十 | 久松潛一 | 評論史 | 日本文學評論史 全二册 | 菊判洋裝 | 至文堂 |
| 十 | 「學士會月報」第五八三號 | 雜資料 | 學士會創立五十周年記念號 | 菊判 | 學士會 |
| 十 | 富山房編 | 同 | 富山房五十年 | 菊判洋裝 | 富山房 |
| 十 | 伊臣眞 | 劇評 | 觀劇五十年 | 同 | 新陽社 |
| 十 | 中村光夫 | 評論 | 二葉亭論 | 菊半截洋裝 | 芝書店 |
| 自十一年十 至十三年一 | 寺田寅彥 | 文集 | 寺田寅彥全集 全十六册 | 四六判洋裝 | 岩波書店 |
| 自十一年十 至十二年十二 | 德田秋聲 | 全集 | 秋聲全集 全十六册 | 四六判洋裝 | 非凡閣 |
| 十一 | 藤村博士功績記念會編 | 論文集 | 近世文學の研究 | 菊判洋裝 | 至文堂 |
| 十一 | 新潮社編 | 雜資料 | 新潮社四十年 | 菊判洋裝 | 新潮社 |
| 十一 | 蘇峰先生文章報國五十年祝賀會編 | 解題 | 蘇峰先生著作五十選 | 四六倍判洋裝 | 編者發行 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 十二 | 蘆花會編 | 評傳 | 德富蘆花 検討と追憶 | 四六判洋裝 | 岩波書店 |
| 十二 | 「文學」第四卷第十二號 | 評傳 | 海外に於ける漱石研究 | 菊判 | 同 |
| 自十一ノ七 至十二ノ十 | 第一書房編 | 歌集 | 短歌文學全集 全十五册 | 四六判洋裝 | 第一書房 |

## 昭和十二年（丁丑）西曆一九三七年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 自十二年一 至十三年五 | 杉村楚人冠 | 文集 | 楚人冠全集 全十二册 | 四六判洋裝 | 日本評論社 |
| 二 | 小宮豐隆 | 劇評 | 演劇論集 | 菊判洋裝 | 聖文閣 |
| 二 | 藤村作 | 評論 | 日本文學原論 | 同 | 同文書院 |
| 二 | 柳永二郎編 | 上演年表 | 新派五十年 | 菊判紙裝 | 双雅房 |
| 二 | 瀧田貞治編 | 書誌 | 逍遙書誌 | 四六判洋裝 | 米山堂 |
| 三 | 秋庭太郎 | 演劇史 | 明治の演劇 | 四六判紙裝 | 中西書房 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 四 | 「國語と國文學」第一五六號 | 文學史 | 芳賀博士と明治大正の國文學 | 菊判 | 至文堂 |
| 四 | 河井醉茗 | 評傳 | 明治代表詩人 | 四六判洋裝 | 第一書房 |
| 四 | 湯地孝 | 評論 | 現代文學鑑賞原論 | 菊判洋裝 | 山海堂 |
| 四 | 村上濱吉編 | 書目 | 明治文學書目 | 同 | 村上文庫 |
| 四 | 舟橋聖一 | 評釋 | 近代日本文學 | 四六判洋裝 | 中興館 |
| 四及七 | 伊原青々園 | 劇話 | 團菊以後　正・續二册 | 同 | 相模書房 |
| 五 | 鳴海要吉編 | 詩文集 | 藤村・若菜集以前 | 同 | 日本書莊 |
| 五 | 「文藝懇話會」第二卷第五號 | 傳記資料 | 近世文藝名家傳記資料 | 菊判 | 文藝懇話會 |
| 五 | 草野心平等編 | 評論 | 現代日本詩人論 | 四六判紙裝 | 西東書林 |
| 六 | 坪谷善四郎編 | 雜資料 | 博文館五十年史 | 菊判洋裝 | 博文館 |
| 八 | 守隨憲治 | 歌舞伎劇 | 歌舞伎通鑑 | 同 | 山海堂 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 九 | 「文學」第五巻第九號 | 評傳 | 二葉亭研究 | 菊判 | 岩波書店 |
| 十 | 河井醉茗 | 詩論 | 醉茗詩話 | 菊判洋装 | 京都人文書院 |
| 十 | 小泉苳三編 | 年表 | 増補明治大正歌書年表 | 菊半截横本 | 立命館出版部 |
| 十 | 本間久雄 | 文學史 | 明治文學史 下巻 | 菊判洋装 | 東京堂 |
| 自十二年十至十三ノ八 | 二葉亭四迷 | 全集 | 二葉亭全集 全八冊 | 四六判洋装 | 岩波書店 |

## 昭和十三年（戊寅）西暦一九三八年

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一 | 菊池寛 | 概説 | 日本文學案内 | 四六判洋装 | モダン日本社 |
| 三以降續刊 | 鈴木三重吉著 安倍能成等編 | 小説集 | 鈴木三重吉全集 全六巻 | 四六判洋装 | 岩波書店 |
| 四 | 前田河廣一郎 | 評傳 | 蘆花傳 | 四六判洋装 | 同 |
| 五 | 鹽田良平 | 評傳 | 山田美妙研究 | 菊判洋装 | 京都人文書院 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 文部省内教育史編纂會編 | 教育史 | 明治以降教育制度發達史（全十一冊） | 菊判洋裝 | 龍吟社 | 五以降續刊 |
| 小宮豊隆 | 評傳 | 夏目漱石 | 四六判洋裝 | 岩波書店 | 七 |
| 舟橋聖一 | 同 | 岩野泡鳴　上卷 | 同 | 青木書店 | 七 |
| 吉田孤羊等編 | 全集 | 新編石川啄木全集　全十冊 | 四六判紙裝 | 改造社 | 六以降續刊 |
| 鹽田良平 | 評論 | 近代小説（「日本文學大系」第十一卷） | 同 | 河出書房 | 七 |
| 雜誌「月刊文章」臨時號 | 文學史 | 明治の文章・明治の文學 | 菊判紙裝 | 厚生閣 | 七 |
| 木枝增一・横田俊一共著 | 評論 | 現代文學研究序説 | 菊判洋裝 | 東洋圖書會社 | 七 |
| 久松潜一 | 鑑賞 | 紅葉・露伴名作物語 | 四六判洋裝 | 至文堂 | 七 |
| 柳田泉 | 雜纂 | 續隨筆・明治文學 | 同 | 春秋社 | 八 |
| 樋口一葉作　長谷川時雨評釋 | 小説集 | 評釋一葉小説全集 | 三五判紙裝 | 冨山房 | 八 |
| 星野天知 | 雜纂 | 默歩七十年 | 四六判洋裝 | 聖文閣 | 十 |

# 明治文學者研究參考文獻

これは、明治文學の研究にあたり日頃閲覽せる文獻の手控を、被評傳者の筆名又は名のＡＢＣ順に列擧せるものである。所載雜誌を或は卷號數に據り或は年月に據り示す等、體裁に統一を缺くもの有るも、其等文獻中には既に手許に存せぬもあり、遂に再調査の餘裕も無きまゝに茲にはメモの儘を一覽とし、他日の増補訂正を期するものである。

## Ｉ　叢傳

菅川怪庵　文士政客風聞錄　明治三十二年　大學館

妖堂居士　文壇風聞記　同　年　新聲社

「文章俱樂部」第二年第一號　文壇一百人　大正六年　新潮社

「中央文學」第三年第七號　文豪追想號　同　八年　春陽堂

文壇樂屋雀編　文壇失敗談　同　五年　新聞學會

「新潮」第十二卷第一號　現代文藝百家小傳　明治四十三年　新潮社

中村孤月　現代作家論　大正四年　磯部甲陽堂

「文章世界」第三卷第六號　近代三十六文豪　明治四十一年　博文館
日本之部ニ樗牛・一葉・透谷・子規・紅葉ノ評傳アリ

緒方流水　塵影錄　明治三十四年　新聲社
第二部ニ紅葉・露伴以下當時ノ文士ノ人物評アリ

中村樂天　明治の俳風　明治四十年　俳書堂
子規・鳴雪・小波・紅綠等主要俳人二十家ノ評論

新聲社編　明治文學家評論　明治三十四年　新聲社

「新古文林」第二卷第十一號　明治文士の悲慘なる最後　同　三十九年　獨步社

正宗白鳥　文壇人物評論　昭和七年　中央公論社

福田清人　硯友社の文學運動　同　八年　山海堂

松本龍之助編　明治大正文學美術人名辭書　大正十五年　立川文明堂

新井聲風編　明治以降物故新派俳人傳　昭和七年　あかね社

佐佐木信綱　明治文學の片影　同　九年　中央公論社

川島益太郎　現代作家の人及び作風　同　八年　大同館

素人社編　現代俳家人名辭書　同　五年　素人社

齋藤昌三編「明治文化研究」第二輯　明治大正作者名索引　同　九年　書物展望社

「現代」附錄　名人達人大文豪　同　三年　講談社
樗牛・漱石・紅葉ノ評傳アリ

「國語と國文學」第九卷第四號　明治文豪論　昭和七年　至文堂

藤村作編　日本文學大辭典 全四卷　同七至十年　新潮社

大阪每日新聞社編　廿一大先覺記者傳　同　五年　大阪每日新聞社

森洽藏編　日本文學者年表續篇　大正八年　大日本圖書株式會社

內田魯庵　思ひ出す人々　同　十五年　春秋社

相馬御風　黎明期の文學　同　元年　新潮社
透谷・一葉・白鳥・未明論アリ

横山健堂　趣味と人物　大正二年　中央書院
文壇人國記アリ

生田長江　最近の小說家　明治四十五年　春陽堂

澁谷榮一　詩壇人國記　昭和八年　香蘭社

武者小路實篤　人生・宗教・文藝　同　十年　學藝社
露伴・雪嶺・潤一郎ニ關スル記述アリ

橋田東聲　子規と節と左千夫　昭和四年　春陽堂

內田魯庵　紫煙の人々　同　十年　書物展望社

吉江喬松監修　世界文藝大辭典　全七卷　同十至十二年　中央公論社

「愛書趣味」臨時號　追悼誌文献篇　昭和七年　青山容三

江見水蔭　隱れたる硯友社作家「國語と國文學」第十一卷第八號　至文堂

| | | | |
|---|---|---|---|
| 西村天外編 | 古今學者列傳 | 明治二十三年 | 弘文館 |
| 島崎藤村等 | 明治の文壇及び劇壇に於て最も偉大と認めたる人物・事業・作品—「新潮」第十七卷第五號 | | 新潮社 |
| 「佛教文藝」 | 佛教文藝・十二傑 | 第一卷第十號 明治卅六年九月 | 佛教社 |
| 千葉木仙史 | 學界文壇時代之新人 | 明治四十一年 | 天地堂 |
| 日比谷圖書館編 | 傳記資料索引 | 第一卷第一至第四冊既刊 | 日比谷圖書館 |
| 「新潮」記者編 | 明治大正文豪研究 | 昭和十一年 | 新潮社 |
| 柳田新太郎編 | 現代歌壇系統圖 | 同年 | 茜書房 |
| 柳田泉 | 隨筆明治文學 | 同年 | 春秋社 |
| 馬場孤蝶 | 明治文壇回顧 | 同年 | 協和書院 |
| | 透谷・眉山・綠雨・漱石・小波・藤村ノ記事アリ | | |
| 成瀨正 | 明治文學研究 | 昭和十一年 | 野田書房 |
| | —紅葉・露伴・鷗外ノ研究論— | | |
| 大町桂月 | 十人十色名物男 | 大正五年 | 實業之日本社 |
| 島中雄三編 | 人物研究 | 同二年 | サンデー社 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 木村毅 | 樗牛・鷗外・漱石 | 昭和十一年 | 千倉書房 |
| 木下杢太郎 | 藝林閒歩 | 昭和十一年 | 岩波書店 |
| | ―鷗外・露伴・與謝野寛論等― | | |
| 相馬黑光 | 默移 | 昭和十一年 | 女性時代社 |
| | ―若松賤子・大塚楠緒子・國木田信子等ノ記事アリ― | | |
| 後藤宙外 | 明治文壇回顧錄 | 昭和十一年 | 岡倉書房 |
| 江見水蔭 | 明治文壇逸話 | 同　九年 | 江水社 |
| 吉田香雨 | 當世作者評判記 | 明治二十四年 | 太華堂 |
| 櫻井德太郎編 | 東京現住著作家案內 | 同　二十五年 | 博盛堂 |
| 新聲社編 | 現代百人豪 全四卷 | 明治三十五年 | 新聲社 |
| 中村武羅夫 | 現代文士廿八人 | 明治四十二年 | 日高有倫堂 |
| | ―紅葉・子規・露伴論アリ― | | |
| 新聲社編 | 創作苦心談 | 同　三十四年 | 新聲社 |
| 文壇諸家 | 文壇に於ける人と國―新潮― | 第十四卷第二至四號 | 新潮社 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 高群逸枝 | 日本女性人名辭書 | 昭和十一年 | 厚生閣 |
| 花房吉太郎編 | 日本博士全傳 | 明治二十五年 | 博文館 |
| 鳥谷部春汀 | 春汀文集單行 | 同四十一年 | 隆文館 |
| | ——逍遙と鷗外・明治の飜譯家等—— | | |
| 柳田泉 | 女性作家七人語「傳記」 | 第二卷第一號 | 傳記學會 |
| 黑澤隆信 | 子規・節・左千夫の文學 | 昭和八年 | 金星堂 |
| 中村光夫 | 二葉亭論 | 同十一年 | 芝書店 |
| | ——荷風・漱石・二葉亭論—— | | |
| 山路愛山 | 明治の小說家とりぐ評「文章世界」 | 第三卷第五號 | 博文館 |
| 「文藝懇話會」 | 近世文藝家傳記資料號 | 第二卷第五號 | 文藝懇話會 |
| 「新小說」 | 明治文士肖像號 | 第二年第一・二號 | 春陽堂 |
| 小島烏水 | 偃松の匂ひ | 昭和十二年 | 書物展望社 |
| | ——山縣悌三郞・千葉龜雄・筑波根詩人・江見水蔭の記事—— | | |
| 樋口一葉の妹等 | 文士遺族末亡人の懷舊談「新天地」 | 第一卷第一號 | 世光社 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 讀賣新聞社編 | 名媛の學生時代<br>——大塚楠緒子・三宅花圃等—— | 明治四十年 | 讀賣新聞社 |
| 久津見蕨村 | 眞人僞人<br>——蘇峰・鷗外・逍遙・漱石・雪嶺論アリ—— | 明治四十五年 | 丙午出版社 |
| 島崎藤村外卅九氏 | 明治文學界天才觀 | 第廿一卷第九號 | 成功雜誌社 |
| 島田青峰 | 子規・紅葉・綠雨 | 昭和十年 | 言海書房 |
| 「面白草紙」 | 明治文學家漫評 | 第二號(明治二十九年九月) | 中川商店 |
| 「新潮」 | 早稻田派論(諸家) | 第十三卷第四號 | 新潮社 |
| 「同」 | 文壇團體評論 三田派論 | 第二十卷第四號 | 同 |
| 「同」 | 同 早稻田派論 | 第二十卷第二號 | 同 |
| 「傳記」 | 明治文學者特輯號 | 第三卷第　號 昭和十一年七月 | 傳記學會 |

## Ⅱ 各傳

案外堂小室信介（柳田泉）『明治文化研究』第二輯所收

與謝野晶子論（長谷川秀雄外六氏）「中央公論」第二十七年第六號

與謝野晶子論覺書（藤川忠治）「國語と國文學」第九卷第四號

與謝野晶子論（水野葉舟）「新潮」第十八卷第二號

與謝野晶子（伊藤銀月）『當世一百人』第一卷ノ內、明治三十八年

與謝野晶子（九百里外史）單行『現代女性の解剖』所收、明治三十九年

平塚明子論「中央公論」臨時增刊（婦人問題號）大正二年七月

赤彥記念號「アララギ」第二十九年第十號

島木赤彥追悼號「アララギ」第十九年第十號

島木赤彦（宇都野研）改造社版『日本文學講座』第七卷（和歌篇）
歌人赤彦の鑑賞（高田浪吉）單行、昭和十二年
故川上眉山氏「早稻田文學」明治四十一年七月號
川上眉山（一丈靑）「日本及日本人」同
嗚呼眉山君（石橋思案）「文藝俱樂部」同
故川上眉山氏追悼錄「新小說」第十三卷第七號
あゝ川上君、外四篇「太陽」第十四卷第十號
川上眉山研究（佐山濟）木星書院版『明治文學講座』第五卷ノ內
川上眉山――人・作品――（大野光次）「立命館文學」第四卷第九・十號
故上田博士追想錄「藝文」第七卷第九號
上田敏號「文藝研究」第一卷第二號
上田敏（折戶彫夫）改造社版「日本文學講座」第九卷ノ內

牧水追悼號「創作」第十六卷第十一號

美妙齋・人・小說（鹽田良平）「國語と國文學」第八卷第六至八號

山田美妙と黑岩涙香（鹽田良平）「國語と國文學」第十二卷第一號

美妙と紅葉（本間久雄）「中央公論」第五十年第七號

晩年の山田美妙（本間久雄）「中央公論」第五十年第五號

山田美妙（鹽田良平）改造社版『日本文學講座』第十一卷

山田美妙研究（土井重義）木星社版『明治文學講座』第五卷

山田美妙（明治文學號）「立命館文學」第一卷第六號

故山田美妙齋に就て（石橋思案）「早稻田文學」第六十一號

山田美妙研究（鹽田良平）單行、昭和十三年、人文書院

土井晩翠（湯淺茂雄）改造社版「日本文學講座」第九卷 新詩文學篇

太田資順編、德富兄弟、單行、大正四年、有朋館

[illegible]

高山樗牛論（諸家）「中央公論」第二十年第五號
――故高山君に就て（大町桂月）外六篇――
高山樗牛（長谷川天溪）「文章世界」明治四十年二月號
亡兄高山樗牛（齋藤信策）「中央公論」第二十二年第六號
詩評家としての樗牛（日夏耿之介）「早稻田文學」第二四四號
高山樗牛（諸家）「文章世界」第三卷第六號
嗚呼高山樗牛（土井晩翠）「帝國文學」第九卷第六號
高山林次郎君の天才に就て（田中王堂）「中央公論」第二十二年第六號
高山樗牛研究（高須芳次郎）新潮社版「日本文學講座」（明治時代下）
高山樗牛（鹽田良平）「國語と國文學」第九卷第四號
高山樗牛（同　）山海堂版「季刊明治文學」第二輯ノ内
高山樗牛（本間久雄）「早稻田文學」第五十號
高山樗牛研究（秋江・御風）「新潮」第十六卷第三號
哲人何處にありや（嘲風・鼎浦編）單行、大正二年、博文館

哲人高山樗牛（西宮藤朝）單行、同六年

大學時代の高山林次郎君（井上哲次郎）『巽軒講演集』二編所收、明治三十六年

明治文學史上の樗牛（椒園生）「人文」第一卷第五至第十一號

樗　牛　傳（齋藤親平・三浦菊太郎・中桐確太郎・畔柳都太郎等）「人文」第一卷第一號以降至第三卷第九號

高山樗牛を悼む（久保天隨）單行『文壇獅々吼』所收、明治四十年

樗　牛　の　事（芥川龍之介）「人文」第四卷第一號

清見潟に於ける樗牛（樗牛會編）單行、明治三十八年

人及び藝術家としての樗牛（赤木桁平）單行、大正六年、新潮社

金子（筑水）博士追悼記念號「理想」第七十六號

筑水金子馬治博士記念號　早稻田文學「明治文學」第二號

文藝批評家としての筑水先生（本間久雄）『文學襍記』所收、昭和十三年、人文書院

生　田　長　江　論（荒川義英）「新潮」第二十二卷第六號

外山（丶山）博士を悼む（高山樗牛）單行『文藝評論』所收、明治三十四年、博文館

外山正一傳（三上參次）單行『丶山存稿』上卷所收、明治四十二年、丸善
外山正一（千河岸貫一）單行『明治百傑傳』所載、大正元年
登張竹風と土井晩翠（佐谷悦治）「文藝春秋」昭和九年三月號
瀧田樗蔭追憶記（諸家）「中央公論」第四十年第十三號
兆民先生行狀記（小泉策太郎）「中央公論」第四十六年第十二號

人及び藝術家としての國木田獨步（江馬修）單行、大正六年、新潮社
獨步と龍之介（池田壽夫）耕進社版「クオタリイ日本文學」第一輯
國木田獨步小論（吉野裕）同　同　第二輯
國木田獨步（佐山濟）「國語と國文學」第九卷第四號
獨步の小說（湯地孝）「國語と國文學」第四卷第九號及第五卷第四・五・十一號
獨步に關するAとB（鹽田良平）「同　」第四卷第七號
國木田獨步號「新潮」明治四十一年七月號
獨步號「新聲」第十九年第一號

國木田獨步（諸家）「中央公論」第三十三年第八號
國木田獨步追懷錄（「新小說」第十三卷第八號
獨步を憶ふ（中澤臨川）「文章世界」第三卷第十三號
獨步氏に就て（正宗白鳥）「青年評論」明治四十一年七月號
國木田獨步（吉江喬松）新潮社版「日本文學講座」（明治時代下編）
國木田獨步研究（作家研究座談會記事）「新潮」昭和九年八月號
獨步論（沼波瓊音）「中央公論」第二十一年第五號
國木田獨步（鹽田良平）岩波講座「日本文學」ノ內
國木田獨步（中村星湖）改造社版「日本文學講座」第十一卷ノ內
國木田獨步論（田山花袋）「早稻田文學」明治四十一年八月號
獨步―傳記・感想（國木田收二等）「趣味」第三年第八號
獨步氏（石丸紫水）「新文林」第五號
國木田獨步論（片上天弦）「早稻田文學」第五十號
獨步十三回忌に（確太郎・臨川等）「早稻田文學」第一六三號

國木田獨歩研究（御風・孤雁・有明）「新潮」第十六卷第一號

國木田獨歩研究ノート（山本和夫）「星座」自第二卷第三號至第三卷第二號

傳記小說 國木田獨歩（福田淸人）單行、昭和十二年、新潮社

——「新潮」第卅四年第二號所載ノモノ——

獨歩の生前に於ける小說家としての人氣（窪田空穗）單行『忘れぬ中に』所收、昭和十三年

二葉亭四迷（坪內逍遙 內田魯庵編）單行、明治四十二年、易風社

柿の蔕（坪內逍遙）單行、昭和八年、中央公論社

——二葉亭ニ關スル長文ノ記事ヲ收ム——

二葉亭四迷研究（作家研究座談會記事）「新潮」昭和九年十一月號

故二葉亭氏追憶錄（諸家）「新小說」第十四卷第六號

噫！ 二葉亭四迷逝けり「文章世界」第四卷第八號

長谷川二葉亭君外四篇「趣味」第三年第六號

二葉亭の一面（大庭柯公）「日本及日本人」第五一〇號

二　葉　亭（正宗白鳥）「文章世界」明治四十年一月號

長谷川　二葉亭（藤森成吉）改造社版「日本文學講座」第十二卷

二葉亭四迷研究（藤森成吉）新潮社版「日本文學講座」明治時代下編

二葉亭資料號「明治文學研究」昭和九年十月號

二葉亭に於ける「實感」に就て（岩崎萬喜夫）山海堂版「季刊明治文學」第二輯

二葉亭四迷の文學觀（井上孝次郎）「國語と國文學」第九卷第四號

二葉亭の女性（久松潜一）「國語と國文學」第二卷第四號

亡友二葉亭を憶ふ（川島浪速）「中央公論」第五十一年第十二號

長谷川二葉亭年譜（齋藤昌三）單行『青淫行狀記』所收、昭和十年

二葉亭の文章（大町桂月）單行『第三筆の雫』所載、明治四十一年

長谷川二葉亭研究（星湖・御風）「新潮」第十六卷第二號

長谷川二葉亭を悼む（島崎藤村）單行『新片町より』所收

二葉亭四迷君を思ふ（田山花袋）單行『インキ壺』所收

二葉亭の所謂現實に就て（金子實英）「國語國文の研究」第三十九・四十號

二葉亭とロシア文學（金子無絃）「同　」第十至十二號
二葉亭研究號　岩波版「文學」特輯號、第五卷第九號
二葉亭の問題（中村光夫）「思想」第一八五號
二葉亭四迷斷片（宇野浩二）「文學」第五卷第十二號
二葉亭四迷（横山源之助）單行『凡人非凡人』所收、明治四十四年・新潮社

大槻博士（復軒）の思ひ出號「國漢」第十七號

小栗風葉論（生田長江）「藝苑」明治三十九年三月號
小栗風葉論（諸家）「中央公論」第二十三年第九號
小栗風葉（中村武羅夫）改造社版「日本文學講座」第十一卷
小栗風葉資料集（陸井清三編）謄寫刷、昭和十年、編者自家版
小栗風葉文献解題（陸井清三）「書叢」第一卷第一・二號

小説 天　才（小栗風葉）單行、明治四十一年、隆文館

――前編卷末ニ附錄トシテ長江並ニ青果ノ「風葉論」ヲ收載セリ――

相馬御風論（清水柳三郎）「新潮」第二十二卷第六號

高橋五郎（櫻井吉松）單行、明治二十六年七月

予の半面（伊藤銀月）同　同　三十九年、弘道館

村井弦齋小論（蛯原八郎）「明治文化研究」第四輯收錄

萩の家主人追悼錄「國文學」第六十二號

故落合直文氏（杉浦重剛）「國學院雜誌」第十九卷第十號

厨川白村氏追悼錄「宗教と藝術」第四卷第十號

厨川白村追悼「藝文」第十四年第十一號

河東碧梧桐追悼號「海紅」第二十二卷第十二號

島村抱月追悼號「早稻田文學」第一五七號

島村抱月論（諸家）「中央公論」第二十六年第七號
島村抱月研究ノートからの覺書（仲賢禮）「季刊明治文學」第二輯
評論家としての島村抱月（同　）「同　」第四輯
抱月先生追悼（本間久雄）單行『文學襍記』所收、昭和十三年、人文書院
孤獨の人抱月氏（中村吉藏）單行『演劇獨語』所收、昭和十二年、東宛書房
龍之介・武郎・抱月（正宗白鳥）單行『思ひ出すまゝに』所收、昭和十三年
岩野泡鳴論（正宗白鳥）「中央公論」第四十三年、第八號
岩野泡鳴（唐木順三）改造社版「日本文學講座」第九卷
岩野泡鳴（宇野浩二）同「同　」第十一卷
岩野泡鳴追悼號「常磐木」第七卷第六號
岩野泡鳴論（舟橋聖一）「新潮」昭和七年九月號
岩野泡鳴（作家研究座談會記事）「新潮」昭和九年十月號
岩野泡鳴論（河上徹太郎）「文藝」昭和九年五月號
岩野泡鳴（舟橋聖一）「國語と國文學」第八卷第九・十・十二號

岩野泡鳴と自己發展文學に就て（舟橋聖一）「國語と國文學」第九卷第八號

泡鳴五部作小說（富倉二郎）「國語國文の研究」第三十一、三十二號

逝ける岩野泡鳴（諸家）「文章世界」第十五卷第六號

岩野泡鳴氏の一面觀（宮島新三郎）「早稻田文學」第一六六號

岩野泡鳴（舟橋聖一）「文學界」昭和十一年七月號以降連載中

岩野泡鳴追憶記事（諸家）「新潮」第三十二卷第六號

岩野泡鳴論（大杉榮）「新潮」第二十二卷第六號

泡鳴君の墓石（戸川秋骨）單行『朝食前のレセプション』所收、昭和十二年、第一書房

岩野泡鳴傳上卷（舟橋聖一）單行、昭和十三年七月

正宗白鳥論（諸家）「中央公論」第二十四年第二號

正宗白鳥論（上司小劍）「新潮」昭和九年六月號

正宗白鳥論（瀨沼茂樹）「文學」同　十年五月號

正宗白鳥（青野季吉）改造社版「日本文學講座」第十一卷

正宗白鳥に於ける痼性なるもの（杉森久英）「季刊明治文學」第三輯
白鳥氏の小說に關する私見（坂本　浩）「同　」第四輯
正宗白鳥論（相馬御風）「新潮」第十六卷第五號
正宗白鳥論（生田長江）「文章世界」第八卷第二號
正宗白鳥君の人と藝術（德田秋聲）「新潮」第三十五卷第四號
文壇的自敍傳（正宗白鳥）「中央公論」第五十三年第一號以降連載

加藤弘之自叙傳（加藤先生八十歲祝賀會編）單行、大正四年六月
原抱一庵追悼記事「新小說」第九年第十號
北原白秋氏の印象（長田秀雄外五氏）「新潮」第二十八卷第四號
樋口一葉創作年表（神崎淸）富山房百科文庫「評釋一葉小說全集」
樋口一葉「たけくらべ」評釋（鈴木敏也）單行、目黑書店
一　葉　論（平井桃水外八氏）「中央公論」第二十二年第六號
女文豪が活躍の面影（三宅花圃）「女學世界」第八卷第九號

樋口一葉（諸家）「文章世界」第三卷第六號
一葉女史記念號「心の花」第二十六卷第十一號
樋口一葉研究（作家研究座談會記事）「新潮」昭和十年六月號
一葉女史の作品及び人（今井邦子）「同」同　九年十月號
樋口一葉研究（瀬沼茂樹）木星社版「明治文學講座」第五卷
樋口一葉研究（久保田万太郎）新潮社版「日本文學講座」明治時代下編
樋口一葉（湯地孝）岩波講座「日本文學」ノ内
樋口一葉論（神近市子）改造社版「日本文學講座」第十二卷
一葉の作品に現れたる女性（湯地孝）「國語と國文學」第二卷第四號
樋口一葉の展望（岩城準太郎）「同」第六卷第十號
一葉の小說（近藤忠義）「國語と國文學」第九卷第四號
小說「樋口一葉」（邦枝完二）單行、昭和九年
一葉女史（小島烏水）「文庫」第四卷第一號
日記を通して見たる一葉の生活（丘の人）「新潮」第十七卷第一號

私の考へた一葉女史（田村とし子）「同　」第十七卷第五號

樋口一葉論（相馬御風）「早稻田文學」第五十號

一葉女史（馬場孤蝶）「明星」卯歲第八號

眞筆版 たけくらべ（馬場孤蝶編）單行、大正七年、博文館

――諸家ノ一葉ニ關スル記事。略傳、著作年表等所載――

樋口一葉論（湯地孝）單行、大正十五年、至文堂

田澤稻舟（長谷川時雨）「東京朝日新聞」昭和十二年三月廿七日號ヨリ廿回ニ連載

田澤稻舟（鹽田良平）單行『山田美妙研究』所收、昭和十三年

谷崎潤一郎論（諸家）「中央公論」第卅一年第四號

谷崎潤一郎論（十一谷義三郎）改造社版「日本文學講座」第十二卷

谷崎潤一郎と佐藤春夫（正宗白鳥）「中央公論」第四十七年第六號

谷崎潤一郎論（武者小路實篤）「新潮」昭和七年七月號

最近の谷崎潤一郎を論ず（佐藤春夫）「文藝春秋」昭和九年一月號

谷崎潤一郎と志賀直哉（豐田三郎）「新潮」昭和十年五月號

谷崎氏の現在及び將來（生田長江）「中央公論」第五十年第五號

谷崎潤一郎氏の古典性（峰岸義秋）「季刊明治文學」第三輯

谷崎潤一郎氏の藝術を想ふ（湯地孝）「國語と國文學」第九卷第八號

谷崎潤一郎特輯號「評論」第五號、昭和九年八月號

谷崎潤一郎論（河上徹太郎）「文學」第三卷第十二號

谷崎潤一郎氏に就て（三宅周太郎）「新潮」第卅七卷第四號

阿部次郎論（生田春月）「新潮」第廿二卷第六號

文豪書簡 紅葉より小波へ（巖谷小波編）單行、大正九年、手紙研究會

人及び藝術家としての尾崎紅葉（本間久雄）單行、大正七年、新潮社

硯友社と紅葉（江見水蔭）單行、昭和二年、改造社

尾崎紅葉（松原至文編）單行、明治四十年、文祿堂

尾崎紅葉論（諸家）「中央公論」第廿二年第八號

尾崎紅葉（塚原澁柿園）「同」第廿二年第九號

紅葉先生の塾「文章世界」明治四十年二月號

尾崎紅葉（諸家）「同」第三卷第六號

尾崎紅葉が生きてゐたら（巖谷小波）「中央公論」第四十八年第八號

尾崎紅葉研究（作家研究座談會記事）「新潮」昭和十年五月號

尾崎紅葉（片岡良一）岩波講座「日本文學」ノ內

尾崎紅葉研究（德田秋聲）新潮社版「日本文學講座」明治時代下編

尾崎紅葉論（德田秋聲）改造社版「日本文學講座」第十二卷

尾崎紅葉研究（福田清人）木星社版「明治文學講座」第五卷

言文一致と尾崎紅葉（山本正秀）「季刊明治文學」第三輯

尾崎紅葉論（福田清人）「國語と國文學」第九卷第四號

紅葉・小波の事（江見水蔭）單行『實說金色夜叉』所收、昭和九年

尾崎紅葉（楠山正雄）「早稻田文學」第五十號

紅葉山人廿七年忌記念展覽會誌（硯友社同人編）昭和四年

竹柏會と紅葉山人（巖谷小波）「心の花」第三百號

紅葉先生と學海翁（刀畔子）「同　」同　號

紅葉山人を悼む（久保天隨）單行『文壇獅子吼』所收、明治四十年

尾崎紅葉追悼演說（竹冷外三氏）「新小說」第九年第一號

紅葉先生（鏡花・風葉）「明星」卯歲第十一號

尾崎紅葉評傳（德田秋聲）單行『尾崎紅葉讀本』所收、昭和十一年、三笠書房版

紅葉山人追憶錄（諸家）「新小說」第八年第十三號

尾崎紅葉について（楠田清人）單行『尾崎紅葉讀本』所收、昭和十三年、第一書房版

尾崎紅葉（明治文學研究會編）單行、昭和十三年七月

特輯 尾崎紅葉研究「解釋と鑑賞」第廿五號　同　年六月

紅葉と露伴（久松潜一）「物語日本文學」第二期第十一卷『紅葉露伴名作物語』卷末附載

田山花袋論（德田秋聲外四氏）「中央公論」第廿三年第五號

田山花袋論（諸家）「新潮」第十三卷第三號

田山花袋論（正宗白鳥）「中央公論」第四十七年第七號

田山花袋（唐木順三）「文學」昭和九年八月號

田山花袋研究（作家研究座談會記事）「新潮」昭和九年九月號

田山花袋（前田晁）改造社版「日本文學講座」第十一卷

花袋と自然（鹽田良平）「文學」第三卷第十一號

田山花袋論（篠田太郎　耕進社版「クオタリー日本文學」第二輯

田山花袋論（坂本浩）山海堂版「季刊明治文學」第一輯

花袋・藤村（片岡良一）「國語と國文學」第九卷第四號

自然主義時代に於ける田山花袋（坂本浩）「立命館文學」第三卷第十號

田山花袋氏の藝術に現れたる人物（水野葉舟）「新潮」第十七卷第一號

花袋・秋聲記事號（諸家）「文章世界」第十五卷第十一號

日常の田山花袋氏（映山紅）「同　」第八卷第二號

田山花袋（小林愛川）「文章俱樂部」創刊號
花袋追慕（内田百閒）單行『北溟』所收、昭和十二年、小山書店
田山花袋墓（白石實三）單行『新武藏野物語』所收、昭和十一年
田山花袋氏の印象（窪田空穗）單行『忘れぬ中に』所收、昭和十三年

天才泉鏡花（諸家）「新小説」第三十年第五號
泉鏡花を評す（蕉陰）「帝國文學」第八卷第四號
泉　鏡　花（中河與一）改造社版「日本文學講座」第十一卷
鏡　花　研　究（藤原定）木星社版「明治文學講座」第五卷
泉鏡花といふ男（德田秋聲）「文藝春秋」第十三卷第十二號
泉鏡花の表現（吉田精一）　山海堂版「季刊明治文學」第二輯
泉鏡花の創作態度について（酒井森之介）「同　」第三輯
泉鏡花の文章（片岡良一）「國語と國文學」第二卷第八號
泉　鏡　花（田原節夫）「同　」第九卷第四號

小山内薫研究（作家研究座談會記事）「新潮」昭和十年一月號
小山内薫追悼號「新思潮」第四十二號（昭和四年二月）
小山内薫先生追悼號「舞臺新聲」第三卷第二號
小山内薫追悼號「劇と評論」第六卷第一號
小山内薫記念號「三田文學」第四卷第三號
小山内薫追悼號「築地小劇場」第六卷第二號
小山内薫君（阿部次郎）單行『秋窓記』所收、昭和十二年、岩波書店

香亭中根淑自叙傳『香亭藏草』所收、大正三年、金港堂
文豪大町桂月（田中貢太郎）單行、大正十五年、靑山書院
大町桂月追悼（諸家）「中央公論」第四十年第十號
桂月翁と鳴雪翁（堀江月明）「國學院雜誌」第卅二卷第六號
大町桂月翁の思ひ出（久保田辰彥）單行（非賣品）昭和四年、著者自家版

薄田泣菫研究（佐藤一英）木星社版「明治文學講座」第五卷

薄田泣菫（南江二郎）改造社版「日本文學講座」第九卷

噫瓊音沼波武夫先生（瑞穂會編並發行）單行、昭和三年

永井荷風論（相馬御風外七氏）「中央公論」第廿四年第十一號

永井荷風論（正宗白鳥）「中央公論」第四十七年第四號

荷風とチエーホフ（正宗白鳥）「改造」昭和九年十一月號

永井荷風論（小島政二郎）改造社版「日本文學講座」第十二卷

藝術家としての永井荷風（相馬御風）「新潮」第十六卷第二號

當今の文章家永井荷風氏（山王星）「文章世界」第六卷第四・五號

好色本作家としての荷風氏とシュニッツレル（秦豐吉）「新潮」第廿四卷第三號

永井荷風の藝術（日夏耿之介）「中央公論」第五十二年第九號

永井荷風論（平井程一）「文學」第五卷第十一號

荷風氏の輪廓と明治大正文學展開の型（片岡良一）「思想」第一九〇號

堺利彦（枯川）傳及著作年譜『堺利彦全集』所收、昭和八年、中央公論社

內村鑑三傳（益本重雄・藤澤音吉）單行、昭和十年
中村正直（敬宇）傳（石井研堂）單行、明治四十年、成功雜誌社
文壇三十年の回顧（馬場孤蝶）「新潮」第十七卷第五號
劇作家としての岡本綺堂（伊原青々園等）「新小說」第廿年第三號
故中村敬宇先生（三島毅）「太陽」第十六卷第十號
文章より見たる中村敬宇先生（増田藤之助）「文章世界」第二卷第二號
君子國の眞君子中村敬宇翁（德富蘇峰）「國民之友」第一二二號
大塚楠緒子女史を悼む（德田秋江）「早稻田文學」第六十一號
饗庭篁村君の追憶（坪內逍遙）單行『竹の屋劇評集』所收、昭和二年
霞亭先生著作年表（江上修治郎編）單行、昭和二年
吉江孤雁氏の印象（中村星湖等）「新潮」第卅三卷第五號
新らしい文章に於ける虛子氏の功績（鈴木三重吉）「文章世界」第七卷第十一號
高濱虛子氏の平生（杵島山）「文章世界」第八卷第九號
茅原華山論（荒畑寒三）「新潮」第廿二卷第六號

花圃女史の作（小島烏水）「文庫」第一卷第三號
默阿彌傳（河竹繁俊）春陽堂版『默阿彌全集』首卷所收
默阿彌研究（大瀨健）木星社版「明治文學講座」第五卷
默阿彌研究（河竹繁俊）改造社版「日本文學講座」第十卷
默阿彌（同　）岩波講座「日本文學」ノ內
默阿彌研究（岡本綺堂）新潮社版「日本文學講座」明治時代下編
鈴木三重吉論（福田清人）「國語と國文學」第十一卷第十號
同（赤木桁平）「新潮」第十七卷第二號
內藤鳴雪追悼號「枯野」第六卷第四號
同「芭蕉」第三卷第四號
同「雲蹤」第四卷第四號
同「覇王樹」第二號（大正十五年）
同「水甕」第四卷第五號
同「南柯」第十五卷第一號

鳴雪翁の平生（杵島山）「文章世界」第八卷第七號
鈴木三重吉論（本間久雄）「早稲田文學」第七十八號
自叙傳（鈴木三重吉）「同　」同　號
鈴木三重吉追悼號「赤い鳥」第十二卷第三號
默阿彌雜記（河竹繁俊）單行、昭和十年、岡倉書房
鈴木三重吉論（石坂養平）「帝國文學」第十八卷第五號
鈴木三重吉氏の事（内田百閒）單行『北溟』所收、昭和十二年
鈴木三重吉斷片（宇野浩二）「文學」第六卷第三號
植村正久傳（青芳勝久）單行、昭和十年九月、敬文館
上田萬年博士追悼錄「國語と國文學」第一六四號（昭和十二年）
佐々木信綱先生（藤田德太郎）單行『文化勳章に輝く人々』所收、昭和十二年
片上伸論（加藤朝鳥）「新潮」第廿二卷第六號
軍醫としての鷗外先生（山田弘倫）單行、昭和九年、醫界時報社

鷗外遺珠と思ひ出（森於菟・同潤三郎）單行、同 八年、昭和書房

鷗外森林太郎（森潤三郎） 單行、同 九年、同

鷗 外 書 志（瀧田貞治編） 單行、同 八年、臺灣愛書會

父鷗外の生涯（森於菟）單行「屍室斷想」所收、昭和十年

森 鷗 外 論（諸家）「中央公論」第廿四年第九號

同 （諸家）「新潮」第十三卷第五號

森鷗外について（正宗白鳥）「中央公論」第四十三年第三號

文豪鷗外森林太郎「新小說」臨時增刊、第廿七年第九號

森鷗外先生追悼號「三田文學」第十三卷第八號

鷗外先生記念號「明星」（第二期）第二卷第三・四號

森 鷗 外 研 究（小島政二郎）新潮社版「日本文學講座」明治時代下編

森 鷗 外（森潤三郎）改造社版「日本文學講座」第十二卷

森 鷗 外 研 究（作家研究座談會記事）「新潮」昭和九年十二月號

鷗 外 と 傳 統（成瀨正勝）「文學」昭和九年三月號

森　鷗　外　論（唐木順三）「思想」同　八年一月號

日本近代文學と森鷗外（宍戸儀一）「思想」昭和九年六月號

臺灣時代の森鷗外漁史（島田謹二）「文學」同　十年五月號

森　鷗　外　論（成瀬正勝）「國語と國文學」第九卷第四號

鷗外追懷記事「心の花」第廿六卷第八號

森　鷗　外（森於菟）單行『父の映像』收載、昭和十一年

晩年の父――鷗外のこと（小堀杏奴）單行、昭和十一年、岩波書店

鷗外の性慾小説（大町桂月）單行『半生の文章』所收、明治四十年

鷗外研究號（諸家執筆）「文學」第四卷第六號

鷗　外　研　究（諸家）岩波書店版『鷗外全集』著作篇附錄

森　鷗　外（秦豐吉）丸善「學燈」第四十一卷第十一號

鷗　外　論　稿（伊藤至郎）「文學」第五卷第十二號

沈默時代の鷗外（一戸　務）「同　」昭和十三年二月號

人間としての森鷗外（三枝博音）「新潮」第卅五卷第三・四號

三木竹二の死と鷗外の「高瀨舟」（片岡良一）「文學」第六卷第三號

鷗外先生を顧る（後藤末雄）「文藝春秋」第十六卷第九號

鷗外文庫に就て（岡野他家夫）「日本古書通信」第一〇四號

櫻痴先生と柳北先生（塚原澁柿）「文章世界」明治卅九年四月號

故櫻痴居士を懷ふ（厨川白村）「明星」午歲ノ第三號

「空炷」の作者 大塚楠緒子」を偲ぶ（花郁芳江）「書物展望」第八十七號

文明批評家としての王堂と卯之助論（北昤吉外七氏）「中央公論」第卅二年第一號

田中王堂論（見榮一）「新潮」第廿二卷第六號

德富蘆花論（山路愛山外）「中央公論」第廿五年第六號

德富蘆花と其哲學（覆面冠者）單行、大正三年、富山房

德富蘆花研究（篠田太郎）木星社版「明治文學講座」第五卷

德富蘆花論（篠田太郎）「國語と國文學」第九卷第四號

明治文學史上に於ける德富蘆花（千葉龜雄）「中央公論」第四十二年第十一號

魯文と柳北（山口剛）「早稻田文學」大正十四年三月號

假名垣魯文研究（藤田德太郎）木星社版「明治文學講座」第五卷
假名垣魯文傳（野崎左文）「早稻田文學」明治廿七年三・四月號
外遊後の成島柳北（大野光次）「國語と國文學」昭和十年五月號
成島柳北論（木村毅）「早稻田文學」大正十四年三月號
高畠藍泉とその作品（柳田泉）『明治文化研究』第一輯所收
德富蘆花十週年記念展覽會目錄（三越編並發行）昭和十一年
——年譜 諸家ノ追悼記事等——
德富蘆花（高須梅溪）「新聲」第六編第三・四號
德富蘆花——檢討と追憶——（湯淺半月氏外）單行、昭和十一年、岩波書店
德富健次郎（池田林儀）單行、大正七年、大日本雄辯會
小說德富蘆花（鑓田研一）同　昭和十二年、第一書房
蘆花傳（前田河廣一郎）同　同　十三年、岩波書店
綠雨とは如何なる人ぞ（伊藤銀月）「新潮」第一卷第二號

齋藤綠雨論（馬場孤蝶外八氏）「中央公論」第廿二年第十號

綠雨追悼記事號「新小說」第九年第六號

齋藤綠雨記事號「明星」明治卅七年五・六月號

齋藤綠雨研究（湯地孝）木星社版「明治文學講座」第五卷

齋藤綠雨（藤村作）「國語と國文學」第三卷第五號

綠雨追悼記事號「文藝倶樂部」明治三十七年五月號

黑岩淚香（淚香會編）單行、大正十一年、扶桑社

廣津柳浪研究（藤森順三）木星社版「明治文學講座」第五卷

廣津柳浪（土井重義）改造社版「日本文學講座」第十一卷

柳浪叢書（同　）「國語と國文學」第九卷第四號

小說家としての經歷（廣津柳浪）「文章世界」第三卷第七號

逝ける中澤臨川氏「文章世界」第十五卷第九號

中澤臨川論（諸家）「中央公論」第二十九年第十一號

中澤臨川論（安成貞雄）「新潮」第二十二卷第六號
幸田露伴研究（形田藤太）木星社版「明治文學講座」第五卷
同　（柳田泉）新潮社版「日本文學講座」明治時代下編
幸田露伴論（木下杢太郎）改造社版「日本文學講座」第十二卷
幸田露伴（柳田泉）岩波講座「日本文學」ノ內
幸田露伴先生（柳田泉）單行『文化勳章に輝く人々』所收、昭和十二年
特輯露伴研究號「文學」第六卷第六號（昭和十三年）

故綱島梁川氏追憶「早稻田文學」　明治四十年十月號
故梁川君（後藤宙外）「新小說」同　年同月號
文學者としての綱島君（島村抱月）「趣味」明治四十年十月號
綱島梁川論（生方敏郎）「早稻田文學」第五十號
內田魯庵先生に關する追憶（木村毅）單行『靑燈隨筆』所收、昭和十年
內田魯庵氏追悼號「古本屋」昭和四年八月臨時號

魯庵翁追悼號「愛書趣味」第四卷第四號
内田魯庵著作年譜（齋藤昌三編）單行『讀書放浪』所收、昭和八年
魯庵翁を憶ふ（新村出）單行『琅玕記』所收、昭和五年
内田魯庵君（戸川秋骨）單行『朝食前のレセプション』昭和十二年
柳村小父樣と鷗外伯父樣（小金井喜美子）「心の花」第三百號
青春時代の上田柳村（新村出）單行「琅玕記」所收
數　奇　傳（田岡嶺雲）單行、明治四十五年、玄黄社
龍溪矢野文雄君傳（小栗又一編）單行、昭和五年
矢野龍溪先生（寄餘子）「文章世界」第二卷第十四號
小波氏記念號「童話研究」第九卷第十號
私の今昔物語（巖谷小波）單行、昭和三年、早大出版部
我が五十年（同　）同　大正九年、東亞堂
大西操山十年記念（五十嵐力外）「早稲田文學」第六十號
大　西　操　山（白松南山）「早稲田文學」第五十號

大西祝（操山論（金子筑水外三氏）「中央公論」第二十二年第十二號
竹越三叉（正岡藝陽）「新聲」第五編第七號
故思軒居士の面影（伊原青々園）「早稻田文學」明治四十年六月號
三宅雪嶺論（進藤遜吾外七氏）「中央公論」第二十三年第十二號
小波先生（木村小舟編）單行、昭和五年十一月
外山正一（ヽ山先生小傳（三上參次）單行、明治四十一年八月
特輯漱石研究「國文國史」第三卷第一號（昭和十三年二月）
文章道と漱石先生（森田草平）單行、大正八年、春陽堂
文豪夏目漱石「新小說」第二十二年第二號
俳人漱石論（西谷碧落居）　單行、昭和六年、厚生閣
文豪夏目漱石（新小說增刊ト同內容）同　大正十年、春陽堂
漱石の思ひ出（夏目鏡子述）　同　昭和三年、造改社
漱石先生（松岡讓）　同　同　九年、岩波書店
漱石襍記（小宮豐隆）　同　同　十年、小山書店

漱石文獻展觀目錄（瀧田貞治編）　同　同　七年、臺灣愛書會

夏　目　漱　石（赤木桁平）　同　大正六年、新潮社

夏目さんの人及び思想（島爲男）　同　昭和三年、大同館

夏　目　漱　石　論（片山孤村外十四氏）「中央公論」第二十三卷第三・四號

夏目漱石研究（森田草平）新潮社版「日本文學講座」明治時代

夏　目　漱　石　論（長谷川如是閑）改造社版「日本文學講座」第十二卷

夏　目　漱　石（小宮豐隆）岩波講座「日本文學」ノ內

漱石先生追慕號「新思潮」第二卷第二號（大正六年）

漱石先生追悼號「澁柿」第三十號

漱　石　號「門外藝術」第一卷第四號

夏　目　漱　石　論（正宗白鳥）「中央公論」第四十三年第六號

同（諸家）「文庫」明治四十年三月號

同（諸家）「太陽」同　四十年十一月號

俳人としての漱石（志田義秀）「東亞の光」第二十四卷第一・二號

夏目漱石論（諸家）「新潮」第十三卷第一號
漱石の餘裕派小說（湯地孝）「國語と國文學」第三卷第四號
漱石の早期作品に見えたる二傾向（田村專一郎）「國語と國文學」第二卷第七號
夏目漱石研究特輯「浪漫古典」第六輯
夏目漱石研究（作家研究座談會記事）「新潮」昭和十年四月號
漱石記念號「思想」第一六二號（昭和十年十一月號）
夏目漱石（夏目伸六）單行『父の映像』所收、昭和十一年
漱石氏の描寫論に就て（相馬御風）「早稻田文學」第五十二號
海外に於ける漱石研究（諸家）「文學」第四卷第十二號
漱石氏と私（高濱虛子）單行、大正七年
夏目漱石論（大町桂月）單行『半生の文章』所收、明治四十年
漱石先生を打診した日（坂本雪鳥）「國文學解釋と鑑賞」第九號
漱石研究（諸家）岩波書店版『漱石全集』附錄
文豪夏目金之助君立志傳（秋野村夫）「成功」第二十一卷第九號

夏目漱石先生の追憶（寺田寅彦）改造社版「俳句講座」ノ内
漱石二題（小宮豊隆）「改造」第十九卷第十號
夏目漱石の文藝（石山徹郎）「帝國文學」第二十二卷第四・六號
夏目漱石の文章（山本正秀）「國語と國文學」第一六三號
新聞小説家としての夏目漱石（大熊信行）單行『文藝の日本的形態』所收、昭和十三年
夏目さんの思ひ出（野上彌生子）單行『秋風帖』所收、昭和十二年
漱石先生の憶出（戸川秋骨）單行『朝食前のレセプション』所收、昭和十二年
夏目漱石（小宮豊隆）單行、昭和十三年七月
夏目漱石の生涯と作品（石山徹郎）「日本文學研究」第二輯所載
俳人子規（白石南竹編）單行、明治三十五年、六合館
人及び藝術家としての正岡子規（西宮藤朝）單行、大正七年、新潮社
正岡子規（臼田亞浪）單行、同　六年、俳句世界社
正岡子規全傳（橋田東聲）單行、昭和二年、春陽堂
正岡子規（藤川忠治）同　同　八年、山海堂

正岡子規研究（宮田戊子編）　同　同　九年、樂浪書院
子規言行錄（「日本叢書」ノ內）同　明治三十五年、吉川弘文館
正岡子規論（諸家）「中央公論」第二十二年第九號
正岡子規號「日本及日本人」第一六〇號（昭和三年九月）
子規居士十三回忌記念號「ホトヽギス」第十八卷第四・五・六號
子規居士三十週忌記念號「日本及日本人」第十二卷第九號
正岡子規「文章世界」第三卷第六號
同　（齋藤茂吉）岩波講座「日本文學」ノ內
正岡子規研究（河東碧梧桐）新潮社版「日本文學講座」明治時代
子規研究（高濱虛子）改造社版「日本文學講座」第八卷
正岡子規（依田秋圃）同　「同　」第七卷
作家としての子規の態度（藤川忠治）「文學」昭和七年七月號
子規の性格及び思想の斷面（藤川忠治）「國語と國文學」第四卷第二號
文壇に活躍の正岡子規（同　）「同　」第九卷第四號

子規氏の近状（伊藤左千夫）「新潮」第五編第七號
正岡子規時代特輯號「ポトナム」第一四七號
正岡子規論（服部嘉香）「早稲田文學」第五十號
子規居士と余（高濱虚子）單行、大正四年
正岡子規を中心に（香取秀眞）單行、昭和十一年三月
子規言行錄（河東碧梧桐編）單行、昭和十一年十二月
改訂正岡子規研究（諸家）　同　同　十年十二月、樂浪書院
子規と漱石（野上豐一郎）「帝國大學新聞」第六六一號所載
子規と漱石（藤川忠治）「國語と國文學」第一六四號
正岡子規（中村憲吉）「中村憲吉全集」第二卷所收
子規居士三十週年忌記念號「同人」第十二卷第九號
子規追悼集「ホトトギス」第六卷第四號（明治三十五年四月）
蘇峰自傳（德富猪一郎）單行、昭和十年九月、中央公論社
山陽と蘇峰（安藤德器）單行、昭和十年十月

德富蘇峰論（諸家）「中央公論」第二十三年第六號
文壇に復活せる蘇峰論（諸家）「中央公論」第三十一年第五號
蘇峰と蘆花（正宗白鳥）　「同　」第四十三年第七號
文壇のスヒンクス德田秋江（生方敏郎）「新潮」第十九卷第一號
近松秋江論（坂本　浩）山海堂版「季刊明治文學」第二輯
山崎紫紅論（尾澤良彥）右　同　　同　輯
木下尙江（神崎清）「國語と國文學」第九卷第四號
德田秋聲論（覆面子）「青年評論」第一號
同　（正宗白鳥）「中央公論」第四十二年第六號
同　（杉山平助）「文藝」昭和九年三月號
德田秋聲（中村武羅夫）改造社版「日本文學講座」第十一卷
德田秋聲と正宗白鳥（舟橋聖一）「國語と國文學」第九卷第四號
德田秋聲研究「評論」第一卷第九號（昭和九年十二月）
予が半生の文壇生活（德田秋聲）「新潮」第十六卷第一號

小說家となつた經歷（徳田秋聲）「文章世界」第三卷第五號
眞山青果論（諸家）「新潮」第十四卷第二號
眞山青果（鈴木氏亨）改造社版「日本文學講座」第十二卷
眞山青果氏を論ず（生田長江）「新潮」第十六卷第一號
伊藤左千夫「アララギ」第十二卷第七號
伊藤左千夫（花田比露思）改造社版「日本文學講座」第七卷
伊藤左千夫と長塚節（齋藤茂吉）「國語と國文學」第十一卷第八號
第二左千夫號「アララギ」第十二卷第十號（大正八年十月）
伊藤左千夫追憶斷片（中村憲吉）單行『中村憲吉全集』第二卷所收
伊藤左千夫（北住敏夫）「文學」第六卷第九號
河井醉茗氏五十年誕辰記念號「日本詩人」第五卷第十一號
予が小說家としての經歷（江見水蔭）「文章世界」第三卷第五號
予が半生の歌人經歷（尾上柴舟）「同　」右同號
尾上柴舟年譜「水甕」昭和十一年四月號、水甕社

文學者としての前半生（嵯峨のや主人）「文章世界」第三卷第七號
德富蘇峰氏に就て（大町桂月）單行『第三筆の雫』所收、明治四十一年
近松秋江氏の印象（德田秋聲）「新潮」第三十二卷第六號
秋聲・花袋二氏の事（菊池寛）「同　」第三十二卷第三號
近松秋江論（生田春月）「同　」第二十二卷第五號
武者小路實篤論（江馬修）「同　」第二十二卷第四號
水蔭追悼號『水蔭行脚全集』第八卷（昭和十年六月）
德田秋聲（小林愛川）「文章倶樂部」第二號
小波先生追悼記念號「南柯」第二十一卷第十號
小波遺影（巖谷榮二編）單行、昭和八年十月
秋聲作品年表及年譜『秋聲全集』別卷所載、昭和十二年
小波身上噺（巖谷小波）單行、大正二年、志鵬堂
母のおもかげ（中野清子）單行『若松賤子集』（富山房文庫本）所收、昭和十三年

――若松賤子ノ追憶――

大野洒竹號「俳味」第四卷第十二號（大正二年十二月）

坪内逍遙傳（千葉亀雄）單行、昭和九年、改造社

坪内逍遙論（正宗白鳥外八氏）「中央公論」第二十七年第四號

同（德富蘇峰等）「早稻田文學」第二四四號

坪内逍遙（本間久雄）岩波講座「日本文學」作家、明治時代

坪内逍遙論（木村毅）改造社版「日本文學講座」第十二卷

坪内逍遙研究（小島德彌）木星社版「明治文學講座」第五卷

坪内博士追悼號「早稻田文學」昭和十年四月號

坪内逍遙追悼特輯「文藝」同年同月號

坪内逍遙博士を偲ぶ（諸家）「中央公論」第五十年第四號

坪内逍遙先生を語る（近松秋江）「新潮」昭和十年四月號

坪内逍遙追悼號（諸家）「藝術殿」同年四、五月號

坪内逍遙論（正宗白鳥）「文藝」同年七月號

文學者としての逍遙先生（正宗白鳥）「中央公論」第五十年第七號

坪内博士追悼特輯「東京堂月報」第二十二卷第三號
坪内逍遙の文學評論（久松潜一）「國語と國文學」第九卷第四號
逍遙と鷗外（成瀨正勝）　「同　」第十卷第十號
坪内逍遙研究號「評論」第十三號（昭和十年五月）
坪内逍遙（奥村梅皐）「新潮」第六編第六號
坪内逍遙（諸家）「早稻田文學」大正十五年五月號
逍遙（三越大阪支店編）單行、昭和十一年一月
――坪内博士を偲ぶ展覽會記念――
坪内博士と浮世繪「浮世繪藝術」第四卷第四號
坪内先生著譯初版本目錄（村上文庫編）昭和十年五月
逍遙書誌（瀧田貞治編）單行、昭和十二年、米山堂
逍遙居士の一面外二篇（飯塚友一郎）單行『腰越狀』收錄、昭和十二年
坪内逍遙氏（奥村梅皐）單行、『一喧一醒』所收、明治三十五年
坪内逍遙（中村吉藏）單行『演劇獨語』所收、昭和十二年

逍遙先生追憶斷片（本間久雄）單行『わが鑑賞の世界』所收、昭和十二年

逍遙博士の業蹟（市島春城）單行『鯨肝錄』所收、昭和十一年

坪内博士を憶ふ（市島春城）「日本圖書館協會講演集」第二輯

坪内逍遙博士（木村毅）單行『青燈漫筆』所收、昭和十年

島崎藤村研究（秋田雨雀編）單行、昭和十年、樂浪書院

藤村の歩める道（山崎斌）同　大正十五年、弘文社

夜明け前の作者（武藤直治）同　昭和十一年四月、新陽社

島崎藤村の文學（伊藤信吉）同　同　年二月、第一書房

島崎藤村論（小栗風葉外八氏）「中央公論」第二十三年第十一號

藤村號「文章往來」第一卷第四號、春陽堂

藤村と花袋と（白石實三）「新潮」昭和九年九月號

島崎藤村論（[illegible]）「新潮」第十三卷第二號

同　（武藤直治）「早稻田文學」第二四四號

島崎藤村氏に就て（正宗白鳥）「中央公論」第四十一年第十號

私の觀た藤村（江口彰次）「國語と國文學」第六卷第十一號ヨリ第七卷第八號マデ

島崎藤村（木枝增一）岩波講座「日本文學」作家・明治時代

同　（吉川宗治）改造社版「日本文學講座」第九卷

同　（有島生馬）同　「同　」第十一卷

島崎藤村研究「評論」第一卷第七號（昭和九年十月）

詩人としての藤村（三木露風）「新潮」第十四卷第五號

現代作家研究　島崎藤村（A・B・C）「同　」第二十卷第一・二號

島崎さん（三木露風）「同　」第三十四卷第三號

島崎藤村（小林愛川）「文章俱樂部」第四號

約半世紀に亘る交誼（戸川秋骨）單行『朝食前のレセプション』所收、昭和十二年

――島崎藤村氏の事――

特輯　藤村研究（諸家）「文學」第四卷第八號（昭和十一年）

傳記小說　島崎藤村（鑓田研一）「新潮」第三十五卷第六號

島崎藤村君の冷熱（星野天知）單行、『默歩七十年』所收、昭和十三年十月

小山鼎浦記事號「六合雜誌」第三十九卷第十二號

片上天弦の文學評論（熊木善一郎）山海堂版「季刊明治文學」第三輯

山縣悌三郎傳（鹽田良平）山海堂版「季刊明治文學」第四輯

三木竹二追善號「歌舞伎」第百及百一號

長谷川天溪の評論活動（田中保隆）山海堂版「季刊明治文學」第三輯

天外と紅葉（片岡良一）　同　「同　」同輯

小杉天外研究（神崎清）木星社版「明治文學講座」第五卷

自然主義と小杉天外（成瀨正勝）「文學」昭和八年五月號

小杉天外論（諸家）「中央公論」第二十三年第七號

田村とし子論（諸家）「同　」第二十九年第九號

同　（諸家）「新潮」第十八卷第三號

田口鼎軒（正岡藝陽）「新聲」第六編第一號

蘆花日記（大和田建樹）單行、明治四十三年

——傳記・日記・年表・著書目錄等——

田口卯吉略歴及年譜『鼎軒全集』第八卷所載、昭和四年
田口鼎軒傳（鹽島仁吉）單行、昭和三年
武郎と潤一郎（津田光造）「新潮」第三十五卷第三號
與謝野寛の生涯（神崎淸）「立命館文學」第二卷第九號
與謝野寛（鐵幹）評傳（坂村眞）　單行、昭和十二年八月
與謝野さん一家を語る（戸川秋骨）同　『朝食前のレセプション』所收
石川啄木（金田一京助）單行、昭和九年、文教閣
石川啄木研究（金田一京助 土岐善麿編）同　同　年、樂浪書院
啄木研究文献（吉田孤羊編）同　同　年、明治文學談話會
石川啄木（湯地孝）岩波講座「日本文學」作家・明治時代
石川啄木研究（藤川忠治）木星社版「明治文學講座」第五卷
石川啄木（土岐善麿）改造社版「日本文學講座」第七卷
石川啄木追想號「純情短歌」第一號（昭和四年五月）
石川啄木特輯號「明治文學研究」昭和九年五月號

石川啄木追悼號「排人」第二卷第四號

先驅的詩人石川啄木を憶ふ（秋田雨雀）「文藝」昭和九年五月號

石川啄木について（岩崎萬喜夫）「季刊明治文學」第三輯

啄木小論（藤川忠治）「國語と國文學」第五卷第十一・十二號

啄木の生涯と其の歌（森本治吉）「國語と國文學」第九卷第四號

父啄木を語る（石川正雄）單行、昭和十一年四月、三笠書房

啄木寫眞帖（吉田孤羊編）同　同　年六月、改造社

傳說小說 石川啄木（鑓田研一）同　同　年七月、第一書房

啄木と二葉亭（吉田孤羊）「文學」第六卷第九號

北村透谷「文章世界」第三卷第六號

北村透谷（鹽田良平）岩波講座「日本文學」作家・明治時代

北村透谷特輯「明治文學研究」昭和九年四月號

透谷と春（齋藤清衛）「國語と國文學」第九卷第四號

評論史に於ける透谷の地位（仲賢禮）「季刊明治文學」第三輯
北村透谷論（篠田太郎）耕進社版「クオタリー日本文學」第一輯
北村透谷の意味（吉田精一）「季刊明治文學」第四輯
北村透谷研究（孤蝶・雨雀）「新潮」第十六卷第四號
透谷・藤村（三木露風）單行『露風詩話』所收、大正四年
明治文壇の鬼才北村透谷を憶ふ（二階堂雨山）「國學院雜誌」第三十二卷第五號
北村透谷君の奇矯（星野天知）單行『默歩七十年』所收
長塚節追悼號「新小說」第三十年第十二號
同　「アララギ」第八卷第六號
長塚節（臼井大翼）改造社版「日本文學講座」第七卷
長塚節の藝術論（藤川忠治）「國語と國文學」第八卷第一・二・三號
長塚さんの思出（中村憲吉）單行『中村憲吉全集』第二卷所收
岡倉天心（清見陸郎）單行、昭和九年十月、平凡社

北田薄氷（久松潜一）山海堂版「季刊明治文學」第二輯
津田梅子（吉川利一）單行、昭和五年二月
五十年生活年譜（秋田雨雀）單行、昭和十一年、ナウカ社
雨江追憶文（諸家）『雨江全集』附錄、大正二年、博文館

福澤諭吉記念號「傳記」昭和九年十一月號
福澤諭吉傳（石河幹明編）全四卷、昭和七年、岩波書店
福澤先生を語る（高橋箒庵編）　單行、同　九年
書簡を通して見た福澤諭吉先生（鈴木梅四郎）單行、昭和九年
我が福澤先生（慶應義塾福澤先生研究會編）單行、昭和六年
福澤先生（竹越三叉）單行『萍聚絮散記』所收、明治三十五年
文學者としての福澤諭吉（國民之友記者）「國民之友」第八十六號
出雲に於ける小泉八雲（根岸磐井）單行、昭和五年四月

文學博士三宅米吉先生追悼錄（吉田彌平編）昭和五年二月
芳賀矢一先生（國學院大學芳賀先生紀念會編）單行、昭和十二年
芳賀博士と明治大正の國文學「國語と國文學」第十四卷第四號
芳賀博士追憶號「國漢」第十三號、富山房
芳賀博士追悼錄（永井環）單行、昭和七年二月
詩人野口米次郎（シエラアド・ヴアインズ）單行、大正十四年、第一書房

夢二追憶號「書窓」第三卷第三號（昭和十一年八月）
予が半生の詩人經歷（蒲原有明）「文章世界」第三卷第五號
蒲原有明（逸見楢吉）改造社版「日本文學講座」第九卷
蒲原有明研究（福士幸次郎）木星社版「明治文學講座」第五卷ノ內
蒲原有明論（形田藤太）「國語と國文學」第九卷第四號

# 人名索引

本書全卷中に記載しある人名、即ち著書の著者、著書中に出づる被研究者、被評傳者等の總てを揭ぐ。人名の排列は、各人の姓氏の頭文字の五十音（發音）順による。

## あ



## い（ゐ）

## に



## ぬ



## ね



## の



## は

## わ

## ―巻末に―

東亞の天地に輝かしき黎明を待望しつゝ、日本は今、長期建設の民族的使命達成の道程をすゝみつゝあるのである。惟ふに、長期建設には物心の兩方面を必要とするであらう。

この秋にあたり私どもは、己が本分とする文學の研究に精進することにより、微力ながらも精神方面に於て、國民としての責務を果さうとするものである。

こゝに一篇の小著を我が榮ある學界と、日本文化研究に志を有つ人々におくらうとするのも亦、著者の祖國に對する愛と感謝の至情にもとづくものである。

とはいへ、國文學に志し、意を明治時代文學の研究に潜めてより、星霜既に十年にして世におくる成果を、斯かるさゝやかなる研究の栞とも謂ふべき著述を以てすることと思へば、眞心まことに慚愧たるものがある。

而も一度巻を繙くならば、意有つて言葉足らず、考ふるところ熟さからずして筆之に伴はざる

憾みの殊に深きものがある。

併し、精神文化の如實の反映である時代文學の究明により、明治時代に於ける我が民族文化の水準を闡明することを得、將來更に飛躍を遂ぐべき使命を擔ふ我が日本文學の發展に資することを得るならば寔に欣懐の至りである。

本書出版に就ての久松教授と東京武藏野書院主との御高配に對しては心からなる感謝をさゝげる。

猶又本書は、財團法人服部報公會の援助により從事中の『明治文學研究參考書內容總覽』編纂の業餘に成るものである。誌して以て同會に對して深厚なる謝意を表する。右の內容總覽は、客觀的事情がゆるすならば、近く出版の機を得たき希望を有することをも、江湖に告げておきたいとおもふ。

昭和戊寅、明治節の佳き日、菊花まさに薰らんとする南緣に向ひて著者これをしるす。

昭和十三年十二月十三日印刷
昭和十三年十二月十八日發行

明治文學研究誌
定價 金四圓也

著者検印

著者 岡野他家夫
東京市目黒區中根町一七九番地

發行者 前田信
東京市小石川區高田豐川町四三

印刷者 高瀬宏
東京市牛込區山吹町一九八

發行所 東京市小石川區高田豐川町四三番地
東京武藏野書院
振替口座東京六七一四六番
電話牛込五〇九番